女學世界

第六巻
第十一號



明治三十九年八月五日発行
毎月一回五日発行
明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可

女學世界 第六巻第拾壹號 目次

登録商標

良薬にして口に甘し

浅田宗伯先生直傳

登録 商標

浅田飴

たんせき一切

肺病の持薬

ひきかぜ

よはき人

老人の滋養薬

登録商標



十二日分 金五拾錢

一週間分 金参拾錢

四日强 金貳拾錢

二日分 金拾錢

日本全國到る處の薬店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町

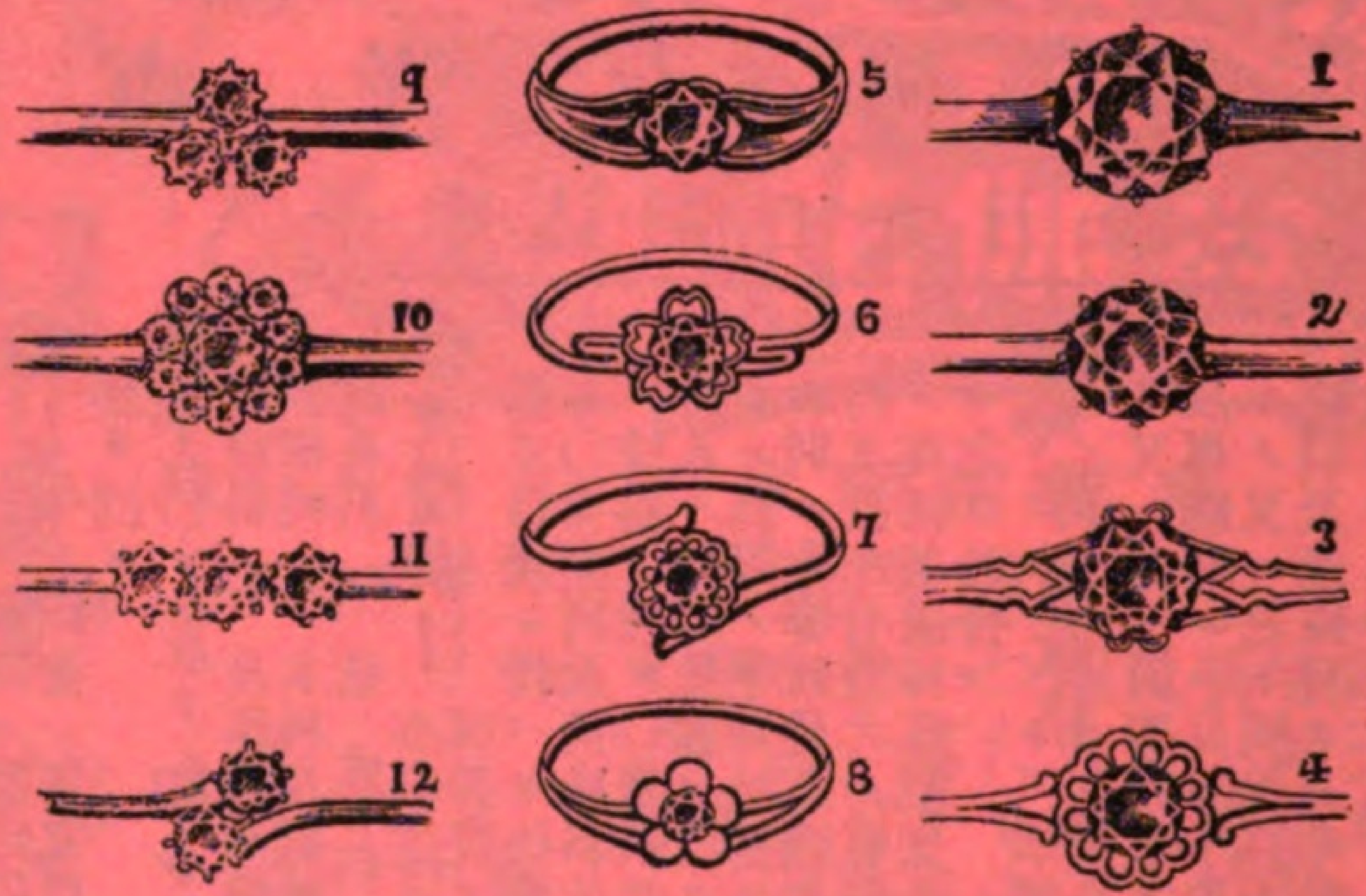
大阪北久寶寺町堺筋

（電話本局壹壹二番）

（電話東三九五八番）

堀内伊太郎

金剛石入金指環（大午ノ四四）



(1)甲價二千圓　(2)甲價九百五十圓　乙價八百圓　(3)甲價七百五十圓　乙價六百圓　丙價五百圓　(4)甲價三百圓　乙價二百五十圓　丙價二百圓　(5)甲價二百圓　乙價百八十圓　丙價百六十圓　(6)甲價百五十圓　乙價百卅五圓　丙價百廿圓　(7)甲價一百圓　乙價八十五圓　丙價七十圓　(8)甲價六十圓　乙價五十五圓　丙價五十圓　(9)甲價二百二十圓
(10)甲價三百七十五圓　(11)甲價三百六十圓　(12)甲價三百圓　乙價百五十圓

永年の間實行致し居候へば一度弊店より御購求の御方は御承知の事に候へども弊店のダイヤモンド入製作品は何時にても原價にて他品と交換又は些少の割引にて買戻し候

貴金屬宝石
美術携帶品商
婦人粧飾品
東京市京橋區南傳馬町三丁目
大西白牡丹
特 電話本局三十番

(甲の二)

生徒募集

東洋女藝學校

（入學申込期日九月五日迄）

新築落成教師增聘

●目的　本校ハ我國固有ノ婦德ヲ涵養シ獨立自營カアル技藝ヲ授ク

●學科　左ノ如シ

裁縫科　高等科及豫科各一ヶ年
刺繡科　本科及刺繡科各二ヶ年
造花科（各科共）速成科六ヶ月

●教授綱目　本科生ニハ高等女學校程度ノ學科ヲ授ケ獨立自營シ得ベキ技藝ヲ修熟セシム○專修科及速成科生ニハ各專門ノ技藝ヲ授ク○豫科生ニハ本科生ニ入ル學科技藝ヲ授ク○高等科生ニハ高等ノ學術技藝ヲ研究セシム

▲別ニ中等教員志願者ノ爲ニ研究科ヲ置キ有力ナル專門家之ヲ教授ス英語茶道挿花割烹音樂等ノ科外ニ之ヲ教授ス

●入學者資格　本科ニハ高等小學全科卒業ノモノ又ハ之ト同等以上ノモノ○豫科及專修科ニハ高等小學二年修業ノモノ又ハ之ト同等以上ノモノ○專修科及速成科ニハ年齡十五年以上ノモノトス

●位置　神田區仲猿樂町十五番地

●規則書入用者ハ郵劵二錢送附セバ新規則書ヲ呈ス

九月十日　**新學期開始**



發賣元　東京橘町　小川潮華園



◎福田琴月君編◎

大判畫帖全一冊定價六拾錢郵税十錢

▲家庭の進物として最適良

◎現代の畫伯、川端玉章、梶田半古、寺崎廣業、中村不折、尾竹國觀の諸氏を始めとし、十四大家の染筆になつたもので、美しいばかりでなく面白い有益な教育的お伽畫帖です、家庭にありては子供も父母も共に樂しむべく、學校にありては教師も生徒も共に觀るべき珍籍です。

▲見て樂しく讀みて面白し

◀お伽旅行 世界めぐり 第四編▶

亜弗利加探険

福田琴月君編
美本全壹冊
定價金十五錢
郵税金四錢

さあさ、太郎はペルシャ灣から阿弗利加内地へわけ入つて、獅子や鰐魚の案内によつて、コンゴー國やサワラの沙漠を横ぎる等怪談奇説面白し

▲朝鮮と滿洲 全壹冊
▲四百餘洲 全壹冊
▲印度と西藏 全壹冊
各冊金十五錢郵税四錢宛

絶代の奇書…
教育界の警鐘…

第拾五版發賣

家庭寓話

我子の悪徳

定價金六拾錢　郵税八錢

家庭雑誌
界の女王

日本の家庭

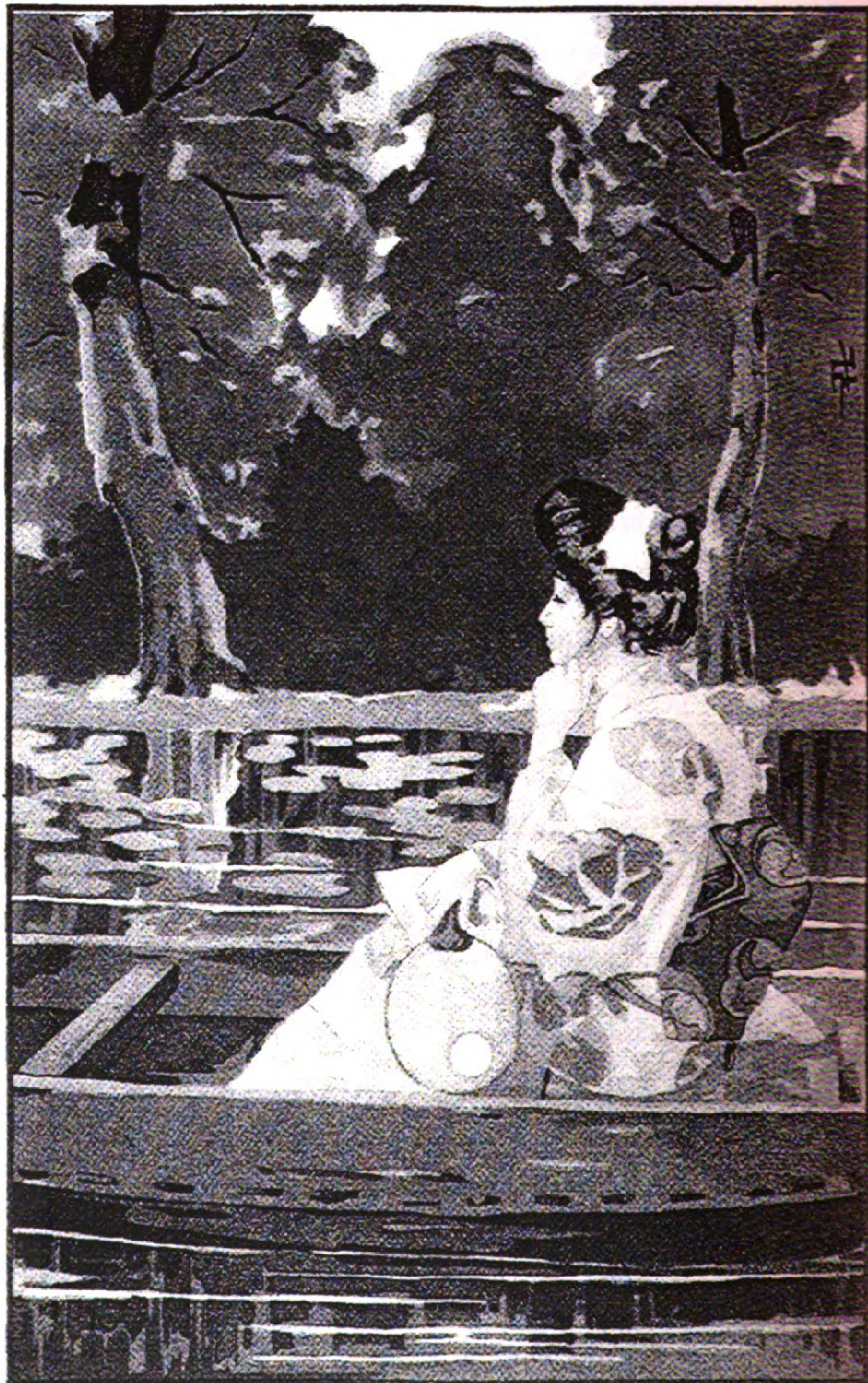
（見本入用の方は郵券五錢封入あれば有合を送るべし）

毎月一回一日發行
定價金拾錢
郵税壹錢
第三巻第七號
八月一日發行

發兌　東京神田表神保町　同文館　大賣捌　東京神田 東京堂　大阪備後町 吉岡寶文館

女(甲の四)

夕涼



一條成美筆

巖谷小波君著



全一冊

四六判裝幀優美紙數約三百頁

正價六拾錢郵稅八錢

九夏三伏の候、休暇三旬の閑を得て、一味の涼風に、百年の齢を伸べんと欲するものは、この『笑の國』に遊ぶに如かず。『笑の國』は、文壇の笑上戸、兼ねて笑はせ上手なる例の小波山人が、輕快の筆と洒落の想とを以て新たに建設する所なり。我と笑はん人々は、疾く來つて笑へかし。夫れ天國は近づけり笑の國は開かれたり矣。（既成發行）

東京本町 博文館

博愛 赤十字石鹼

▲二十世紀▼

▲貴紳淑女用▼

我社の發賣に掛る**博愛赤十字**石鹼は創業以來拾數年間苦心慘憺の結果我社獨得の技術を以て製出せし所最純良品にして**衛生上**實に缺く可からざるもの也**博愛赤十字石鹼**は體裁芳香共に他に比類なく高尙優美にして**中元進物**用として最適切品なり

東京市本所區柳島梅森町

井村整興社

電話下谷 五十二番

女（乙の二）

大好評毎號賣切れ再版三版眞價を知るべし

日本第一　**婦人世界**　實用專一

八月三日發行　毎月一回　第八號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分九十錢郵税共　一年分一圓七十五錢

口繪

◎山階宮妃殿下の最近御尊影◎
◎名家の新婚寫眞（珍品三組）◎
◎涼風千里（世界第一大瀑布）◎
◎三宅花圃女史の家庭と其書◎
◎蒙古女學生の書と河原女史◎
◎社交俱樂部の婦人喫茶會員◎

彩色石版　夏の朝……中澤弘光
雁來紅……跡見花蹊
繪手本　瀧……中澤弘光

婦人の日常生活法　村井弦齋

▲何の運動が婦人に適するか
▲散歩は如何にすべきか
▲精神の運動は如何にすべきか
▲足の運動は如何にすべきか
▲手の運動は如何にすべきか
▲接客は如何にすべきか
▲交際は如何にすべきか

▲言語は如何に遣ふべきか
▲笑ひ方は如何にすべきか
▲訪問は如何にすべきか
▲土産物は如何にすべきか
▲お八つは如何にすべきか
▲氷は如何に使ふべきか

見よ日本婦人必讀の大文字これを讀まぬ人は大不幸なり

◎弦齋夫人の料理談

△冷し珈琲は如何にして造るか
△氷箱は如何に使ふか
△レモナードは如何にして造るか
△桃は如何に料理するか
△玉子の淡雪とは何か
△唐茄子は如何に料理するか
△赤茄子は如何に料理するか
△イチボ肉は如何に使ふべきか

◉小兒汗ものの豫防及治療法……ドクトル加藤照麿

◉暑中休暇と子供……大村仁太郎
◉夏の我家……有島幸子
◉家庭用ラムネ製造器……鶴田博士
◉アイスクリイム製法……嘉悦孝子
◉海水浴と溫泉……（醫學士）伊庭秀榮
◉上海までの船中日記……河原操子
◉三宅花圃女史の面影……樂石生
◉買物案內……近藤蕉雨
◉妊娠中の心得……產婆西尾京子
◉婦人と寫眞……石塚月亭
◉天人菊（小說）……河井咀華
◉暑中休暇と子供……後閑菊野

發兌元　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社　（郵便振替貯金口座参弐六番）　賣捌　全國書店

女（乙の二）

報知新聞記者　中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

▼最新刊…子女を持てる父兄に並女學生諸君必讀の一大要書

（此書を讀みたる人は着實に成功するを得べし）

▼製本發賣

☞本書目次（總ふりがな付）

全一册洋裝　正價參拾錢　郵税四錢

（郵便振替貯金口座一七二九番）

此書を讀まば著者が如何に苦心精査せしかを推知すべし

發兌元　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話本局六〇七番　女子文壇社

市內特約賣捌所　○東京堂、北隆館、東海堂、前川文榮閣、上田屋、良明堂外書店

女（乙の三）

女(乙の四)

あさつゆ



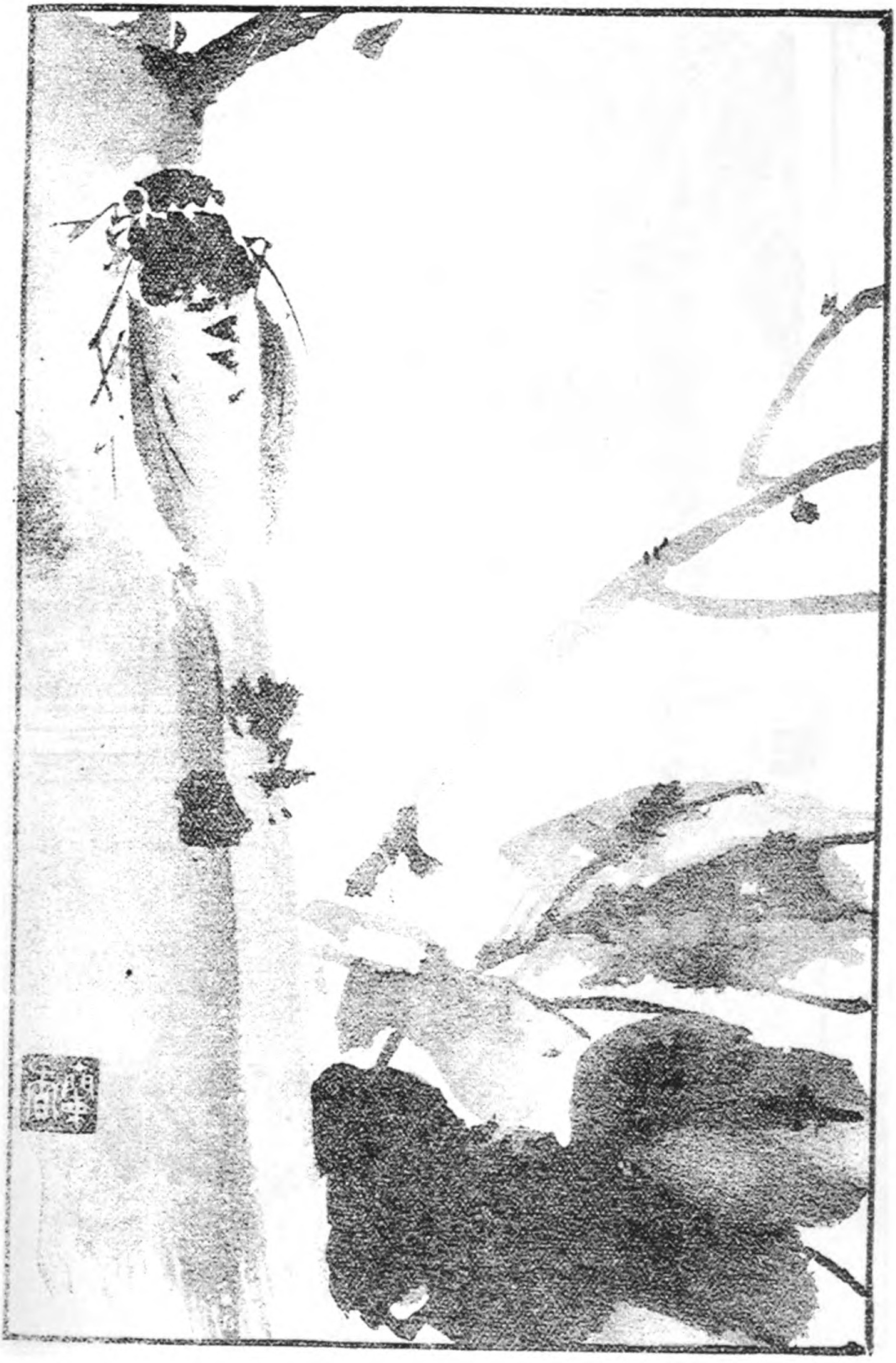
榊原蕉園筆

窓の外



島崎柳塢筆

蟬



川崎蘭香筆

女(丙の一)

意匠登録

登録商標

玉おしろい くも井

定價 瓶入 金貳拾錢 同筒入 金拾五錢 金六錢

この玉おしろい（雲井）の儀はへちまの水にてよく晒し玉に製したる白粉へ化粧料の薬品と龍腦麝香の芳しき香を加へ候御顔の皮膚を清く艶を出し其他御顔一切によろしく腫物を防ぎ候等實に類なき御重寶なるおしろいなり

御用法は常のおしろいの如く水にてときて御使用相成候得ば麗しく相付申候

東京市京橋區銀座參丁目

調製所 八 松澤八右衛門（電話新橋特五百參拾四番）

△賣捌は各處小間物店賣藥店にあり

博文館

各廣告 雜誌取次

東京市神田區三河町 博報堂（電話本一四四 同二五七一）

東京市京橋區元數寄屋町 弘報堂（電話新橋八五一 同三二〇九）

群馬縣師範學校長 羽田貞義
新潟縣長岡高等女學校敎諭 小澤錦十郎 兩先生合著

母のための教育學

全一冊 價五拾錢 郵稅六錢

本誌前號廣告中著者小澤金十郎とせしは錦十郎先生の誤に附き訂正仕候

東京市京橋區南傳馬町一丁目 目黒書店

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

紀念贈呈

好機逸すべからず

婦人は必ず心得ねばならぬ條件を丁寧懇切に記述せる現代諸名家の**婦人講話**及び紀念贈呈券、會費全免券、懸賞五十圓主意、繪葉書交換、淸規の五點本社創立十週年紀念に九月三十日迄郵券十二錢（なるべく五厘切手にて）お送りなさる方に贈呈いたします

備前瀬戸驛南潟瀬 東洋文社

女（丙の二）

新刊書

理學博士久原躬弦先生著

新刊 **化學者之夢**

全一冊（定價五拾錢 郵税貳錢）

理化思想の普及發達

理化學思想に乏しきは我國民教育の缺陷なり。著者一場の夢に托して理化思想を鼓吹せんとす。叙説多益多趣味にして學生及家庭の讀物として極めて妙なり。

石原重雄先生著 新刊

オルガンピアノの手ほどき

本書はオルガン、ピアノの樂譜、構造、奏法及練習上の注意等を丁寧に詳説し且樂典の一般をも一々之を表示し極めて簡潔平易を旨としたれば唱歌ヴァイオリン等を問はず苟も音樂に志す人々は容易に理解するを得べし、風清き邊、月明なる夜此書を友とせば快味いふ可らざる者あらん。

洋装菊判全一冊 定價金參拾錢 郵税金四錢

芳賀矢一先生校訂 名著文庫第廿五篇 新刊

慶長見聞集

慶長元和は江戸の勃興期なり、家康新勝の力を以て武基を定め文運を佈く、學問に美術に演藝に各種太平の英華一夜にして競發せんとす、豈我が日本帝國新興の今日に酷似せずや。慶長見聞集は活眼を以て讀まば宛然明治見聞記なり。今得難き寫本より飜刻して大方に紹介す。描寫亦縱横不羈、遠く隨筆の辭を拔く、珍書中の珍書といふべし。

全一冊 口繪慶長江戸圖 寫眞版入 正價金貳拾錢 上製金廿八錢 郵税四錢

編輯 校訂 擔任（五十音順）饗庭篁村 上田萬年 幸田露伴 關根正直 芳賀矢一 藤岡作太郎 宮崎三味 諸先生

袖珍名著文庫

既刊目次

第一編 芭蕉翁繪詞傳附句集
第二編 近松淨瑠璃三種
第三編 雨月物語
第四編 假名文章娘節用
第五編 今昔物語選
第六編 近江縣物語
第七編 狂言二十番
第八編 西行山家集
第九編 風流志道軒傳
第十編 春花五大力
第十一編 俳諧水滸傳
第十二編 よものあか
第十三編 國性爺合戰
第十四編 謠曲二十番
第十五編 世間娘氣質
第十六編 日本永代藏
第十七編 日本新永代藏
第十八編 萬載集大藏集選
第十九編 花月草紙
第廿編 鳩翁道話
第廿一編 綟手摺昔木偶
第廿二編 夢想兵衛胡蝶物語
第廿三編 同 上後編
第廿四編 假名手本忠臣藏

毎編口繪 寫眞版、木版 三色寫眞版等 原畫縮寫挿入

●全部百冊（毎月發行）

發兌元 東京神田裏神保町 （郵便爲替貯金加入五〇一番） 合資會社 冨山房

女(丙の三)

大學目藥

『世の進むに從ひ目藥にもこんな立派な物が出來ました

登録商標



大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基きし貴重の製劑也世に有古し賣藥の類に非ず

●定價金十錢（郵税二錢） 中瓶三十錢（郵税四錢） 大瓶五十錢（郵税八錢） ▲各地藥店に在

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

田口參天堂發行

（丙の四）

效能の概略

▲はやり目
▲トラホーム目
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

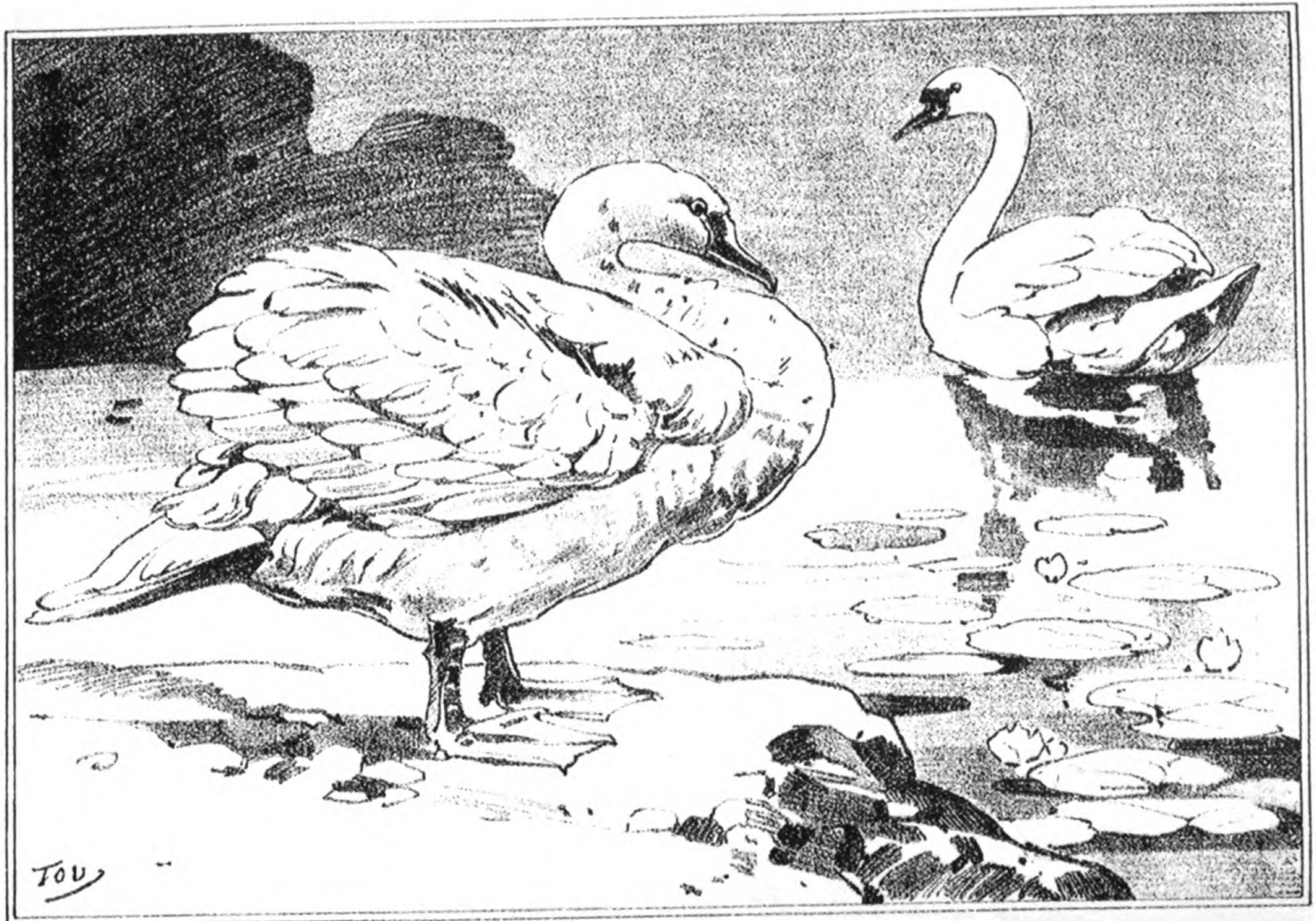
◉又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

吾家の庭



小林萬吾筆

織田東禹筆



鵞鳥

千葉縣野田町

釀造元　茂木佐平治

天下一品

最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

各國帝室及王家御用

ネッスレス

ミルクフウド



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ○最モ盛ンニ藥舗洋酒食料品店ニ販賣ス

女(丁の一)

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺り眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し决して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

(電話下谷五四六番)

(丁の二)

第五回勸業博覽會及内國製品共進會に於て幾多白粉を超越して賞牌受領



●白ゆり白粉は東京市内にて賣捌つゝある白粉舶來品共四十四種に付き内務省衛生試驗所の試驗に於て無鉛白粉として第一に表明せらる

●白ゆり白粉は梨園の花たる芝翫、高麗藏、羽左衛門等の常に愛用せらるゝ品なり

於内外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK



Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor

G. TANAKA

Choshi, Chiba-ken, JAPAN

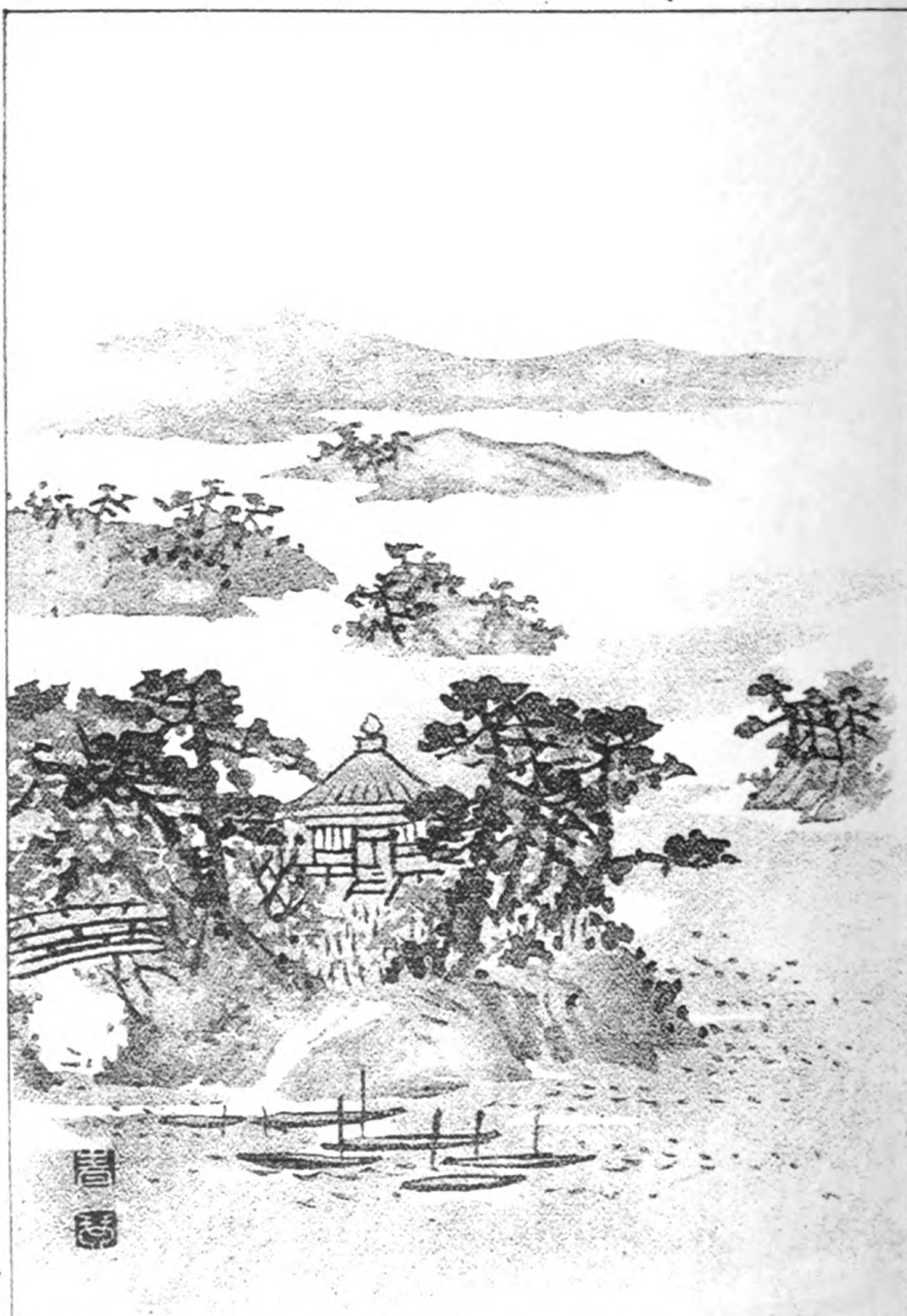
ヒゲタ印醬油

宮内省御用達

千葉縣 銚子港 田中玄蕃釀造

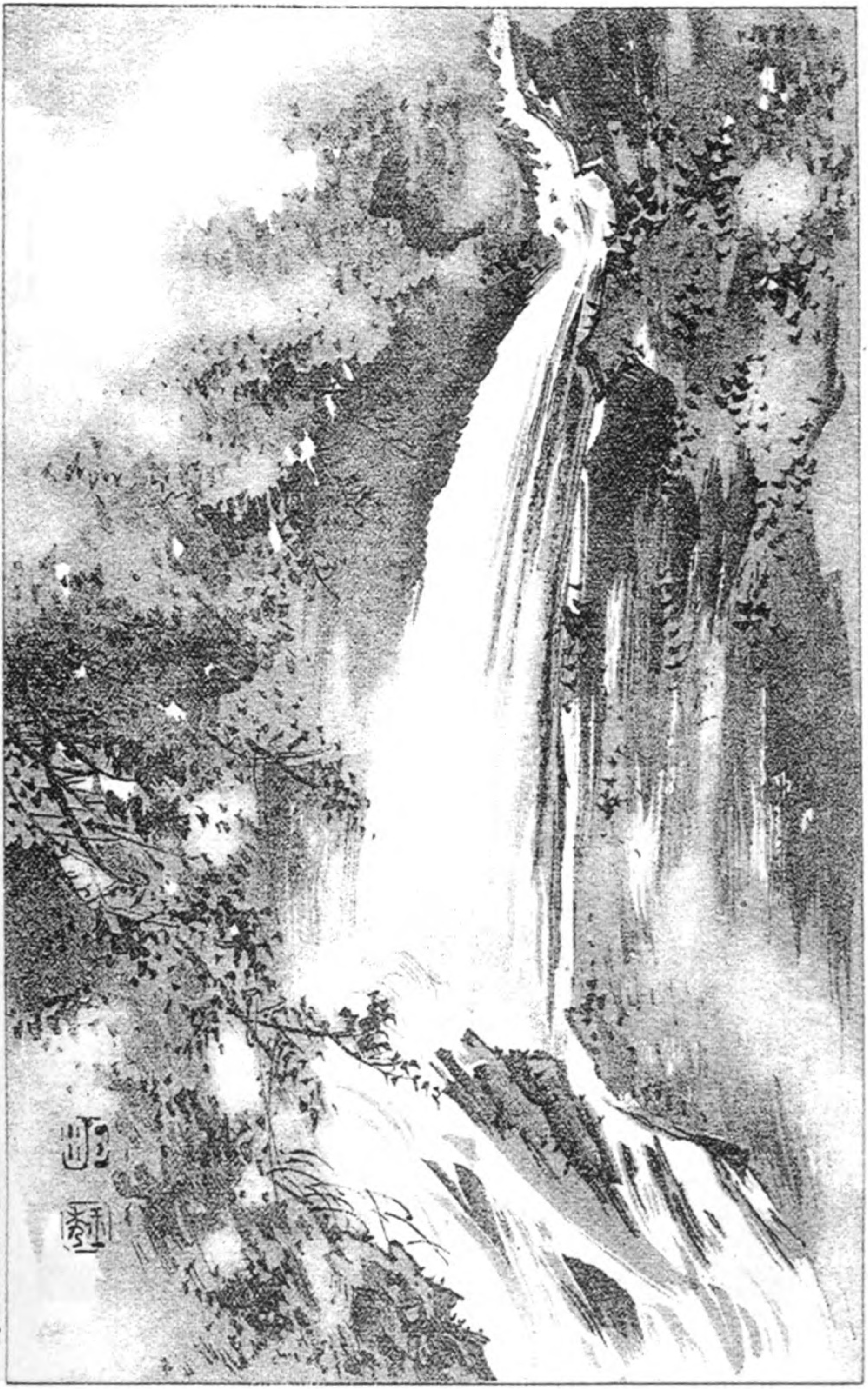
女(丁の四)

奥州松島の五大堂



馬杉青琴筆

越後妙高山の瀑布



戸田玉秀筆


美術造花材料


衞生家必携懷中良藥
THE GEM
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(戊の四)

アルプスの絶景



（アルプス山中ブルチンの温泉場）

太平洋岸の海水浴場



（米國ニユーゼルシー州アトランチツクシチーに在り）

舞踏の稽古



（日本體育俱樂部の夜會）

當今の令孃



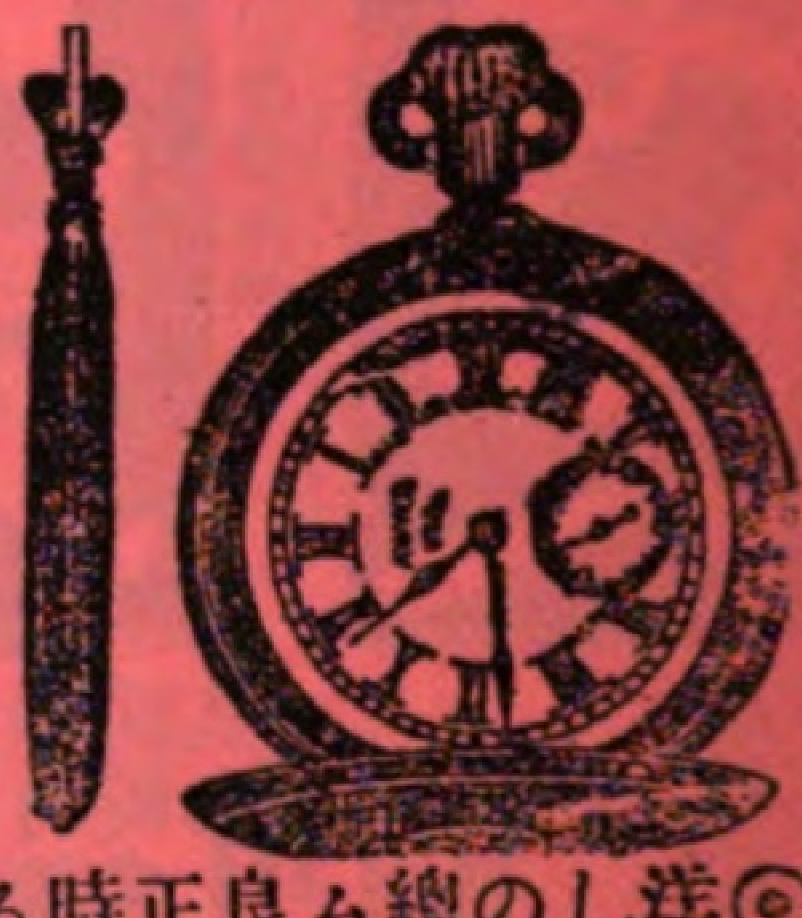
高橋是清氏令孃和喜子（目下米國留學中）

井上獨逸大使の令孃幸子



優美高尚 極薄手形

米國形實用時計



◎本品は小店特約東洋一手販賣の精品にして其の形狀及機械の構造、側の銀質等總て米國ウォールサム製に殆ど遜色なき良品なり價廉にして正確、堅牢優美なる時計は本品の右に出るものなし

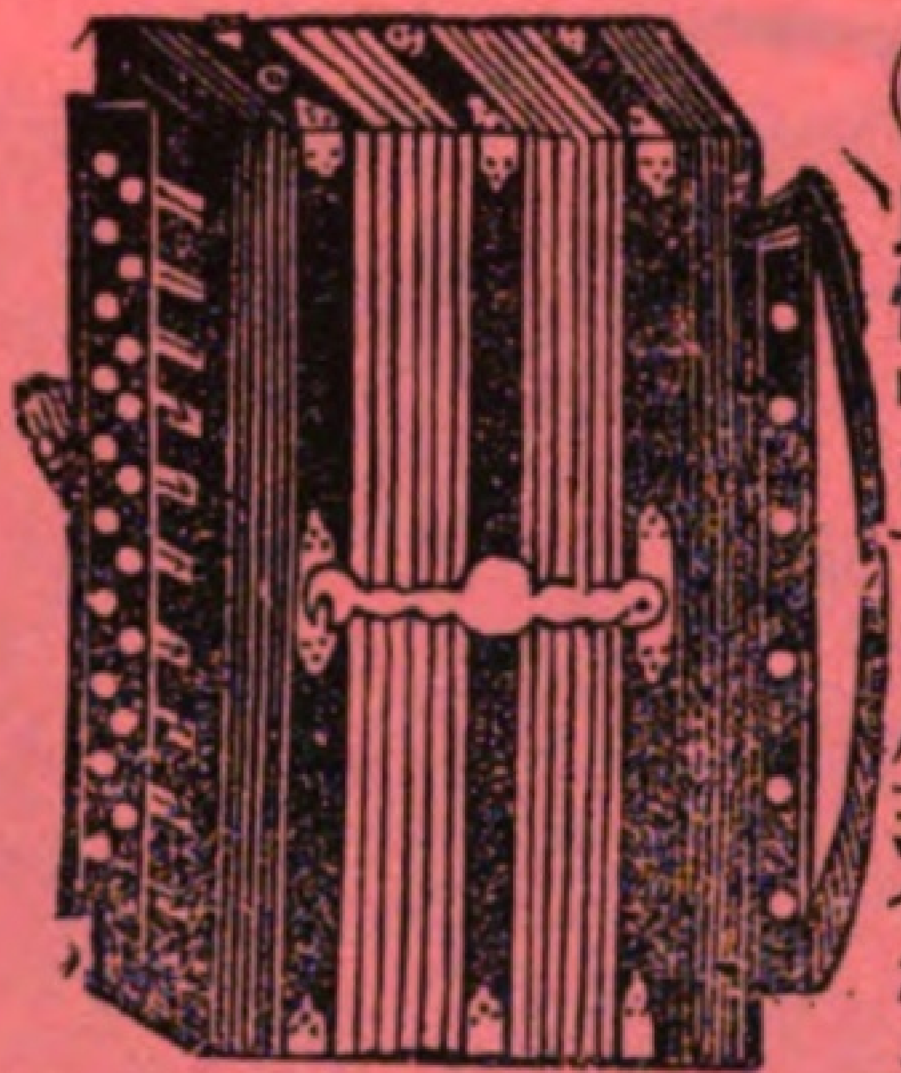
價十三圓半（銀側斜子兩蓋中蓋付16 17 18形 機械金梨地二枚車內天府二重瞬子 向爪石入アンクル龍頭引出針廻し）

價十二圓 右同品片硝子

●保險三十年 極薄手形 太文字 鐵針
●送料內地十錢 滿清韓卅錢 代金引換は卅錢前金
●戰地發送の便宜あり送料凡卅錢軍事爲替到着即日出荷

東京銀座一丁目 特電新二三三一

伊勢伊時計店



堅牢無比 懷中

手風琴

本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の強大なる事普通手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割增

大阪市東區和泉町貳丁目

發賣元 **覗商店**

全一冊

生殖器健全法

本書は男女生殖器を強健にし人生無上の快樂を得せしむる方法を詳記せし**珍書**今回十萬部を限り**無代進呈**望の人は郵券封入又は往復葉書にて大阪高麗橋長命堂宛申込あれ

子宮病

自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらい色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安す／＼と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町

笹岡りん

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

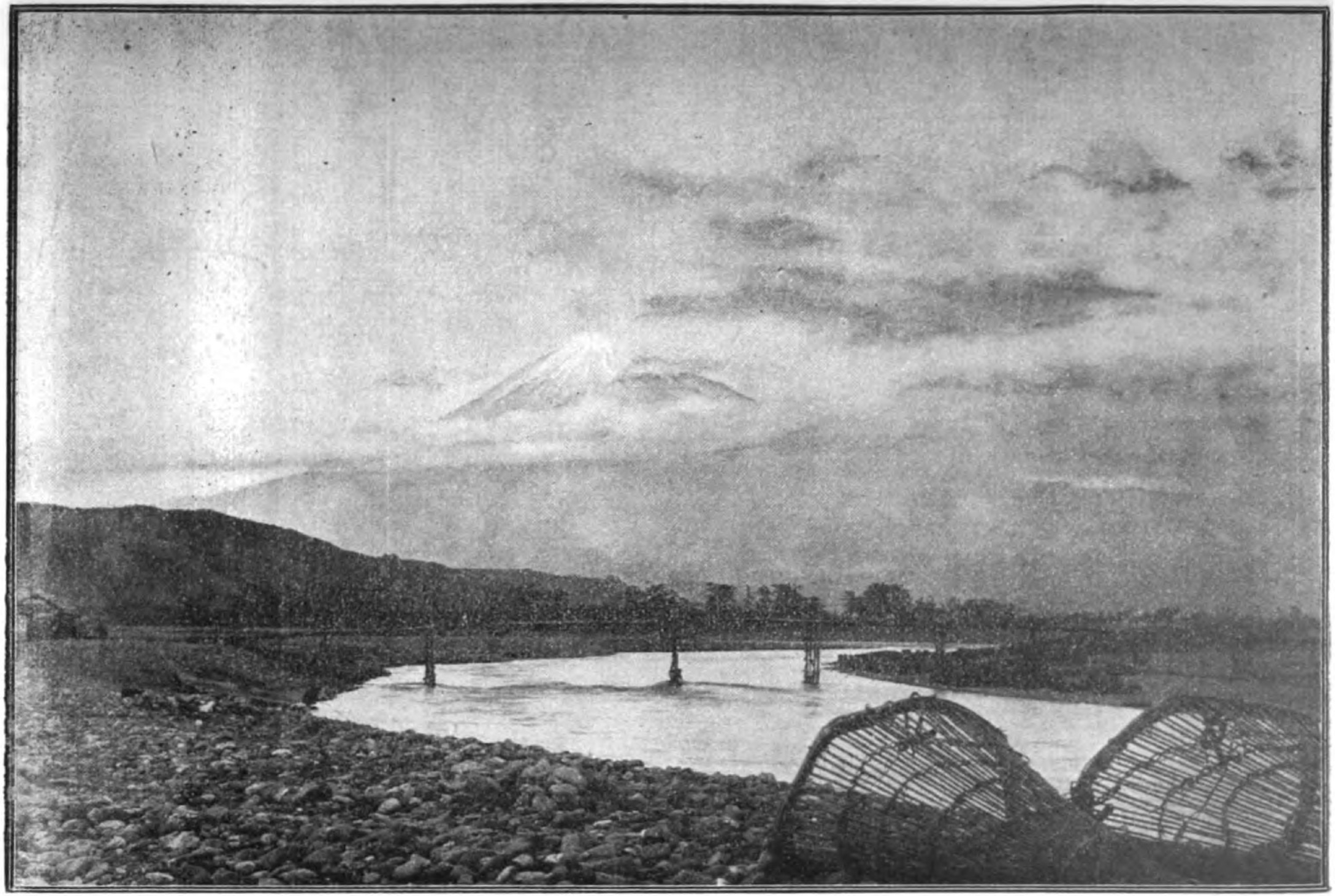
東京市下谷區上根岸町

衛生書院

女（巳の三）

女(己の四)

夏の富士山



（駿州岩淵より望む）

六版既に盡く　七版近日發行

石橋思案君校　星野麥人君編

紅葉書翰抄

全一册横綴美本紙數三百餘頁

正價五拾錢　郵税六錢

發兌元　東京本町　博文館

五大軍醫合議製劑

藥價　五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔

本舗　東京銀座壹丁目　大阪南久寶寺町柳落南　山田安民



全國各藥店にて取次販賣す

○外毒豫防ゴム製

婦人の衛生器現れたり



子宮サック

効能及使用方　一名さよごろも

子宮サック　はゴム製にて斬新の發明御婦人方の衛生上必ず携ふべき要用の瓦器なり子宮サック　を用ゆるときはいかなる場合といへども徽毒痳病下疳等の傳染することなく又子宮を損傷する患なし子宮サック　は懐妊を望む御婦人は用ゆべからずこれを用ふる　ときは懐妊せざればなり子宮サック　は月經の際穢水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ子宮サック　の使用方は本品を添て委細傳授すべし

○子宮サック入用の御人は御注文次第東京市内は無遞送料にて御屆申上候其他地方は郵送料一個に付金十錢にて全國何處を問はず御郵送申上候

東京兩國米澤町二丁目一番地角

定價　一個　甲種金壹圓　乙種金七十五錢

月やくはらい　子宮サック

通經丸本舗　發賣所　萬珠堂藥舖　電話浪花一一三八

特約大販賣所

吉田安五郎

東京々橋區銀座通、一　佐々木玄兵衛

東京日本橋區坂本町角　德田多助

東京日本橋通四丁目　津村順天堂

東京日本橋通二丁目　北島茂兵衛

大阪道修町二丁目　賣藥卸會社

大阪高麗橋一丁目　槍尾商店

京都四條通新町　武田都堂

京都三條小橋　賣庭大藥堂

前田閑亭君著

全一册洋裝菊判
正價貳拾八錢
郵稅六錢

口繪石版畫挿入
紙數百五十頁



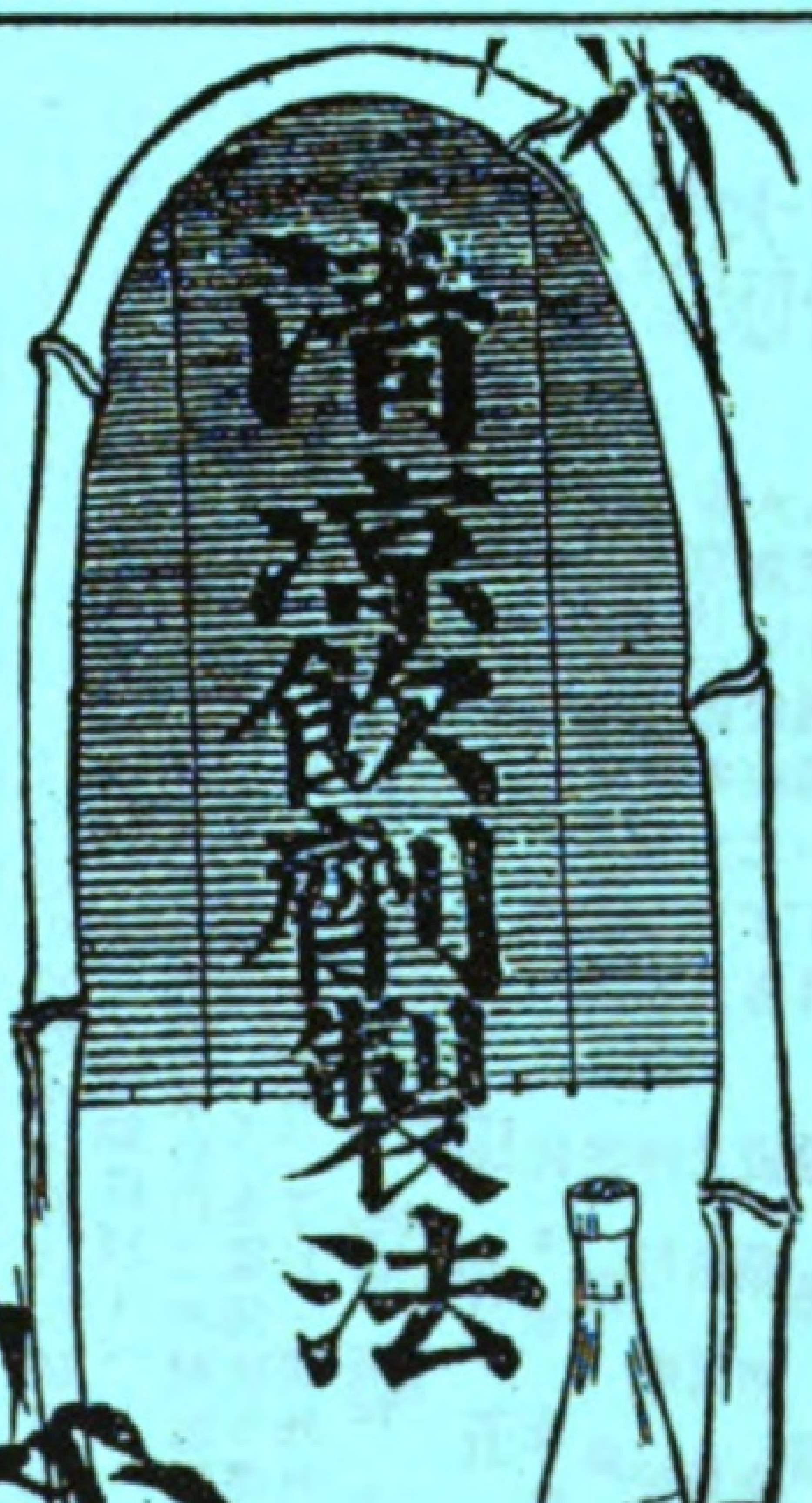
抑も小獸鳥魚の飼養は、家庭娛樂に最も好適し且つ高尙の品性を陶冶する等諸多の方面に益すると尠なからず、就中淸靜にして優雅なるを金魚の飼養とす、蓋し金魚は池沼汚泥中の一產物なりと雖も、容姿纖麗にして嬌柔愛すべく、園池の美觀、室內の裝飾上缺くべからざるものなり、近時歐米各國此魚の飼養流行し、一尾數十金にのぼるものありと聞く、然れども金魚は飼養宜しきを得ざれば、忽ちにして斃死すべきに依り之が飼育には頗る注意を要す、著者は父祖以來此等の娛樂を好み、古來よりの傳說と實驗とに基ける飼養の方法を記錄したるもの一册をなせり、今之を輯補して世に公にす、幸に養魚家の參考となり、併て家庭娛樂を裨益する一端とならば足れり。

（旣成發賣）

東京本町 博文館

米國藥化學士
藥劑士
川崎近雄君著

（旣刊）



全一册洋裝四六判紙數八十頁
正價拾貳錢 郵稅四錢

夏の夕一家團欒の食卓に研究に依て得たる自衛の清涼飲料劑を上さば如何に家庭の趣味を深からしめん。又炎暑灼くが如き日來客に接したるの時先づ一盞の清涼飲料を製すれば如何に主婦の品位の周到なるかを顯はさん。本書は久しく米國藥舗にありて清涼飲劑製法に經驗を有し亦前に京都醫科大學醫院藥局にありて助手を拜命し製劑上に就きて多年の研究を積みたる川崎近雄君が家庭及製造業者の爲め新鮮美味なる清涼飲料劑を輕便實用的に製する方法を簡明に記述したるものにして。家庭に於ては主婦の良友又營業者には好指針たる様編述したる者なれば。趣味と實益と衛生とを兼ねたる無二の良書は本書を措て他にあらざるなり。

東京本町 博文館

女ゝ廣の二

讀書作文唯一師友

幻堂内山正如君編

【八月上旬出來】

中等學生作文寶鑑

全一册

四六判總クロース美本
金文字入
紙數六百頁
正價七拾五錢
郵税拾貳錢

▲卷頭寫眞銅版

●福澤諭吉先生肖像及筆蹟●中村敬宇先生肖像及筆蹟●宮城春晴●富嶽晴望●春の芳野山●夏の華嚴瀧●秋の宮島●冬の松島等

作文に關するの書册汗牛充棟なりと雖ども能く中學程度に依つて整然たる編述に成れるもの極めて稀なり而して中學程度に在つて敎師及學生とも最も困難を感ずるものは實に作文の一科にあり編者爰に見る所あり多年作文の著述に精練なるを以て其組構極めて親切周到に學生をして自在に作文の圓熟を得せしむ所謂作文界の羅針盤といふべし其内容區劃の如きは下記細目に依て知るべく文例類語及び應用の三欄は作文の經營布置結構を知るに於て最も有力なる資料といふべく殊に終編の書簡門は其作法を記すること最も詳明なり

●第一編 **記遊門** (一)春の部(二)夏の部(三)秋の部(四冬の部(五)雜記の部○摸範文例類語及應用課題

●第二編 **論說門** (一)論の部○人物論、諸物論、文例類語應用 (二)說の部○摸範文例數題及類語應用等

●第三編 **傳序門** (一)傳の部○摸範文例數題及類語應用等 (二)序の部○摸範文例數題及類語應用等

●第四編 **題跋門** 題跋の摸範文例數題を掲げ其類語に於て起句叙事句結句を分截し應用課題に於て錬習す

●第五編 **祝祭門** 祝詞と弔祭との摸範文例數題を掲げ其類語に於て起句叙事句結句を分截し應用に於て錬習せしむ

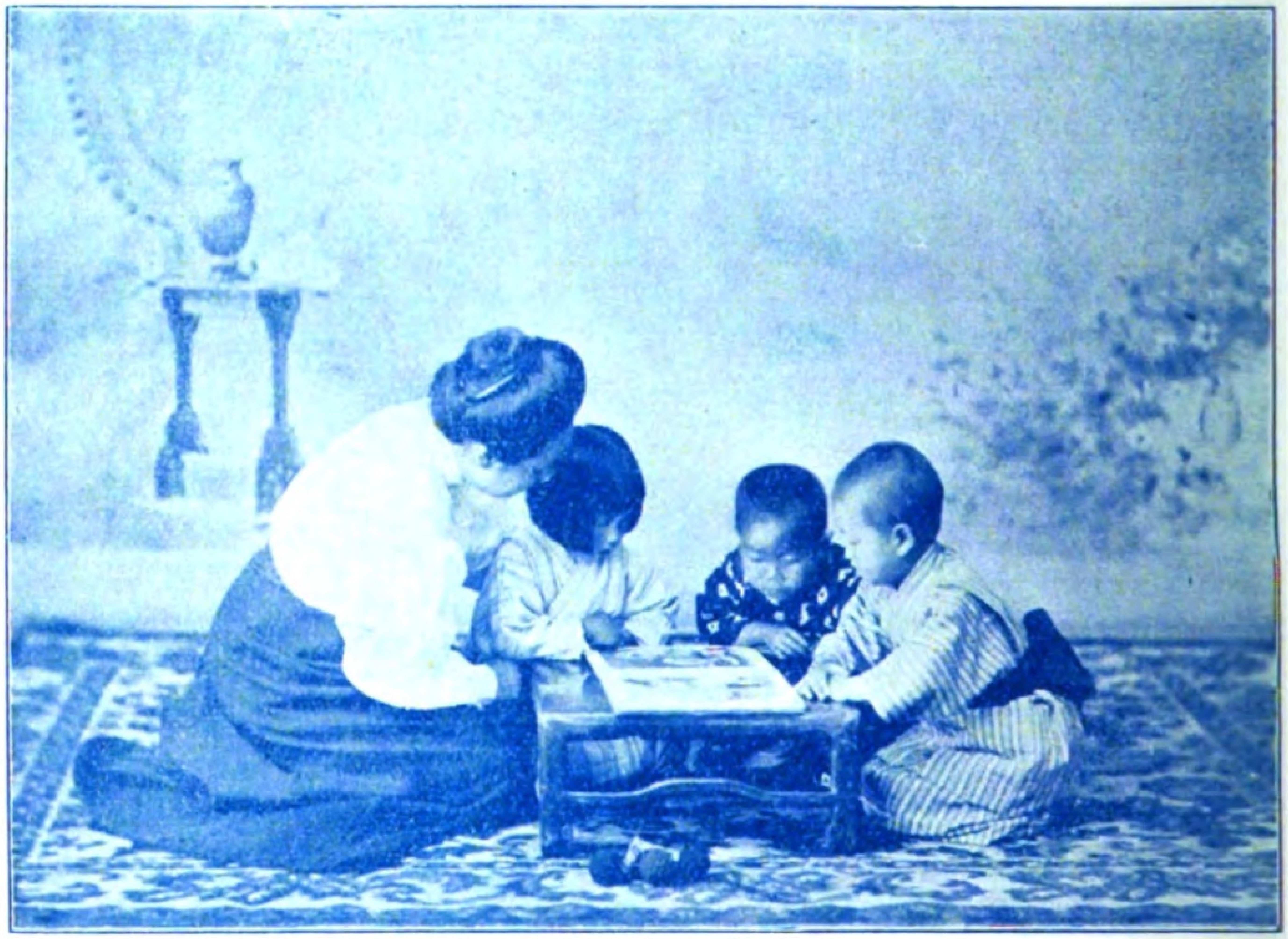
●第六編 **雜體門** 上來の各門に收まらざる贊○銘○頌○賦○書○辨○解○評等の摸範文例を掲載して其應用に補ふ

●第七編 **書簡門** 書簡文の心得○摸範文例○實用文例の三欄に分ち特に上欄を設けて實用の妙を得せしむ文例數百題

東京 博文館 本町

女(庚の三)

甲賀藤子女史と幼稚園兒童



(記事参照)



函館和洋裁縫女學校卒業生

少女世界

皆樣！今度**少女世界**が出來ます、これ迄少女方の讀物としては、本館から少年世界や女學世界の一部を以て、これに充て、居りましたが、**女子教育**の著しい發展は、到底今日迄通りでは世間の希望に添ふことも出來ず、又從つて少女方の一大不幸を思ひ、茲に斷然獨立して少女世界を編み、**來る九月上旬**新涼の天を期して**第一號を發行**することになりました。さて**其編輯統監**にはお馴染の**小波山人**が、本誌の兄分たる少年世界幼年畫報同樣に力を盡して**少女訓、少女お伽噺**に其卷頭を飾るべく、其他**少女修養**談、少女小説、**少女的科學談**、の如きは何れも**女子教育界**に知名の士に乞ふて、專ら**斬新に有益なる材料**を網羅し、以て後日の賢母たり良妻たる人の**良師たり良友**たらんとするのであります、若し又**口繪、挿畫**の、**印刷体裁**の如きに至つては、從來**比類なき新機軸**を案出し專ら趣味の教育にも大に裨益する處のものであります、滿天下の少女諸姉、この雜誌一度發行の曉には、必ず見落し給はぬ樣、今から御注意申して置きます。

東京 **博文館** 本町

(辛の一)

女（辛の二）

マスター、オブ、ロース

宮本桂仙君著



全一冊洋裝三六判紙數二百卅頁

八月中旬發行

西洋人が日本服を着けたる者を見れば何だか不格好にして見苦しきと同じく日本人が洋服を着用する時は等しく變なものが多い樣なり、其は身體の姿勢が各々異なることが第一の原因であるけれども第二の原因は其着用法を知らざるに在り然るに身體の姿勢を急に變化せしむるとは不可能の事なれば先づ洋服を着るには洋服の着用法は是非一通り心得ねばならない。洋服には日本よりも複雜なる種類が多くして時と場合によりて種類を異にするが故に少くとも禮服の種類だけでも覺えて置く必要がある、著者は歐米に學ぶと十年能く彼地の風俗に馴れ禮儀に通ず曩に男女交際法を著はし女子に必要なる事柄を叙述したるが今又た紳士の心得を公にし就中洋服に附いて晩餐會、舞蹈會等に於ける詳細の事項を我が國の紳士に紹介せんとす、新日本の紳士として社交を重ずる人一本を座右に供へ時と場合の顧問となさば其益する所盖し大なるものあらん、加之ならず文章平易にして趣味津々たるが上に斬新の議論も所々に散見す、是れ實に紳士として缺く可らざる良書なり。

本書目次

發兌元
東京本町
博文館

女(辛の三)

（山葉風琴（保險附））

壹號形	金拾六圓五拾錢	六號形	金五拾五圓
貳號形	金廿六圓五拾錢	七號形	金六拾五圓
參號形	金參拾七圓	八號形	金七拾五圓
四號形	金四拾參圓	九號形	金百圓
五號形	金四拾八圓	拾號形	金百貳拾圓

メーソンモデル

第壹號	金百參拾圓	新形壹號	金八拾圓
同貳號	金百五拾圓	新形貳號	金四拾五圓
同參號	金貳百圓	足折形壹號	金貳拾五圓
		同貳號	金參拾五圓

○山◎葉◎洋◎琴◎

壹號形	金參百圓
貳號形	金參百五拾圓
參號形	金四百圓
梨地塗	金五百圓
傘臺	金七百圓

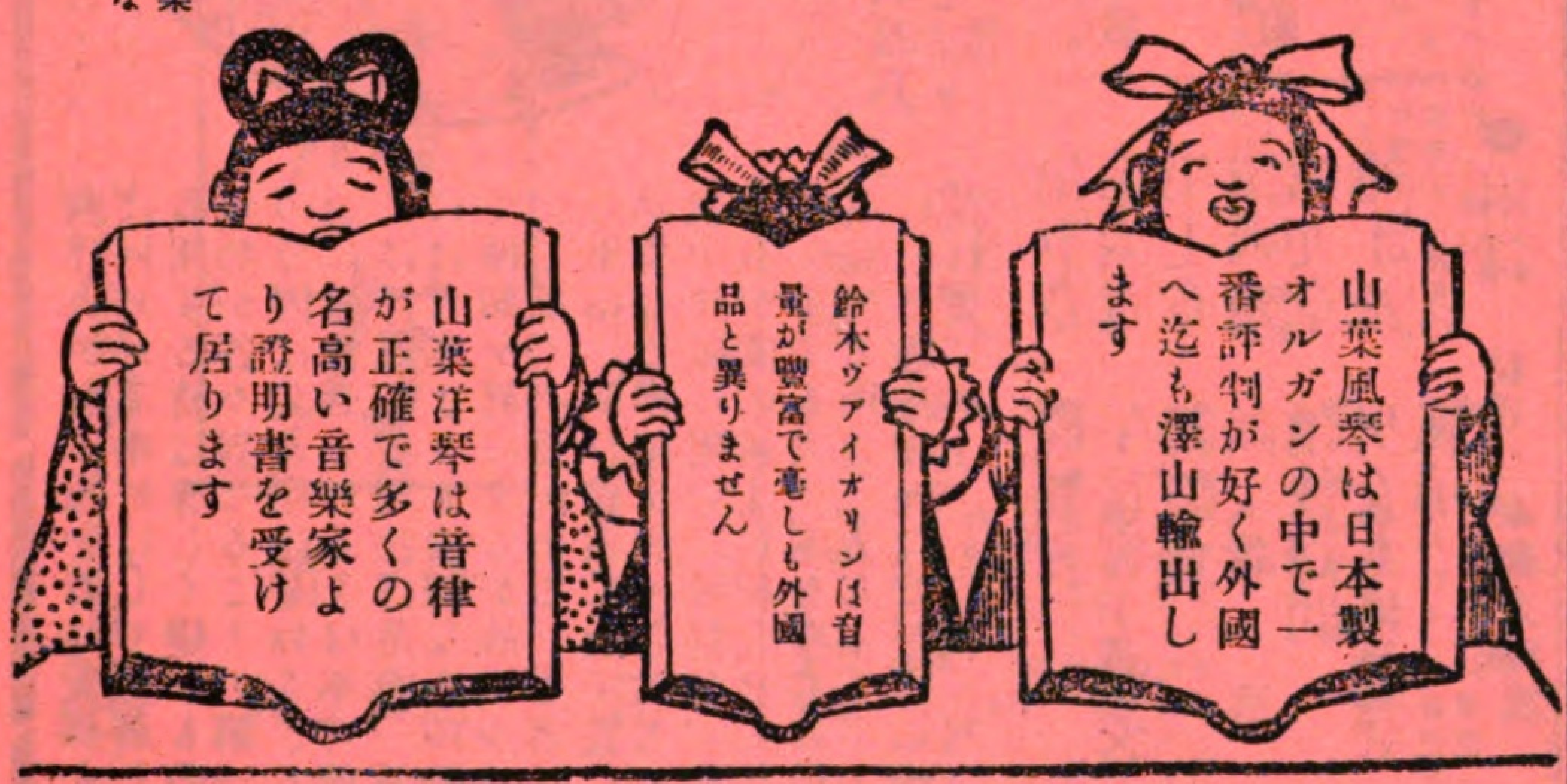
○鈴木ヴァイオリン

金五圓以上金八拾圓位迄各種
弓　金壹圓以上各種
箱　金壹圓五拾錢以上各種　其他附屬品各種

●舶來洋琴、參百圓以上參千圓迄各種
●舶來風琴、百圓以上千五百圓迄各種
●舶來ヴァイオリン及弓箱等各種
●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種
●戰捷紀念國旗印銀笛數種
●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

○ピアノ、オルガン調律修繕應需

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジョーレット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す





東京市京橋區竹川町十二番地　合資會社　共益商社樂器店　電話新橋五二九　電信畧號キヨ

女（辛の四）

アルプスの絶景



（ロカルノー温泉場）

巴里の女辯護士

（記事參照）



ルエル夫人



マルテン夫人



ブテ夫人



ザーヨー孃



最初の佛國女辯護士ショーヴアン孃



ザラン孃

根治確證

わきが

新治療藥 ラビヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず
價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を驅逐し潔淸し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひて苦惱を脫せよ丙

毛のぱへる

原名ベグネス 毛髮生養液

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

防バンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

みやくをとろし

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す
價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳圓拾錢 特別製分貳圓拾錢小包料拾錢

メリルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經のとまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

専賣 東京本郷湯島四丁目十二 オリエンタル藥館

根治確證 新治療藥

梅毒 キーネル

輕症は半劑惡症重症も二劑用ひよ暫く奏效す世間種々雜多の無効なる賣藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必ず根治す

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし試に一劑分丈けも用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

獨逸撰方 効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しようかちも一夜に輕快を覺え膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分

如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ひよ忽ち根治の目的を達す本劑は内服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受くるを得速に用ひて病根を斷絕し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

専賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥館

（壬の一）

女(壬の三)

◉會員大募集――目下入會の最好機なり

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

(壬の四)

新學期開始

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評 講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評 米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評 高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評 講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評 講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評 講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼ 端書にて申込あれば直に郵送す可し

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會



女學世界

第六卷第拾壹號

八月五日發行

家庭暦

日曜（五日、十二日、十九日、廿六日）

行事‖氣節は上旬より立秋に入る○二百十日は立春より數へて二百十日目の日（本月末日か九月一日）にて農家の大厄日とす○大根、蕪、秋蕎麥を播種す○殘暑堪へがたく諸所の瀧業昌す○東京にては月の二十五日龜井戸天神、二十八日深川八幡の祭日あり○各地にて夏季講習會あり○家々にては晴天の日に夜具布團の洗濯をなす。

遊覽‖舊暦の中秋に當る月は滿に月見團子、枝豆等を供へ月見の宴を張る○蓮見は不忍池、芝公園辨天池、京都大谷、大阪天王寺○朝顔は入谷尤もよし○瀑布は養老、布引、日光の諸瀧、白糸、佐野瀑園○吟賞には初秋、稲妻、秋草、朝顔、銀河、花火、蟲聽等あり。

料理‖西瓜○眞桑瓜○蕃椒○なた豆○里芋○しめじ茸○鮭腹ら子○玉川の鮎○中川のセイゴ○栗飯○松蕈飯○紫蘇實の鹽漬等は味最も美

一忍は以て百勇を支ふべく一靜以て百動を制すべし　蘇老泉

人は邪にして天は正なり而して邪は遂に正に勝たず　セクスピーア

時論

一家安全の礎

ネルリ、ホール、クレメント孃

日本婦人の勇氣と温柔と、物に當つて堅忍な精神あつて然かも婦人らしいといふ美德は、歐米諸國人の大に稱讃するところで、皆さんが御國の英雄を誇るに充分な理由があると同時に、御國の氣高い御婦人方に向つては又大に誇るべき價値があると思ひます。

一體何處の國にも好ましくない、即ち私共の理想としたくない婦人がまゝあります、今これを二種類に分けて申しませう、第一は賢良な婦人となることが出來ながら、そうならうとしない者。第二は賢良な婦人となりたいと望がひながらも、さて如何してよいか其方法の分からない人です。第一に屬する者には深かい同情を與ふべきですが、第二に屬する者には出來る丈の助力を與へなければなりません。

現今日本の若い女子にいろ〳〵誘惑の多いことは皆さんがよく御承知の事でせう。歐米諸國の婦人には永い、

年代の間に漸次に起つて來た事柄が、今日の日本の女子には一時に急激に起つて來たのであるから、此場合是非とも特別なる指導と感化とを與へねばなりません。就ては何事も同情を注いで見ねばなりませぬ、日本基督教女子青年會の如きは、この邊に大いなる時勢の必要を認めて起つたもので近頃學校の寄宿舍以外に女學生のために寄宿舍を建てようとして居るのです。同會の働きは遲々たるものですけれど漸々多くの人士の賛成と助力とを得て、遠からずその計畫も成熟することでせう。

さて婦人の强情を直す最良法は何かと申すに、先づ之を未發に防ぐことが肝要です。私共の諺に「一オンスの豫防藥は一ポンドの治療藥に勝さる」といふことがあります、で豫防は先づ皆様方の娘さんから始めなければなりません。

東京の某女學校に敎鞭を取らるゝ一外國婦人の言に、「私は女中にでもさせるがよいといふやうな些々たる事でも心をつくして、よろこんでするように生徒に敎へます。例へば玄關に見送ること、出迎へること、着物をチヤンと調へること、履物をそろへること、若しもそれが果して良人の心をよろこばすものとしたならば、妻たるものは是れを衷心より務むるの習慣を取らねばなりませぬ、私がまだ小兒の時、父の出入りの度毎に、父のスリツパーの世話をすることが、私の小兒心の樂しみでした。こうして父を慰め父に事へるのが母と私との喜びでありました。今でもこの様なやさしい行が、出來るならばしたいものですが、今は孤獨の悲しさ、それも出來ません」と申されました、それで母親たるの義務は、其の子女に向つて、どんなつまらぬ仕事でも、若し必要な事であれば喜んでするやうに敎へ、且つ自分の家庭をこの世の最善最美なる所とするのは、妻たる者の最も高尙なる義務であることを知らねばなりませぬ。

婦人は又時として、自分の仕事が餘り單調で變化のないのに愛想をつかす方もあるやうです。或人は、男子

の働は日沒と共に終るが、女子の働きは終るときがない、と申しましたが、實にさうで、妻は時に依つては、主婦となり、婢となり、母となり、乳母となり、又料理人となり、裁縫女ともなり、毎日の御留守番にもならなければなりません。斯る次第であるから中には自分のする事が甚だつまらないものゝ樣に考へてゐる方もあるやうですが、決してそうではありません、この世の中に家事ほど婦人に取つて大なる仕事はありません、即ち毎日一家の上に起る問題や困難を着々と解決して行くことは男子が戸外に於て取る處ろの仕事よりも遙かに大なる責任であり且つ大なる事業であるのです。

△詐りは幸福に對する致命傷

さて次に家庭に於ける義務は、夫妻互に平等であらうと思はれます、或る詩人の詞の中にある如く夫と妻とは丁度弓と弦のやうなもので、弓を曲ぐるものは弦である、然し弓に從れて戻るものも弦である、で互に片方がなければ役に立たぬといふ、丁度夫妻もその通りで、共に勇氣ある清美な愛情を以て相和し相助け合はねばなりませぬ、されば凡そ結婚は、お互にこの深かい義務や責任が雙方ともに明かに認めらるゝ迄は、容易に企てらるべきものではない、結婚してから後に惡い性癖があつて一致せぬとか、圓く行かぬとかいつて不平を鳴らしても、もはや取り返しはつきません、ですから相互に知り合ふといふことは結婚の以前からで、それが又結婚後もなほ永續しなければならないといふことを十分に考へなくてはなりませぬ、されば何れの場合にも欺騙といふことは幸福に對しての致命傷でありますが、殊に結婚に關して隱し合ひ欺き合ふといふが如きは全然幸福を滅殺します、諺に人を知るのには其人と添ふて見よといふ事がありますが、この添ふて見よといふのはあながち結婚せよといふ事ではなくつて知己になれといふ事です、タトヱ淺い知己の間にも、相手の缺點や品性は、明かに窺ひ知らるゝことですから、併し斯う申したからとて私は强ひて米國あたりに行はれて居るやうな

青年男女の交際を、そのまゝ日本の男女間にお勸めいたすのではありません、唯其中庸をお取りになるやうに希望します、日本舊來の習慣にある夫を擇び妻を娶るといふ晴れの婚姻席上で、夫妻これが初對面であるなどといふことは眞の幸福を得るに對し、餘り冒險的ではなからうかと思はれます。

又兩親に於ても未來の婿や嫁となるべき者の人格を吟味するにこれでは餘り、不注意に過ぎるかと思ひます、さて美容とか富とか名譽とかいふやうなものは、もと〳〵愛の要求に應ずる資格ではございません、寧ろ智才とか、善良とか淑德とかに比べては些の價値もないのでございます。

さて結婚が成立つてからはどうするかといふと、御存知の通りシエクスピーアは「悍婦矯正」(Taming of the Shrew) と云ふ面白い話しの中に、邪險な妻を娶したものは唯邪險な一人の夫の嚴しい手際であつたといふことが書いて在りますが、世の多くの男子方でよし時間があるにせよ、まさかに自分から一つ邪險になつてあのやうなことをしてみやうと思はるゝ方も無からうかと思ひます。就いては雙方の剛情を矯正する方法として家庭の圓滿を圖るべき最良手段は、

△第一滿足の德＝何事に限らず、自分にある丈のもので滿足する事は眞の幸福を得る秘訣です、この滿足さへあらば富貴貧賤は唯眼前の塵のごときものであります、富は幸福を左右するものにあらず、滿足こそ幸福の土臺です。

△第二妻の價値＝數日前或紳士が永らく入院したる其の夫人の退院を聞きて「家内が歸宅致しますので 私共はどんなに嬉しいか知れません、あれが入院してからといふものは萬事手が屆きませんで家の中は暗の夜も同然、秩序が亂れ、着物は汚れ放題食物は口に適ひませんし、まるで親切氣のない旅宿に居る樣な心地でした」と申されました不斷は妻の價値も解らず、其の眞味も有難味も分らぬけれども、さて居なくなつて見ると家の內

が亂れておぢゃむさくなつて大いに妻の價値が分つて來るのであります、故に良人たる者はよろしく此の邊に心をとゞめてよく妻の價値を認めねばなりませぬ、日本の良人の中には妻が病院にでも行かなければその有難味を解しないのが多いやうです、どうか皆さん、其最愛の妻がなくならない内に妻の價値を知つて下さるやうに願ひます。

△第三利己や我儘でないこと――我儘とか利己とか申しますことは、多くの不幸や不和の原因となります、私共は互に人の時間を妨げたり思考を拘束してはなりません、で妻は何日も家にばかり引き込んで居るべきものと思ふのは誤りです、勿論家庭は地上に於ける最も美はしき慰安の場所とならねばなりません、家庭は愛の中心とならねばなりません、さてそこで夫の富は大小に拘らず妻も等しくその權利を持ち義務を負はねばなりません、「戰場に臨んだ者と、糧食輜重の番に當つた者とは、同等に功賞せられねばならぬ」といふことが或る立派な裁判にありました、しかし勿論、妻は夫が其缺乏を供給してくるゝからといふて奢侈放逸に流れて、己が縱恣をする權利はございません、さて妻たるものは金錢上の事は一切公明に節儉に正しくすることが必要です、そこで若し妻たるものが眞に勤儉貯蓄の必要をよく理解し、彼の幾多忠誠なる妻の協力が、其夫の事業の失敗を救ひ、之に反して無才無能の妻の不心得が、一家の災禍を釀すかといふことを知るならば、自然萬事を經濟的に所置するやうになるでせう。

△第四信頼――夫が其妻の精神や行爲に對して全き信頼を置くことは、やがて其妻の精神や行爲を其信任に應はしきものとなすやうになります。この信任といふことは最もよき刺戟となり、基となることは明かなる事實であります。

△第五忍耐――これは大切の德の一つであります、いざ妻が其小さな家庭を持つてこの爲めに、如何につくす

べきか、引いては婢僕の身の上に對してまでも、之を補助し之を導き、且ついろ／＼面倒なる事が起つて來ます併し乍らこの困難と面倒が婦人に取つて大なる樂となるものです、何となれば若し婦人として何の屈托もなく心配もなければ却つて不愉快と不滿とを來らす源となるのであります、故に困難と面倒は樂ですされば其心配を負ふには第一忍耐がいるのです、而して此際若し一方に同情を結合した忍耐があるとすれば更に最良の助力となるのであります。

△第六思慮の深いこと‖妻の安寧や幸福の爲めを計つて、與へらるゝ親切の言葉や注意は、殺風景な過失ばかり探して居ることよりは遙かに妻を從順ならしむる方法でござります。

△第七貞操の德‖古き諺に貞操ある婦人は其夫の冠冕なりとあります、誠に其の通り、之に反して不貞操は人類社會の禍の根元です、貞操は文明進歩の基礎で人間社會を組み立つる處ろのセメントであります、今若し婦人に貞操の德が缺けて居るとしたならば社會はどんなに成りませう、恰も要の放れた扇のごとく、バラバラに成つて仕舞ひます。あらゆる社會上の罪惡や、家庭上の紛紜は皆この婦人貞操の缺乏から來るのであります。乍併男子が婦人に貞操を要求する以上は女子も矢張り男子に之れを要求する權利が十分にある事と信じます。婦人のみ貞操を守ツて男子が之を犯してよいといふ法はありません。

△第七愛の德‖愛は世界中の最大なるものなりとはヘンリードラモンドの言です、愛はすべての戀を變ずるの力があります。今日まで全き愛を以て强情な頑固な人を變へた例は澤山あります、この愛の最も驚くべき模範は基督の生涯に現はれてゐます。さてこの愛こそ眞に家庭を善化し美化するものであります。

今私共がベトーベンの優雅なるソナタの一曲を聞きますと、其美に打たれて恍惚とするではありませんか、さて同じ曲でも若しや未熟練な者が無暗に彈き出したならばどんなに聞苦しい不調和な音が起るでせう丁度其の通り、前申した婦人の諸德も若しよく注意して調和し整頓しなければ眞の幸福を得ることは出來ません。高き希望、尊き動機、清淨なる心は新の幸福を生み出して永久なる生命の活力となるものであります。

世帯持としての蓮如上人

文學博士 前田慧雲

名譽や財產、位勳の如き所謂肩書は個人に取つては或る意味からいへば贅澤物である、つまり何の價値もないものである、然らば家庭になくてならぬものは何であるかと云へば、第一圓滿なる人格と美德である、若しも家庭が不和で風波が常に絕へなかつたならば、人は眞の慰籍を得る事が出來ないから、名譽位勳があつても、何等の用もなさないのである。

一度家庭に圓滿を缺いたならば、如何にあせつても、急に直るものではない、寧ろ心靜に回復を圖らねばならぬ、夫れには先づ主人の人格が大切である、人格を修養して其感化を家庭に及ぼさねばならぬ、之れに付ての適例は、眞宗中興の名僧蓮如上人の如き、よき模範であらふ。

抑も蓮如上人は本願寺の開祖親鸞第八世の嗣法にして、眞宗の勢力を今日の如く偉大ならしめたる人である、斯く一代の名僧であるから、其家庭もなか／＼拔群の所があつて、然も其家庭は悉く上人の人格から來たのである、上人は小供が澤山あつたのだが、皆父親の感化を受けて、悉く其人格は高尙であつた、今上人が家事經濟上に於ての、注意すべき事を二三擧げて見やう。

一、冥加を思はれし事　上人は平生恐ろしいと思ふ心を忘るゝなと、人每に敎へられた、此恐ろしいと云ふは、佛敎で云へば如來、基督で云へば神、即ち此の宇宙には己れよりも遙かに偉大なるものがあつて何時も己れのそばを離れず、己れを保護してくるゝ立派な力がある、冥加と云ふのは即ち此の力の事である、故に人間

は結果を思つて仕事をしてはいかない、何を食いたい衣たいと云ふ心より働く樣な現金なことではいかぬ、何事も天地自然に對する報恩の心掛を以て働かねばならん、上人は三度の食事に必ず佛祖の賜を先代の恵みとして、一々膳を頂いて飲食された、又信者から御布施を貰はれた時も、必ず衣の下で輕く頂いて、一々佛に御禮を申上た。

斯る次第であるから、如何なる些細なものでも、上人は決して粗末に取扱ふ事はなかつた、或る日廊下を行かれる時、紙屑が二三片落ち散つて居たのを見て、あゝ勿體なし、何人か佛の賜をかく粗末にするぞ、とおし頂いて拾はれた、又ある日腫物の膿をぬぐはせる時、其處に杉原紙が一枚あつたから、御子樣は何氣なく其紙を取つてぬぐおうとなされた上人は嚴かにそれを戒めて、あゝ、和子よ、汝は佛祖の賜をみだりにするな、其の紙の半分にて足れりと、半を裂いて懷に收められた。

しかし斯る小事に心を注がれたから上人は凡常の人では規模の小さい吝嗇な方と思ふ人もあらふが、なかなか以てさうではない、戰國兵亂の時に當つて、八十年間の長日月兵火の間をくゞりぬけて最も大膽に布敎された此の一大傑僧である。

二、節儉なりし事、上人の家庭は何事につけても極めて儉約であつた、其前半期は兵馬倥偬の時に當つて敎運最も困難を極めた時であつたから、自然儉約もされたであらふ、乍然後半期は其反對に最も富有なる生計であつたに拘らず、以前の事を忘れず、克己忍耐されたのである。其結果として本願寺の財政は明治の初年に至るまで日本長者鑑の大年寄に表出され、朝廷式微の折柄には恐れ多くも即位式の費用を獻納し奉りたる美談を遺したのである。

一例を言ふと、上人は立派な身分でありながら、如何な大寒にも、朝の盥漱には必ず冷水を用ひられ、又月

の光の明かなる時は、燈を消して書物を讀まれた、薪炭を焚くにも非常に意を用ひて、むだ火のない樣にされた、次に佛事用と私用とを嚴重に區別して、如來の前には光明赫燿と燈を盛んにさるゝにも拘らず、自分の室には燈心一本で書を讀んで居られた、以て上人が日常の衣食の儉素なる事を推し圖らるゝのである。

而も上人は身體頗る壯健で、九十歳の老齡に達せられても、尙徹夜して、佛事に勉勵された、斯る次第であるから、小供等には折々自分の經歷を語つて、戒めとされた、十三歳の稚兒の時から、九十の老齡に至るまで、草鞋をすり切らして、六十餘州の津々浦々を行脚された其辛苦困難の樣を、繰返し〳〵家人に訓諭されて、吾々が斯く安穩に生活するは、皆悉く佛の賜、先祖の惠みであると諭された、去れば蓮如上人の一代は、宇宙の威靈に感得されたる、活力と信仰の塊である、眞宗の勢力が、社會に及んだのも、やはり此の活力と、威靈の結果である。

そこでつく〴〵、私は上人の性格に依つて、大なる敎訓を得た、就て之れを一般の家庭に示したいと思ふのは、左の事柄である。

自分の小供達が成長して社會に立ち、其生活が不幸にして順境に行かず、大なる困難に遭遇した時、夫れをよく凌いで行くのと、又其困難に堪へ切れずして、屈從し、墮落して行くのとは、抑も家庭の仕付の方法如何にある事で、主人が贅澤をすれば、己れ一人はよかろうが、其結果は子孫に大なる苦痛を與へるのであるから、尤も愼まねばならぬ、美衣を斥け、美食を愼むのは、己れ一人の克己忍耐のみでなく、つまり我が最愛の子に對する大なる慈悲である　（文責在記者）

我身の尊き理由

婦人は如何にして煩悶を解くべきか

三輪田元道

人生の不可解とか、煩悶とか、人は何故に活きねばならぬかといふ樣な精神的問題が男女靑年の間に波及するに至つたのは極く近來のことで、古來の婦人は恁かる不健全な思想は抱かなかつたのである。若し偶まありとすれば單に戀愛に對する煩悶を和歌文章の上に洩らす位に過ぎなかつたもので現今の婦人の如く生哲學者めいた事を云ふ人は殆んど無かつた、尤も之は婦人敎育が盛になつた結果、人文の進歩に伴ふ一種の副產物で、過渡時代に於て免れ難い思潮である。殊に若い女學生――未だ一向世間の事情も知らぬ處女が濫りに人生問題に頭腦を悩まし世の中を悲觀するなどは甚だつまらぬ事で、此等は素より無病者の呻吟と齊しく、深く憂ふるには足らぬが、唯だ玆に驚く可き事實は自殺者の增加した一事である。最近の統計表に依ると自殺發狂兩者を合して、從來は男子五人に對する女子一人の割合にすぎなかつたのが現今では男子六人に對する女子四人の割合になつて居る。又一ヶ月平均四百人に滿たなかつた自殺者が近來は六百人の多數に上り、勿論其中の多數は發狂者である、此の著しき自殺の增加は敎育者及び社會學者の最も注目すべき現象で其原因は家庭上生活上の困難から起つたのが多數であるが、又不健全なる思想に養はれた一種の煩悶病者が其一部を占めて居る、之を詳しく解釋せんとするには勢ひ東西の歷史に溯つて婦人の心理狀態より研究せねばならぬ。

△婦人の煩悶は物質上の虛榮心

元來女子の煩悶は何に起因するかと云ふに、失戀の結果、生活上の困難、家庭の不和等より起るのもあるが、概して云へば物質上の虛榮心が滿足せられぬからである。財產、名譽、美衣美食が理想通りに供給せら

れぬからである。其證據には今の女性が理想として居る歷史上の人物は如何樣種類であるかと云ふに、其多くは精神界の偉人よりも寧ろ、クレオパトラとか楊妃姬とか妲妃の樣な物質的成功者であるやうに思はれる。併し此等の婦人は眞の成功者であるかと云ふに、決して爾ではなく畢竟たわいもなき瞬間の成功者にすぎぬ。それを理想に描く現今の婦人は全く物質慾の爲に身心を焦されて居るのである。

▲婦人の潛勢力

西洋人は婦人を稱して『男子を左右する者は女子なり』と云ひ、兼行法師は『女子の一髮よく千斤の重きを釣る』と云つて居るが之は淸い意味に於て婦人を稱したのではなく、暗に女の潛勢力の怖るべきを諷したのである。有名の哲學者で『女子は惡魔の化身なり』とまで罵倒したショウペンハウエルでさへ一人の女優に金三千磅を贈るとの遺書をなした程であるから、女子の潛勢力の怖る可きは云ふまでもなく、從つて女子が虛榮心に驅らるゝのも此邊から基因したのである。

▲昔の女子は自身を惡觀せり

支那及び印度の經文や經書には悉く女子を惡意味に解して居る。孔子は「女子と小人は養ひ難し」と云ひ釋伽は「女人は罪深くして汚れたるもの」として頗る濟度し難い者の如く云つて居る。此思想がつッと德川時代まで一貫し來つて「或は三從七去の敎となり或は「女子は三界に家なし」と云ふやうに敎育されたので、女子自らも自身を惡觀し、女は男よりも劣等の者であると心得て居た。壓迫されればされたなりに、女とは此の如き運命の者である、と觀念し絕對に服從して不平を抱く女もなかつた然し斯の如き野蠻の狀態は決して永續すべきものでない、人文の進歩と共に、女子にも相當の權利自由が與へられて、今日では學問をする機關もあれば新聞雜誌の如き女子が氣焰を吐く可き舞臺も供へられてある。卽ち女子が自覺に對する報酬として充分の新天地が開かれてあるではないか。然るに女子が昨今の如く煩悶不平を訴へる樣になつたのは、一言せば女子自ら社會に對する要求が餘り大きすぎるからである、學問を充分に消化し盡さぬ爲め空想徒に大にして實力之に伴はず、智識のみ發達して世間の實相を知らぬからである。

▲婦人の幸福は男子以上

元來婦人は何人によつて生活しつゝあるか、其衣食は何人に依つて供せられつゝあるか又何人によつて敎

育を受けつゝあるか、これ皆な其父兄若くは良人たる者が汗油に代へて婦人に保護して居るからである。即ち男子は其妻子を養はんが爲に、社會生活の戰鬪場裡に立つて血を流し汗を絞り、勇戰奮鬪しつゝあるではないか、之に比較すれば女子が家庭にあつて一家を整理してゆく位は實に易々たる事業である、然るに女子が之を思はず物質上の虚榮心が滿足せられぬとて叨りに不平煩悶を口にするは少しく分に過ぎたる我儘であらうと思ふ。然し多數の婦人の中には、實際不幸の境遇にあつて世を悲觀するも無理ならぬ人もあるが、要するに心の鍛錬が足らぬから自殺するやうなとになるのである。

▲如何にして煩悶を醫すべき乎

勿論煩悶は人々の勝手であるが其煩悶が既に病的に陷つて居る以上、何とかして救濟の策を求めねばならぬ。さらば如何にして之を慰安すべき乎。先づ第一に信仰が必要である。畢竟心に倚ろところが無いから、兎角迷ひ易く且つ世上の寂寞を感じて悲觀する樣になるのであるが、心に一定の信仰さへあれば如何なる場合に處しても驚き悲しむとはない、然らば其信仰は何によつて求むるかと云ふに宗教を信ずるのが最も捷徑である。「靈魂は永遠に滅びず」てふ信仰力に依て慥に其一部分は救はれるのであるが。日本人は宗教思想が未だ充分に發達して居ないから宗教によつて慰籍を求むるとの出來ぬ人は、止むを得ず自ら修め自ら信ずる方法を講ぜればならぬ。即ち「我」が社會に在る理由と、「我」が社會に負ふ處の義務とを自覺せればならぬ。

▲生を重んせねばならぬ理由

曾て煩悶せる一婦人が村上博士に、「人は何故に生を愛せればならぬか」若し充分なる解答を得ざれば自殺する云々、との書面を送つて答辭を求めた。博士は之に對して、「貴女の煩悶は讀書の中毒からである」と答へられた。然るに其婦人は更に反駁書を寄せて、「妾は中毒する程學問をしたともなければ又それ程深く書を讀んだ覺もない若し讀書學問なるものが中毒を起す性質のものとすれば、教と云ふものは甚だ愚なものである。又人は何故に自殺してはならぬか、人の生を愛する如く妾は死を愛す云々」とやつた。博士は之に何と答へられたか、又其婦人は自殺して了つたが或は生きて居るか其處は解らぬが、兎に角此種の思想は人生の眞に重んず可き理由を深く窮めぬのと社會に對する義務の自覺がないから起ッた誤謬である。即ち「我」の此世に存在する價値を知らぬから往々疑が起る、我一身の貴きを知るに至れ

ば決して厭世の心など起るべき筈はない。

▲我は社會の共有物なり

凡て人間の存在は事實である、此事實は如何なる學說でも否定することは出來ぬ、此事實によつて生くる我は、我一人の我に非ずして社會全般の『我』である。謂はゞ社會の共有財産である。ルーソーは『人間は約束なり』と云つて居る、如何にも約束に相違ない、人と人とが相集り『我』と『我』とが接合して茲に社會なるものを形作り、其約束によつて生じたのが即ち義務である、其義務を放擲して自分勝手に身を殺さうとするのは取も直さず、社會の約束に違反する一種の罪人と見做さねばならぬ、我其者が社會によつて衣食を供給されて居る以上は之に對する當然の義務を支拂はねばならぬ、其義務は何であるかと云ふに即ち活きて働くことである。モ少し約めて云へば『我身即ち社會』である。我一身は社會の共有財産であるから之を濫りに殺さんとする人は社會の公共財産を私するに齊しい罪人である。

▲人生は苦中に快樂あり

社會は一種の戰鬪場裡である、之に對して厭世を說き或は自殺を企てんとするは、恰も戰爭に赴いて私かに脫走せんとする卑怯に等しい心懸である、人自ら義務に勇敢なれば必ず苦みの中に一分の快樂を感じて來る、凡て人間の存在は一種の抵抗と摩擦とによつて保たれて居るもので、此摩擦がなければ社會は死物の如きものである、畢竟苦みあればこそ快樂もあるので、人間が義務として苦痛を忍ぶ位は何でもない譯である。而も此苦痛を忍ぶ能はざる人は義務の自覺心なき大なる我儘者と云はねばならぬ。

私の母は昔から熱心なる儒敎信者で就中、『辛酸を嘗めて心鐵の如し』といふ梁川星巖の言葉を萬事のオーソリチーとしてあるから如何なる困難の場合に處しても落膽する樣なことはない、凡て苦痛を求むるも去るも一に人々の心懸け次第である。又熊澤蕃山の『憂きことのなほ此上に積れかし限りある身の力試さん』との歌の如きも意志弱き人に對する唯一の敎訓であらうと思

はれる。

▲煩悶者に對する慰安

西洋でも十年程前に『我は神なり』と云つて同時に發狂した學者がある、思ふに之は變則なる哲學に伴ふ結果であるが、支那や日本の儒教には恁那發狂する樣な教もなければ亦た發狂した儒者もない、故に私は毎に儒教を土臺として萬事常識を保つて行くと共に、今の煩悶を口にする女性諸君にも是非漢籍の素養を深くして欲しいと望むのである。即ち論語の一冊も熟讀し沈思默考したならば必ず胸中の慰安を得、慥かに自殺者の五人や十人を救ひ得るだらうと信ずる。尤も儒教には婦人を罵倒した文字は多いやうなれど其處は氣にかけず篤と熟讀玩味したならば、少くも其中からオーソリチーとすべき言葉を見出すであらう。之に西洋の向上主義を調和して自ら工風すれば必ず婦人問題の解決もつき亦た各々分に安んじて生活し得るでせう。

▲分を知りて諦むるにあり

凡て苦悶とは心に描く想像であり て實物ではない、謂はゞ影の如く雲の如きものである、今の女性は即ち雲と影とを描いて自ら煩悶して居るので、物質に對する雲の如き慾望と富に對する影の如き慾望とが交々胸中に闘つて居るのである。之を醫せんとするには儒教の所謂『足るを知る』と云ふとが必要である、自ら分を知り足るを知つて世に處すれば決して不平などの起る筈がない何人と雖も萬事自分の思ふ樣にばかりゆくものでないから困難に處しては諦めが肝腎である、之を要するに『人力を盡して天命を俟つ』と云ふ事に歸するのである。

婦人の鼻

▲長き鼻の人……性質卑劣にして人の惡口を云ふ
▲短き鼻の人……物事を忘れ易し
▲大きな鼻の人……薄志弱行にして多淫なり
▲小さき鼻の人……正直にして邪念なし
▲低き鼻の人……利己心に富む
▲段ある鼻の人……高慢の氣味あり
▲膨れた鼻の人……頓智ありて滑稽趣味に富む
▲仰向ける鼻の人……性質ねじけて柔順ならず

女學生と神經衰弱

神經の衰弱は統計上不規律の勉强に因るもの多し凡そ腦病は學生時代に於て多く、四十歳を越ゆれば甚だ少し、而して女子の十三四歳より十八九歳までの間は、其身體の發育上、完全なる思慮を缺きて、腦の病的時代とも云ふべきものなり。此間にありて運動を禁じ、不規則なる勉學をなすものは必らず神經衰弱に陷る殊に身體薄弱なる女生にありて甚だし。

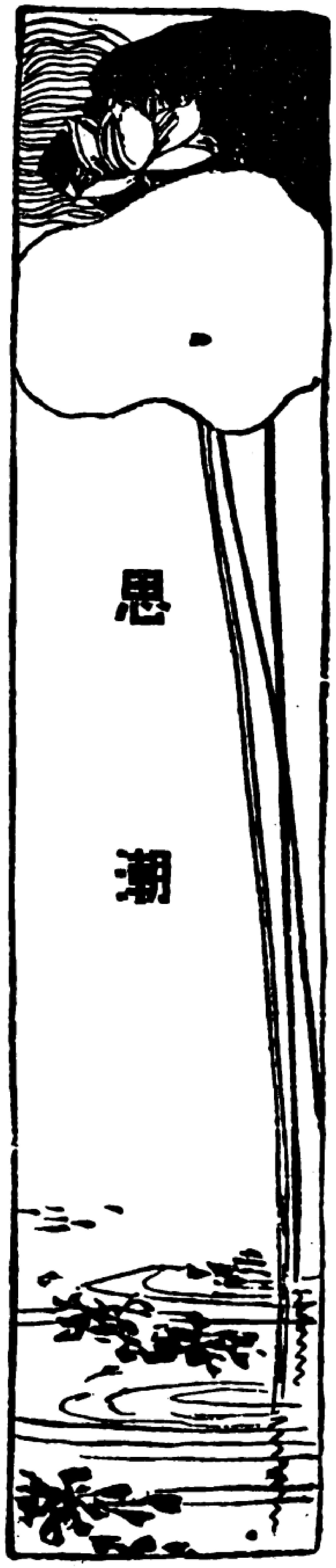
予が明治三十二年九月以來六年半の間に診察したる同病患者七百八十五人に就き、其原因を調べたる結果は、

▲勉强、苦學、試驗等に原因するもの。百六十二人▲處世上の苦心及家族の不和、六十二人▲失敗落膽及損失。十五人▲近親の死亡に依る心痛。二十五人▲憤怒、驚愕、悔悟。十一人▲家政上の苦慮。三十五人▲異性に關する苦慮。五人▲業務上の苦慮。四十一人▲自己の疾病を憂慮して。二十一人▲其他種々なる苦心。二十一人(以上は專ら精神的過勞より來るもの)▲不攝生。十八人▲手淫及房事。四十六人▲酒及煙草の濫用。四十二人▲身體及精神過勞多忙等。四十八人▲外傷及外科的療法。十九人▲急性病。廿八人▲慢性疾病。四十四人▲梅毒。三人▲生殖器病。一人▲衰弱、亡血。十一人▲藥用、中毒。一人▲敎育の不良。一人▲原因不明。百廿五人▲合計七百八十五人。

即ち勉學に原因するものの最多數なるを見るべし、之れ其不規則より來るものにして、歐米の如く時間の上に嚴格に規律を守りて、秩序有る生活を營まば、決して此憂無きなり。例令ば起床、食事、執務、運動、讀書、就床等を規定して、之を實行する時は、學年試驗の間際に成りて、徹夜の大車輪にて勉學せざる可からざるの理無し。

人は各自にその素質を殊にして腦に强弱鋭鈍の差あり、然るにこの青年を一堂に集めて敎育する時は其結果は同一ならざるべし、然るに不結果なる鈍者には、威迫を加へ、叱責してまでも、其勉學を强ゆるは甚だ不道理にして、敎育家のよろしく反省すべき處なり、又發情期に際して身體に異動を來し、頭腦の不透明なる少女に對して、現時の高等女學校は、餘りに學科が多過ぎざるか、たとえば五合の播種を適當とする地積に七合の播種をするがごとく反つて其收獲を不利益ならしむるに至らん。

肉體の勞動を專一とする者は兎も角、腦力を以て生活する者は、必ず一週一日の休息を要す。暑中の如きは殊に休養の必要有り。然るに從來の風習として、日曜日を休業せざる者多く、暑中の如き公然完められたる休暇にも、尙は勉學する學生有り、是れ甚だ不規律なり夏は十分精神の休養に務むべきなり(後藤腦病院長談)



現代令夫人の熟讀翫味すべき
警策的大文字

良人待遇法

泊子

一婦人の柔徳を砥礪すべき試金石
一家庭の神聖を保つべき最良の防腐劑
一弱點多き男子の秘密消息を解剖して家庭改良の一助に資す
一婦人の貞操を弄ばんとする男子をして一讀愧死せしむ

能く家政を整理して、良人をして内顧の憂え無からしめ、心からの温い優しい愛情と好意とを捧げて、複雑にして繁劇な社會に出で丶闘ふ良人の身心の疲勞を慰め、かねては活動の餘地を與へ、發展の元氣を養つてやらねばならぬと、之れは苟くも、女學校教師たらむ人の口癖の樣に仰つしやる紋切り形、何れ、豆腐のお値段と同じ事で、誰しもスヰートホームを想ふの人は、此の上、耳胼胝拵へずとも分り切つた話、けれど、路は何時も平々坦々として十日の雨、五日の風必ずしも其の時を得ると云ふ譯には行きませぬ、うらうら霞む長閑な春野にも、忽ちにして悲風雨を呼ぶの壯觀を見る事が出來ませう、油の如き穩やかな夏の渚邊

にも、忽ちにして怒濤岸を嚙むの偉觀に接する事がありませう、人事は複雜で、運命は決して一樣の形を以て私共を支配するものでは御座いません。

されば常に處するの標準を以て、變に應ずるの準備を致して置きませんと、飛んだ間違ひが起つて參ります、親に逆はぬのが孝行だと申しますけれども父母に過失等のあつた場合に何處〳〵迄も爭はねば子たる役目はすみませぬ、成程名古屋は東京の西に位して居るから、東京の人に云ふ時は西だと云つて決して間違つては居りませぬけれど、京都の人には然うは云へぬ、一方では善と認められて居る事も、他方では反對の現象を呈する事が間々ある、だから良人を待遇するに於ても、第一位置が違ふ習慣が違ふ、其人〳〵に依つては性質も違へば職業も同じくはない、妻君天下で丸く治まる家庭もあれば、何もかも良人本位に奉つて至極平和に行く家庭もある。

昔は家事の一部を除いて總べての事に、少しでも婦人が喙を容るれば、牝鷄晨を告ぐるは一家の不吉として退けられて居つた、けれど、現代思想の潮流は、良人を天と心得ろの、良人は始めつから無理な者と思へ等との黴臭い女今川や女大學風の良人待遇法を確守して居るばかりでは、良妻として許されぬ場合がある樣になつて參りました、けれど勿論私共は前にも申した樣な

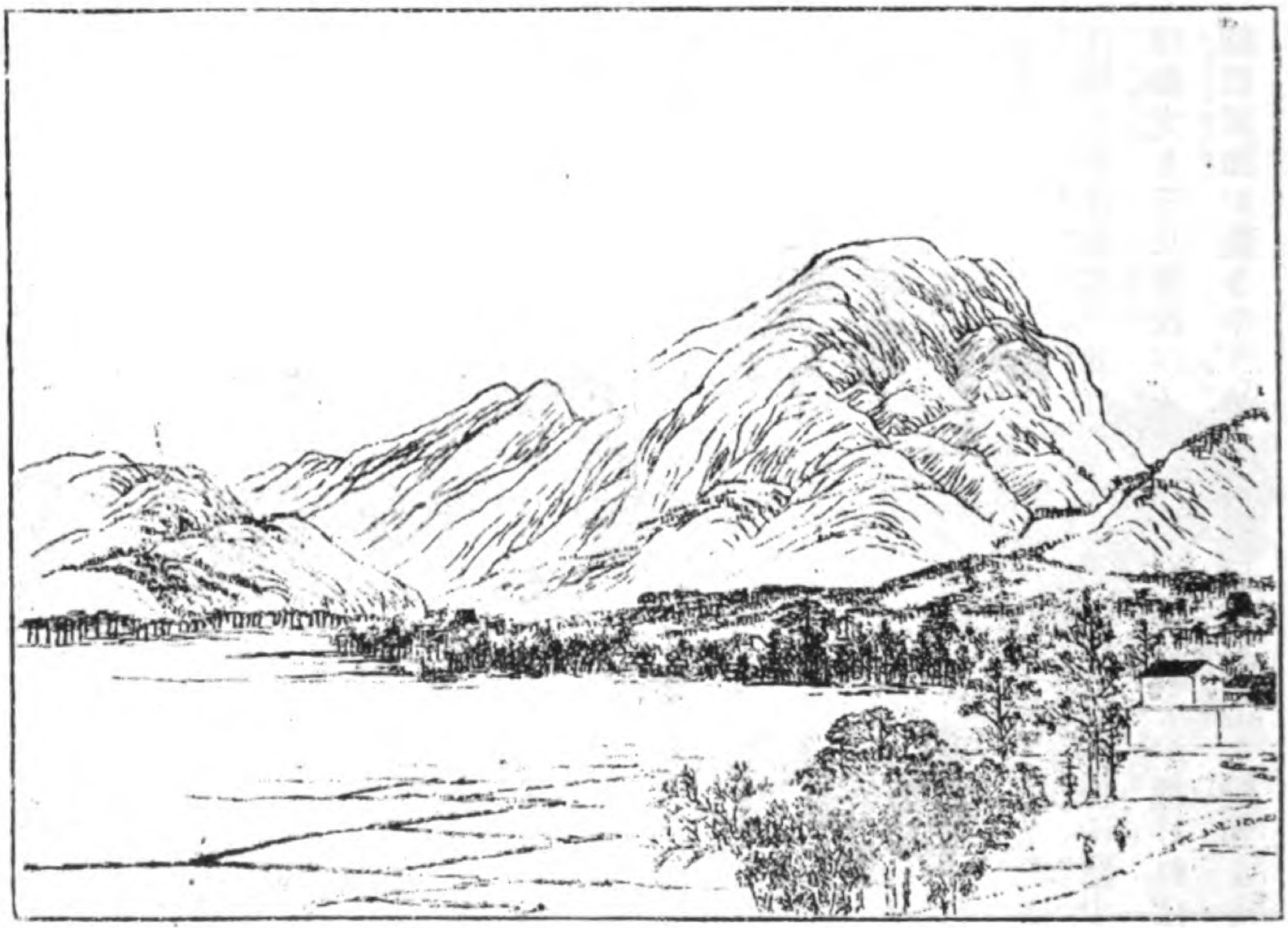
妻君天下

なるものに全然贊成致して居る譯では御座いません況んや相當な位置を保ち體面を重んずる人等には、餘り感心すべき待遇法としてお勸めはしないのであります、けれど事を成すには正道あり權道あり、大いなる良妻を以て自任して居られる方々には、這麼細瑾を顧みて居られる暇が無いので、隨分之で押し通して行つて、内助の功を全うせられた立派な賢夫人は世間に無いでも御座いません。

人の話しでは御座いますが、當時名望二つながら高き某博士の夫人にして、非常に新らしい思想を有つて

居らつしやる偉いお方がある由です、博士は元より學者肌の人ではあり、其れに餘り物事には無頓着の方で、嘗て夫人の留守に書齋からのそ〳〵と這ひ出して、お兄様方を相手にして他愛もなく凧を上げて遊んで居られた處へ夫人がお歸宅になつたので、博士泡を喰つて只管恐れ入つて居られたとか云ふ程ですから、夫人一人で、家政の事から子女の敎育から、內外一切の衝に當つて切つてお廻しになる敏腕には誰れも敬服しない者は無いと

比叡山　（近江山城）



谷文晁筆日本名山圖會所載

云ふ事です、選擧時にでもなると御自身出馬遊ばして運動をなさる、時には、大臣官邸迄押し懸けて行つて、良人を大臣にして下さいとお迫りになる事もあつたとやら、眞全く博士の今日あるは、夫人の內助の功半ばありと申して差し支へない位だと云ふ事であります、だから年少野心家は此のお方を以て、細君を娶る時の標準とし、若き婦人方は、此の賢夫人を以て後來の理想として居る由に伺ひます、元より裏店の妻さんが、ヘン聞いた

風な事仰つしやり遊ばすなど〻宿六を怒鳴り付けるのと形が違ふ、併し豪傑の細君を持つた人は悲慘な者さとは、或る人の評語。

其れから此れとは反對に、私の知つてる某辯護士で非常な、

從順しい內氣な細君

を有つて居る人があります、甚麽に良人が無理な事を仕様と、我身一つに自分の身を責めて、丸で腫物にでも障る様に大事に大事を掛けて良人に接して居られる、自稱紳士には附き物の待合通入り、其れも三四日の流連は珍らしくないと云ふ、甚だしきは愛妾を本宅に引き摺り込んで、差し向ひの晩餐に細君の手料理を愛妾に品評さる〻と云ふ始末、加之に恐ろしい癇癪持ちで、少し氣に喰はぬ事でもあると、直ぐに撲つ蹴る其れは手をつけて見様の無き東洋風の英雄豪傑、其れを細君は其の的になつて、御無理御尤もで只管詫び入つて居られるとか、君夫れでは細君冥加が盡きやうせと或る人が申したら、澄ましたもので、何あに意氣地なしだからね。

之れでも紳士の瑕瑾にはならないで、辯護士として少壯政治家として、斯界には嘖々の譽れ高く、一世の木鐸となつて風敎、道德、等に關する演說會には大抵此の人が出席されて居る、世の中は能くしたもので、此の人に前の意氣地のある細君を給つたら什麽であらう、其れこそ犬も喰はぬ波瀾の果ては、三行半か、さなくば、一家の平和を破壞して仕舞つて不幸な一生に終らねばならぬ事だらふと存じます。

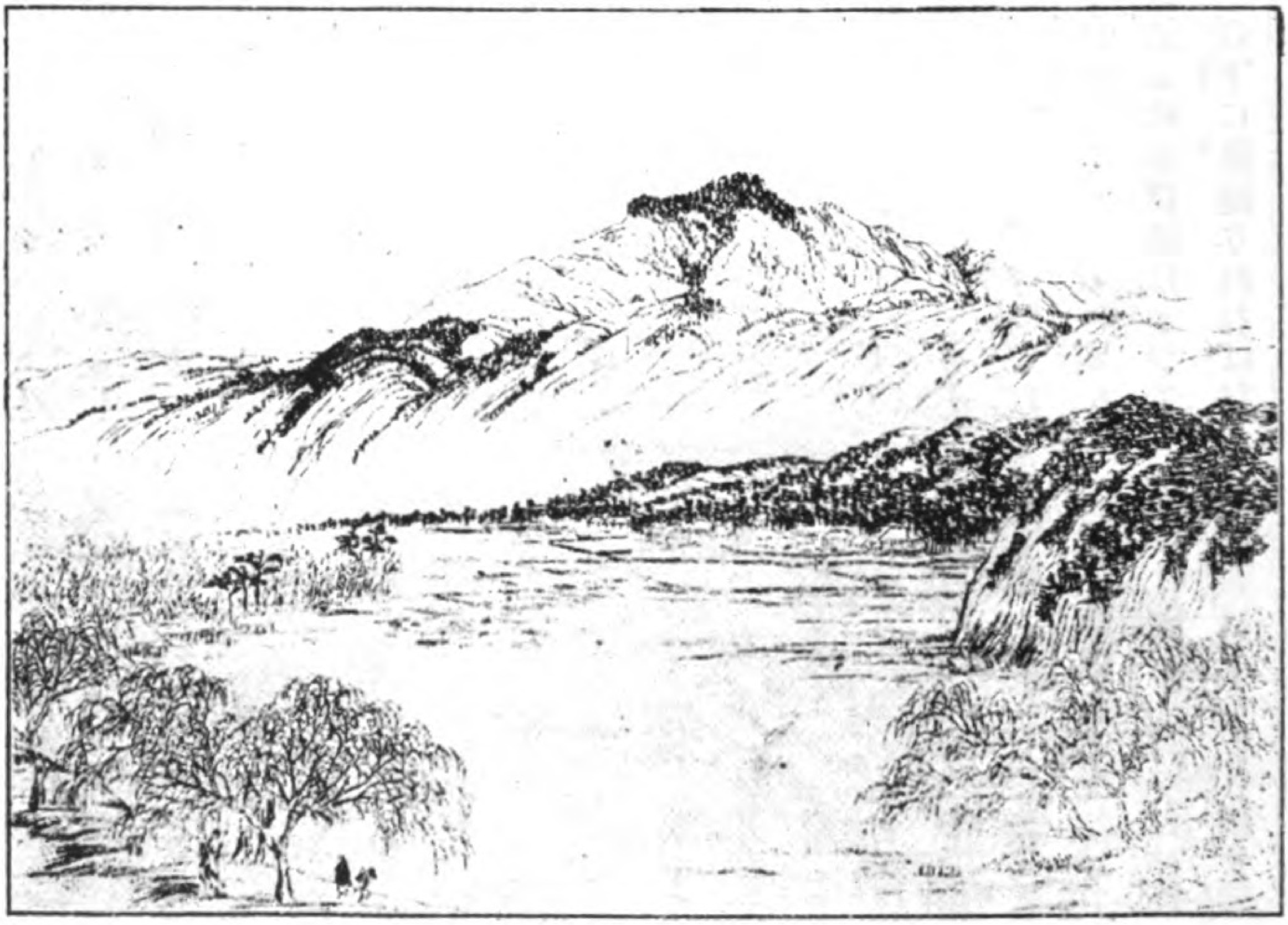
這麽具合で先も申した通り一定の標準を立て〻、何でもかんでも、其の定規に當て箝めて良人を待遇すると云ふ譯には行きません、丁度或る一種の動物が、時期と場所とに依つて、自己の生命を保護する爲めに、外面の色を變ずると云ふ様に、其の時と場合とによつては、機に臨み變に應ずるの機轉と、鄕に入れば鄕に從ふの度量とが無ければなりません、然うかと云つて自己の個性迄も變せよと云ふのでは勿論ありませぬの

で、表面に顕はれた手段方法は何であらうと、畢竟る處の目的を誤らぬ樣にせよと申すので御座います、即ち外部の色彩は幾ら變つても、兎は兎で跳ねるがよし毛虫は毛虫で自分のベストを勉めればよいのである、で私共は、嘗て經驗した範圍内に於て、怎うして良人を待遇したらば宜しいかと研究する前に、先づ

男は甚麼もの

だからと云ふ事を觀察する必要がありませう、古から婦人の研究には餘

愛宕山　（山城）



谷文晁翁筆日本名山圖會所載

程苦心された樣で御座います、西洋の或る詩人等は、「婦人は神秘なり、スフインクスの謎の如し」と迄絶叫されて、終には女性は到底不可解だとして衆論が一致した樣です成程、婦人は心情の赴く處流るゝ處、雲の如く、浪の如く、私共婦人自身すらも、婦人の心情は迚も端倪する事が出來ないのである、けれど分らぬ者は婦人ばかりでは御座いません、人類其の者が既に千古からの疑問になつて居るのでありますまいか、長陽は太陽より遠

しと云ひ近しと云ふ、我々眼界の及ぶ處でさへも、六十度以外は何物も見えぬでは無いか、況んや千變萬化極まり無き微妙なる心靈の作用を、我々人類の淺薄なる知識を以て知らうとする丈が、抑も僭越極まる愚な話しである、だから此處で男は甚麽ものであるかと云ふのは、決して甚麽六つかしい面倒な事でありませぬ亦申し上げてからが、梅干の種子迄割つて其の中の實迄割り出さうとも勿論致しません唯私共過去の經驗に照して、婦人と異なる男性の弱點を捉へ樣と致すので御座います、其れには第一に

男は我儘な者

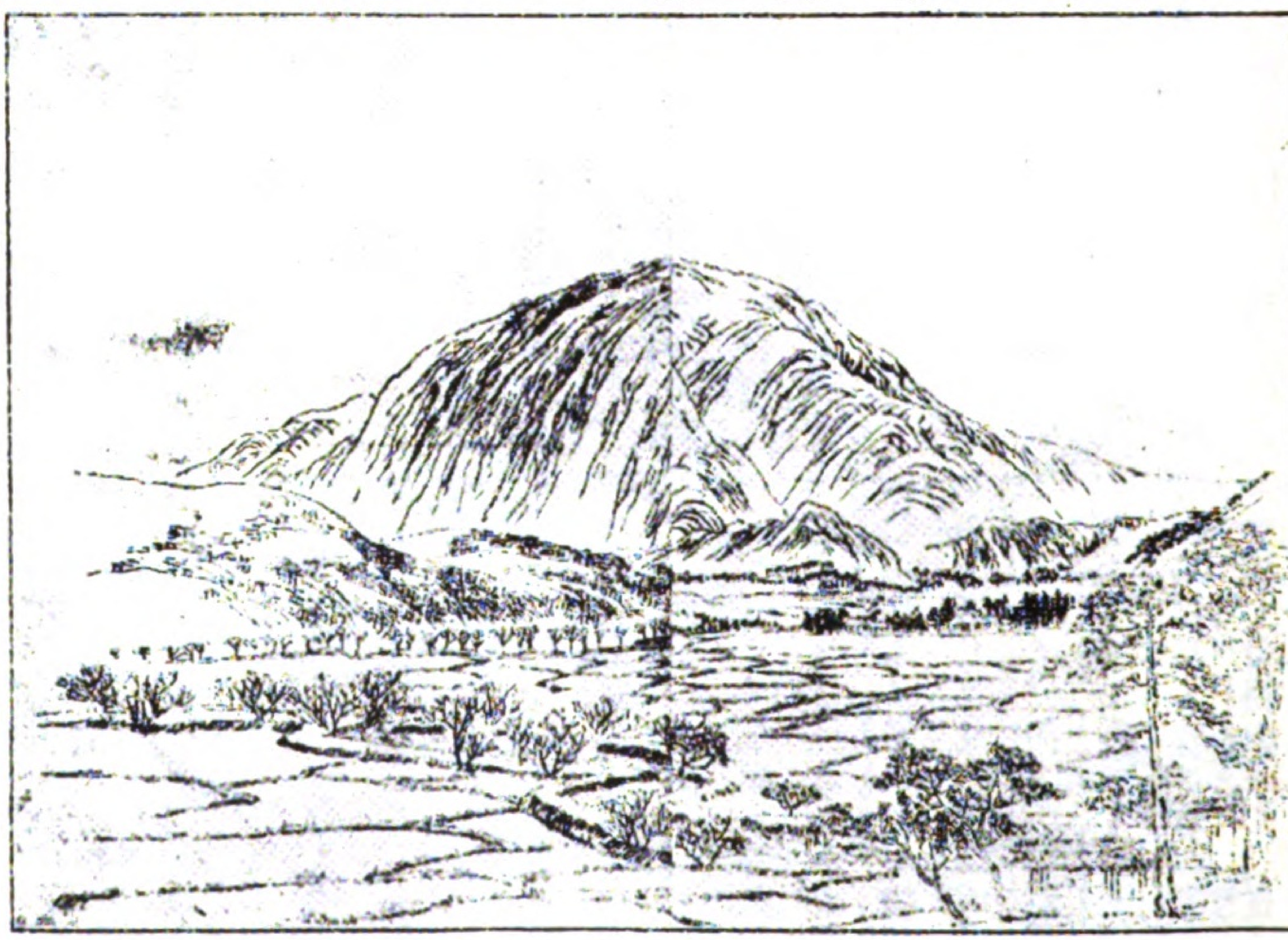
と覺悟せねばなりません、之れは獨り男子ばかりの罪ではないので、今日迄の宗教とか敎育とかゞ、男子を我儘に仕上げたのであらうかと存じます、佛敎では女人を惡人の部に入れ、儒敎では女子を小人の仲間にして措いてある、女尊男卑だと云ふ歐米諸國にそつてすらも、婦人は弱者として男子の下に保護されねばならぬ者として御座います、だから男子の我儘は種々な原因からして、習慣性となつた先天的なので、今更諸姉が怎う氣を焦つても駄目な話し、けれど中には、頻りと女權を振り廻す細君を大目に見て許して呉れる、寛大な男子も無いでは御座いませんが、先づ男子は我儘な者と覺悟して、其の我儘に事へて妻たるの本分を誤らぬ樣にした方が、安全の策だらふと存じます。

併し、此の我儘と云ふ處が男子の弱點でもある代り其の長所なので、女よりは惚いと云はれるのは、此の性情に基く一種の反影であります。

先日私が一寸用がありまして、本鄉のある處で巡査に道を聞かうと致した事がありました、丁度私より前に一人の男の方が矢張り路を聞いて居たらしかつた處が其の巡査頗る不愛相な顏付して氣の毒な程不親切に、碌々能くも聞かせ無かつたので、其の男は餘程憤慨狀に其處を去つた、で、私も不安心になつて來て、怎う仕樣かと思つたけれど、折惡しく四邊に聞かうと思ふ人はなし、什麽せ元々なんだから叱られたら其時

と、度胸を定めて、恐る恐る其の巡査に路を尋ねたら之れは又案外、手に取る樣に丁寧に教へて呉れたので御座います、一寸した事ではありますが之れは強ち異性相牽引するの電氣學上からの原則からばかりでは御座いますまい、畢竟、女性に對して强者を以て自任する處から起る、優しい側隱の心で、貴樣は巡査だから職務上人民に路を聞かせる事位は普通でと云ふ風に、理窟から征服するでは無く

伊吹山（近江）



谷文晁翁筆日本名山圖會所載

情に訴へて

所謂、男子の我儘なる性情の本陣へ肉迫したからだと思ひます、由來意志の強かる可き筈なる英雄の多涙多恨なるは、此瞬間の美しい心情の働きを云ふのでありませう。

此處が即ち良人を御する第一の秘訣かと考へられます、けれど一部賤業婦の樣に、自分の卑しい慾望を滿たす爲めに、男子の此の弱點につけ込んで、籠絡するとか瞞着するとかの類を云ふのではありません、勿論之れに

は、永遠涸れぬ心からの愛情を捧げる事を躊躇しては醜業婦等と更に選ぶ處なき一時の姑息手段に過ぎぬので、却つて良人を好遇するの道に遠ざかる譯になつて參ります。

風吹けば沖津白浪立田山
　夜半にや君が獨り越ゆらん

と故意か偶然か、愛妾の許に通ふ良人を送り出して、更け行く夜半に虫の音物悲しう、月に想夫戀の興や失せし、獨居の閨に訪ふ葦の葉風の一入身に泌みてか、密と窓押しての述懐、之れ等は餘程男子の性情の急所を突いた旨い趣向と云はねばならぬ、流石に色好みの聞え高き業平中將も、之では溜まるまいと思ふ、宜なり、前よりは一層交情濃やかになつたとは。

近頃或る人に聞けば、粋な某博士、職務に忙しき身のお歸りになつちや、妾厭よと、甘たるゝ可愛ゆき口元に心は殘れど、後朝の別れ惜しみかねて、夜更けての歸館路、俥を飛ばして家へ來て見ると、物思はしげに蘭燈に對し、悄然と、良人の歸館を待つて居られた影の樣な夫人を見て、博士取り敢えず、「夜更けて歸る我家には、寐入る坊やに待つ女房、何方向いても氣が咎め、一人心で詫をする、」と口ずさんで涙を翻されたとやら、

又或る人が、婦人は脂粉を以て形を作つて、男子に媚を呈するなんて、廿世紀の教育ある女子の爲めに僕は斷じて取らぬと嘆息されたら、婦人は自分を美しう見られたい爲めに形を作る……其處が即ち、女性の愛す可き優鈍しい處ではないかと、大變に恐悦がられた人もあつたと云ふ例もある。

だから、其處の呼吸を能く呑み込んで、拗ねるもよし、駄々を捏ねるもよし、笑ふもよし泣くもよい、而して良人に過失のあつた時には、充分に諫めて善に導き、若し又良人が進取の氣象に乏しかつたら、出來る丈勵して、向上心を促がさねばならぬ、唯男子の我儘なる心情に訴へて情を以て迫ると云ふ事は、呉々も忘れてはならない事だらうと思ひます、乃で此處の呼吸で能く會得出來て、良人の感情を調和する事を知つて

居りましても、

良人を尊敬する

と云ふ事を致しませんでは、到底満足な待遇法とは申されないのであります、之れ迄の日本の風俗とか習慣とかを離れて考へて見ても、今日の處體力から教育の程度から女子は男子の上に立つ事は出來なからうと思ふ、成程等しく人間と云ふ點から考へましたら、男が尊くて女が卑しい、と云ふ様な事は無い筈でありますけれど、彼の女尊男

鳥海山（羽後）



卑とか男女同權とか云ふ事は、男子自身が男子を責めるのは、甚だ聞えて居りますが、女子が、女子自ら唱道するのは、頗る謙譲の徳に悖りは致しますまいか、よしや、眞理は何處にありまして、古來因襲の久しき、今日直ちに之れを破打し様と云ふのは、策を得た事では無からうと考へられる所謂、自由結婚なるものが、悲惨なる運命を以て終るに拘はらず、干渉結婚の方が却つて好結果を得ると云ふ、之れは、前者は後者に比して兎角馴

れて居る處から我儘が出て、此の良人を尊敬すると云ふ事を忘れたに、多く起因するので御座いませう。

以上二つは良人を待遇するの大體の方針で、之れに依つて、其の都度〳〵に起る複雑な事件を各自の常識に訴へて、臨機應變の處置を誤らぬ様にせねばなりませぬ。

夫れから之れは或る特殊の場合に限りますが、

良人の職業に同情する

と云ふ事が必要であります、勿論良人の職業に依て相違は御座いませうが、少なくも良人の片腕となつて内助の功を全うする覺悟が無ければなりませぬ、殊に美術家とか詩人とか文學者とかの、即ち天才を要する一種の藝術家の妻となつた女は、什麼しても良人の趣味を解する丈の同情と智識とがなければならぬ、此の種の多くの人等は、絶えず書窓に閉ぢ込つて肉以外靈に憧憬し、神秘に觸れ様として、私共から見れば、丸で夢の様な事を正氣で考へて、煩悶して居るのであるから、一體が名聲心が強くて餘計に我儘で其癖神經質で、常識には比較的乏しい、であるから其妻となつた人は、一種精神上の憫むべき不具者と豫め覺悟して物質的の滿足とか慾望とかを放棄して仕舞ふ丈の勇氣が必要である、別けて此の種の良人に對しては經濟上の話しは大禁物で御座います。

幸か不幸か、未だ世は天才？に報ゆるには甚だ薄いので、一かど世に聞こえた知名の文士の細君すらも、手束ねの後れ毛掻き上げ敢えず、流石に目立たぬ程な下前の綴ぎ矧ぎも、良人の面目を思へば、我と恥ぢて行く日も來る日も臺所の隅で世帶の苦に窶れて居られる等は、まゝ見る例であります、されば、富とか人爵とかを望む人は、始めから決して此の種の人等の妻となつてはいけませぬ、一旦縁あつて此等の人を良人として、仰ぐ様になつた以上は、富以外に、人爵以外に肉以外に、人世の趣味を追究し、永遠に死せざる良人の作物に對して、慰安を求め光明を認めねばならないのであります、されば迚て、幾ら天才でも喰はず飲

ますには居られない者から、一生家計上の話に就いて相談せずにも居られますまいけれど、例へば良人が作物に筆を行つて居る時とか、非常に感想に耽けつて居る時とかは、餘程注意せねばなりませぬ、併しながら要するに、

良人の待遇法

は、先も度々繰り返して申しました通り、人情の自然を摑まへて、良人を愛し、尊敬し、優しい妻が同情心から家庭を治め子女の教育の任に當り、良人をして家庭の平和を攪亂するの餘地を與へぬ樣にするにあるのです、能く人は妻の義務とか妻たるべき責任とかと申しますけれど、責任を明かにする爲めや、義務を果たす爲めに、良人の待遇法を講ずるのならば、私は始めから同意致しかねるので、唯最愛なる良人の爲、温い眞情を吐露して、此れを以て家庭の全般に發現させるのを希望致します、最後に私は改めて此處に良人待遇法として、

「愛せよ、敬せよ、而して本能の急所に迫れ」

と、斯う云つて、此話しの局を結びませう。

致富の秘訣

◎カーチギー曰く、將來富有ならんことを希ふ人は、先づ貧究より事を始むるにあり、世人が貧究の青年に加ふる責任は、彼をしてあらゆる能力を發達せしむ。

◎エヂソン曰く、自己が第一に着目したる事物を熟視し之に固着すれば足る、その事物より得る處なきものは、聰智の一分子をも有せざるものなり。

◎セージ曰く、世人は何人も一弗の金を得べきも、如何にして一弗を節すべきかを知る者は、只沈重謹愼の人のみ。

◎ロツクフエラーは曰く、早起の習慣と就業前に運動する習慣を作るを以て第一となす。

◎ピルスベリ曰く、常に自家の受くる處に値する以上働け、何者もこれに抗爭するものあらざる可し。

◎アストン曰く、火酒と煙草とを斥けよ、負債を作るな、力の限り節約して晴雨を問はずに利殖する不動産に投ぜよ。

◎以上は世界大富豪が、一米國新聞の問ひに應じて回答せし自家の經驗に依れる成功の法なりとす。

徒歩と健康

棚橋絢子女史談

徒歩主義は結構です、妾は若い時から徒歩が好きでした。夫には種々の事情にかられて、餘儀無くされた場合も有ますが、之れが爲めに大層健康に成りました、今年は六十八歳ですが此通りでございます。

これに就て一つ感じた事がありますのは私が三田四國町に居て、當時神田橋に有つた學習院に通勤して居た頃の事ですが、大雪の盛んに降る朝でございました、此日ばかりは歩くのが嫌で、車に乘りたい物だと思ひましたが、當時私の數人の子供が矢張徒歩で通學して居るものですから、自己が先きに車に乘る事は出來ませんので、とう／＼歩く事にしまして、稍歩いて行ますと、雪は益々甚だしく、かッ／＼と降つて風が寒く吹いて、四邊は人通りも稀で車等も見當りません、丁度日比谷の原(當時は草茫々たる原野です)まで行くと、下駄の鼻緒がプッつり切れました。で、自宅へ戻つて下駄を直して來やうと思つても最早半分道來た上に、學校の方も時間が迫つてます、四邊を見ても雪眞白に積つて下駄を直す事も出來ません、勿論其位ですから人通りもありませんので止むを得ず、足袋跣足で行かうと思ひましたが、それでは教場へ出て跣足に成られればならぬから。一層始めの内に跣足で行つて教室で足袋を穿かうと思つて、書籍を左の脇に抱へ、下駄を右手に下げて卍字巴と降る雪中を一生懸命に行きました。やがて學校の入口で足を拭つて足袋を穿いて、下駄の緒の切れた方は手拭で足の甲に縛り付け、素知らぬ顔で學校に這入りますと、間もなくチン／＼／＼と始業の鐘が鳴りましたのです、實は妾は漸く歩いて來て鐵のやうに冷えた體や、感覺を失つた手足でも少しは火鉢で暖めて、茶の一杯も飲んでから教場に行かうと思つたですが、時間が來れば仕方か有りません、凍へ擬へて教場へ這入つたです、其時私は思ひました、若しお金でも澤山あつて車にでも乘つたら此樣寒い思ひはせまひもの、あゝ貧乏は辛い物だとつく／＼思つて、當時の辛さと云つたら今でも忘れ得ません。

其後は車賃位は出來ましても常に徒歩ばかりで、今日でも電車の有る所までは歩いて行きますが、氣のくさ／＼した時などに歩きますと

心持が大層善く成ります。只今でも相替らず健康なのは、全く徒歩の御蔭で御座いませう。

徒歩するに就きましては今日の女子の服装は甚だ不便ですから何とか改良せねばなりませんが、私は此頃新聞や雑誌に見受ける様な西洋じみた改良服は感服しません、従来の服を土台にして改良した物が欲しいのです。従来の服装では、裾が切れます、擦り切れゝば直ぐ取り換へる様にすれば何んの事も御座いませんが普通の婦人には手数ですから、そんな事の無く而も従来日本人の風采の損なはぬ物にして裾の下へ出る袖は強い布で、破るれば腰取り換える事を得る様の者にしたら善いと思ひます。

それから紋付を着た時ですが、下へ小紋の物を一枚着まして、表は縮緬で裏は唐縮緬(これは強くて安価ですから)のを重れ、それを腰へまくり上げて、上から吾妻コートを着、肩かけを着れば、腰の周圍は少し大きく成るけれども、裾は歩く時チラ〳〵見えても小紋ですから左程見苦しく無くて、紋付の裾はいたまないで歩き善うございます。尤も若い女には腰の大きく見えるのが恥かしいかも知られど、妾は常に斯う仕ますから、家庭では、「亦おからげ」ですかと皆が笑ひますけれども、之れが一番宜しう御座います。

歩く點から云ふと袴は大層宜しう御座いますが、學生時代を過ぎて、髷の奥様には一向似合ひません、従つて着けるお方も有りませんが、これは追々穿く事にしたら如何でしやう、そう致しますと是迄日本婦人の通弊になつて居ます小足に歩るくのも少しは直りませう。

妾は丸山福山町の自宅から本郷四丁目の電車まで三十分間で歩いて居ますが、用の都合で時々人力車に乗る事がありましても、途中の拾ひ乗りで、決して自宅から乗つて出ません、ですから妾の車賃は長男の半額位で濟みます。長男は玄關先きから乗りますので五十錢の車賃を要する所も、妾は電車の百回券を利用して若し利用の出来ない所は歩きますから唯だ三錢一厘位で濟む事もあります。實い、にけちな話で他は慾張りものだと思ふか知れませんが、妾は遞信省にも銀行にも一文も金錢を預けては居ません。元来金錢は嫌ひでほんの小使より外は持つた事が有りません只健康でそして愉快に職務を盡して居ますのが第一の楽みです、此頃の若いお方が人力車に乗つて行くのを見ますと、皆お顔の色が蒼白てます之れは、車にばかり乗つて居まして運動の足りない結果だと思ひます、妾の様な老ぼれでさへ努めてるのに、前途有望な若いお方なぞがそんな風では日本人の身體は益々薄弱になつて國家の前途が案じられるでは有りませんか。

夏の美――八月の卷

▲木槿――めくら子の端居淋しきむくげ哉、花は芙蓉のそれにも似て、風にも堪えぬさまながら、床に鉢植の眺めとならで、馬に喰るゝ運命とや、田舍道の右左り、詫びしき垣を彩るなり。露の朝を咲盛れど、人はさまでに賞でもせじ、月の夕を落ちながら、人はさまでに惜しまじとよ、されども花に遇報はありて、歌の嚢に入ればこそ、思の淵の瀬にも浮くなれ。

▲洗ひ髪――結ひたての島田、丸髷、涼しきものゝ一つながら、一夜寢ねたる朝の後れ毛、がくりとなりし根の緩みに、焼けし油の香ぞ物憂き。それよりは、洗ひ髪の、さば〱として肩に垂るゝは、緑の瀧の音なく落ちて、帶に飛沫の風や冷たき、團扇片手に涼臺の、男嬉しと見るは此髮、末長かれと祈りもすべし。

▲冷麥――客ありと見し臺所に、鉢や冷たき冷麥の、出す間に温む心地やせん、箸につるりと辷り落ちては、水に青菜の散る風情、木葉がくれの谷とや見ん、鏡に映る銀河のさまも、かくこそあれと語るに似たり。

▲稻妻――昨日は東、今日は西てふ稻妻の、何を怒りの眼をしばたゝく、山を二つに割るよと見れば、灘も裂けよと暗を射るなり。夏凄まじきものながら、夕べ入日の雲の彼方に、微かに光る俤は、詩にも入るべき一つならずや。

▲雷干――瓜をむく手の匂やかに、丈の長さを誇らんとや。形ち稻妻に似通へばか、雷干の名を負はせて、竿に危なき影を連ねん。そもや雲の峰の崩れん時、土に落つるの響ありや、刻みて盛りし鉢の模樣も、不破の關屋と人は見るべし。

▲夏瘦――夏瘦を人に語りて涙かな。美しき人の夏を瘦せて、戀に憂身のいぢらしさよ。千代の清水の涸れ果てゝ、底に小石のあらはなるより、哀れ深さに似たらずや。戀の情けを身にしめて、秋を肥ゆべき望みもあるべし。

▲登山――可愛兒に旅させよとぞ、女とて人の身ならずや。男に山の自由はありて、女になしと誰が敎へけ

ん、女人禁制も昔となりては、麥稈帽に日光を避けて、蝦茶袴の裾輕う、金剛杖に岩根を攀づる、またこれ夏の慰めならずや。巴勇々しと云ふなかれ、今板額の名にな怯ぢそ。脚下に雲を見たらん時、われも女神と人に誇るも、神もさこそと見赦し給はん。

▲鼠尾草＝みそはぎとはやさしき名なり、形ち萩に似たれども、その葉、その花、皆小さく、鉢に伏猪の姿を見するも、可愛きもの〻一なるべし。みそはぎや水につければ風の吹く、水の力を借らざればそよ吹く風にも得堪へじとや。

▲葛餅＝疊を海と見立てなば、これぞ海月のふうわり、と、涼しき影を宿すにこそ、箸にとまらぬ味輕く、鉢に冷たき色淡し。

▲蜻蛉釣＝今日は何處まで行きしぞとは、我兒の事を思へばなり。草はきれする野の端を、蜻蛉釣る兒の暮殘りけん、椎の一木を日の漏れたる、またなき畫題に上らずや、罪な遊びも罪なくして、昔を今に見るよしもあれ。

▲蕃椒＝花はさまでに美はしからねど、實に鉢植の眺めもありて、三坪の庭に紅長く、雨にも褪せず、風にも散らで、雨滴落ちの葺ばかり、辛き目に逢ふとは洒落たり。七色と名に呼ばれては、振出しの大江戸に、甘酒と共に十六屋の荷をも飾るとや、貧しき家の軒に干せるが、やがては貴き膳にも添はん。

▲雨乞＝大地も破れよと照る日の影、青き稲葉も黄となりては、今年の作も想はれて、農家に憂きの極みなり。簑笠に身を固めて雨乞ひの山登り、凄まじと云はゞ云ふべし、其角が一人雨乞ひの、三圍も昔となんぬ。

▲殘暑＝油の盡くる時しもや、燈火明くなるが常とぞ。今や殘暑の秋近かけれども、殘る暑さの煎りつくばかり、大暑に讓らぬ日のきほひは、鐘も鎔けよの力鋭し、夕顏棚の下涼みも、かくてぞ汗の種ともならんを、知らず顏なる鈴蟲の、獨り涼しき音に耽るなり。

▲行水＝夕月淡く柳にかゝれば、脊戸に戸板の圍して、行水の人の美くしさよ。そもや衣を枝にあづけて、盥に眞白の肌をまかせば、蟲も暫時は其音を盜まん。

夏季の飲料品

△ウヰスキーと鑛泉　夏季の飲料として、上流社會に歡迎されつゝある、ウヰスキーは他の酒類と違ひ水との調和が克く、酒量に由つて水の加減が隨意に出來、醇烈の爲め口を曲めて飲ずとも克きゆゑ、酒呑まずの人にも適すといふ、ウヰスキーへ調和する飲料水は鑛泉類が尤も克し、先づミツ矢印平野水、布引炭酸水、函根水等を混れば、頗る佳味となる故ウヰスキーの流行に伴ひて、鑛泉類の需用は增せり、又氷水やラム子に舌鼓を鳴す婦人方も、二十世紀の飲料品として鑛泉類、曾逹水を飲用さるゝに至りしが、此鑛泉類は、腐敗し易きものなればなるべく良品を選擇せざるべからず其の選擇法は、壜を逆まにして振つて見て、小さき泡沫が立ば品質の變らざる證據なり。

△葡萄酒と容器　葡萄酒は一般に古酒を尊む所より沈澱物の生じ易きものなり、之を取扱ふには動搖せぬやう、最初に壜の汚物を拭き去り、次に澄だ所を洋盃へ注なり、若し動搖させたらば沈澱物が混り、高等飲料としての品位を損するものなり此葡萄酒の收容器は(銀座の明治屋にて鬻けり)、中央の所に氷を容るやうな裝置にしてあれば夏季は氷を以て葡萄酒を冷却する事を得べし。之は新着の舶來品との事なるが、其の機械は單に洋酒のみならず日本酒を容ても克し、清淨劑の附屬品として贅澤社會に需用多しと。

△麥酒と氷の不調和　麥酒は衛生向の飲料にして夏季は缺くべからざるものなれど、麥酒は殊に水を嫌ふものなるに拘らず、主客ともに麥酒洋盃の中へ氷を容たがりて、麥酒が出れば氷を添るやうな習慣となり居れるが、氷は麥酒の禁物にてその豐味を失するものなれば、麥酒の洋盃へ氷を入れざるがよし、眞の麥酒飲は冷藏庫にて冷した麥酒さへ口にせざるものなりと倘麥酒の良否を確めるには、先づ麥酒を飲だ跡口が淡くして、洋盃へ注だ時に淡色なるが良品なり。

△清涼飲料　婦人方の嗜好は孰れも舶來品の、ライムヂユース、オレンヂユース、レモンヂユース、シロップなどの原料數滴を清水の中に滴せばよき飲料となる、其の原料は一壜一圓内外にて各所の西洋食料品屋にあり、猶普通の飲料品は果實水薄荷水、肉桂水、ラム子等なれど、溷濁腐敗の恐れある故、自宅製の外に用ひざるがよし。

△アイスクリーム　態々西洋料理店より取寄すとも、器械あらば手製にて家内中へ御馳走出來るなり、其の原料は牛乳四合に鷄卵八個(但し黄味のみを用ゆる)、白砂糖三十目と云ふ割にて、原料を製造器の中へ容れ周圍へ氷二斤と食鹽を混て詰め、約三十分程手を休めずに器械を急轉すれば、中罐の中の原料は氷つて良品のアイスクリームとなる、製造器械は以上て分量を最小器として器械の價格は四圓、西洋食料品屋にあり。



小崎千代子夫人の家政談

中村鈴子

一身を犠牲とし矻々として傳道の任務に餘念なき小崎弘道氏の人格は一世の認識する所でありますが、弘道氏の好伴侶にして二十五年來、影の形に伴ふ如く、殆ど一體となつて弘道氏を補佐されしは、實に夫人千代子であります、夫人は熱い深い信仰を以て、傳道に心身を粉碎されますので、無明の迷を醒し、神の懐に入るもの幾何あるか分りません。それで世間では小崎氏御夫婦を稱へて靈南坂教會に男女二人の牧師があると申し、記者も毎度此噂を耳にしたので御座います。

斯くまで外の務を良人と共にせらるゝ夫人は、又家政整理、子女薫育に熱心で、常に後進の模範となられて居ります。記者は一日夫人を訪れて、着實と快活を兼ね備へた御話を伺ひました。其御話は――

▲子供留守居の躾

私は御承知の通り外へ出る用事が多う御座いまして、婦人會、老人會、矯風會其他種々教會に關する集りには、必ず出席致さねばならず、一個人の交際に就ても出掛けることが可なり澤山ですから、大抵先づ午後から留守勝で御座います。で此務の爲めに子供に留守居の習慣を付けました。ハイ私は五人の子女を持つて二人缺けたので御座いますが、唯今では末の娘が九

歳になりましたから、最早ゆるりと外出も出來るのです。子供は何れも自分の乳で育てましたが、赤子の時分から留守居の習慣を付けるやうに心を用ゐ、何時も一人の下女に托して置いて出ました。尤も極赤子の間は、成るべく二時間位で用事を切り上げ、大急ぎで歸宅致し、乳を與へては又出ると云ふ風に致し、少し東西が判つて來ると母樣は御用で出るのだから大人しく留守番をなさいと始終言ひ聞かせましたので、自然それを平常と心得て、小さい內から少しも後を追ひません。ハイ私共では唯今まで子守を置いた事はありませんで、唯だ一人の下婢に臺所から留守中の子供の世話一切を任せるのですが、子供も前申す通りの習慣ではあり、下婢も十分責任を負うて勤めますから、人樣のやうに留守の懸念なしで是れまで過しました。

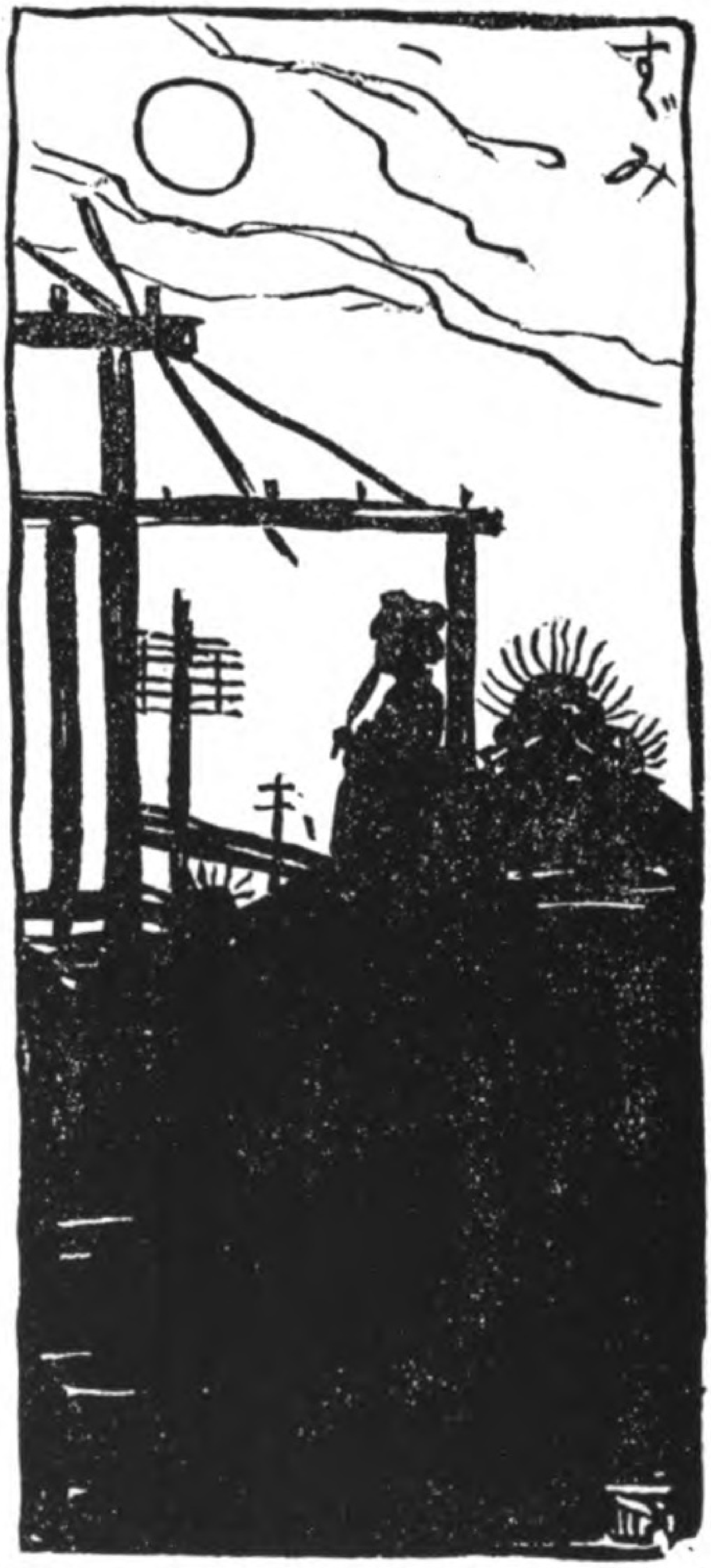
▲下婢の待遇

下婢は無責任で役に立たぬ者のやうに言はれる奧樣がよく在りますが、平常よく家の主義を說き聞かせ、食物なども家族と平等にして遣り、自重心を養成して置けば、萬事責任を以て働くことは私が多年の經驗で善く存じて居ります。米國あたりの下婢は給料も高い代りに實に善く責任を負うて働くこと驚く程であります、而して主婦の外出多き出では賄まで任せてありますので、下婢の切り盛りで食膳へ付けた御菜を主人が彼是いふことは出來ぬ位なものと聞きました。それほど力量のある下婢が十分働くのですから、主婦は安心して外出することが出來る次第で、日本の主婦とは大違ひであります。併し又彼地の主婦が在宅の時よく家事を働くことは、日本の主婦に優るかと思ひます。西洋よりも役に立たぬ下女を使つて居る日本の主婦は、西洋の主婦に較べて何倍か働かなければならぬ譯ですが、何樣も日本の主婦は左樣怠らぬやうです。

▲主婦外出の必要と家の整理

西洋の婦人が時間を規則正しく上手に用ゐて居る事は實に感心致しまする。あれでこそ家も亂さず頻繁に外出が出來るのです。家に居て規則なしに仕事に掛つて居れば、終日何だか苦駄羅なくゴタ〳〵と暮すも

ので、偶に一日出て歸れば留守は亂脈、其後片付に骨が折れる所から、ツイ外出が臆劫になるのは我邦從來の習慣ですが、主婦が始終家に籠り切りで、唯だ裁縫にばかり從事して暮すと、氣を腐らして愚痴に爲つたり妄想に耽つたり致す弊がありますから、何卒工夫して多少外界の空氣に觸れ成るべく新智識を得て良人を助け又慰め、子供の教育に注意するやうに致したいものです、私は人樣がよく留守の亂脈をこぼし成さるを聞き、何卒この心配のないやうに致して見たいと考へ、規則的に工夫しましたところ、結句やさしく出來ました。子供の所持品の入れ場所を整然と定めて、



小さい子にも自分で出し入れの始末をさせ、家具の置場所も下婢に分るやうに定めて置くと云ふ風に注意しますと、私の繁務が大層省けて、而して何時も整然と片付いて居ります。私の外出は午後が多う御座いますから、午前在宅の間は、戸棚の整理やら、衣服の積りやら致し、時としては張物洗濯を致して下婢の勞力を助けます。それで宅へ御入來の方が、『貴女は始終家を明けなさるのに、よく斯樣な細かい布片まで張つて置きなさいますね』と、不思議さうに仰しやいますが、家事を働く時間が少いと、寸陰を惜んで油斷なく車輪に働きますから、割合に夏冬の準備も早く手が

廻るかと思ふのです、始終家にばかり籠つて居る奥樣が、外の務を取る奥樣に較べて何程家事が捗取るかと申すに、割合に左樣は參らぬやうです、強く抑へ付ければ強く刎ね返す力の出るのと同じ道理で、忙しい者は、それだけ餘計に働く精力を奮ひ出すのは必然の道理でありませう。

▲女學生の花嫁

學校教育を受けた細君が、御子さんの二三人も持たれる樣になれば、新智識を應用して立派な家庭を作られますけれども、花嫁の間は案外に昔風の御嫁に劣る方が多いのは如何いふ次第でせうか。私の知れる女學校出の或花嫁は、學生時代に俊才であつたに似合はず、結婚後は氣拔けがした樣になつて、何の爲すことも無く遊び暮し、毎日晝寢する癖があるのです。これは理想と反對せる家庭で失望した結果かと云ふに、決して左樣では無く、良人は立派な地位ある方であり、夫婦中も宜しいのであるのに、頓と自暴自棄の體たらくに見ゆるのは不思議ではありませんか。尤も我邦の事情に通せぬ西洋人が教える女學校中には、一日の内一時間か二時間晝寢して心身の勞を養ふと云ふ自國の風習を其儘生徒に履行させる學校もあるさうですから、晝寢の癖の付いた人があるかも知れません。餘り何から何まで行き届いた教育を受けた女學生が、一朝無爲な家庭の花嫁となると、何となく頓挫して氣拔けが致し、精神活躍の反動として安逸怠惰の身持となるのかとも考へます。それで却て舊式の教育を受けた娘の方が花嫁として價値のある事が多いのは、境遇の激變もなく、謙抑の習慣が深く染み込んで居る故でせう。

▲夫人の學生時代

私は當年四十三歳になります。元治元年に小石川で生れましたので、親は舊幕臣でしたから維新の際靜岡に轉じ、復び出京致したのは、私が八歳の時でした。小學校は草創の際でしたから、甚だ不完全な教育を受けたので、十二歳から今の青山學院へ通ひ、後に寄宿致しました。父は却々女子教育に熱心でしたが、母は其頃德川士族風の人で、三味線や踊を仕込まうと

致し、兩親の意見が衝突したさうです、併し私は極々遊藝が嫌ひで學校へ入りましたから、唯今ピアノやオルガンに掛つても唯だ譜を辿るだけで、耳の働きが無くて困る位で御座います。其頃の女學生で御座いますか、矢張り獨身主義を唱へる人もありましたが、一般に家庭主義の人が多う御座いまして、特に私なぞは女は人に頼らねばならぬ者と常に信じて居つたのです、生活は至つて質素なもので、唯今の學生方の平常着がお晴れでして、メレンスの帯を餘所行として貴重した位でした、偶の奢り競にも、お薩か炒豆位が關の山でしたが、唯今は衛生が嚴しくなつた丈に西洋菓子でも買はねばならず、女學生を子に持つた親御は隨分骨の折れる事でせう。其頃は交通機關が不便であつたから乗物は決して用ゐず、私なぞ本郷の宅から築地の學校まで何時もちびた下駄でボク／＼歩いたものですが、唯今は電車と云ふ便利があるだけに學生も徒歩が馬鹿らしくて出來なくなつたと云ふ鹽梅ですから、萬事入費が嵩んで堪りますまい、私は十五歳で父に別れましたので、母の困苦を案じて學校の休日には始終手傳ひを致して居りました。ハイ結婚は十八歳の時でしたが、其頃の女學校では、裁縫も料理も學びませんから、單衣が漸と出來る位、御飯も滿足には焚けず、實にお耻かしいやうでしたが、幸に優しい姑を持ちましたので、家事を學ぶことが出來たのです。



▲姑に依頼す

私は嫁に參りたてに、萬事姑を師と頼みました。針仕事も御飯焚も全然知りませんから、何卒教へて下さいと縋り付いたので、姑も『それは學校にばかり居つたのだから無理は無い』と申して、子供のやうに面倒見て呉れました。それですから折合もよく、永の年月少しも姑を厭ふ心が起らぬのみならず、亡き今日に至るまで姑の恩は忘れぬ位で御座います、總て知らぬ事は最初から一々白状して、姑の教を乞ふ方が宜しいので、姑の有無を嫁入の一問題とするなどは馬鹿々々しいと思ひます。併し老人にも新聞一つ手に取らず、家の外は少しも知らない沒分曉の方が隨分あるとを毎々實見致し、立派な教育ある御嫁が自由を妨げられて、定めし煩悶さるゝだらうとも想像致します。けれどもこれは最初が肝心で、例へば教會へ日曜毎に出る事の如きも、最初に約束して置けば如何にか通せるものを、最初餘り心弱く體裁を繕うて履行しないと、遂に外出も出來難くなると云ふ事實が幾らもあります。

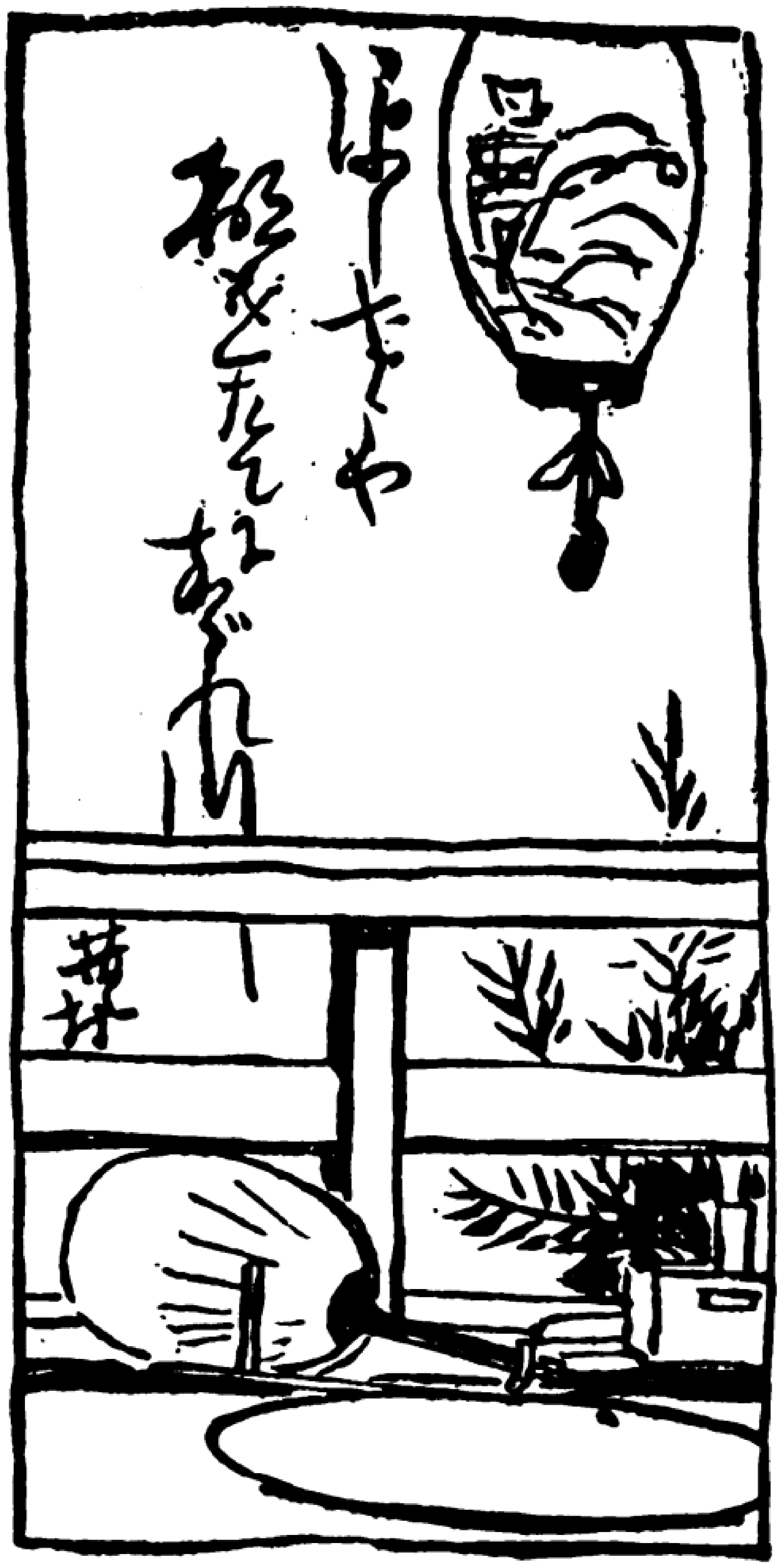
▲夫人の信仰

私は十二歳の時に洗禮を受けた古い信者ですが、其割に何の仕出來した事もなく、お耻かしい次第です。併し今から顧みれば、妙齢の時の方が眞面目で熱心で、何時も教師に從つて出來ぬながら說教を致しましたが、其頃蒔いた種子が今芽を出して、昔し貴女から聽いたのが基礎になつて信者になりましたと言はれる方があります、如何も不思議でなりません。何でも世の教育が進歩するに隨つて信仰が冷淡になるのは何國も同じ事で、米國の若い婦人などが教會で祈りを致す樣子を見ますと、唯だ體裁ばかりで輕く浮いた調子が多く、あれでも他國へ傳道に出掛けられるかと思ふやうです。併し一般に體裁を繕ふ事は感心なもので、これは參考として宜いと存じます。

▲米國婦人の體裁上手

米國婦人が交際上に體裁を注意することは實に周到なもので、唯だ他人の前ばかりで無く、良人や我子の前にも體裁を繕ふことを務め、朝起きると直ぐに容儀

を整へて我子に接しますから、子供は母の素足を見たことの無いのが多いさうです。尤も中流以下では斯樣でもありますまいが、體裁を亂さぬ事は何樣な下等社會にも行はれ、乞食でも左樣どろ〳〵な服裝は致して居りません。日本人は家屋衣服の異るからでもありますが、一般に淡白過ぎ、體裁を構はな過ぎるかとも思ひます。體裁を構ふと申して、別に金を費つて飾らんでも宜しいから、朝の內手早く髮を取り上げ、常着を整然と着けて、取り亂してさへ居らなければ、不意の來客にも少しも狼狽せず、直ぐに出迎へが出來ませう。御客が見えてから奥樣が御化粧に時を費し、客に欠伸をさせてから、應接室へ出ると云ふ風では、實に困ると存じます。



▲米國婦人の勢力

日本の夫婦は、未だ封建時代の遺習が拔けない故か、夫は人の前で細君を大切に遇するのを不面目と心得て餘所々々しく取扱かひ、細君は家に居ると却て夫に我儘を振舞ふと云ふ風が多いやうです、米國婦人は外で夫に優遇さるゝ割合に家庭では却々よく夫に勤めますので、實に感心で御座います。尤も家庭に於ける夫も日本の男子ほど細君に對して我儘で無いやうです、總て婦人の勢力が強い土地ですから、男の子よりも女の子に敎育費を餘計注ぎ込むと云ふ風で、交際場裡でも婦人に敬意を拂ふのは驚きました、未だ彼地に慣れない日本の紳士が婦人の前で、プー〳〵煙草を吹かして居られるのを見ると、

冷汗が出る位に感じたのです。

▲細君の修業心と料理講習

隨分閑暇な若い奥様方が、毎日つまらなく暮すと云ふのを、私は非常に惜みまして敎會へ御集りの方々に何か修業的の事を御勸め致したいと云ふ考へから、よい年をしてミシン縫の稽古や料理の實習などを先へ立つて始めました、最早吾々位の年輩になれば、不肖ながらも若い方の模範を以て任じなければならぬと考へますから……。それで料理實習は私共の臺所で催すことに致し、西山さんと云ふ御婦人を敎師に聘してありますが、此方は良人が家を外にして茶屋酒と贅澤食に家計を傾けられたのを心配して、良人の道樂を直すには、茶屋の料理より優つた旨い物を家で拵へるに如くはないと考へ、赤堀さんに就て實習に心を凝し、尙ほ經濟を基として應用の經驗を積み、遂に良人の道樂も直された豪い御方でありますから、萬事經濟的で何樣な家にも應用される料理法を敎へられて居ります、例へば炭火を七輪へ起すには、炭を惜まず澤山ついで火氣を十分盛んにし、早く煮上らせるのが、炭の儉約になる事、七輪と鍋の隙は悉皆炭で塞ぐべき事、炭は樫の木炭が一番德用で、これは消して置いても元形を崩さず、再び用ゐて十分火氣がある事、其他醬油、砂糖、鰹節の用ひ方まで、微細な點まで懇ろに敎へられますから、皆樣にも直ぐ其日から應用が出來、宅の下女など傍で聽くだけでさへ、大層臺所の經濟が上手になりました、毎日爲す事なく、閑殺されてある奥樣方が、料理の稽古でも成さると、說明を書き取り、記臆力を養ふなど、一方ならぬ修業になります。

▲夫人の生活法

月に百圓位の收入の家が、一番苦心の多い生活である事は、少し經驗のある御方が御存じの通りで、全く體面を保つのに骨が折れる事と思ひます。吾々の生活は、餘程工夫魂膽して金を巧く用はねばならぬので、却々油斷は出來ません、私は一番儉約の出來ないのは食物で、一番費用を省き得らるゝのは衣服と定めて、食物には成るべく費用を惜ます、勉强盛りの子供には

粗食させない様に心掛け、其代り醫者には滅多に拂ひませんそれから職務上、交際費は節約出來ませんが衣服は漸く禮を失はぬ丈の間に合せで、何處でも押し通して居ります、車には紋付でも着た時の外は乘りませんが、それもコートでも着て成るべく徒歩するやうに致して居ります。二十五年間可なり考を凝し心身を使ひましたが、地位財産の出來ないばかりでなく、何時も御承知の通り苦しい生活を致して居ります、併しながら私共の樂みは地位財産に代へ難い傳道の天職なので、夫婦が堅く信ずる神に仕へ、不肖ながら迷へる心靈を救うたのが何よりの幸福と怡んで居ります。

晩婚せる賢夫人

（菊池みね子女史）

婦人記者

名古屋藩の水野松軒と云へば、郷黨の少年を縮み上らせるほど峻嚴な漢學者であつたのです。この松軒先生の長男忠雄氏は、藩の留書頭を勤め、廢藩置縣となつてから愛知縣の小參事を勤められました。晩婚せる賢夫人——法學博士菊池武夫氏令室みね子女史は、水野忠雄氏の第二女として安政六年に生れ、明治二十九年に三十八歲で緣付かれたのです、女史は明治十二年に東京師範學校の女子部（今の女子高等師範學校）を卒業せられたので實に同校に於ける最初の卒業生ですが佐久間陸子（相馬永胤氏の故夫人）、長谷川文子（西川長崎控訴院長夫人）、古市らく子（古市工學博士令妹）、佐方鎭子（女子高等師範學校教授）等と同級生でした。女史は卒業後、名古屋高等女學校教諭と爲り、轉じて千葉縣師範學校女子部に教鞭を執り、再轉して築地なる海岸女學校に教員たる傍ら、英語の學習を心掛け、明治十七年東洋英和女學校の創立せらるゝや、同校に教鞭を執り、兼て同校の教師であつたスペンサー氏及びミス、カツクラン。ミス、モード兩女史に就て英語を練習せられ、明治二十一年に一ツ橋なる高等女學校の教

諭し爲り、女子教育の爲め大に骨折られたのです。女史は各學校に教鞭を執らるゝ傍ら。德川侯(尾州)山縣侯其他の家庭に聘せられて家庭教師を勤められましたが、學校を辭して後は、主として三條公爵、岩倉公爵松平子爵(舊西條藩主)等の家庭教師に聘せられ、三家の姫君を薰育せられました。女史は斯く家庭教育に熟練されて居らるゝので、義子六人もある菊池博子方へ緣付かれて、端嚴重厚なる遺傳と眞率淡白なる世才を十二分に發揮し、善く良人と老姑に仕へ、善く義子を薰育し、自ら擧げられた三人の子女を撫育して、圓滿多幸なる家庭を作られたので、實に感歎敬服に堪へません。夫人が初對面の記者に毫も墻壁を設けず、家政談に時を移されたのは、其眞率淡白にも因りますが、亦實踐躬行を以て人を率ゐるに熱切なる精神を見るべきであります。夫人の御話は——

▲獨身時代の感

獨身生活も若い間は氣樂で宜しう御座いますが、年を取つて參ると子供が欲しくなるのは自然の情でありませう。私は最初から獨身で終る決心で、三十八歳まで老女生で居りましたが、御友達の御心配で圖らず此家へ片付きましたので、自分ながら不思議のやうに存じます。一つは親の遺言にも因りますけれども、亦若い內とは考へも變つて參つたからで御座いませう。私は方々の學校へ出ましても、始終傍ら自分の稽古半分の心得で、少しも倦むことは御座いませんでした。又晩年(教育家として)學校を辭して、方々の御邸へ上るやうになつて以來は、多勢へ一般的の教授致すより一個の方々へミッシリと自分の考へを申し上げることが出來て、身體は以前より忙しく精神は愉快になりまして少しも獨棲の詫しさを感じませんでした。其間に私のやうな者でも貰ふと仰しやる方もありましたし、兩親も無論身の落着を望んで居りましたが、才智も容貌も立派な方でさへ、夫の愛を失つて煩悶さるゝことが隨分あるのに、私のやうな不細工な者が迚も樂しい家庭を作り得る筈はない、且つ子供を持つて面倒な世話を致すよりは、最早親の御蔭で自分を過すだけの道も得

られ、誰に遠慮も入らず自分の了簡通りに氣儘に暮す方が何の位宜いか知れないと、先づ斯樣に思うて居りました。偶に御友達と結婚に就ての談話が出る時は、毎時私が絶對の獨身主唱者であつたのは、唯今から考へると可笑しい次第で御座います。一體幾歳になつても、未婚の内は男子の本當の心情が善く解らぬもので兎角惡い點ばかりが眼に觸れるものですが、實際妻となると豫想外な事もあるやうです。

▲夫人結婚の決心

私の姉妹は皆それ〴〵身が固まつて先づ安心であるのに、私だけ何時までも家に居るので、行末如何と案じ暮した父は、不治の病氣が重體になつてから、譫語のみ申し、私の名を呼んで、師範學校は罷めたが、華族女學校から



辭令が下る筈だ、そら辭令が下つたなぞと、私の身の上ばかりを申す父が心の中を察すると實に堪らなくなりました。自分は晩年までも獨身で押通したから、最早大丈夫と信じて居るのに、慈愛深き父は死に瀕するまで、私の身の上を案じて斯くまで煩悶されるのであるか、獨立して不肖ながら世の爲め人の爲めに益さうと云ふ意氣は盛なやうであるけれども。畢竟氣樂に暮したい我儘心を含んで居ることに心付き婦人の天職に背いて親に苦勞を掛けた事を後悔致し、腸を切らるゝ樣に感じ、大に決心致したのです。父の死後、同窓の親しい御友達方が御親切に御世話下すつて、此家へ片付いたのですが、老書生が俄に家持子持となりまして、何を致すにも眞暗闇、至らぬ事ばかり

で御耻かしい次第で御座います。併し優しい姑が萬事導いて呉れるのが幸である上に、六人の義子が揃つて從順な性質で、私如き者でも眞の母の如く敬ひ慕つて呉れますのと、良人武夫が一切を擧げて私に打ち任かせ、極寛大である事は、此上もなき私の幸福と喜んで居ります。

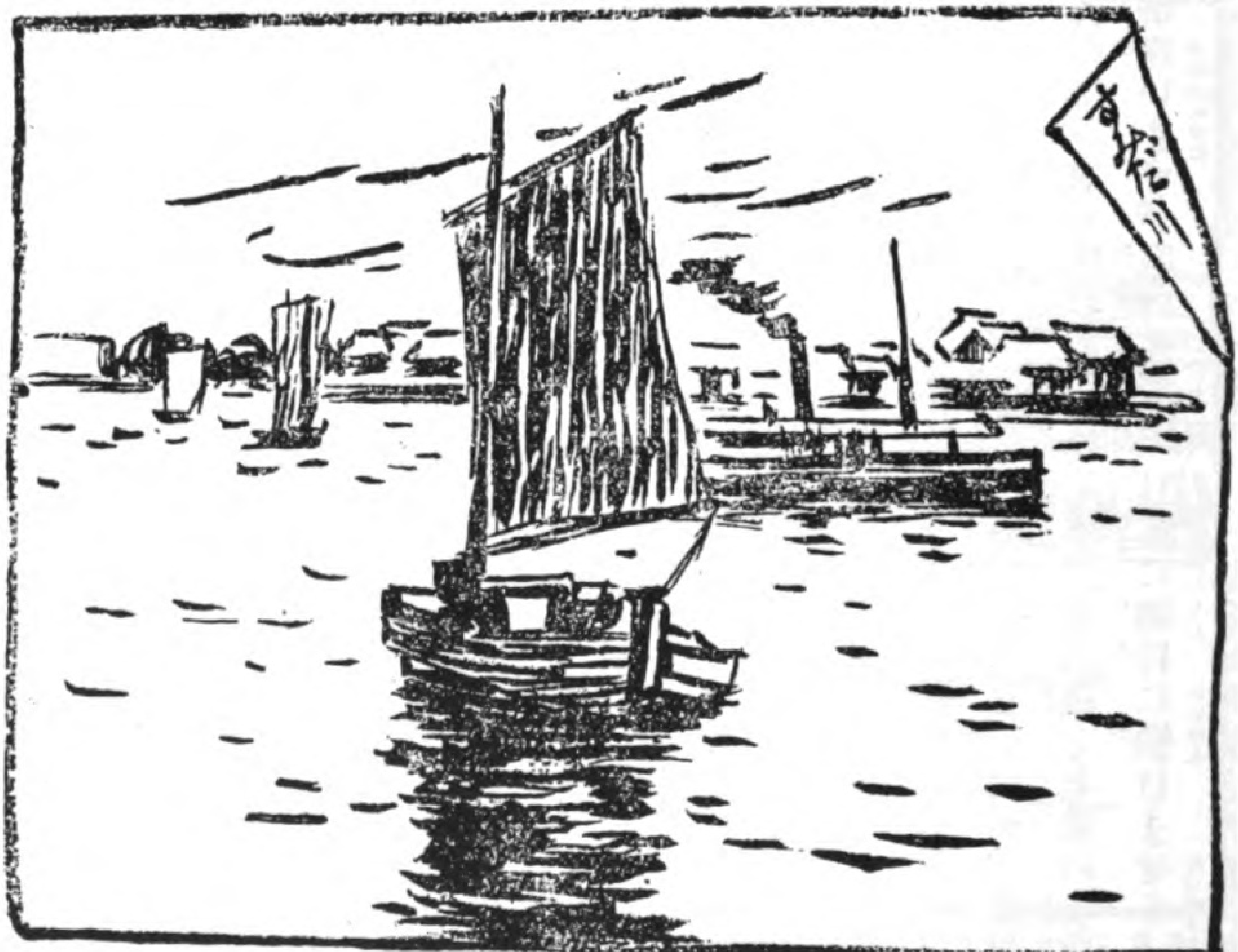
▲母となりし快感

嫁して六人の義子に母と呼ばれ纏はれて見ますと、俄に責任が重くなつた心地でしたが、獨身時代に自分の一身を献げて遣つて見やうと云ふやうな捨身的な意氣込は無くなり、子供の爲めに自分の身體を大切にせねばならぬと云ふ自重心が起つたのは、確にそれだけ生活が愉快になつたのに違ひありません。義子は皆前に申し上る通り、至て性質が善良でありますが、最初は成るべく取り扱を寛大に致し、偶々注意したい事があつても、大目に見遁し、小言は一切父から申して貰ふやうに致しました。義母子の間柄は感情一つで圓滿に行くのだと存じますから、此點は深く注意したのです。眞實の所生の子と少しも變りなく可愛う御座いまして、特に本年十二歳になる鶴と申す娘なぞ、三歳から育てましたが、小しも異母である事を存じませんで初めから側に附き纏ひ、私の肩へ手を懸ける者があると、鶴チャンの母様だから觸つちや厭と泣く位、却つて生みの子の方が冷淡で可笑しいので御座いますよ。ハイ私は五人生みました内二人缺け、唯今七歳を頭に三人で、末子は一昨年四十六歳で持ちました。本當に普通ならば孫を抱く位のお婆さんですから、安産が出來るか如何かと自分も危んだ程でしたが、不思議なもので、末のが一番産も輕く、二時間ばかりで安々分娩しました。畢竟生み得らるゝだけの精力があるから妊娠致すので、年齢によつて心配するに及ばないのでせう。

▲批評と實際

獨身時代には餘所の子供達の我儘を見る毎に、母親が嚴重にさへすれば直るものをと存じましたが　偖實際子を持つて見ますと、却々考へ通りには參りません

子供は左樣容易く親の命にばかり服從しませんし、此方も獨りで考へたやうに嚴重には出來ぬものです。私共では義子の方が私の考へ通りになる位で、却て生みの子が言ふとを聽きませんから、ツイがみ〲と小言を申し、姑に止められるのが毎度で御座います一つは未だ年齢が幼くて道理が解らぬ故もありませう。ハイ子供を失つたと申すものは實に譬へられぬ痛みを心に印し、年月を經るも忘れられるものでありません人の笑ふ時は同じやうに笑ひは笑ひましても、心の底には曇りがあります。愉快な仕事や行樂の際



には、ふつと亡兒を聯想しますと、唯だ〲可愛さうで堪らなくなります。これは私ばかりでは御座いますまい。

▲子供の食物

子供の食物の好き嫌ひで御座いますか、それは幾らか御座いますが、大きくなれば自然何でも食べるやうになると存じますから、成るべく好む物を與へて置きます。子供の好き嫌ひの品は大抵定まつて居まして、野菜でもお薩や豆類を好み、人參、牛蒡なぞは嫌ひなやうで御座います。間食は惡いと存じて、食後に菓子や果物を遣はせましたが、近頃小さい子供には矢張りお

八を與へる方が宜いと申す醫者の說に據り、幼いものには午前十時と午後三時に何か與へる事にしました。それで子供は、お十時〳〵と申して待つて居ります。宅の子供は皆餡氣の御菓子を好みませんで、私がコーツさんに敎はつて拵へた西洋菓子の擬物を喜んで頂きます。これも牛乳やバタの殘りのある時だけ拵へますので、別に菓子の原料を買ひ立てゝ拵へることは致しません。

▲店屋物は入れぬ

來客は大抵事務所の方で應接致しますから、御飯でも差し上げる御客は極懇意の方だけで御座いますが、武夫が店屋から取り寄せるのは大嫌ひですから、何時も不調法な手料理を差し上げて失禮ばかり致して居ります。武夫の口が盛岡風ですから、自然盛岡風の味に拵へる樣になりました。併し武夫は食物に就て、一言も彼是申したことは御座いませんので、箸を附けぬ時は口に合はぬことを察するだけで御座います。家内多勢の衣類で積り物や續ぎ當だけでも隨分忙しく、ツイ臺所の世話まで屆かなくなりますから、新らしい料理を敎はりますと、直ぐに女中に傳授して、大抵差支ないやうに致して置きます。

▲洋服裁縫の稽古

明治母の會のコーツ夫人は、二十年前、私が師と賴んだ方で、近頃は又種々家政上有益な事を敎へて頂きます。私は子供の爲めに是非洋服裁縫を習ひたいと存じ、先達てから少しづゝ參り始めましたが、日本の裁縫よりも習ひ易く、時も費えず、而してミシンをから〳〵と廻すのが何となく愉快なもので御座います。子供のシャツやヅボン下なぞ、悉皆私が仕立てますが、求めたのより寬濶と出來ます故か、大きい男兒までが母樣の縫つたシャツが一番運動着に宜いと喜んで居ります、此間は猿股風の新案を敎はりまして、白の阿波縮で拵へましたが、體裁も好く女の子に適して居ります。十二歲と七歲の女兒に作りました夏の洋服を御笑草に御目に懸けませう。

記者が拜見した夏洋服の地は、白い眞岡織へ絣や中

形を黒く出した上品なものですが、これは東染と申し早稲田鶴巻町に染物工塲を持つて居る者の專賣品で、毎年四月頃注文を取りに廻はるさうです。直段は一反一圓二十錢から四十錢ぐらゐ、如何ほど洗ふても剝げぬ便利な布との事。

この東染一反で、二人の女兒の洋服が十分に出來、時間も午前の内に一枚拵へる位は樂な仕事です。子供の着物は何樣しても、洋服の方が時間と入費を省き得らるゝと思ひますが、和洋共に用ゐては却て面倒で不經濟になりますから、追々工夫して、洋服ばかりに致したいと考へて居ります人樣が善く『貴女は何時まで稽古事を爲さるのです』と仰しやりますが、私は年を取つて居ても、未た家政は初步ですから、何でも彼でも研究出來るだけ致す積りなので、これが又大層愉快で御座います。



▲小切の整理とお針の女中

老書生が俄に一家の整理に着手致しました時は、總てが錯雜混淆して、如何して宜いかと惑ひました。特に多勢の子供の着物の始末、別して小切の始末に困りまして、チヨツト友切を搜すにも彼地此地を引繰返すのですから、どの位暇を潰したか知

れません。それで私は小切分類の必要を感じ、一日がゝりで小切類を悉皆座敷へ取りひろげ、糸織、紅絹木綿等の小切を精細に小分して、疊紙や呉服紙に包み一々上書を致して箪笥の抽匣へ蔵つて置きましたので其後は容易く小切を探し得るやうに爲り、又誰にも分るやうになつて、無益に時間を費す憂ひが無くなりました。而して鋏や糸類なぞも抽匣を一定して置き、何處で何を用つても、終りには必ず此一定の抽匣へ入れるやうに致し、子供の手道具や玩弄品も矢張り各自一定の入れ場所を與へてありますから、幼い者まで此規則を守つて亂雜になる事が少くなりました。先達て母の會へ出ました時、コーッ夫人が私に何か話せと仰しやいましたが、私は毎日家に閉ぢ籠つて忙しく暮すばかりで、纏つた考もなく御話の材料もありませんからくだらぬ事と存じながら、小切類整理に就て、自分の困つた經驗をチヨツト申し上げた事が御座いました。

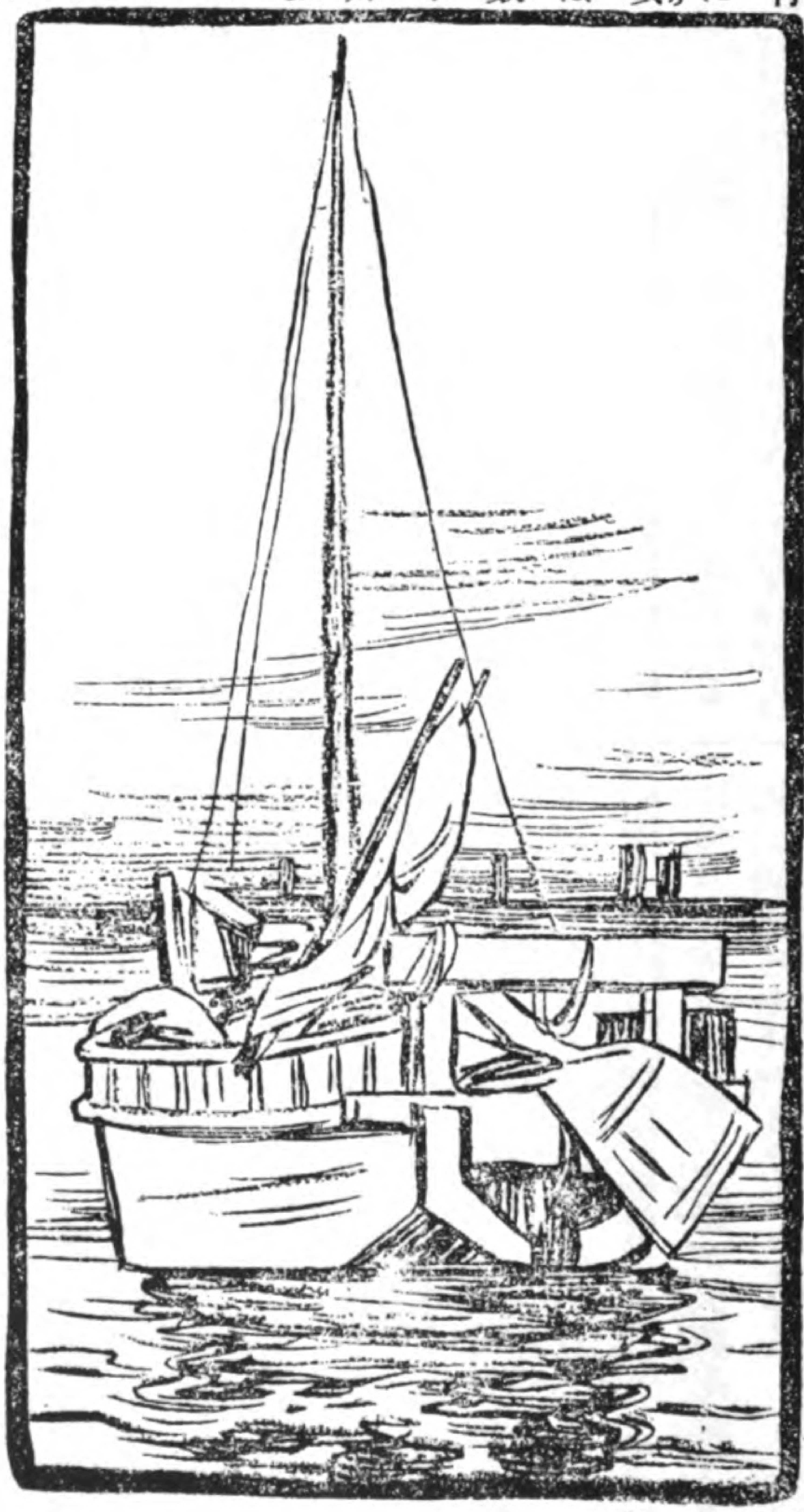
私共では一しきり御針の女中を雇うて見ましたが、夕方の掃除に他の者が總立になる時には、矢張り共に立たねばならず、子供達がワーッと鬨の聲を揚げると自然落着て仕事して居られないと云ふ具合がありまして、何様もうまく參りませんから、雇ひは止めまして知己の方に頼んだり、裁縫學校へ出る方の材料に願つたりして、間に合せて居ります。

▲小遣帳の工夫

日々の小費は、當用日記へ付けるのが此家の前例で私も最初は其通り致して居りましたが、忙しい際こまく〳〵拂つたのを夜分一度に付けますと、兎角付け落ちが多く、又覺えて居やうと思ふのも繁忙の身體には隨分煩はしう御座いますから、少し方法を考へ出しました。それは武夫が箱根から子供へ土産として買つて參つた小さい錠前付の函を私が貰ひ受けて錢入れと帳簿と共同の容器に致し、蓋に紙片を貼り付け鉛筆も備へ付けて、お金を出すと同時に紙片へ記し置きます。鍵は此通り私の帶に下げて居り、私より外に函を開けないのですから、決して間違は御座いません。私の外出して居る間に拂ひの必要がありますと、姑に立て替

へて貰ひ、歸つてから直ぐに返濟致します。實につまらぬ工夫ですが、斯樣に致してから、無駄な心遣ひが無くなりました。

▲家庭教育　私は學校に居りました頃暗誦的の事は大不得手で數學や理科のやうな推理が好きで御座いました。それで唯今では何も彼も忘れて了ひ、子供が花を持つて來て、雄蕋が幾つ雌蕋が幾つなぞと申しますと、成程左樣であつたと思ひ出す位で御座います、數學なぞも暫く棄て、置くと、善く忘れるもので、近頃の國庫債券とか勸業債券とか云ふ問題になると、分り切つた利息算にもまごつく事があります。私は宅の子供達に定まつた復習はさせませんが、漢文や英語の不審を尋ねに參ると敎へて居ります。



學識ある菊池博士夫人が平凡極まる小切整理や小費帳付け方に苦心せらるゝ處空理妄想に溺れて居る滔々たる女學生に對する大鑑戒と存じます。

鏡は容貌を見せ酒は心裏を現はす　西諺

學校と家庭の相違

藤井靜子

學校と家庭との教育は、相連絡して一致せねばならぬことゝ思ひます。當時の狀態といふものは、家庭の方が、遙かに劣等なので、宅の娘は學者にしたり、氣位ばかり高くさせ度くないから、女學校にはやらぬといふやうな考を持たれる親御が、また、世間には大分にあるやうであります。中には、よき身分の方の處へ緣付けたいが爲めに、資格つけの一法として、卒業證書が入用な處から、女學校へ入學させるといふやうな考の方もあると、常々聞いて居ります。親からして斯様な考をもつ、現世の狀態でありますから、其子たるものが、人物や學才の有無をばさておいて、只身分や金といふものゝ爲めに、一身の自由を捧げるやうになりますのは、先づ止むを得ない事情と申しませうか。しかし、私は、私の親が學問をした時代より、凡ての方面に對しても、進步して居る今日でありますから、如何に親がさる考をもつたとても、自分は高尚なる思想を持たねばなるまいかと考へます。

家庭教育の程度が、劣等であるといふことは、當時の家庭主宰者の罪でありませう。現今の學校教育を受けさすべき兒女を、敎養するに足るべき學識を備へて居つたならば、自然に高尙になることゝ思ひます。學問ある婦人を內君とせられたる御家庭でも、單に學者といふに過ぎないで、御主人の御用は、お手傳になられるし交際場裡には勢力を得られるといふやうな有様でも、肝心の御子様方の事は、寸暇なしとの口實の下に、學識不充分なる乳母若しくは侍女などに一任されるがいくらもあると伺つて居ります。之れでは學問も役にはたちません。一家の主婦が天職を盡すその上に於て、少しも効がないからであります。

近來は、大層家政學といふものが盛になりまして、女學校には勿論、專門のものさへ出來るやうになりました。大分に奥様方も御入學になる方が多いと承り

ましたが、これは悦ぶべきものであると思ひます。しかし、兒女の敎育は勿論、衣食住の整理より、奴婢の使役法に至るまで、單に家政學に待つばかりでは不充分であります。法制經濟などの簡易なる一端も知らねばならず。國際法の何物たる乎、法律といふものは、どんなものであるかなど、その大體を腦に印して、地理に歴史に理科に數學に對して、何れも普通の智識を備ふるといふことは戰捷國の婦人として、世界列强の間に馳驅せしむべき英傑を、養成せねばならぬ婦人にあつては、是非共如上の考を以てせられねばなるまいと思ひます。ともすると、今の婦人は、應用力の乏しい爲めか、少し政治的の書物を讀まれると、政治家を氣取られたり、少し哲學の書類などよまれると、哲學者となりすまして、厭世觀をふりまいて、家庭整理などの緻密の業を嫌ふやうになるのは何故でせうか。



母上を學者で持つて居られる兒女達に、俊秀が多いかと申すのに、事實はこれに反して居ります。世の人は、苦學するものは成業後、活氣がなくて、大人物をつくることは出來ぬと申して居りますが、如何でせうか。

さらば、學資充分な家の兒女は、必ず豪傑であるかといふのに、決してそうではなく、多くは之れも事實に反して居ります。苦學するものゝ成業後活氣を失ふといふのは、餘り成功を望むことが急なる爲であり

ませう。

當時の狀勢に照して考へますのに、之れはどうしても自然に、學校と家庭とか連絡するやうに考へるのは、一大急務かと考へます、家庭の方でも改良すべき點は改良するし、學校の方でも、成可應用主義を取つて、敎へた所の學問はやがて、家庭に應用されるやうにするといふやうに、家庭敎育者も學校敎師も、互に相讓步して便利を計らねばなりません。

學者や敎員養成目的の學校の事は申しますまい。また特別の技を授ける處の學校も、主とせる技藝をして、實用に適せしむるのが目的でありますから、之れも申しますまい。玆には、高等女學校令により、高等の敎育を授け、良妻賢母の養成を目的として居る分につきてのみ申さうと思ひます。

或雜誌上で、或女學校の主幹をして居られる老練家が、學校で理化學を敎へたからつて、それが直に漬物や料理に應用の出來るものではありません、といはれたのを見た事があります。實に御尤もの義と思ひます。學術として敎へた理化學が、直ちに應用することの出來ないのは當前であります。その次に、世間の親達が娘を學校にやつて、勉强をさせても、宅の用をさせることが出來ぬから無益だといふのに對して、專門でない學校では、夫れは無理だといはれました。女學校に對して、親が此の言をなすのは、眞に無理でせうか、私は、之れを强ちに無理とのみ打消すことは不可であると考へます。

例へば、生理學に、鹽は身體主成分の一であるとあつたからといつて、毎日毎日鹽ばかりで御飯を頂いて害がないでせうか、脂肪は溫發生の原動力だといふお講義を聞いたからつて、湯茶のやうに油を飲んで、効能がありませうか、何でもかでも學校で習つた事を、直ちに轉用しようといふ事は、不可能で、しかもそれを望むのは無理であります。また未成年の兒女にあつては、學力があるといつても、まだその程度も僅かのものでありますから、應用法の緖を敎ふるのは、肝要の事と思ひます。

家政學の教師は勿論の事、理科でも數學でも教ふる所の教師は、自身にも能く家庭に對する應用法を講究して置いて、教科書に記載した字句以外に、口授して筆記させ、應用力を喚起させるといふことは、殊に女教師に必要の事と思ひます。教師といふものが教科書に依頼して、國語でも教ふるかのやうに、讀ませるのを一課として居るものゝ多いといふことは、幾度も實見した事があります。私は、順序といふもの丈は、教科書によるのを宜しいと思ひますが、其の意の存する所は、講義といふより話によりまして、一に實用の方面から教ふるのを貴ぶかと思ひます。



何しろ前述の通り、今日の家庭教育といふものは、劣等なばかりでなくて、不完全でもあるのですから、これに適するやうに教へて行くといふのは、一に教師たるものゝ、器量に存するものかと思ひます。眞に學力のある教員といふものは少く、只受賣的の教員の多いのは實に歎かはしきの至りであります。地方の友人から聞きましたが、國語の教師が、教科書に引用してあつた謠曲の山姥といふことを知らないで、生徒の保護者から注意を受けた時、學校で習はねばといひたりとか。之れも女學校教師に、かゝる失策のありしとは、情ない事ではありますまいか。ま

た、家庭でも之れに對する責任は、確かにあります。學校にやつてあればなんでも出來る。卒業さへすれば學者にはなるし、家内の事も自然に出來るからよいといひ、或は、毎日學校の勉強で疲れて居るのであるから、勝手にさせておけなどいふ子煩惱もあるのは、大に子を愛し誘導するの法を誤つてるものかと思ひます。いくら學事が忙しいとて、親の年に比較すると、子女は血氣壯なる年配であります。壯なる時、柔惰なる習慣をつけると、慢性病などのやうに、成年後に、活動力といふものが减却してしまつて、神經質にはなるし、大事をなすことは出來ぬものであります。夫れ故、學校で覺えた學科の應用力を增進させるが爲に、母自身が指揮者となつて、子女をも下婢同樣に、炊事をもさせるのが、最良の法かと思ひます。氣位ばかり高くなつて、人を人とも思はず、親に對する禮儀作法を無視するものゝ多いことは、度々之れを耳に致します。之れといふのも、我儘一杯にした結果で、家庭敎育者の罪であります。が子女も相當の敎育を受けながら、さりとはあまりなる言語同斷のことであります。學校で習つた料理法なども、惣菜物でなき時は、來客の折の料理に應用させ、味加减なども子女に一任せず、指揮者自身に之れを試し、其の上達を計り、仕出し屋などいふ衛生の心得なきものに依賴せぬ美風は、なんと結構なものではありますまいか。

世界の日本たる、我國婦人の眞面目は、一に活動にあります。この活動といふことは、單に交際場裡に立つて、辯舌を弄するの意味ではなく、夫を助けて選擧場裡にはね廻るのをいふのではありません。習つた所の學術技藝を實地に應用して、充分なる天職を盡すの謂であります。完全なる家庭の敎育者となり、未來英傑の母たるべきものは、實に今日の女學生諸姉でありませう。どうか習はれた所の學問は、やがて之れを家庭に應用し得らるゝやうに覺えて、學事の餘暇には、母上を助けて、家政整理の補となられ、決して、試驗及第の目的にて覺ゆる事のなきを願ふと同時に、學校の敎師も書物の字句にばかり拘泥せられず、自身に先

づ能く研究して、やがては實用の効を奏するやうにせられたく、家庭の主宰者も、學校で子女が習ひ來し事を、只學問として見做さず、家庭にも施し得ることは、家風に應じ之れを斟酌して、之れを實用に供せしむるの方面より、懇に誘導されんことを偏に願ひます。

米國の幼稚園

女子大學幼稚園主任　甲賀藤子女史談

日本女子大學にては、這回米國より歸朝せられたる甲賀藤子女史を招聘して、其附屬幼稚園の主任教授と爲せり。女史は攝津三田の藩士正元逆氏の長女にして、本年は四十九歳、我國幼稚園界の先覺者なり。初め女史の神戸女學院を卒業するや、直ちに米國に渡り、明治廿年より廿四年まで四年間ケンブリッヂ、ボストン等に在りて專ら兒童教育法を研究し、歸朝後神戸の頌榮幼稚園、廣島の英和女學校等に教鞭を執りて大に我が兒童教育界に貢獻し卅年布哇よりの招聘に應じて同地に渡り、此處に白人婦人の設立に係る諸人種混合の幼稚園を管理する事多年。近來歐米幼稚園界に新舊二派の軋轢を生ずるや、女史は實地研究の爲め卅七年更に布哇より米國に渡り、先づ舊派の本家本元たるボストン師範學校に入りて舊式教授法を研究し、次で新派にて有名なるシカゴ大學の模範教育部に入りて教授を擔任しつゝ新式教授法を研究し、本年五月歸朝しこゝに女子大學にの聘に應じて理想的の幼稚園を創むる事となれり記者は我が幼稚園界に此の篤學の良師を得たるを喜び、女史を楽抜の寓居に訪ひぬ。

△ケンブリッヂに遊學

神戸女學院に在學中明治十年頃、始めて一度米國へ參りました、此の時はほんの暫らくの事で、別段御話申す程の事もありません。遊學の目的で渡米したのは學校卒業後、何を仕やうかと一時は迷ひましたが、在學中に形ばかりの幼稚園で三年間程保母の實驗をして之に一方ならず趣味を有ちましたので、將來此の方面で働らきたいと云ふ考になりました。で其の頃は婦人の間にやう〳〵外國熱の起りかけた時で、私も是非米國へ行つて幼稚園の教授法を研究して見たいと思ひ、幸ひ世話をして下さる方がありまして、今より廿年ほど前彼地へ渡りました。米國ではケンブリッヂへ參つて、シーシーヴオーリツス孃の立てゝ居られる保母養成所へ入學しました。其の頃米國では僅かに恁んな養成所的のものが有つたきりで、まだ保母を專門に養成す

る學校は有りませんでした、此處には丁度二年間程居て先生の免狀を受けました。

△六十餘ヶ所の幼稚園主

ケンブリッヂ在學中一度ボストンへ遊びに行きましたそこにはクインゼショールと云ふ金滿家の奥様が、ボストン附近に自費を以て六十幾ヶ所と云ふ澤山の幼稚園を建て兒童教育家として有名なピーボデー孃等を聘して指導の任に當らせました。其結果追々と幼稚園の必要を感じて、遂には彼の邊一帶の都市が皆感謝して之を受け容れるやうになりました。



初夏　スケッチ・S

△八十八歳の老教師

此のピーボヂー孃の御住居はボストン附近で御年齢は慥か八十八歳と存じました。孃は以前長く獨逸に居られたが、歸つてから幼稚園事業に貢獻して、非常に名高くなりましたから定めし立派な家に御住ひだらうと思ふて參つて見ると甚だ御粗末なのに驚きました。此の有名な老大家が他人の二階に小いさな室を二つばかり借り受けて、其の一つは書籍や雜誌を一ぱいつめ、今一つは居室に充てられて、其處には塵埃だらけの古い机が据えられ、壁に側れる所は穴の明く程に損んだ古びた羅巾を掛けて、其

の上に缺けたインキ壺が載せられてあると云ふ洵に御麁末至極な寓居でした。私は餘りの事に『如何して貴女は恁んなですか』と聞きますと『私はお金が無い』と言つて平氣でした。そして此の老境に在り乍ら雇人一人も使はずに一切自分で爲さるので、たゞ手紙を書く氣力が無くなつたと申されて、一週に三度ばかり人に來て貰つて世界各國から來る手紙に對して一々返事を書かせて居られました、後で聞いて見ると姪が二人あつて孰れも立派な姆母になつて居られるので、此の人達や又外の人々からも金を出して補助



を仕やうと言はれるのださうですが、何時も『私の力の續く限りは人樣の世話にはならぬ』と言つて斷られると云ふ事でした。御年齡は八十八歲と申しても其の精神は確實なもので、そして社會の爲め人類の爲めに盡す事を考へて居られるのです。此の方から書物や雜誌を澤山貰ひましたが、殘念乍ら拜見せぬ前にすつかり火事で燒きました。

△ボストンに遊學

ケンブリッヂの養成所を卒へて後、今少しく勉強したいと思ひまして、ボストンへ出てクインゼシヨール夫人の立てられた姆母養成所へ入學致しました。此處では每日午前は稚兒を伴て幼稚園を廻り

歩いて他の人々の仕方を見、午後は先生から教はると云ふ様にして居りました。其時分は亞米利加では「母の會」が漸く各地に起りかけて、母親様方が互に兒童研究を御始めになつた頃でしたから、遠方から參つた私に、敎師や母親達が別けて同情を寄られて、色々親切に致て下さいました。何處へ行つても稚兒達は大概私と一緒になつて喜んで遊んで呉れましたけれども、ボストンに居た時に一人私を嫌ふたのがありました。それは或る上流の御子達の來る幼稚園で、私が參ると早速呼んで環の中へ立せて遊ばせましたが、其の中に一人私の黒い髪や皮膚の色や足の先などを厭さうな顔して凝視て居るのがあつて、とう／＼私と手を携つて遊ぶとを仕ませんでしたこれが唯一度。日本の子供でも西洋の子供でも取扱上には大した差異は無さゝうです。

△幼兒保育園

當時ボストンに於いて私が見て最も感じましたのは幼兒保育園でした。此れは生れて十八ヶ月から幼稚園年齢即ち三歳位迄の乳兒を毎日時間を定めて預るのです。朝子供を其所へ預けると、園では種々な事をして遊ばせて居ります。遊戯は大概赤色い球、青色い球、黄色い球などを轉がして、青色い球を拾つて來いとか赤色い球を拾つて來いと云ふやうな、極めて容易しいものを擇びます。又可愛らしい寢臺が幾個も備付けてあつて時間を定めて寢せも仕ますし、不調法をした時の用意に着物なども澤山に蓄へてあります。午後になると母親が迎へに來るので、勞働者などには甚だ便利なものです。今日は餘程盛んになつて參りました。私は是迄まだ自分で經營した事はありませぬが、好機を見て是非このナアースリーを創めて見たいと思ひまして、女子大學から之を開く認許は受けて居ります。先日二葉幼稚園や學習院女子部の附屬幼稚園の樣子を伺つて見ましたら、大分此のナアスリーの意味を採つてあるので、大變結搆な事と思ひました。

△布哇に於ける「母の會」

ボストンには一年間程居て、廿四年にオークランド

や桑港邊の幼稚園を視察して日本へ歸りました。それからは神戸の頌榮幼稚園、廣島英和女學校(今の廣島女學校)抔に暫く勤めて居りましたが、其後布哇へ行つて教育して見ては如何かと勸める人がありまして卅年に向ふへ渡りました。彼地は御承知の通り諸の人種の寄合ですから幼稚園へ來る小供は英米人、日本人葡萄牙人、支那人西班牙人、伊太利人、半分の間子、四分の一の間子等種々雜多です。其れ故いざ「母の會」を開くとなれば餘程の奇觀で、諸國の母親樣達が出席するので迚も一つ言葉では通じませぬから、演說は英語でやりますが、之を通譯する婦人が三方四方に分れて居て、其の一節毎に各自自分の受持に向つて通譯するので御座います。豫じめ手筈を定めてやる事ですから、これは少しも混雜なしに運びますが、たゞ恁くも多種類の人々に向つて一つ演說をして、それで皆が能く合點が行つて利益を得る所を見ますと、兒童教育は何處の國も大概同じものかと感じました。



△再渡米の動機

布哇には六年間程居りまして、卅七年七月に又々米國へ渡りました。元々米國へ行く考で彼地に居た譯でもなかつたのですが、初め私が日本から布哇へ參つて見ると日本で新らしいと思ふて居た事が布哇では非常に陳腐となつて居たのに驚きましたホノルヽなどでは餘程新らしい方法を採つて居りましたので、以前私の習得つた教授法などは古くて迚も用

ゐることが出來なかつたのです。監督者に就て一生懸命勉強して居りますと、軈て幼稚園の教授法に就て新舊二派の議論が喧しくなつて參りました、然れ共書物や雜誌の上では十分に解りませんから、今一度米國へ行つて之を研究して見たいと思ひ立ちまして、弟の贊成と友達の助力に依つて布哇から直ぐに又渡米するとになつたのです。

△ボストン師範學校に入る

渡米して第一番にボストンへ參つて、再び前のローラフイッシャー孃を訪ねて自分の志望を述べますと、『ではボストン師範學校に良い教師が居るから其處へ行つたら良からう』と申され自分はたゞ視察丈で良い積りで其の學校に就て授業の樣子を見て居たのですが授業中保母の手を止めさせて質問を試みる譯にも參りませぬから、視察丈では何うも不都合を感じまして、肝腎な所を今一度操り返へす考で遂に其校へ入學し、傍ら助手となり參觀人となッて諸方の幼稚園を見て歩きました。ボストンは米國では舊派の中心ですから、其の教授法を大變やかましく申しますから何しろ此の前私の居た頃とは違つて其の進歩は非常なものでした。

△舊式と新式の差異

舊式と新式との差異を一寸申せば、舊式の方では幼稚園の開祖フレベルス氏の遺した組立を文字の儘に採用して兒童を教育しますが、新式の方では其の精神を採つて、種々新工夫を凝らして行く、又舊式の方では大體の教案を豫じめ定めて置いて兒童を之に當て箝めやうとしますが、新式の方では教案を後にして兒童を主位に置くのです。それ故新式の方では三十四十と集り來る兒童に就て、先づ此の兒童は山家育であるか或は海邊の者であるか又は河邊の者であるかなど兒童の境遇を前に調べて、是等の者に最も解り易い材料を採つて教案を作るやうに仕ますし、又縱令箇樣にして教案を定めても、若し中途で兒童の喜ぶやうな事が起れば、教案の如何に拘らず直ぐ其れに移つて兒童を導くと云ふ風にして居ります。詳しくは述べられませぬが

米國では此の新舊兩派の爭が非常に烈しう御座いまして、近頃は亦每年新舊幼稚園保母の萬國大會を開いて雙方互に批評し合ふと云ふやうな事もして居ります。昨年はキヤナダのトラントンで開き、今年はシカゴの近所で開きました。

△シカゴの
　模範教育部

ボストンを辭してシカゴへ參り、シカゴ大學の模範教育部へ這入つて、初め二期は助手で勤め、後の二期を參觀に費して日本へ歸りました。シカゴ大學の此の部の生徒は多くは學校長、教師、保母などで、諸國の人々が集つて居ります。此部は幼稚園教授法では新式を以て名高い程あつて、其の遣り方はボストン師範學校などゝは全然異つて、非常に研究的で何でも新らしい事新らしい事を探つて進んで居ります。此部には附屬として幼稚園から中學迄のものを設けて、模範部生徒の習つた所を直ぐに試みられるやうにしてあります。尤も此れは左迄珍らしくもありますまいが此の附屬の中に種々の作業場を拵へ、幼稚園の稚兒より中學生徒に至る迄、各々其れ相應の所作を與へられて、實際的の技倆を養ふことに力めてあるのを見て、餘程良い趣向と感じました。



△模範部の實物示教

其處には鍛冶工場もあれば木工場もあり、又料理場もあれば、染物工場もあり、或は化學工場、或は織物工場、其他種々の作業場を澤山に設けて、生徒の實際的の頭腦を開發するのです。幼稚園時代の子供の仕業に就て申せば、こゝに一つの籠を編ませやうとするには松葉か藺の類を持つて來て、「其野蠻時代に人間が樹を切り倒して積み上げた所が、丁度恁んな工合になつたので、此れから思ひ付いて籠と云ふものが出來た」と云ふやうにして進めて行く、すると子供も趣味を有ち、不知不識の間に立派な仕事を覺えるので御座います。



△學校内の演伎場

其の外舞臺なども設けてあッて、歴史を學ふと後で芝居にして生徒に遣らせ、獨逸語や佛蘭西語を稽古するにも亦獨佛人に假裝して舞臺に立たせますから、皆が一生懸命になつて學科を容易く覺えます。目的無しに覺えるのは餘程骨折でせうが、恁ういふ身振の時には恁う言はねばならぬと、其れを樂みにしてやるのですから、餘程進歩が早う御座います のみならず恁んな所に立つて話を上手に出來るやうになれば、成長くなつていろ／＼助けにもなりませう。

シカゴ市中には今日も尙ほ隨分古るめかしい教育法を

採つて居るのもありますが、シカゴ大學の方は萬事斯う云ふ風に工夫して、斷えず新らしきを選びつゝあるので御座います。

今度彼地から歸つて女子大學へ來て見ますと、成瀨校長はいろ〳〵研究して歐米の最新式を採用するに熱心な方であり、それに卒業生が孰れも亦非常に熱心なので、其の精神が能くシカゴ大學に似て居ると存じまして、此校で私もどうか充分骨を折つて見たいと思ふて居ります。

小學兒童暑中休暇に就て家庭の心得べき事柄

小學兒童の暑休暇中家庭は如何なる方針を取るべきかは教育當事者の注意する處ろなるが右に付萬朝紙上に記載されたる同問題中二三名流の意見を抄錄すればまづ

▲上流社會

の心得ともなるべき點より判定して伊澤修二氏はいへり、

上流社會等に華族の家庭では親達は東京に居て子供達を別莊に送り召使などに監督させて置く、之は頗ろ注意すべき事で惡い事は兎角召使の者から覺えるのが多いやうですから故近衞公も此の點に就て非常に苦心されて華族の家庭へ注意された事もあります、次に兒童の教育上注意すべきは杓子定規にコセ〳〵せぬ事で兎角コセ〳〵すれば小悧巧な者ばかり出來て大人物は出來ません、自分は此點に餘程苦心をして大人物を作り出だすべく二三ヶ月前に幼稚園を設け保姆に監督させて居ますが遊戲所は小山を築き其下に小さな流れがあつて花壇も築いてある、そして小供達は形式とか規則とか云ふ事で縛らずに自由自在に遊ばせ、若し惡戯でもしさうな模樣なら他の方面に心を轉じさせて決して叱らぬやうにし又あゝしちやいかぬ、斯うしちやいけぬと云ふ事もせぬ、多くの幼稚園では土弄りをさして塔や人の型を作らせなどして居るが、之は人工的で天然的ではない、自分は子供に向つては人工的よりも天然的の方が智育の上にも利益が多からうと信じます、例へば土弄りをするにも別に粘土を捏れてやらずとも自然に任して置けば降雨の後土が天然に濕つた所で衣類の汚れぬやう氣を付けてやりさへすれば自然に土を捏れて塔や人形を喜んで作つて遊んで居る、この方が餘程天然的で利益が多い云々。

而して氏は暑中休暇中兒童の團體を組織して遊ばせに連れて行く事の困難なるを說き、中等程度の者ならば兎に角小學兒童は學校に居る間こそ課業に縛られ秩序正しく運べど遊びとなりては秩序を保つ

事困難なり云々と。

▲中流の家庭

次に中等社會の親達の注意すべき事柄につき星常子女史はいへり

近頃男女と云はず一般に文弱に流れ要らぬ事に心を惱ますとか、つまらぬ事に不平を起すとかして可惜命を塵芥の樣に棄てる方が漸う多くなるやうですが之を救には何うしても青年や壯年にならない前の小兒の時分から能く〳〵注意して其傾向を防がなければなりません、夫れに就ては兒童をして出來る丈け外界に接し天然に近かしむるのが最も宜しからうと思ひます、例へば植物を弄るとか動物と戲るとか又は土工のやうな事をして自然に近き外界の趣味を感ぜしむるのが肝要で、兒童の間から家の中で小說や雜誌を濫讀さすのは甚だよくないとです、(中略)



私共でも何れ家を新築する筈ですが其際には庭園を大きく取つて區域を定め夫れ〳〵土地を割當てゝ兒童等をして夫を耕すとか又は種を蒔くとか或は池に魚を養ふとか各その好む處によつて仕事をさす考へです、避暑の爲めに旅行をさすのも宜しいが之れは又事情の許さぬ家庭もありませうし其塲合には飛鳥山とか王子方面とか角筈とか近郊にも塲所が澤山ありますから此邊へ行けば時間も費用も餘程經濟でせうが夫れも唯目的なしに行くのは何の利益にもなりません、却て惡い物を見たり聞たりして善くない刺擊を受けますから一の目的を定めて行くのに限ります。學校や寄宿舍でも休暇中と云つて生徒を打棄放しにしないで時時一同を引連れて山とか海とかで遊ばせ遊ぶ傍ら實地の學問をさすやうに致したら生徒の利益にならうと思ひます。猶女史は兒童敎育の方法に就て曰く兒童にはあまり干涉するも不可なれど又一切放任も宜しからず、要は唯積極的に其進む方針を示すにあり云々。

寄宿舍生活

女子高等師範學校

濤涯

記者一日女子高等師範學校御茶水の寄宿舍に訪問して同校生徒日常生活の一班を聞くを得たり。

(問) 御校の生徒は凡て何人位ムいませう。

(答) 現在の處では本校の生徒が二百八十五人、技術專修豫備科の生徒が二十四人と總體で三百〇九人御座いまして一級の平均が七十五人となつて居ります。

(問) 年齢の平均は如何ものでせう。

(答) 滿十八歳から二十五歳位までムいまして平均すれば二十二歳位かと思ひます。

(問) 日常生活の一班を伺いたうムいます。

(答) 日常生活と申しましても廣い意味から云へば普通の家庭生活と太した相違はムいません、唯だ多人數のヿでムいますから一日の規則だけは定つて居ります、尤も春夏秋冬、日の長短に因りまして食事課業其他の時間に相違が御座います、之を四季に分けて申しますれば。

▲春期● は起床が六時、それから當番にあたつた人(之は一室から二人乃至三人づゝ一週間に一回交替當番をなす)は寢室のお掃除をする人もありますれば亦た賄ひの手傳をする人もあります。其他の人は凡てお化粧をしたり又は室外運動を致します。七時に一同朝食を認めまして、八時から課業となります。課業の時間は級や科に依て一定しませんが凡そ平均七時間でムいます。晝食が正十二時、三十分の休憩で三時頃放課となります。放課後は五時迄隨意で運動をする人もあれば外出を致す人もムいます。夕食は五時、六時半まで食後運動を致しまして六時半から八時半迄四季を通じて復習勉強時間に宛てゝムいます。それが濟みますと各自の寢室に退いて讀書其他は隨意で十時に一同就床と成て居ます。

▲夏期● は起床五時、六時朝食、化粧運動等は例の如く、八時から教場に入りまして課業は平均六時間でムいます。放課後は散歩外出隨意でありますが正五時に

は四季共に閉門の規則でござい ますから五時前には皆な歸校致します。夕飯は六時、六時半より八時半まで勉强、九時に就寢、凡て一年中睡眠時間は八時間と定つて居ます。それに七月十一日より九月十日迄夏期休業でござい ますから、生徒は皆な歸省いたします。

▲秋期　は春期と凡ての時間に於て大差はありません

▲冬期　は起床六時半、朝食七時二十分、八時より例によつて平均七時間の課業、夕餐は五時半、夜間の强勉二時間、九時半に就寢ますが冬分は各室に暖爐を設けてござい ます。

(問)　夜間の勉强室は級科によつて分れて居りますか

(答)　否、之は二百坪ほどの一室の講堂で、全校生徒凡ての共同勉强室であります、其處に各自の卓机と椅子とが備へてありまして教室と大差はござい ません、唯だ技藝科の生徒だけは教室にやるヿになつて居ります。

(問)　寢室は何人位づゝに分れて居りませう。

(答)　一室は十六人の組と十二人の組と八人の組とがありまして一人平均一坪餘りの割合で悉く洋式の寢臺でござい ます、で今お咄した當番の人が毎朝交替で室をお掃除するヿになつて居りまして、化粧道具其他の所持品は一切寢室の押入へ入れておきます。

(問)　衣服に制限はありませうか。

(答)　絹物でも綿服でも別に制限は致しませんが唯だ成可質素を旨とするやうに注意してあります。それに裁縫、洗濯及び結髪等は凡て自身にやるヿになつて居ります。

(問)　教場服は一定致して居りますか。

(答)　之も別に一定致しません、唯だ教場に入る時は必ず袴を着ける規則でござい ます。

(問)　食堂及び炊事料理等のヿを承りませう。

(答)　食堂は一室で全校の生徒殘らず一緒に食事致します、又炊事及び料理等のヿは凡て家庭組織になつて居ります、で四年生の中から毎日交替に主婦となるものがありまして料理其他の指圖をなし、又實地習練の為に下婢の手傳をしてお料理をする人もござい ます、下

婢は現今十人御座いまして給料は一人三圓平均であります。

(問) 生徒一人一ヶ月何程の費用を要しませう。

(答) 凡て實費支出でムいまして、小使錢を除き一ヶ月平均五圓五十錢あれば充分であります。又會計は會計員と舍監とが司つて居ります。それに生徒の小使帳は一週一回づゝ舍監に示すことになつて居ります。

(問) 薪炭油等は何程要しますか。

(答) 電氣燈があり、冬は暖爐があり炊事等は一切瓦斯を用ひますから薪炭油の必要はありません、それに毎日四時半から八時まで浴湯がたつて居りますから生徒には好都合です。

(問) 教科書以外の讀書の種類に制限はムいませんか

(答) 規則的に制限は設けてありませんが、可成小説とか或は風俗を亂すやうな新聞雜誌は避けしめる樣に致して居ります。

(問) 交際は自由に許しますか。

(答) 交際に就いて危險のない限りは關渉致しませんが之は程度問題で、舍監が常に注意を怠りません。

(問) 中途で退學する生徒はムいませんか。

(答) それはヨク〳〵の事情がなければ許さぬ規則であります、不健康で修學に耐えられぬ者とか不成績で就業の見込がない者は止むを得ませんから退學を命じられますが、爾那人は一年僅に二三人しかムいません

(問) 運動遊戯等は重に何を致しますか。

(答) 先づ大抵ロンテニス、ピンポン、フートボール位のものでムいます。

(問) 日常お料理の獻立を伺いたうムいます。

(答) 料理は季節に因て必ずしも一定致しませんが凡そは左の如きものでムいます。

◎一週間の料理

(月曜日)朝● 豆腐の味噌汁に佃煮の類と香の物、晝● 魚肉の燒物に野菜の煮〆もの、夜● 豚肉を浮かした汁の物に福神漬の類。

(火曜日)朝● 野菜の味噌汁に海苔と香の物、晝● お生

魚に香の物、夕● 野菜と牛肉の羹附及び香のもの、
(水曜日)朝● 野菜の味噌汁に生卵、晝● 洋食一品に香のもの、夕● 野菜の煮〆に香のもの。
(木曜日)朝● 豆腐の味噌汁に海苔と香の物、晝● 燒魚に野菜の三杯酢、夕● 野菜の羹物に佃煮の類。
(金曜日)朝● パンに牛乳一合、バタ附、晝● 生魚に香のもの、夕● 豆腐汁に香のもの。
(土曜日)朝● 油揚と野菜の味噌汁に香のもの、晝● 煮魚に香の物、夕● 卵燒に佃煮の類。
(日曜日)朝● 野菜の味噌汁に生卵、晝● 洋食に漬物、夕● 魚肉の羹物に香の物。

これは唯だ概畧の料理でムいますが、季節々々によつて可成變つたものを料理するやうに致して居ります、そして料理する人は衛生上凡て白い服を纏ひます、又夏期は朝餐だけ割麥飯を食すヿに定つて居ります。

(問)間食はお許しになりますか。

(答)成べく避けます、然し舍監の許可を得て偶には果物菓子等を買ふヿがムいます。

(問) 一般食物の原料を買入る商店は定つて居りますか。

(答) 大抵定つて居ります、▲米は東京精米所から二等米を取るヿにしてあります。▲味噌醤油の類は湯島五丁目の酒舗と神田小川町の酒舗と二軒御座います。▲野菜類は普通の店でなく、出入の男がありまして毎朝食事係の注文に應じて神田青物市場から一割の口錢で持て參ります。▲魚類も受負の人があつて矢張り當方の注文に應じ魚河岸から一割の口錢でもつて參ります。▲牛豚肉類は本郷三丁目の三枝といふ店から求めるヿにしてあります。

(問) 殘飯殘食はドウなさいますか。

(答) 凡て加減をして三度々々に整ひますから滅多に殘るやうなヿは致しません、若し殘りますれば、出入の八百屋魚屋に持たして近所の貧民にでもやるやうにして居ります。先づ生活の一斑と申せば右樣もので御座います。

夏の一品料理

◎萵苣のサラダ

萵苣をよく洗ひて水を切り、小さき皿に盛りて出すべし、各自適宜に砂糖と酢とにて調味すべし、砂糖と酢とのかはりにサラダ、ドレシングを用ゆるもよし。

◎萵苣と胡瓜のサラダ

萵苣を洗ひて水をきり、皿にきれいにもり、新鮮なるつめたき胡瓜の皮をむきて薄く輪切に切りて、萵苣の葉の間にはさみ、サラダ、ドレッシユレグをかく可し。

◎落し鶏卵

浅き鍋に水を四分の一計りと塩を小匙に一杯入れて沸騰たせ、鶏卵を一ツ一ツ別の茶椀にてつぶして静かに鍋に落す可し鍋の湯は鶏卵を蓋ふ程充分ならざるべからず、白身が硬まりて黄身の上に薄皮の出來たる時鶏卵をくづさぬ様氣をつけて一個宛バターをひきたる焼パンの上に置て食すべし、鶏卵を湯より取り出すには穴の澤山ある大匙を用ふるがよし塩加減は食する人の勝手に任す、すべて鶏卵は人體を保持するに必要なる諸種の元素を丁度よき割合にふくむ故模範的食料と云ふ可し。

◎半熟鶏卵

深鍋に沸湯を入れ、静かに鶏卵を入れて三分間煮る可し、一時に澤山鶏卵を入る時は湯を冷す故同時に四個より多く入る可らず

◎牛乳をかけたる胡瓜

二本の大きな胡瓜を一寸位の厚さに切り、深鍋に入れて水を其上まで注ぎ軟らかになるまで煮、熱き皿に盛りてクリーム、ソースをかけ、熱き内食すべし。

◎煮たる玉蜀黍

若出來の玉蜀黍を撰び、煮る直ぐ前に皮をはぎ毛を去り湯の沸立ち居る深鍋に入れて十分か二十分煮て皿に盛り、バターを少しぬり塩をふりかけて熱き内供すべし。

◎茄子の揚物

大きな茄子の皮をむきて二三分位の厚さに輪切にきり塩をふりかけ麥粉の内にてころがし、よくかきたてたる鶏卵に浸し、パン粉の内にてころがし、充分脂肪のある鍋にて揚ぐ可し。

◎キャベーヂのソース掛け

キャベーヂの凋たる葉は取り去りて、半時間冷水に浸し置き、水より出して沸騰湯の深鍋に入れ、塩を小匙に一杯入れて二十分間煮、湯より上げて熱き皿に盛りクリーム、ソースをかくべし。

人情哲學

▲一人前

男は廿一歳になれば一人前と云つても好いと云ふ人もあれば結婚しなくつては一人前でないと云ふ人もあるが、古から女は男の肋骨で拵へたと云ふから、其肋骨を女から取返へしてからでなければ完全な男とは云はれまい。

▲夫婦喧嘩

或夫婦は寝る前に屹度喧嘩をすると云ふ評判であつたが、併し二人とも決して寝臺から落ちたとはなかつたそうだ。

▲稿料

詩人新聞社主に向つて「私の詩が貴君の新聞に出ます様なれば誠に難有事で御座います、何卒よろしく。して稿料は……新聞社主、頓と感ぜぬ調子にて「まあよろしう御座います、今度丈は少しも頂かんでよろしいですから御心配なく。

▲拒絶

女「まア酷い、妾を抱いたりして、好いんですか、男「ナヽ、何故、いけませんか、女「いけませんとも、一時間の間に是非手を放して下さいまし。

▲金の在處

辯護士「お前さんの罪を少しでも軽くして上げる為に辯護をするンだから、何でも匿しちやいけない、れ、話しなさい悉皆と、」囚人「皆話しちまいましたあとは金の匿して在る處だけなけれど、此奴ア滅多にや話せません。

▲電車

美人かれ、と若旦那が聞いた、媒人は媒人口で何とも云へませんが、如何なに混だ電車に乗つてもちやんと席が出来ると云ひます。

▲馬乗

馬好きの男新調の洋服で街を乗り廻はし、自働車に衝突して大怪我をし人事不省となつたが、やがて目を見開いた、醫者「まア好かつた、大分六ヶ敷いと思つたが、馬好き「如何な工合です、驚きやしませんから容態をきかして下さい、醫者「驚いちやいけないよ、脊骨が折れちまつた、馬好き「馬に乗れますか、醫者「支柱を脊中へ縛り付ければ乗れよう、是を聞いて「しめた」と云つたが安心の為めか、又すや〳〵と眠て仕舞つた。

▲外交

外交とは何ぞや、答へて曰、外交とは六ヶ敷い問題の起つた時、対手を怒らさないで纏める術を云ふ。

▲糶市

或人が糶市で金を無くして心付かずに帰宅したが、気が付いて再び糶市街へ引帰し支配人に遺失したか盗まれたか三百圓を喪つたと届け、振り返へつて一同に向ひ金を探して呉れるか見付けて呉れゝば五拾圓の礼金を出すと叫んだ、すると片一方の隅から「百圓出す」と云ふ声が聞え、又一方から「百五十圓」と呼ぶ者があつたが、忽ちの中に遂々千圓迄糶り上てしまつた。

▲お里が知れる

母「服部さんからお前を貰ひ度いつて来たら、立派な手紙でも、娘そう、其様られ、来月から私の日給が上るから、夫を貯めて衣服を拵へる迄待つて呉れつて返事して頂戴な

▲海底旅行

愛爾蘭人、国に居ても面白くなく出稼を思ひ立ち海を渡つて英国へ来たがそう甘い仕事にも出会さず、終に一文なしになつて茫然して海岸の石に腰を掛け、是なら国に居た方が好かつたと思へども今さら海の向ふが其処だと知りながら思ふには任せず頻りに心細く思つて居ると、潜水服を着た人がやつて来てずんずん海の中へ這入つて往く、忽の内に沈んで仕舞つたが、やがて何やら手に持つて上つて来た、愛爾蘭人は是を見て横手を打つ、なんだ斯様事が出来るなら心配は無い、歩いて国へ帰る分の事だ。

▲政治家

百姓と云ふものは穀物を作るものさ、穀物は酒を拵へるものさ、そうして酒が政治家を拵へ、政治家は其一生懸命国の政治に面倒な事を拵へるものなんだ。

▲冷遇

彼の女は僕が是程に熱情を捧げて居るのに恐ろしく冷淡だ、他人には最温にして僕だけに冷かのに違ない、何時往つてもアイスクリームだのアイスレモンだの、菓子を出すにさえ氷を乗せて出すんだ

▲駿馬

好い馬を買ひましたよ、一度御覧に入れ度い、第一足の確りして居る事と云つたら、私は最早三度蹴られましたから、ようく分りました。

夏季魚類の鑑別法

△暑中の魚類は兎角腐敗がちですから、臺所へ御用を聞に來る馴染の魚屋の外、振り賣の魚屋など招かぬが宜いのです、併し馴染の魚屋とても、毎日新鮮な魚のみを持て來ると限つても居ませんから、魚類を購求するには新鮮と腐敗とを選擇する必要があります。

△鯛や鮃の上等魚の新鮮と腐敗を判別するには、先づ魚の鰓をまくつて見るのが善い、古かつたら嫌な臭氣がしますが、新鮮なら生臭い匂ひのみで、別に嫌な臭がしません、それから魚の尾鰭を攫つて動かして見て、魚がピンとして居たら、新らしき證據、けれども生洲の魚の殺立は骨肉が硬まらないので、腐敗した魚と同じやうに軟弱なものですけれど其の魚鱗の光澤が違ふから一見して直ぐ判る。

△何魚に拘はらず新鮮なものは、魚鱗の上に粘膜が附着して居る、魚が古くなると此粘膜が脱て了ふのである、それから鰆や鰹は尾鰭を持て見て、ピンとしたのが無論善いが、別に尾鰭を握らずとも下鰭の所へ障つて見て、其所がザラ〳〵として指頭へ當るやうてしたら、必ず新鮮の魚に違ひないのです。

△けれど、鰆や鰹には流し網漁の魚があつて、一見した所では新鮮のやうですが料理をして見ると、肉が軟かくつて非常に不味ものですから、鰆と鰹は特に魚の鑑別を要するのです、尤も見た處ろでは新らしいのと違はないから判別に苦しみます。

△又魚其の者が金形であつたら以上の方法で、新鮮と腐敗の選擇も着くのですが、之が切肉や刺身となると魚肉を逆に指頭で撫で見るのです、指先にザラ〳〵とした物が、感じるやうであつたら孰れも新鮮の肉です。

△之に反して腐敗に近い魚肉なれば、指頭が滑で、その腐敗した肉は粘りが指頭へ附着する、同じ魚類でも烏賊や章魚、海老の類の選擇法は異なつて來ます、烏賊は金色で赤味を帶び、章魚は之に反し水色が新鮮としてある、併し指頭で叩くと其所へ赤色を呈すのが尤も良ので御座います。

△海老は伊勢海老、車海老、芝海老に拘はらず、肉が水色であるのを最良品としてあるが、又海老の腰の所を捉へて見て、頭と胴の間がぶら吊るやうなのは、腐敗に近い海老ですから買はぬがよろしい。

△貝類の選擇法は頗る簡易で貝の口を開ぬのが、何貝に拘はらず新鮮です、鮑の良品を選擇するには、鮑の中央を強く叩いて見るに限る、新鮮の鮑だつたら肉か貝殼の中を、キリ〳〵と遁つて活動を始める、前う云ふ鮑なら水貝にも酢貝にも料理が出來ます、此活動のない鮑は俗に死貝と云つて、水貝酢貝にはならぬ。



婦人の神經質

醫學博士　吳秀三

◎病的神經質

人間の神經には中樞神經と末梢神經とがあつて、中樞神經とは五管を司る神經の本元で、末梢神經は、身體の全部に亘つた枝葉の神經である、で此中樞神經又は末梢神經が本當の病氣に罹れば全く神經病者となるのであるけれど其處までは進まず、形の上には何等の異狀なくして機能の上に於て著しく不完全なる半病半健の者が即ち神經質の人である。元來男女共に神經組織に變つた處はないのであるが、殊更に婦人に神經質の多いのは、婦人の神經が外部より來る刺擊の爲に反應鋭敏にして感激の度が强いからである。尤も神經質の種類は種々雜多で、大體に別けて云へば身體に關する神經質と精神に關する神經質とである。凡て神經質の婦人は、普通の人と嗜好其他の感覺を異にして、常人が痛くも何ともない外來の刺擊に此患者は耐えられぬ程の痛味を感じたり、又は之と反對に、普通人が忍び切れぬ程の外來の刺擊に對して一向痛痒を感せなかつたり、或は食物等に就いても、全く人と嗜好を異にし、美味い物を拙いと云ひ、拙い物を旨いといひ甚だしいのになると灰や土を手摑みに喰つて舌皷みを打つて居るものさへある。且つ精神上に於ても喜怒哀樂の情が殆んど常人と逆行して、普通の人が泣悲む樣な

とを喜び笑ひ、喜ぶべきことを悲み泣き、又一方に極めて涙脆い性かと思へば他の一面では非常に殘虐なことをして喜んで居る物がある、これ等は本統の精神病者にもあるけれど輕度のヒステリー患者にも屢々見受ける處である。

◎粘着性神經質と神經變質

凡て病的神經質の婦人は、物事に感じ易く思立つと直ぐ實行せねば氣が濟まぬといふ風であるが、直ぐ勞れて了つて後には何事も出來なくなつたり、一時非常に神經を興奮するけれど忽ち思考力が衰へて何を思つたのだか少しも解らぬことさへある。之に反して粘着性神經質といふのがある、一つ事が何時までも心に粘着して之を取去ることが出來ない人である。例へば潔癖のある婦人の如きは一種のヒステリー患者で、一寸した蠅などが或物に止つても非常に汚ながつて四度も五度も同じことを繰返し、或一物を潔むる爲に其他の物の不潔になるのも顧みざる如き、或は蛇などを見て非常に驚いた時、其恐怖心が始終精神に粘着して何を見ても蛇になつて見ゆるが如き、又は全く健康體であり乍ら自ら病氣に罹つたと信じて頻りに苦悶するもの、之等はヒコポンデリーと稱してそれが嵩ずれば本統の精神病者となり、或は神經變質となるのである。

◎神經變質者の徵候

病的神經質及び神經變質者の身體徵候如何と云ふに即ち左の如きものである。

▲朝夕に皮膚の色が變化するもの
▲瘦せたり肥えたりする度の强きもの
▲顏色忽ち紅く忽ち白くなるもの
▲體内に冷熱を感じ易き人
▲骨格婦人らしからず髯が生えたり局部の發育が男子に近かつたりする人
▲特性なる體質を有し、例へば蟹を食して下痢を起し又は肉類を喫して腫物を生ずる等の人
▲風や雨や雷等を極端に怖るゝ人

▲人と咄をし乍ら急に驚くもの等にて五官の上より此の特徴を云へば。

▲一寸した光や音響に恐怖するもの

▲故なくして五體に痛みを覺ゆる者例へば神經痛の如きもの

▲指を觸る所悉く痛みを感る人

▲局部々々に痛痒を覺ゆるもの（此痛みは末梢神經より來るあり中樞神經より來るあり又兩者同時に起ることあり）

▲皮膚がビリ〳〵と痺れる如き感あるもの

▲或部分は火の如く熱し或局部は氷の如く冷氣を覺ゆるもの（醫學上之を梅核氣と云ふ）

又神經質の婦人が月經時に於て最も多くある徵候は、幻影或は幻覺等である、之は有る物を無いと思ひ無いものを有るかの如く信じて恰んど混沌狀態に陷るもの醫學上之を錯覺と云ふ、其他の徵候としては。

三十年後の白髮　　現在の紅顏



▲急に氣分惡くなり暈眩を起す者

▲人と對話中身體疲勞して咄の出來なくなる人

▲體中痲痺して腰の立たぬ人

▲寢て居れば何事もなし得れど座し又は起立しては何事も爲し能ぬは人

▲關節に痙攣を起す者口元を歪め或は顏の筋をピク〳〵させる人等皆な一種の神經病者で、西洋では之をチックと云ふ、日本では疳の強い人といふ、之等の婦人は刺戟に對して反射運動が非常に劇烈で、些細なることにも甚だしく精神を勞する、だから益々神經が衰弱するのである。血管の上から此病者の徵候をいへば。

▲醫學上怔忡と云つて、常に心臓の鼓動劇しく濫りに苦悶を覺ゆる人

▲逆上性の人又は一寸した事に顔面へ血の集るもの

▲忽ち充血し忽ち貧血する者

▲腺の働きに異狀を呈する人

▲故なくして手や鼻に汗をかく人

▲唾の分泌を缺いて人と對話の出來ぬ人

▲立腹したる時下痢を起す人

▲精神不安にして安眠出來ぬ人或は不眠症のもの

◎精神的神經病者

神經質の人には往々非凡の秀才もあるけれど亦た白痴に近い人もある、殊に美術家文學者の如き一藝一技に長じた人は重に神經質の樣であるが、人としては常識を缺いて居る、萬事人の上に立たんとする虛榮心が強いから悉く自己中心である。恁る人は多少神經に異狀あることを自覺し乍ら敢て之を改め樣とはせぬ。又凡て病的神經質の人は迷信が強くて一旦恁と思つたら人事を省みざる迄の極端に走るので、此等の人の徵候は。

▲注意力が散漫して物を觀察し能はざる人或は全く記臆力なきもの

▲一人にて二身の如く心得居る謂はゞ狐憑の如き者

▲故意に非ずして病的に嘘を吐くもの

▲恐怖心の爲に物に觸れ得ざる人

▲疑問のみ起つて世の中が危險で堪らぬ人

▲脅迫觀念強くして己は大罪惡を働けりと思ひ自殺するに至るもの

▲道德の小局部に固執する偏屈者

▲濫りに妄想を起す人、例へば我夫が他の女と姦通すと妄想して嫉妬心を起すもの

▲人を困らせて喜ぶもの、例せば夫に無理な注文をなし夫の苦むを見て喜ぶ人

▲宗教狂となるもの又は美術に耽りて美を不美とし醜を美とする癖のある者

▲同情心不公平にして憎愛の念甚だしく俗に機嫌買なるもの

等其他種々の神經病者がある、又意志の點から云へば、意志全く衰へて何事も考へ能はざる人と、意志はあり乍ら全然間違つた考を持つ人とがある。前者を無意識狀態と稱し、後者を暗示性神經質と云つて、之は自己の意志が定まらず、凡て外部から注入された事を固く信じて動かぬとで、婦人には、此迷信が殊に甚だしい、ヒステリー性の婦人は受動的の暗示よりも自家暗示が強いから催眠術などを施しても比較的効が少いやうである。

◎間接の治療法

以上の如き神經質、神經變質、及び神經病者を如何にして豫防し且治療するかと云ふとは頗る六ケ敷い問題

三十年後の白髮翁　　現在の壯夫



で、他の病氣の如く藥劑等に依て容易に治すべき者でない。之には血統も在ば遺傳もあり、又境遇習慣等の關係も在から、第一に小供の時の敎育が肝腎で、若遺傳性の神經質であつたら、可成小供の神經を銳敏ならしめぬ樣に注意せねばならぬ。私の考では父母其ものが神經質であるから子供が神經質となるので、父母が模範となつて小供の惡癖を矯正する樣にすれば少々の神經病者は必ず治することが出來るのである。次に小供の性質及び天賦の才能に應じて個個の敎育を施さねばならぬ。小供を抑へすぎるのは却て反抗心を起さしむる基であるから勿論避けねばならぬが、爾かと云つて可愛がりすぎる結果萬事放任主義をとつて我儘放題に躾るのは大に戒めねばならぬ。殊に子供の虛榮心を奬勵したり、又は

感情の鋭敏なる點をオダてたりするのは、求めて神經質たらしむる樣なものである。神經質の小供は凡て意志の弱いものであるから、之に忍耐心を養成することが肝腎で萬事足るを知ることを忘れしめてはならぬ。小供の中から物に滿足せしむる癖をつけるとそれが習慣となつて、長じてからも何か自分の思ふ樣にならぬことがあると直ぐ悲觀又は厭世思想を抱いて、ツヒ自殺など云ふ事になる。教育にさへ注意すれば決して以上の如き精神的不具者を出すものではない。又遊戲なども男女の別を嚴格にして、少年少女時代に色情や戀愛などのことを一切知らしめぬ樣にせねばならぬ。殊に神經質の婦人は早熟であるから、小說演劇其他神經を刺擊する樣なものは絕對的に避けて靜かに身心を養ふ必要がある。兎角現今の學問は形而上に流れて、哲學其他空想に耽り易い讀物を奬勵する傾があるから、無邪氣な少年少女を早くも神經質に陷らしめるので、就中お伽噺の如きは、鳥や獸が人間と同じくいろ〳〵の事を爲し且つ物を言つたりするから小供が自然空想に腦を支配される樣になるのである。之は其局にある教育者諸君の一考を煩はして可成ならば實物教育を施したいと思ふ。

◎直接の治療法

小供の時から父母が注意して神經質に陷らしめぬ樣にするのが間接的治療法であるが、既に神經質となり又は神經病者となつたものは醫師の手を煩はすとは勿論として、第一の療法は患者を靜かなる地方へ別居せしむるのが最も得策である。凡て神經病者は家庭の波瀾等から起るのであるから保護者は篤と此邊を考へて適宜の處置をとつたがよろしい、之が攝生法の要領を摘めば、

一 飲食物に注意し不消化の物を避くること。

一 肉慾を愼み適宜の運動をなすこと

一 讀書は小說其他神經を刺擊し易き讀物を避くること。

一 娛樂の種類を選擇すること。

一適度の職業に就くこと。
一規則正しき生活をすること。
等であるが家内の人が患者に對して、お前は精神病だから巣鴨へ送るぞなどと脅すのは最も病氣に宜しからぬから之は大に愼まねばならぬ。

日常生活 女子美容法

醫士　岸　恒彥

△女子が化粧を輕んじてはならぬ理由

近來一部の女性間に、人は心さへ正しくば容貌や裝飾はドウでも宜しい、若し毎日お化粧をする位の時間があつたら其暇に勉強でもした方が可い、など云つて醜いまでに髮容妄亂しながら平氣で居る人もある樣だが、之は今の處極く少數であつたにせよ、女子としては甚だ心得ぬ次第である。古來から女の身嗜みと云つて、女は女らしく身分相當の化粧をして其美を發揮するのが、婦人にとつて忘れてはならぬ日常の務である西洋の詩人は『美婦人は天が此世に下したる一大美術品である。』とさへ云つて居る位だから之を粗末にする婦人は一種の自暴自棄であると共に、容貌を亂す程の女は必ず精神まで正しくない、其證據には粗衣粗服を纏ふた人は、凡ての言語動作が荒々しく心に品格と謂ふものがない、男子でも大禮服にシルクハットを冠つた時の心持と寢卷姿でゴロリと横になつた時の心とは大變な相違がある。又未開時代の民族が全然化粧法などを知らなかつた處を見ても如何に裝飾と人文の發達との關係が大なりしかと云ふことが明かである。第一容貌端麗にしてキチンと裝飾つた婦人と、だらしなく取亂した婦人とは、人が之に對する尊敬の程度から違ふ凡て身嗜みを粗末にする婦人は無精者の證據で萬事に不忠實であると見做されても仕方がない、そこで境遇上全く化粧や裝飾の出來ぬ人は致方がないとして、然もない限りは華奢に流れぬ範圍に於て容姿を修める

のが婦人として至當のことであらうと思ふ。さらば如何にして女子は其美を發揮すべき乎と云ふに先づ第一に體育を重んせねばならぬ。

△容貌と體育の關係

何程容貌ばかり美しく、或は綺羅錦繡を着飾つても之に相當する五體の姿勢が釣合はなければ、決して完全なる美人と云ふことは出來ぬ。だから常に體育を怠らず自ら其姿勢を正すのが美人となる根本の要素である然るに日本の婦人は古來からの習慣で雨にも日にもあたらず所謂深窓に垂籠めて少しも運動などに重きをおかなかつたから押なべて體質が虛弱である、のみならず筋肉の發達が不充分で大抵の婦人は脊髓骨が曲つてをる、だから姿勢が正しくない、これでは容貌ばかり美人でも其人全體の美人といふことは出來ぬ、美術家などがモデルに望むのは顔の美しいのは第二として先づ五體の筋肉が自然に發達した女である。西洋でも姿勢の良い人を「グート、プレゼンス」と稱して其人の品性の美を示すものとしてある。畢竟日本の婦人が一般に顔色蒼白く、又は黄黒色を呈して居るのは第一日常の運動が足らぬからで、之を矯正せんとするには是非共適宜の運動と相當の衞生とによらなければならぬ。

△運動と美容法

西洋では特に婦人の爲に室内美容術と云ふのが設けられてある、之は重に曲線的運動で、筋骨の働きを自在にし且つ容姿をしなやかにする一種の體操である。其方法は、

(一)壁を背面にして立ち兩踵臀部及び兩肩と後頭部とを壁に接け兩腕は自然に體側に垂れると

(二)そこで徐ろに後方に體を屈めて頭の頂が壁に着くまで仰向くと、

(三)此間深呼吸をなして十分間に二十回ほど之を繰返すと、とである。其他まだ種々の運動法もあるが此方法が一番簡便で、日本婦人の如き脊髓の曲つたのを正すには最も適當な運動法かと考へる。單にこればかり

でなく我邦在來の歌舞伎式踊りの如きは頗る當を得たる美容術で、姿勢を美にする點から云へば遙に西洋の舞蹈法よりは優つて居る、論より證據、踊りを稽古した人とせぬ人と一見して其動作が解るではないか。又平常歩行する時は兩手を膝の横に伸し、肩を張らず腰を屈めず胸を出さずして我面前六尺位の處に眼を注ぎしとやかに歩むのが最も正しい姿勢である。

△顏色の蒼白なるを治す法

色の白いのは七難隱す、とか云つて色さへ白ければそれで美人の資格が具はつた樣に心得て居た時代は過去つて、今度は蒼白色を隱すために往々有毒なる色素の含んだ紅を白粉に交ぜて塗るやうになつたが

三十年後の皺顏　　現在の美容



之は衞生上甚だ有害である、つまり血色の宜くないのは何處か不健康の徴候であるから之を治すには化粧以外の化粧法、即ち衞生に則つた根本的治療法に因らなければならぬ。其方法は

(一)毎日二回適度の運動を怠らぬと、凡て運動は神經力の最も敏鋭なる時に適するものなれば朝夕共食後二時間を經てすると但し寒冷なる空氣中に運動するは心臟を過度に働かす故宜しからず。

(二)朝食前に冷水摩擦をすると但し甚だ虛弱なる人は微温湯摩擦にても宜し。

(三)便通を緩かにする爲め朝食前に一合程の鹽湯を飲むと、

(四)空氣の乾燥せる室を擇ぶと及び神經を費やさゝ

ること。

(五)食物は可成蛋白質に富みたる滋養分を擇ぶこと。

(六)睡眠前に間食をせざると及び睡眠時間は八時間と一定して早寢早起をすること。

(七)床中にありては雜念に耽らず點燈は必ず消して寢ること。

(八)毎日一定の時間を定めて光線浴をなすこと、即ち砂塵の立たぬ(海岸は最も妙)處に三十分程日向ぼつこをなすこと、但し酷暑の候は例外なり。

(九)屢々新鮮なる衣服に着換ると及び長く一處に座するは脚部を壓迫して血液の循環を妨ぐるが故に宜しからず。

未だ此他に療法もあるだらうけれど凡そ右の如きもので之を二月位勵行すれば必ず効が見える。

△皮膚の光澤を良くする法

顏面だけ美しく飾つても、手足其他の皮膚が不潔なればこれ亦た眞の美人とは申されぬ。そこで皮膚の光澤を良くしキメを細かくするには何が一番宜しいかと云ふに先づ適度の入浴をすることである。入浴は單に皮膚の不潔物を去るのみならず血液の新陳代謝を促がして血液をよくし且つ消化を助ける効がある、其適當なる溫度は華氏九十五度乃至百度(攝氏三十七度内外)沐浴の時間は午前九時より十一時迄の間最もよし、次は午後三時頃、夏期は一日一回冬期は一週三回位を適度とし入湯時間は三十分を超ゆ可からず、湯から出た時は冷水にて汗を止めタオルを以てよく濕りを拭い去り全く乾燥したる後三十倍程に溶解したる硼酸グリセリンを手足又は顏面に塗擦すべし、目下坊間に發賣する下等の香水又は化粧水の如きは多量なるアルコール分を含むが故に皮膚を刺擊して却てキメを荒くする虞れあり、又夏期の汗止めとして汗知らず其他鉛分を含める粉末を用ふる人あれど之は衞生上宜しからざれば汗止めには炭酸マグネシユーム硼砂とを混合したる粉末を用ふべし。

△顔色を美にする法

少量の亞砒酸を用ふれば顔色を美にすると云つて西洋人などは往々使用するさうだが之は怖るべき紅毒業であるから決して用ゐてはならぬ。然らば如何にして容顔を美[illegible]化するかと云ふに先づ食物と精神の作用とによつて間接的美貌法をとらねばならぬ、食物は消化のよき肉類及び瓜、林檎等の種類最も白顔色を白くするに効ありと云ふ、又精神作用とは表情のことを云ふの[illegible]で、心毎に嘻々として平かなれば顔面自ら優しくして美しく見えるけれど胸中不平絶えざれば美しい人も思面に現はれて醜く見る道理である、又日光に燒たる皮膚の色は檸檬液を塗布して治すことが出來る。



△頭髪に就いての注意

頭髪は婦人の最も貴しとするところで、隨つて之を整理するには頗る綿密なる注意を要すると共に髪を洗ふことを、怠つてはならぬ、髪を洗ふのは油や垢の臭氣を去り且つ毛の光澤をよくするのであるから必ず二週間に一度、夏季ならば十日に一度位洗はなければならぬ洗粉は何が一番良いかと云ふに普通の洗粉よりも生玉子を溶かして微温湯で洗つた方が最も髪の光澤をよくする、油の最上等は舶來の油か然もなくば三宅島附近に出來る純粹の椿油が一等毛髪の生育を好する其他の油は槪ね混合物がある、又他人の櫛を借りて髪を梳くのは病毒傳染の虞があるから之は自己

所有のものに一定しておいた方が宜しい。

△石鹼の良否を鑑別する法

舶來の極く高價なる石鹼は別として普通我々の使用して居る石鹼の中に却て皮膚のキメを荒くするものがある、元來石鹼は脂肪分と亞爾加里鹽類との抱和物であるが、之が良否を試驗するには、フエノフタレンと云ふ藥品を藥種屋から求めて、三倍のアルコールで溶き之を石鹼に注いで見ると惡性の物は忽ち赤色を呈するけれど良好の物は變色することがない、即ち赤色の程度によつて良否を識別することが出來る。

△有毒なる白粉を試驗する法

白粉に鉛の分子が含んで居つてそれが人體にとつて非常に有害のものであることは廣く世間の知る處であるから玆に其說明は省くとして、唯だ如何にして其有毒分を知るかと云ふ試驗法を揭げやう。舶來の白粉は多く澱粉とマグチシユームとで製してあるから全く無害であるが、普通和製の白粉は、種々なる名稱を附してあるけれど、其十中八九までは百分中九十八といふ多量なる鉛分を含んで居る、之を試驗する最も簡便なる方法は、十五倍の蒸餾水で之を溶かして見るのであるよく溶けて半透明になれば鉛分を含まぬ證據であるけれど、能く溶解しないでドロ〳〵したのは鉛分の多量なる物と見て宜しい。

△化粧の方法

さて一通り衞生や其他の說明も濟んだから愈々お化粧の話に移るが、一口に化粧と云ふけれど其中にも、淡化粧の似合ふ人もあれば濃ひ化粧の似合ふ人もあり又全く白粉を施さでも宜しい人とがある。だから其人の容貌によつて化粧にも區別がある。

▲唇の薄すぎる人は口紅を濃くし

▲厚すぎる人は紅を淡く點すべし但し紅にも有害なる色素を含みたるものあれば純粹なる臙脂を擇ぶべし、

▲頰の靑白く瘦せたる人は白粉に微少の紅を混じて頰

に點すべし、
▲頸の短き人は咽喉部の下るに隨に白粉を濃くし、
▲頸の長き人は之と反對に薄くすべし、
▲額の出過ぎたる人は額に白粉を用ふ可からず若し用ふとすれば極めて、少量なる青味を混じて塗るをよしとす、
▲鼻の低き人は鼻筋の白粉を濃くすると
▲小鼻の怒つた人は可成其部分だけ淡く刷くと
▲眉間が低すぎて鼻と釣合はぬ人は其低き部分へ白粉を施すと
▲眼の落凹みし人は眼の縁だけ少しく濃くすると
▲眼の腫れ氣味なる人は眼瞼を極めて淡くするを宜とす、
▲眼圓くして太すぎる者は下瞼だけ他の部分より少しく淡くすべし、
▲眼の細き人は上瞼を濃くすると
▲眼の釣上りたる人は上瞼の鼻筋に接したる部分を比較的濃くし下瞼の眼尻に近き方を薄く刷くこと
▲眼尻の垂下りたる人は釣上りたる人と反對に化粧を施すべし、
▲襟足にのみ白粉を濃くするは最も醜し、
▲眉薄く又生際の淡き人は黛を用ふべし但し黛の製法は凡て蛋白質(卵の白味の如き)を黒燒にして粉末となしグリセリンに混じて用ふるを可とす、
▲歯を美くするには酸類最も効あれど歯を弱らせる性質のものなれば食鹽に灰を混じて磨くを可とす、
▲爪を美しくするには屢々酢に洗ふを良法とす、
▲又顏を剃るには逆剃刀を使ふ可からず。

先づ大略以上の如きものである。其他衣服の模様や着こなしの工合は、凡て色の配合又は身體の長短に應じて自ら考へるが宜しい、例令ば背の低い人には縦縞の物が似合ひ高い人には横縞若くは格子縞が似合ふといふ樣に萬事其人の適不適によつて配合と調和を圖らねばならぬ。

季節衞生

前號即ち第六卷第九號には海水浴、水泳法、海氣浴、氷水飲用法、夏と飲食物、臺所衞生それから蚊蠅等に至るまで夏の心得可き事詳しく述べて有りたれば、月こそ違へ、季節衞生は殆んど餘蘊無しと謂つても可い、然れば今回は其の聊か遺ちたる分だけを拾つておきませう。

▲汗に就いて――汗は如何なる物か、又何の爲に出るものか、議論は少し六かしけど時節柄これを辯明するも決して不必要なることでは無い。偖我等の身體は一分時間に十七八回の呼吸をして其の度毎に空氣中の酸素を吸ひ、其の酸素は身體中に入り、身體中を燃し、甚だ多くの熱を發す其の熱が我等の活力となるものである、之を腋下で測れば攝氏の三十七度（華氏の九十八度六分）内外、これより高くても低くても共に健康を害するものである、故に之を調節し氣候の寒暖に拘らず其間に過不及無い樣にするものが無くてはならぬ、然らば其の任に當る物は何かと云ふに汗である。抑々液體が蒸發するときは、これに觸接する物體から熱を吸ひ取るは物理の定則で、身體は勿論其の定則に從ひ、身體に熱の發生多きか或は空氣温が高くて體温の出るのを妨げる恐れあるときは、汗の分泌多くなり、其の蒸發するに當り、温を吸ひ取り去つて遂に三十七度の平均を失はぬやうにする、故に空氣温の寒い時は汗の出が少くなつて矢張三十七度の熱を保つ、何と大切な汗では有りませぬか、故に夏殊に八月の極暑に在つてはドン〳〵汗を流す可き必要があるのです、汗を流せば其後は涼しくなつて來る、此の理由を悟られたら極暑の日中に午睡などせずと、襷掛で働くが宜い、さうすると唯さへ出る汗ですから今度は瀧のやうに落ちます、然る後休憩して御覽なさい、大いに涼しさを感ずるものである、併しながら汗は體温を洩すと同時に身體中の老廢物を流しだすものであるから、其の老廢物が皮膚の表に溜つて垢となり、それが遂に毛孔や汗孔を塞ぎ一方ならぬ害をなすものなれば、働いて汗の出たる後直ちに温浴をするが宜い、さすれば垢を落す

のみならず、皮膚は反射作用にて温たる後は冷る作用があるから、尚々涼しさを感じ何よりの避暑法である、人は一般に夕方に入浴するけれど、勞働者で無方は、夏は日中働いて日中に入浴することを甚だ妙法なりと、余は「中學世界」にも說明したのである。

若右の様にしてゐても、顏や腋下抔に殊の外發汗し、夫が爲に折角の白粉も滅茶〳〵になつて了ふ恐のある方は、常に其部へ撒里矢爾酸一分澱粉五分の割合で混たものを撒布してゐると、大いに汗の量を減ずるものである。

又汗疹の出たる時は亞鉛華粉を撒布するか、然らざれば矢張汗止の藥も功がある、併し汗疹は身體衣服を清潔にし、屢々沐浴して汗を拭ひ且つ洗つてゐる人には發せぬものである。

顏や頭は血管に富だ處であるから、發汗も亦從つて多い、故に夏は殊て髮毛を洗ふこと肝要である、さうするには良好なる石鹼をつけ微温湯にて洗が宜し、頭に限らず不良なる石鹼を附けると、皮膚を害すること甚しい、不良なる石鹼は、舌の尖で少し嘗ると、ピリ〳〵と刺戟し、且指尖で壓せば直に跡の附く者である。

▲日射病――常に日光に觸慣てる人は餘り本病に罹ぬけれど深窓の下に閉籠り勝の人が極暑の節、急に旅行抔すると、始めの中はタラ〳〵汗を流して屈れど、後には眩暈を發し、卒然人事を失ふことがある、之を豫防するには道中の所々で、汗



三十年後の老翁　　現在の壯夫

の源を作つておくと必要だ、汗の源は水なれば沸冷しの水或は冷たる麥湯等を、時々飲み且つ濕つたる手拭手巾等を頭に載せることも忘れてはならぬ。若又日射病の爲に倒れてる人を見たらば、直ちに冷水を頭から胸に灌ぎ掛ると大抵治るものである、併し其の倒れてゐる人が、日射病であるや無しやの診斷をしてかゝらぬと、頓でも無い人に水を灌いで、灌がれた者は甚だ有難迷惑を蒙むることがある、これが診斷法は先づ倒れてる人の皮膚に觸れて見ると、本病者ならば皮膚が乾いてゐて、且つ非常に熱して居れど其他の者は幾らか濕氣が有つて熱く無いものである、戰勝の結果國民の意志は强固となり、從つて徒歩主義の行はるゝ今日必ず覺えておかねばならぬ一法であらう。

▲日に燒けぬ法＝毎年〳〵夏に向ふと、雨降る如くこの問の手紙に接するが、余は餘り答へたことは無い、何となれば日に燒けるといふは太陽の光線中の或物が、皮膚の色素を沈着する作用あるから、夜見の國へでも逃げたらいざ知らず此世に居ては太陽の光線に逢はぬ行は出來ぬ、若又逢はぬ方法があるにしてもそれは非常に衛生上の害で、人間は適度な日光に觸幾分日に燒ねばならぬ道理になつてるからである、併乍、婦人の身を以て赫々たる日光に觸れ、俄に黒人然たる顏になるも甚だ殘念の程御察し申さねばならぬ、斯る已を得ぬ場合には傘をさすは勿論なれど、尚强き光線の作用を受ぬ爲に酸硫規尼涅一分グリスリン軟膏十分の割合で混たる物を顏や手に塗て出方が可い、而して家に入つたら直に洗ひ落せば元の奇麗は其儘との事、余は經驗もして見けれど害無藥なれば試みらるゝも試みられぬも、そは貴女方の勝手である。（糸　左近）

▲衛生顧問▼

問　同情深き糸左近先生よ水銀劑を服すれば發聲を暴しくすと、眞實に候や是非とも七月の誌上に御敎を乞ふ。（濱達の水無月女）

答　服用久しきに亘れば發聲を暴しくする事は屢々實見致し候序に申しますが御手紙を出された日が六月廿六日で、小生の手に

入つたのが同廿八日、然るに七月五日に答へよとは、出版の事を少しも考へぬ方と謂ればならぬ、されば今月十日迄の分を來月の五日に答へ、餘は來々月に延すことゝ心得られたし。

問　私事齒齦が腐蝕するかの如くなり、從つて齒も動搖致し候、當地にては之を「ハクサレ」と申候がこれを治する藥を御敎へ下され度候。（北海道廿八歳女學講讀女史）

答　三％の鹽剝水にて屢々含漱せらるゝことと肝要に候、倘ほ御地の外科醫の診療を受けられよ。又因に申しますが、端書に郵税未納の廉を以て、小生より罰金徴收、斯の如き郵便規則に違背のもの月に廿通は有ります御注意くゝ。

問　出產後一回も月經を見ずして妊娠することありや何卒御敎示を乞ふ。（靜岡城西女）

答　出產後三四年も見ぬ人幾らも有ります而して其の揚句に妊娠すれば其月だけ月經有るが通常である。

問　母體の榮養不良なる結果は胎兒死に至る者に候や御教授願ひ上げ候。（神戸女）

答　榮養不良の程度にも依るが、胎兒死に至る位ならば母體も亦一通りの不良では無い。



三十年後の老婆　　現在の令孃

問　私は近眼で、十度の眼鏡をかけてゐますが、或人の說に眼鏡をかけると益益近眼になるとの事、眞實に候や御敎へ下され。（麴町のＫＨ生）

答　或人の說は不可なり、かけざれば益益其の度の進むものに候。

問　私は夏期に至れば何となく身體倦み疲れ食事は進まず身體グニヤくに弱り何事も爲し得れず實に困り入候、御情を以て之が治療法を問。（長崎の廿二歳女）

答　秋冬春に於て或は冷水摩擦或は郊外運動等をなして身體の抵抗力を作つてあれば、夏來るも毅然たりで更に夏負などせぬものである、然るに三期は打捨おき、夏になつてから喞しても容易に治されませぬ。嗚呼抵抗力の強き者は、古人の句にある通り

人ハ皆苦ニシ炎熱ニ我ハ愛ニス夏日ノ長キヲ

と一向平氣な者である、余は非常に此句を愛吟する儘爰に掲げました。

問　灸の跡は治らぬものに候や治るものならば御示教を乞ふ。（大阪増田内梅女）

答　年を經るに從ひ、自然と消えますけれども、仲々治らぬものである、野蠻の療法をせぬが可い。

問　耳より膿出で候へども、土地に專門醫無きため、内科醫に診て貰いましたれば、五十倍の硼酸水にて洗ひくれましたが全治せず、幸ひに親戚に藥劑師あつて、沃度劑の内服藥を用ゐてゐますが、矢張功ありませぬ、何卒これが治療法の御教を乞ふ。（栃木寒村の赤貧女）

答　硼酸一、〇と石炭酸〇、二を溫湯五〇、〇に溶かし、僅かに溫氣のある程度まで冷まし、これを「スポイト」にて注射せらるゝこと一日に二三回行はれよ。但し返す〴〵も水の溫度が肝要である、若し冷たければ腦貧血を發し、熱ければ腦充血になり、何れも眩暈の種になる、されば其の溫度は水氣を放れてゐるといふ位なのが宜いと心得べし。

問　兄は放蕩のため梅毒に罹り、治療中に候が、其傍ら湯治を試みたくと申し居候、就ては全國中遠近を擇ばず候間何くが宜敷候や御敎示を乞ふ。（北海道小樽區愛兄女）

答　何れにても硫黄泉が最も宜し、それには下野の日光湯本河原湯、相摸蘆湯の仙液湯、同達磨湯、山鹿の龍の湯などが適當なり。

問　母は子を十人以上も産みましたが二ヶ月前より糖尿病に罹り、身體も衰弱致し候、これが養生法及び療法を何卒〳〵御敎示下され度候。（松山の親思ふ娘涙）

答　可成糖分を含まぬ食物を取るやうにし、入浴運動を盛んにしてドン〳〵發汗を促がし、尿を少くする工夫をせねばならぬ、これは仲々の重病なれば通信療法の出來るものならねば一刻も早く名醫の診療を乞はるゝこと肝要に候。

問　腦充血性であるか知ら、常に顔が赤くて冬になると紫色になるし、白粉をつけても矢張紫になるのよ、何卒よくなる法を敎へ下さい御手數ながら。（青森縣弘前市の恥知娘）

答　娘時代は大抵頬の赤きが通常であつて左程心配するに足らぬものよ、兎に角便通を整へ月經の不順無きやう御地の醫士に診療を乞はるゝこと肝要なのよ。

問　數年來牛乳を用ゐてをりますが毎年暑中だけは止めます、他に夏冬に拘らず代用す可き滋養品の御敎授を乞ふ。（青森縣下住居四十女）

答　病氣にて流動性の食物を取らねばならぬ譯なら、夏とても牛乳を止める必要なし、何の病氣も無くば牛乳二合の代りに飯一椀多く食はれよ、滋養は殆んど同じことです。

問　先達而新聞紙上に廣告してありました牛込通寺町のカーケレーシ商會發賣の身長を延ばす器械は果して有力なるものでせうか、御答を乞ふ。（東京の一寸法師）

答　余も其の廣告を見ましたし、又聞いてもゐますが、未だ實見致

さず候へば、至急經驗に取掛り追て其の結果を本誌上に御紹介申すべく候。

問　私は口中が臭くて毎朝含嗽も致しますれど、何の功も無之候何卒この全治法の御教示を乞ふ。(口中の惡臭女)

答　口中の病からもなるし、又胃病或は梅毒等からもなれば原因療治をせぬ以上は到底治らぬものである、姑息的治療としては三 % の鹽剝水或は二 % の硼酸水にて屢々含嗽することを試みられよ、又口中は毎朝位で無く、何人も晨起の直後三度の食後、就寢前の五度は含嗽せられたきものだ、殊に喫煙する人は尚更である。

問　物に衝突したるが原因となつた癲癇は不治のものに候や、これが攝生法及び治療法を問ふ。但し泡は吹かず候。(不幸なる十八歳女)

答　生命には別條なきも、根治は甚だ困難に候、攝生法としては心身の過勞、房事の過度、授乳を禁じ常に消化し易き食物を取り、便通を整ひ、若し便秘する場合あらば直ちに醫師に就いて治療を受けねばならぬ、又發りさうな前徴が有つたらば五 % の食鹽水を中合程服すると止むことがある、發作したる後は固より醫療を受く可きではあるが、まづ素人療治としては

臭剝四、〇　單舍一〇、〇
水一〇〇、〇
右一日三回分服

位の所だ。



三十年後の皺面　現在の美貌

問　雨水は四季に依て成分を異にする者に候や、又雨水を以て皮膚を洗へば害ある者に候や御教示を乞ふ。(神田の近藤やえ子)

答　雨水の地上に來る途中に塵埃でも入れば兎も角も、さうで無い以上は天然の蒸餾水で、四季に依り成分を異にするもので無いされば雨水を以て皮膚を洗ふても何等の害無しと謂はねばならぬ。

問　愧かしながら自覺的症情の結果、白帶下になり、又白髪まじり申候、不治のものに候や若し全治法あらば何卒御教示を乞ふ。(東京のおたのみ生)

答　斷然と心を高尙にし、身體を淸潔にし、殊に腰部以下の冷水洗拭を屢々實行し、郊外にて活潑なる運動、山水花木を愛すると、早寢早起の習慣をつけること等着々步を進められよ。

問　妾は攝津の國の者で當年十六になる女で御座いますが、骨髓病にかゝつて、足の自由が叶ひませぬ、先生哀れと思召し宜しき御藥を敎へ給はりたし。(大阪の繁子)

答　十分同情を寄せますが、併し外科術ならでは何うも致し方が有ませぬ、然れば御地の病院にて診療を受られよ。內服藥としては

沃度曹達〇、三　苦丁二、〇　單舍八〇　水一〇〇、〇

右一日三回分服(但し沃度は漸次增量)

など用ゐますがこれとても醫師の指圖を受くること肝要である。

問　私の叔父は三十六歲ですが腦病の結果中風のやうになりました、宜き療法ありますまいか。(長崎のX女)

答　腦病と申しても其の範圍が廣く且つ中風のやうとは如何、其の「やう」を今一應詳しく病狀を認めて投書せられよ。

問　時節柄御飯其他の料理が腐敗しかけて困ります、極簡單なる豫防法の御示敎を願ひ度候。(廚夫長)

答　乾燥と冷却との二法を應用するより外に致方ありますまい即ち飯ならば笊にでも入れて笊蓋をなし北窻の風あたり宜き處に吊すが可し、其の他の料理も矢張斯る場處に而も冷水を盛れる器中に沈めおくこと必要である。

問　男女何れが生殖欲の强きものでせうか、面白半分の問で無くて衷心より御聽き申すのであれば何卒御高敎を仰ぐ。(某高等女學校の某敎員、滋賀縣の女學愛讀者)

答　男子の方强きものなりと、古今東西の生理學者動物學者が既に說いてゐらる。

問　廿一歲の女別に病い所もありませぬが、色靑く且つ瘦せて居ります、多分貧血ならんと存じ候恐れながら强壯法を御敎へ下さい。(駒込よし子)

答　每日原野に出でゝ大空に觸れ、日光に浴び、晨に有明の月を眺めて冷水摩擦を行ひ、夕には既に就寢し、能く勉め、能く遊び、三度の食事を舌皷鳴して樂まれよ、强壯の祕訣自ら其中に在り。

問　私は女の癖に煙草を好み別にこれといふ害も見受け申さず候へども、人目恥かしく候へば何うかして止めんと存じ、代りに豌豆を食し居りますが、食し終れば矢張吸たくなり堪へられませぬ、衛生外かも知れませんけれど、何卒厭になる方法を御敎へ下され度願ひ上げ候。(東京の好煙女)

答　煙草を止めて間食をすれば尙一層の害があります、厭になる方法とては別に無し、眞に止めんと思へば止められぬことは必ずありますまい。

問　夫は非常に酒道樂で御座いますが、之を止めさする御藥あ

らば御教を乞ふ。(大阪の諏度女)

答 別にさる藥とても知らざれども、或人の説に徳利の中へ何時も極少量の肝油を入れておくこと數月續けたれば次第に其量減り遂に止んだとの事、肝油は害あるものでも無ければ、一つ試みられよ、併しこの事を前以て知らせてはなりませぬ、換言すれば極秘密にしておくのであります。

問 月經缺乏にて日本藥局法の蘆薈藥剌巴丸を毎食前四丸づゝ服用して居ますが、何日間位服用せば宜しく候や御答を乞ふ。(神戸の廿四歳お轉婆女)

答 原因にも依れば、猥りに通經藥を服用してはなりませぬ、又一回四丸は多量なり、朝夕二丸宛位を試みるが可し、一ケ月に一週間連服するが關の山である、斯くして二三ケ月試み、更に功無くば固より醫療を受けられよ。

問 神經衰弱に催眠術は効ありませうか、又効有るものとせば幾日位續ければなりませぬか。(京都四條大橋淺井うの子)



三十年後の禿頭者　　現在の壯夫

答 余は催眠術に不賛成ですから、それよりも前々號に述べたる旅行療法を試みられよ、若し旅行し難き場合には(駒込よし子)に答へたる方法を實行せられたい。

問 アルコールを頭髪に塗けて害ありませぬか何卒御答を乞ふ。(出雲の女學世界愛讀者)

答 害ありませぬ。

問 私事本年廿四歳になりますが、五六年以前より熟眠中多きは一晩に二三度少きは隔晩又は五六日目位に一度聲を擧げて泣きます、それで私本人は其事を知覺致しませぬこれが治療法を御敎へ下され。(神戸の夜泣女)

答 恐るべき談話を聞いたり、或は恐る可き圖畫を見たりして精神を強く感動せしめたことが大原因となるものであろ、左無くとも何か悲觀的に陷りそれが本病の種となることもある、其他虚弱なる體質・貧血・胃病・心臟病・癲癇等が之を誘ふこともある、又本人が寢てから家族が骨牌或は談話或は讀書などして熟眠の妨害となる可き事を爲れば、それが爲に本病

にかゝることもある、故に其の原因となる可き事柄を避けるが肝要である、即ち他に病氣あらば早速醫療を受くると同時に、家庭の改良をなし、安心をして眠るやうにせねばならぬ、且つ又た平生に精神をして臆病ならぬやう悲觀的に陷らぬやう殊に臨臥には愉快に樂しんで眠ることを務むるが療法の主眼である、嗚呼主眼である。

問 伯母五十六歳は癪が持病で、醫藥を用ゐても一時は治まるけれど又々發ります、何卒全治法を敎へ下され。(紀伊山奥心配女)

答 全治法の無いものである、けれどもこれが爲に死ぬことは殆んど無い、本病者で今現に九十一歳の人もある、姑息療法としては日本酒を二三勺頓服すれば仲々功あるものなること、余は屢々試いたのである。

問 私はまるで男の樣に、肌の質があらくて、甚だ困ります、宜き療法を敎へ給はりたし。(みにくき女)

答 脂肪に富める食物を取り、能く運動して毎日米の磨汁を沸し、それにて入浴することを續けて御覧なさい。

問 長女五歳は腹部の中央に髪毛の如くに毛生じ、小兒ながらも人目を耻ぢます、之を拔く法を敎へ給はりたし。(豐後の母親女)

答 硫化加爾叟謨といふ藥を塗ると除けるが、これは惡臭を放つのみならず、塗けたる後色々と面倒なことがあるから、それよりも

硫黄一匁　石灰七匁　澱粉三匁

を能く混ぜて、これに適宜の水を加へ、グタ／＼煮て、それを布片に厚く塗け、其の部に大凡一時間程貼つておくと、奇麗に拔けるものであるが、手際が惡いと、甚だ害あるから、醫師に賴むに如かずである。

小生儀都合により、從來の宅の眞向の家、即ち本郷區一番地眞●●●●北高七十八號に移轉致候、日曜日に限り、診察及び衛生顧問の御依賴に應じても宜敷候。

小生の姓名を「いとさ、ちかし」或は「しさ、ちかし」「し、さこん」など色々な讀方をなさるゝ方がありますれど、「糸」は姓で「左近」は名であります、御訪れ下さる方の爲に一言辯じておきます。

▲明治女學校の擴張

同校は明治十八年の創立にかゝり、府下に於ける女學校中最も古き歷史を有し、多數の良妻賢母を養成して、其の校名高かりしが時勢の進運と共に、今回更に規模を擴張し、組織を變更し、校長には吳久美子氏、學監には服迫龜太郎氏其他に山木、湯谷氏等を當事者として、今後敎育の方針及學校の經營に任じ、學理に流れず技藝に偏せず新學科を加へて、專ら實地的女子高等敎育を授くるを目的とし、益々其の實績を擧げんとし、本年四月の新學期と共に之を施行し、更に來る九月第二學期開始に際し、一般志望者の爲めに、普通部、實習部の各初學科に入學を許可すと云ふ、入學志望者は九月十日迄に手續をなすべしとなり、詳細は同校に照會すべし。(所在地東京巣鴨庚申塚明治女學校)

小宇宙

飛燕

▲盆栽と女子教育▼

盆栽の趣味は自然に發育すべき草木を枉げて不具とし仕立つるにあり、女性を强ひて男性に近からしめんとする教育家は大に盆栽の趣味を解する人なり。

▲不自然なる冒險心▼

非凡、天才、神童等の讃辭は其實賢人をして愚者たらしむるにあり、近者年僅に九才の少女にして單身富士登山を企てたりと云ふを、天下の新聞紙は筆を揃へて之を賞賛し、其父兄亦た我子の勇敢なるを誇として盛に冒險心を獎勵せりとぞ聞く、借問す、これ見世物興行に我子を賣つて其演藝を喝采するの殘酷と孰れぞや。

▲落魄と自省心▼

小野の小町は其晩年に於て初めて我才貌の身を殺す刃たりしを自覺せり。

▲女性の男化▼

片假名は男性なり、平假名は女性也、然るに近時の女性は競ふて片假名を學びつゝあり。

▲賣品と非賣品▼

廂髪は賣品なり、丸髷は非賣品なり。

▲理想の面影▼

未婚婦人の理想なるものを繪に描いて說明すれば、樹上の猿猴手を伸べて溪間の月を捉らんとするが如し

▲何等の無風流ぞ▼

山あり河あつて天地の美は保たれ、强者あり弱者あり善人あり惡人あつて人類の歴史は飾られたり、婦人をして悉く男子と平等たらしめんとするは、富士山を崩して琵琶湖を埋めんとする沒風流にも如かざる也。

▲佛家の粹語▼

「不斷煩惱得涅槃」とは人間の半面が永遠に獸性を脫し能はざるを、それとなく諷刺したる粹の粹なる惡洒落なり。

▲人は神と獸類の化合物▼

動物進化説可なり、神人合一説亦不可なし。神と獸類と永遠に調和し能はざる其二端を捉へて調和の運を試みんとする中性のものこそ即ち人間の宿命なれば、之を善なり惡なりと差別するが如きは無造作なる見解たるを免かれず。

▲人間の分解▼

水は其作用單一にして恰も一なるものゝ如けれど、若し之に電氣作用を施せば水は忽ち分解して、酸、水の二元素となるなり、「人間」なるものは平靜の狀態にありては全く一の如くなれども、素これ「肉」と「靈」との調和物體なれば、一度非常の波瀾、若くは覺醒の機に觸るゝとあるや即ち一個の『人間』は二つに分解して肉か靈かの其一は空間に遊離し了る也。

▲自ら減殺する而已▼

三角形の中に圓形を描き得べし、圓形の中に三角形を描き得べし、斯くすると幾回、相摩し相對し、遂には圓角共に縮少して零となるを見ん。世上徒に相對し相爭ふて耻とせざるの輩、少しく幾何學をまなびては奈何。

▲人生は爭闘の場に非ず▼

『日は暮れよ夜はあけよと鳴く蛙』唯生くれば可なり時間を追ふて唯だ生くれば可なり。徨々として奔り汲々として爭ふ、何等の陋態ぞ、人は自ら心に針を植えて自ら傷くを社會的勇士と稱す、我等は之を憫むとは云はず、寧ろ心池の餘裕なきを惜む也。

▲人を愛せよ▼

戰闘とは何ぞや、人を殺す道なり、少くも人の心を殺す道なり、人を殺さゝれば我立つ能はざるか「適者生存」の理法は遂に人をして好闘的動物たらしめたり飢えたる人には肉を與へよ、爭ふ人には愛を與へよ、愛は萬能の力なり。

▲精力主義とは何ぞ▼

精力とは、這は主義にあらず、醫學上の術語なり、攝生の度合也、精神よりも肉體の問題なり、人は不可思議に進歩してこれにも主義を冠らせたり、奇なる哉。

▲寧ろ盲人に如かず▼

右眼を閉ぢて一劃の線を見よ、其線右方に移るべし左眼を閉ぢて一劃の線を見よ、其線左方に移るべし、滔々たる世人は自己の不具なる雙眼を顧はずして徒に他の一切を主觀せんとす。寧ろ盲人黑暗々なるに如かざるなり。

漫言

結婚難

鑑涯

古昔の人が「人には添ふて見よ、馬には乗て見よ」と云ふたが。之は未婚者には何の感じも有るまいが。既婚者は成程と合點する所があるに相違無い。如何にも添ふて見よだナアと思ふであらう。

西洋の夫婦の成立ちと云ふ者は。皆様一昨日御承知の通り。小學校や日曜學校の道連れから始まつて。音樂會や茶話會の同席は二言三言の談話が縁となつて自然と懇意になり。互に時々逢ひ度なり逢へば互に親切も言ふ。此時は一生懸命何れも賢く交際するが故に。失策も無からう。缺點も見えまい。其所で兩人の胸中末頼母敷い人だ。斯んなお方と添たなら嘸や樂しい生涯が送れるだらうと。情火烟々一時に燃上つて。夫婦の契約が成立ち全心を献げる樣になり、各々其順序手續きを踏んで遂に準備に取掛ることになる」。

サア斯う成つたら。お互に大事件です。日本の樣に人力車一丁や天秤一本で活計が立つと云ふ暢氣ナ世界でない。五六百萬から漸と金持の仲間入り。一億萬以上でなければ長者の部類に入れぬと云ふ恐ろしき社會。並大抵なことでは兎ても世帶は持ち切れぬ。だから若い男女が新家庭を作る前には。互に一心不亂貨殖の事に汲々として——之ならば人並の生活が出來るといふまでは。三年も五年も氣長に待つて居る其間相方手紙の往復をして少しも怠らない。そうして互に直接に間接に。其の品行其の思想。其の働きの如何を吟味して居る。之が即ち試驗の時期であつて。其時互の間に何か突留めた非行があれば破談、言分がなければ結婚。と斯う云ふことになつて居る。此位丁寧にしたならば。其こそ生涯夫婦相唱和して琴瑟啻ならざる次第であるかといへば。其でも不愉快もある。衝突も起る。喧嘩もする。其結果離婚沙汰も少く無いといふことである。其だもの我邦では媒介口を散々敲かれ。其上一寸見合をして宜しいと極めるのであるから。其

人物も能くは分らず。我が生涯の半身とする價値があるや否も知れず。珍馬を博勞から賣附けられた痴漢の如く。結婚してから段々出で來る嫁殿の地金に驚き。嫁入してから次第に募る夫君の無法に膽を潰す者も澤山とある。既婚者の三分の一が離婚となるも當然の事である。何と添うて見よに違ひ無いでは無いか。

新様に我邦の夫婦の成立は抑々から間違つて居るからどうも家庭が面白く無い。かたりともみしりともいわぬ家庭は本に少い。其源溯りて末の清かるべき筈は無く。家内揉のするは理の當然。即ち必然の結果である。故に夫婦揃ふた「チーアフル」を。鴛鴦の番ひの樂みを得て居る者は如何にも少い。關々と雌雄相應じて樂む鳥は寧ろ羨むべきではあるまいか。例へば亭主能く稼げば女房内で引摺り。妻眞面目に内を守れば。夫外で道樂をする。主人殊の外氣前善ければ。内君存外に吝嗇れ。妻君頗る如才なく立廻れば。旦那公不思議に變屈者で分らず。必ずどつちにか優劣がある。佳人才子と連添ふと云ふは。どんなに難しいことであらうか。其とも之が天の配剤とでも云ふのであらうか。

其と云ふも畢竟我邦の舊慣で。男女の交際が自由にならず。自由結婚を許さないから起るものであるが。去りとて自由にすれば四方八方から紛々たる批難は矢の如く身に集る。だから餘程蛻けた「ハイカラ」先生で無ければ。西洋式の自由結婚は出來ない。左顧右顧の臆病者には兎ても出來る藝當で無い。儘ならぬは浮世の習ひ。東西風を異にすれば。亦是非も無きことぞかし。兎に角一旦夫婦と成つた上からは。たとへ面白からずとも。意外の癖が見えても。如何様の事があつても。之は仕方が無い。體に合せて造つた洋服でも着にくいこともあるものなれば合はぬとてどうならう。モー是迄の運命と諦め前世の約束と觀念し六十年の不作と悟り。出るの引くのとみつとも無いことを言ひ出さずに。我慢往生するが上の上分別なるべし。萬一離縁となると。夫も得で無く。妻は勿論損である。若し夫れ。其間に子供でもあつた日には。其こそ大變眼も當てられぬ有様である。疊と女房とは新きを良とすとは大白痴の放言取るにも足らぬが。廣い世界には之を實行して。私は今まで女房を幾人貰ひましたと平氣で言ふ厄介者もある何と驚き入らざるを得んでは無いか。

所が一寸見ては何でも無くて。思の外能く揃ふた夫婦のあるのは。中以下の職人や鳶の者の夫婦である。是等の手合は亭主甚だ威張らず女房無闇に恐入らず艱難を倶にし安樂を同ふし。夫とても褞袍を脱げば妻も亦袢纏を脱ぐ。乃ち同權同等と云ふを得ざるも。確かに權力の不

平均が少ないと思はれる。其の裏腹で。何處から見ても如何にも立派。如何にも結構な御夫婦。外からは最と美しう最と奥ゆかしう見えても。且那様以上、殿様、御前様の家庭には。恐く深き美しき温き愛と眞の行はるゝは蓋し少なからん。要するに前者は寧ろ形式に近く。人物の鑑識を誤ること少なく。初より地金を出して居れば。結婚後に馬脚を現す憂も無し。後者に至つては。第一は早婚なれば人品も定らず。且つ爵と爵、財産と財産、土藏と土藏、株券と株券といふ配合なれば。固より人物の眞否が分らぬも道理。お屋形騒動の起るも不思議は無い。

私竊かに惟みるに。夫婦互に愛の紐にて結び着たならば。浮氣沙汰も無く。不身持もあるまい。物言い、衝突、破裂なぞはあるべき答が無い。然るに社會の大頭から中頭。皆な身持放埒なるは。爲す者の罪は無論大なり恕すべからずだが。細君に之を止めさする丈けの覺力の無いにも困るでは無いか。實は我邦の婦人は餘り趣味が無さ過ぎる何にせよ一家の内に深き愛の空氣が無ければ。夫婦の樂は無い。夫婦の樂みは錢多きにあらす。位貴きにあらす。大厦高樓に住むにもあらす。金銀珠玉を纏ふにもあらず。たとへ野の末、山の奥。賤が伏屋の侘住ひでも。夫婦互に信じ互に愛すれば。言ふに言はれぬ樂の其中に在るもの。人生の幸福は此の佳境にても受けらるゝものである。

去れば若き男女が。ドーセ一度は婚禮を爲にやなるまいが。若し此人はと一種異様な感に打たれた時は。努めて己が頭を氷囊で冷し冷眼を以て仔細に鑑察すべし。店頭で反物を見てさへ多少氣迷ひのするもの。況してや我が夫となると云ふ紳士の前。まさか平氣でも居られまいが。言はゞ一生の大事の場所。神佛に誓つても膽を据て掛られねばならぬ。風采爽かにして下らぬ男あり。傾國の姿を備へて分らぬ女あり。容色を愛る時は動もすれば人物を視損ふことあり。一時の失策は百年の悔を遺す者ぞ。人物の鑑察は直覺力にても略分る者なれども。其言行と。世間の風評と。其育つた家庭と。其教育と。其朋友とに由て知るを得べく。其より以上は直接交りて知るの外なし。呉々もホツトヘツドは往々判斷を誤ることあり。夫婦の選定は鄭重にせよ。努め疎かにする勿れ。

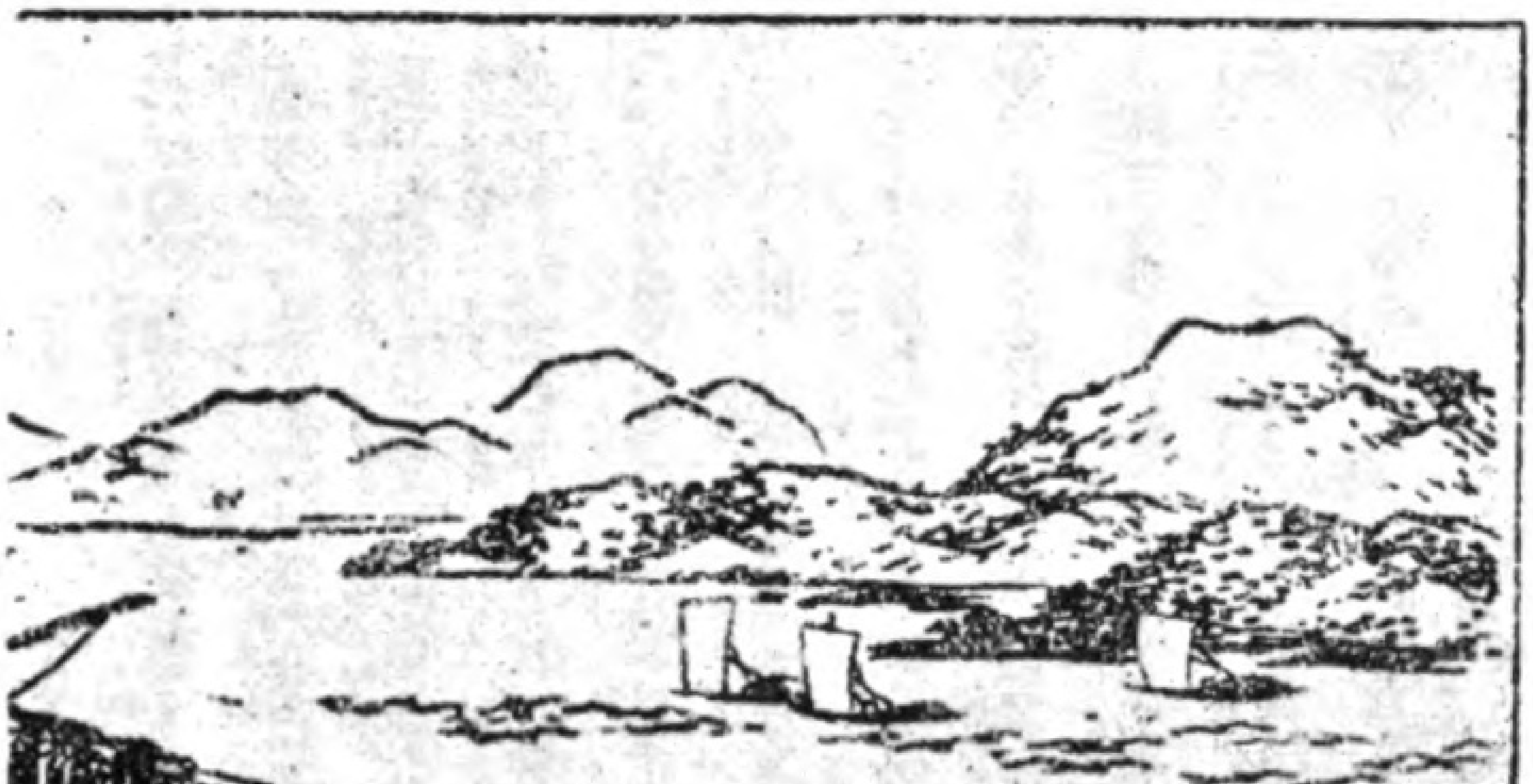


堅魚釣の話

山海生

朝な〳〵の味噌汁を始めとして凡そ汁といふ汁の煮出となるもの數多あれど鰹節ほどに滋養の効能ありて廣く需用さるるものはあらじ、抑

山海名産圖繪所載



も此鰹節は、日本水產中屈指の優品にして久しきに耐へ、貯藏に便にして、勝手元の重寶たると今更めていふほどの事もなし、この物上古以來製造の法ありて既に延喜式和名抄等に堅魚の字義あるをもて知るべし、産地古へより

土佐を第一とし、薩摩、伊豫、阿波、紀州、伊豆、相模、駿河、安房、上總、陸奥等其外諸國にて採收さる、此魚初夏四五月(陰暦)の頃は陽に向ひて東南の海に群集して浮游する故に相模、土佐、紀伊に採るもの多し、就中土佐、薩摩を名産とす、味ひ濃厚にして肉肥へたり故に多く此地方にては乾魚として生食せず之に反して、駿河、伊豆、相模の産は味ひ淺く肉脆きを以て專ら生食とし乾魚となすには味薄し、安房、上總、仙臺以北の産を劣等とす。

△鰹魚釣の光景

鰹釣の光景(其一)



鰹魚を採るには網を以てするは稀にして釣多く、尤も其時節は春夏秋を撰ばざれども陰暦三月の始より中旬までを初かつをとして專ら生食しそれより五月までを春節として上品の乾魚とす、八月までを秋節といふ釣に用ふる餌は專ら鰯の生餌を用ふる故まづ鰯の網を曳く事も常なり、圖に示すごとく鰯を二坪ばかりの餌籠に入れて汐潮水に浸し是を三石許の桶に潮水を湛へて移し入れ、十四五石ばかりの釣舟に乗せて一人長柄の杓を以て其潮を汲出せば一人は傍より又汐を汲み入れて入れ替へく

して魚の生を保たしむ釣人は一艘に十二人釣棹長さ一間半糸の長さ一間許りともに常の物よりは太し、鈎の尖にかへりなし、其船には竹簀、筵等の波除あり、さて釣を始むるにまづ生たる鰯を多く水上に放てば鰹これに附て踊り集まるその中へ鈎に鰯を尾より刺し、群集の中へ投げ入るれば乍ち喰ひ附て暫くも猶豫の間なく曳きあげ〳〵一顧に數千尾を獲ると恰も三十三間堂に數矢を放つがごとしと。

　又一法には水淺き處に自然魚の集るを見れば鯨の牙或は牝牛の角の空の中へ鈎を通し餌なくしても釣るなり、これをかけるといふ、牛の角を用ふれば水中に入れて光ありて鰯の群集せると擬ふが故なりと。

　又魚を集めんと欲する時は同じく牛角に鷄の羽を加へ水上に振り動かせば光耀尚鰯の大群に似たり、此外天秤釣などの法あり、又釣に乗ずる時若し遠く餌を逐ふて鰹の群れ來る時にあへば自から船中に飛び入つて其勢ひなか〳〵人力の防ぐところにあらず、其甚だしき時に及へば殆んど舟を沈没せしめんほどの有樣なり、されば熟練せる船手も遠くこれを望みて若し殆ふしと見れば急ぎ船

濱にて鰹釣



を漕ぎ退けて其の群の過ぐるを待つなりと。

△蒸乾製法

さて沖にて満載したる鰹は船ごと磯に漕ぎ寄せて魚を砂上に投げ上ぐ、此の時漁場の老幼男女多く集りて手に〳〵桶又は板一枚庖丁を持ちて船に漕ぎ寄るを今や遅しと待ち居るなり鰹の沙上に投げらるゝや、いづれも桶の上に板を渡して俎となしまづ魚の頭を切り、腹を抜き骨を除き、二枚に卸したるを又二つに切りて　尾を四片となし、骨と腸とは桶の中へ落し入る、これを自分の所得となし鹽につけ、鹽辛として售り別に賃錢を受けざるなり

の光景（其二）



又所によりては料理場を一里許り他所に構へ大俎板を置きて兩人向ひ合ひ、頭を切り尾を携へて下げ切とす其手練甚だ早く熊野邊にて製するもの皆是れなり。

斯くて形をよきほどに作り籠にならべ幾重にも重ねて湯の沸騰せる大釜の上にのせ蒸して下の籠より次第に取出し、水に冷し又小骨を去りよく洗ひ又長さ五尺ばかりの底は竹簀の蒸籠にならべ大抵三十日許り乾し曝し、鮫皮にて肌を削り更に繩にて磨きて仕上るなり、鰹節は背節を上とし腹節を次とす脊は上へ反り腹は直なり、贋物は鮪

を用ふることあり甚だ腥し、若乾燥の時雨降にあへば藁火を焚きて籠の下より濕氣を去るなり冷すに水を撰む。故に土佐には清水といふ處の浄水を用ふるとなり。

△鰹節に關する古説

カツホの字義は乾魚、或は堅魚といふ字音の轉化したるものとの説あり、又松魚と書くは謬りなり松魚は鮭の蘇制にして肉赤く松の節の如しとの説あり、兎もあれ乾魚は本邦日用の重寶にして既に萬葉集にも水の江の浦島の子が堅魚つり云々とあり、又延喜式に堅魚煎汁を貢すること見えたり、イカリは今ニトリ即ち鰹魚蒸製の際に滴たりたる濃液なるべしと又兼好法師の徒然艸に。

鎌倉の年寄の申傳へしは此魚己れ等が若かりし世まではは かゞ〜しく人の前に出すこと侍らざりき頭は下部も食はず、きりて捨侍りし物なりと申きが、かやうの物も世の末になれば上さままでも用立わざにこそ云々とあり是は室町將軍時代に貴人などの生にて喰ひし事をあやしみいふこゝろと見えたり云々山海名產圖繪に見えたり。

濱にて鰹製



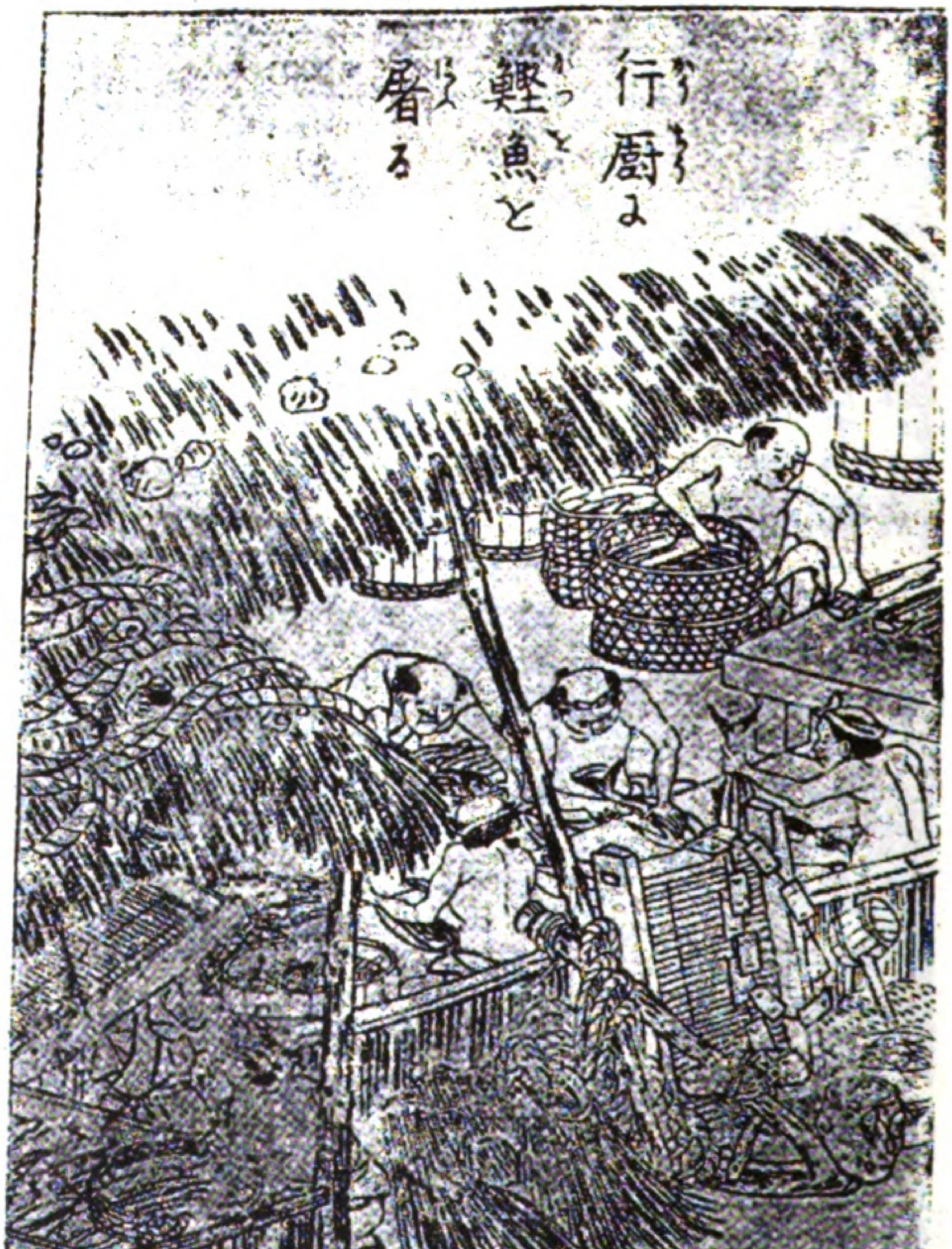
後車の戒

ツイ此頃の事なりき、ある生命保險會社の重役がその息子（三十）の爲に適當なる嫁もあらばと搜し居る中、知人より相應の婦人（廿四）ありとの報知あり、よく身元など質し見たるが別に不都合の處もなく、殊に其婦人は官立の某專門學校を卒業し居る由なれば、別に不足はなきものとして結納も取交し、愈々吉日を選んで結婚式を擧ぐる事となり途其の二三日前とかに、花嫁なる方より妾の理想の一端なりとて申越せるは、「結婚の上は新婚旅行の事、必ず現職を引續け居るべき事、結婚後兩親と別居すべき事、女中二名を置くべき事等」以下十七箇條を履行せられたしと、手紙にて男の方へ申込みたるより、これを見たる父子は驚と怒り生意氣千萬なりとて、早速媒約人を介して破談を申込みたるにぞ、流石の當人も大に困却し、覆水盆に還らずば投身して兩人に怨みを酬ゆべしと、長々しき手紙を寄せたりと云ふ。

今日のハイカラ女子が良人と同等の地位を占めんとするを見て、或人が古來日本女性の占め來れる牢固なる地位をば、自ら求めて失墜するものにして、現代の一大困事に屬すと云ひしも實に理なり、故に女性のハイカラなるものと結婚せんとするや、大抵は彼に讓歩し、その主張を容るゝが如く見せかけ、彼をして所謂理想の良人を得たりと思はしめ、所謂理想の家庭を組織し得べしと信ぜしめ、斯くて兎も角も一旦夫となり妻と呼ぶの曉に於て、漸次日本古來の惡風を發揮して壓力を彼れに加へ、遂には寸毫も假借する所なくその服從を强ふるなり、此に至つて約束を振舞しても追つ付かず、彼の所謂理想は總ち泥土の如く蹂躙せられ終るを常とす、此期に及んでお轉婆女流は、夫婦喧嘩を起して離婚沙汰となるも、その多數は最初こそ彼れ是れと不平をも並べ愚痴をもこぼしつゝあるも泣寢入となりて、ズル／＼ベッタリに子を生みて終に離れ難くなり、斯くて萬口等しく、女學生時代の美しき空想は南柯の一夢なりしと。

顧ふに前の婦人の結婚談の如きは薄志なる現代のハイカラ式女流の好標本たり。

の光景（其三）



科學

家屋と室內裝飾

某建築家談
濤涯筆記

家屋建築のことは一種の專門學に屬して、玆に詳說したところで到底普通の方にはお解りになるまいと思はれるから、管々しいことは省き、唯だ簡單に家屋建築上の心得及び室內裝飾等のことを說明致します。先づ其順序から申せば。

△土地の選擇
△家屋建築に就いての心得
△家屋と衞生の關係
△室內裝飾

等です。尤も家屋の選擇は日常の衣食と同じく、實益と趣味と衞生とが伴はねばならぬことは勿論として、就中衞生のことに重きをおくのが、文明式の建築法かと思ふ。そこで第一に注意すべきは土地の選擇です。

▲土地の撰び方

古來我邦の習慣として兎角方位とか方角とかに因つて住居をトし、少しも衞生其他の事に注意をせなかつた樣であるが、恁那迷信は速に排斥したいと思ひます。そこで建築上ドンな土地が一番適するかと云ふに、地層に岩石砂石を交へた高臺が最も宜しく、次は粘土質の地殼に礫利の衣をしたのが地盤として健全です。日本で最も地質の健牢なる處は兵庫縣の神戸附近と會津の郡山地方ださうで、此處は地壁が一面の岩石層だから地震其他の際には比較的安全であります。東京でも麻布赤坂麴町邊の高臺なら幾分宜しいが、下町邊の殊に新開地と云つたら、雨が降れば泥の海、風が吹けば塵埃で目口も明かぬといふ、イヤどうも困つた土地です、之は元來が灰砂質の土地だらか根本的に改造する譯にはゆかぬが、責めて將來はセメント位で何とかしなければなるまいと思ふ。土質の軟硬は單に地震の時

の關係ばかりでなく、衛生上から云つても、毎に塵埃を浴び易く、濕氣をうけ易く、萬事に非衛生であるから、建築は勿論、移轉するにしても土地の軟硬は大に注意すべきことで、之を知るには種々の方法もあるけれど、附近の井戸掘に就いて聞くのが最も簡便であらうと存じます。又次に選擇せねばならぬことは。

(一)空氣の乾燥せるところ、
(二)植物の少しく茂りたる處
(三)井水の良好なる處(四)全坪數の三分の一を空地として庭となしたる處、等で又避けねばならぬ個所は。

(一)土地低くして濕氣なる處



(二)溷濁したる泥溝の附近
(三)飲料水の粗惡なる處、
(四)附近に工場ありて煤烟のかゝる所、(五)周圍に高堤又は高塀などありて光線を遮る處、
等は宜しくない方です。

▲衛生に適する家屋

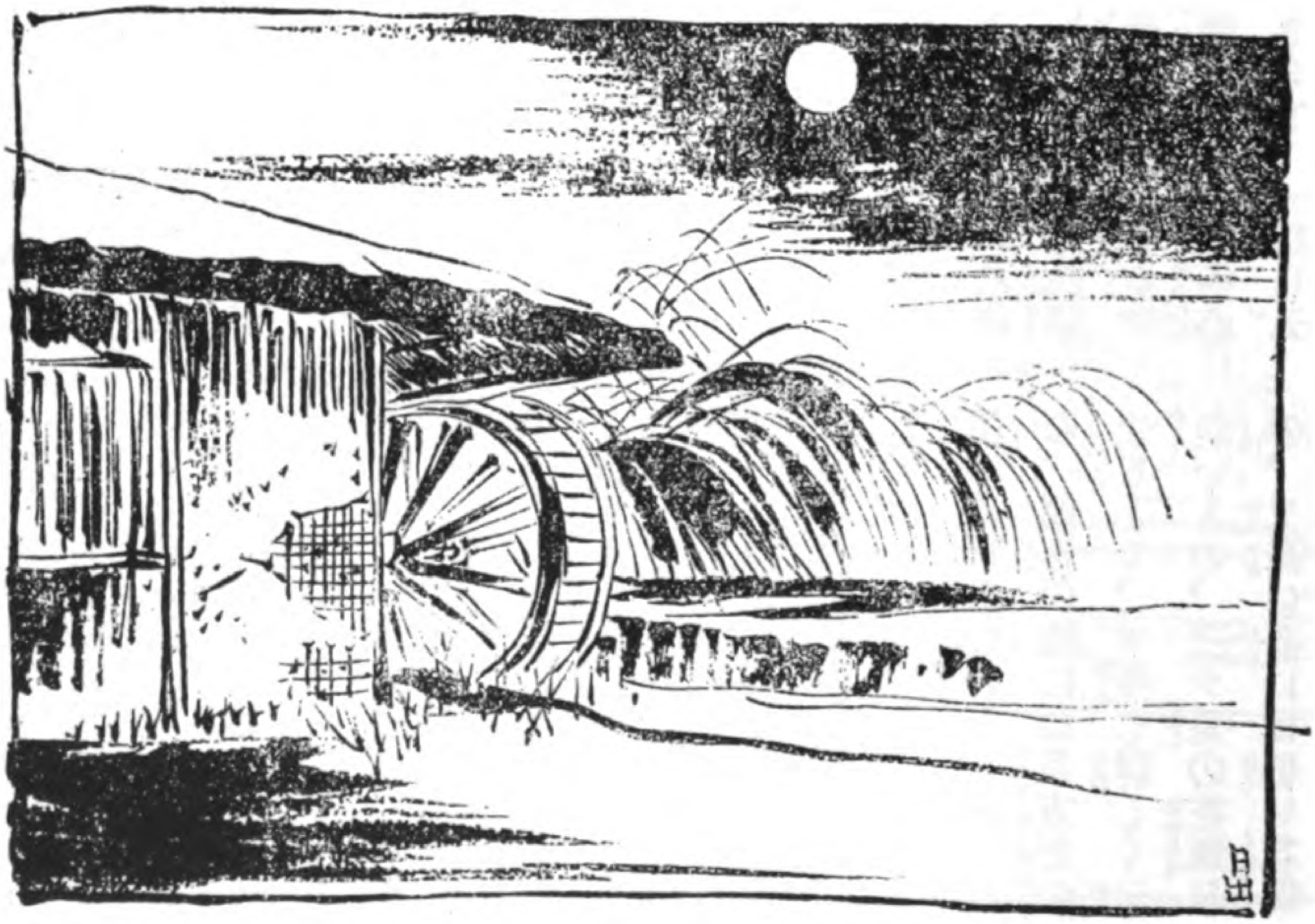
同じ家屋と云つても九尺二間の裏長屋も家屋なれば五層六層の大厦高樓も家屋である。之は各々身分職業等によつて差別があるのだから止むを得ぬとして、先づ日本で中流以上に於ける家屋の構造を區別すれば、

玄關、應接室、書齋、座敷、茶室、部屋、納戸、茶の間、寢室、化粧部屋、臺所、湯殿、土藏、物置、便所等であつて、これにも西洋構造もあれば日本家屋もあり亦和洋折衷などもあつて隨つて其材料も同一でありません、西洋館ならば石材、鐵材、煉瓦、陶器等で專ら堅牢と體裁とを主として居るが在來の日本家屋は木材、竹材、粘土等を用ゐて居る、便利といふとから云つたら何れが良いかは問題であるが、衛生上から云へば日本の方が天然の換氣法に叶つて居つて宜しいのみならず、日本の如き地震系の土地では三層四層の西洋館よりも矢張り今日の如き二階作りの家屋が安全だらうと信じます。何故西洋の家屋よりも日本の家屋が衛生上宜しいかと云ふに、日本の方は天然換氣法に叶つて居るけれど西洋室は人工換氣法をとらねばならぬからである。換氣法とは室内の空氣を新陳代謝せしむる法で、日本の家屋は木材や、竹材や、壁や、襖のやうな、極めて氣孔の粗い材料を以て建築されてあるから、毎に空氣の通りが可い、之に反して西洋のは石材や煉瓦や硝子や陶器の如き氣孔の緻密な物で出來て居るから空氣の流通が自在でない、そこで窓や空氣拔を明けて人工的換氣法をとるけれど、何方かと云へば日本の方が自然的衛生志想に叶つて居るのであります。

▲家屋の新築と間取の工風

家屋の新築に際して最も必要なる二三の注意を申せば、第一は床上の地盤を固めることである。之はコンクリートかセメントで叩き上げれば申分ないのであるが、爾もゆかぬ場合には固く地均をした上へ厚く石灰を撒布して地面の濕氣を取去ること。床上は一尺以上一尺五寸位に高くして空氣の流通を自在にし毎に乾燥ならしむること。家屋の方向は南向きを以て最も可とし、東と西とはこれに次ぎ、北向は光線が屆かぬから宜しくない。屋根は衛生上茅葺が最も良いのであるけれど火災の時の虞れがあるから瓦が適當である、鐵葉屋根は夏暑く冬寒いから之は用ゐぬが宜しい。壁は煉瓦陶器よりも普通の土塗の方が衛生的である。又壁の色は

白や黑よりは光線及び視覺上靑色か黃色が最も適して居る。窓の大きさは室の十二分の一を以て正式とします。又空氣の流通、光線の工合の惡き室には屋上に窓をあけ更に小屋根を設けて換氣法をとるが宜しい。天井は可成高くした方が衞生的である。床の間は通例二間より一間半乃至一間等で床脇に棚あるを以て正式とします。臺所口は可成西南に向つた方が萬事に好都合である。厠には衞生上上下二個の窓を明けた方が宜しい。家屋建築の時期は春夏秋冬何れでも大差はないが冬季は壁に龜裂を生じ、又は乾かぬから宜しくない。新築の家屋は凡て濕氣が



あるから充分に暖氣を入れて之を乾かした後住居する等のことが大體の注意であります。それから間取の丁合は生計と職業向等によつて相違はあるが普通は玄關、其次が應接室、茶の間座敷書齋納戸等の順序であつて之は各自分に應じて工風を要するので、先づ大體に就いて云へば、

△**茶の間**　は主婦の居る所だから家の中央にあつて四方を見通し乍ら世話の出來る位置にあつた方が宜しい。

△**座敷**　は客間であるか

ら庭園に面して玄關から廊下傳へに行かれる様にすること。

△寝室及び納戸　は箪笥類をおく處だから奥まつた處でも宜しいが最も空氣の流通よきところを擇ばねばならぬ。

△書齋　は二階若くは離室がよし。

△化粧部屋　は納戸及び湯殿に接近したるところ。

△湯殿　は臺所と井戸に近き處。

△厠　は臺所及び井戸と距離れたる處を擇ばねばならぬ。

▲室内装飾の秘訣

近來室内装飾法と云つて、室内の装飾を茶の湯や活花のやうに一定の法式或は規則でもあるかの様に心得て居る人もあるが之は大なる考違ひで、元來室内装飾なるものは美術繪畫若くは衣服の模樣を見立てるのと少しも異つたことはなく、装飾の巧拙は其人の美術心或は趣味の程度によつて違ふのであります。一口に云へば一身の化粧をすると同じく、如何にすれば似合よかといふ工合に配合を主とするので、決して斯うせねばならぬと云ふ定まつた法式はありません。だから徒に高價の物を室内に陳列した處が凡ての物と調和せなければ決して美といふことは出來ぬ。粗末な物でも調和と配合さへ宜ければ一種の美術になる。凡て装飾の神髓は色の配合と物の調和とに外ならぬのです。

第一は色の配合です。之は繪畫の如きもので、濃い色と濃い色、淡色と淡色とを配合した處で繪にはなりません、假令ば緑と青、樺と黄と云ふ様な似た色を接合するのは最も拙なる手段で、濃淡、黒白を旨く配合した處に自然の妙味があり、繪畫の生命が籠るのであります。

第二は形の配合で、例へば三角形のものには四角なもの、圓形の物には長方形の物等を取合せて旨く調和させることで、モ少し詳しく云へば花瓶が圓ければ花臺は角いもの、三ツ足の花瓶ならば花臺は角のない低いもの、又高い臺には低い花器を用ゐ、挿花が紫色ならば

白い花器を配合するといふ様に凡て同色同形は避けねばなりませぬ。

▲装飾の要は配合と調和

室内装飾は一種の美術であるから之を人に問ふよりも自ら工風すべきものである。日本室には日本室に相當した清くして淡泊なる飾物を要するし、西洋室には西洋室らしい華美なる額や器物を排置するといふ如く萬事手加減でやらねばならぬ、必ずしも古風の器物や飾物を用ゐねばならぬといふ法はないのだから機に臨み變に應じて色の配合と物



の調和とを考へて自ら實地研究をして見るが徑捷ですそれから言ふまでもないことだが室内を清潔に掃除することが室内装飾の一要義たることを忘れてはなりませぬ。以上は唯だ家政學の一班として參考までに述べたのです。

夏のくさむら

倭　翁

三伏の夏の夜、身はさながら蒸汽罐の中にあるが如き苦熱の中に一味の冷氣を送り來るものは、蟲の鳴音である、喞々又喞々の音は吾人をして土用中ばに秋風のそゞろに訪ひ來る思あらしめて爽然たらしむるものである、いでやこの蟲の性態を少しく調べて見やう、

◎鉦敲

雄蟲はその體軀長楕圓且つ平扁で長さ二分八厘許りある、頭部と前胸部とは茶褐色を帶び腹部は灰黄白色である、その觸鬚は細くして非常に長く殆んど體軀の二倍以上に達す、その翅は短くて稍々長方形を爲して居る、又雌蟲は體軀少しく大にして、約三分許りあり、色は雄蟲と異はないが全く翅を有たず雄蟲に比べて太く且つ短い、この蟲は八、九、十の三ケ月に多く現はれ、通常灌木の枯葉とか枯枝などの間に潜伏して鳴くのであるが、常に枝より枝へと疾く遁移つて鳴くから其發聲の場所が一定せず此處で鳴くかと思ふと忽ち彼處で聞える、故に多くは一匹の蟲の鳴く音を數匹と思ひ誤るのであります、此蟲の特性は疾行する時は決して發音するとはない、停止すると必ず翅を立てゝ鳴き出し、スエン、スエン、スエレン、スエリレン、スエン〳〵と永く續けるのである、

◎邯鄲

その體軀は細長き圓筒形をなして居る、雌蟲は長さ五分、色は淡黄綠で、身長に倍せる長き觸鬚を有して居る、雄蟲はその體軀雌蟲に比べて一層長いが觸鬚は大差なし、色は淡鮮綠である、此蟲は重に七、八、九の三ケ月に現はれ、レリ〳〵〳〵と續づけさまに鳴くのである。

◎鈴蟲

その體軀は雌雄ともに黑色を帶び、雌蟲は長さ七分、頭部小にして腹部肥大し翅は腹部の中を蔽ふに過ぎない、又雄蟲は長さ五分五六厘で雌蟲に比せば體軀短く、翅は背面上で互に重なり平扁面をなして體の全部を蔽ふて居る、重に七、八、九の三ケ月、草中に生息して黄昏から夜にかけて、リン〳〵〳〵と續けて鳴くのである。

◎松蟲

その體軀は赤褐色を帶び、雌蟲は長さ七分四五厘、背面に一條の白色曲線を有して居る、觸鬚は雌蟲に比して長い、雄蟲は長さ七分、頭部やゝ小さく背面上の翅は鈴蟲と同じく平扁面をなして居る、七、八、九月の頃に現はれ、黄昏よりスエツスセツリ、スエツスセツリ、と

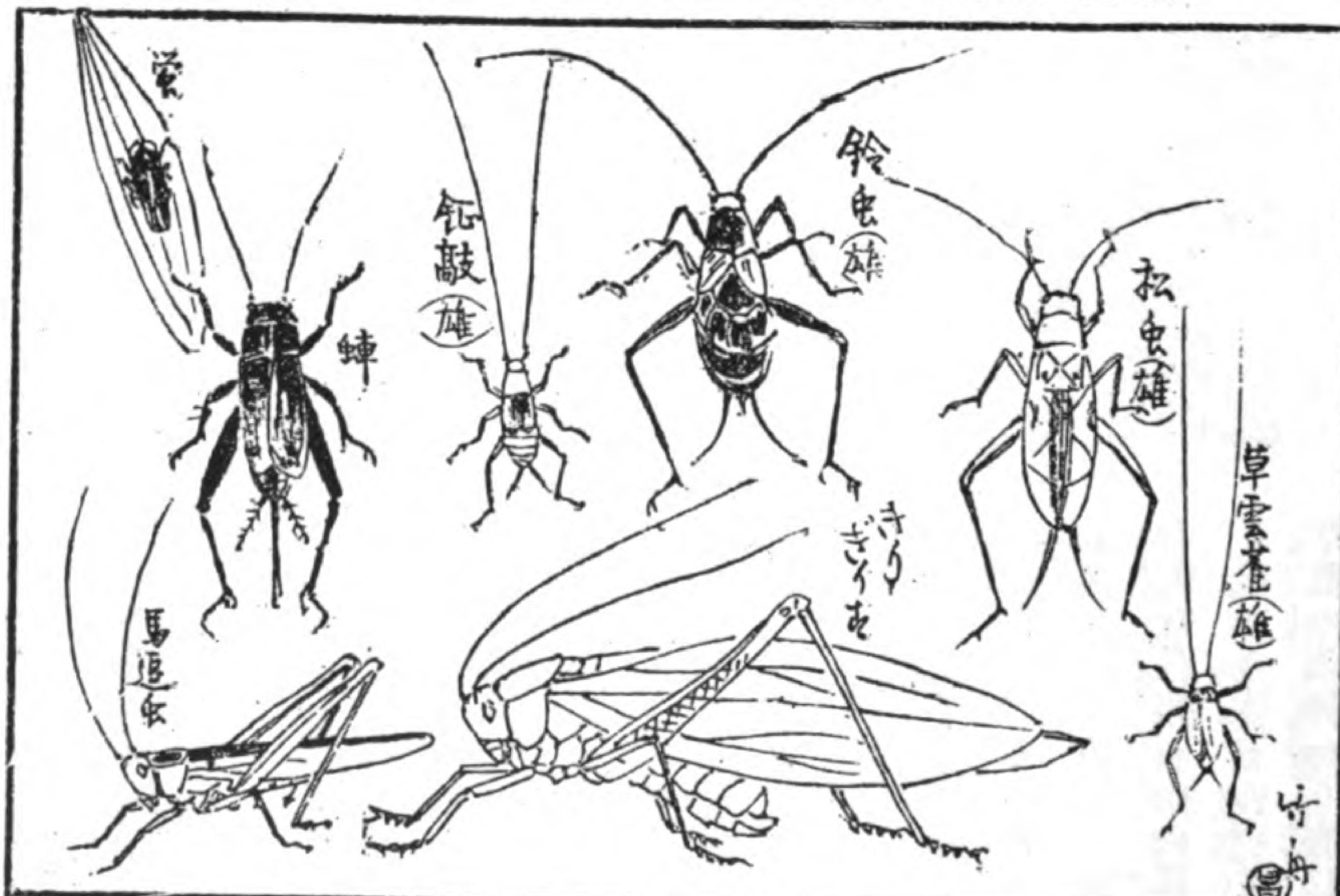
鳴く。

◎草雲雀

その體軀は圓筒形をなして淡灰黄色を呈せり、長さは雄蟲三分二三厘雌蟲三分弱にして、共に觸鬚極めて長く殆んど體長の三倍半あり、此蟲は八月下旬より十月の頃まで樹上に生息して決して地上に生息することはない、常に枯葉の間に潜伏して晝夜の別なくスヱリヒ、リヒ〳〵と數分間つゞけさまに鳴くのである、その頃黄昏より夜にかけて樹間に清朗なる蟲聲の連綿として聞ゆるは、皆なこの蟲の鳴くのである。

◎轡蟲

その體軀は雌雄共に肥大にして頭部に長き觸鬚を有しそれで食物などを探る用を便ずるのである、雌蟲は長さ一寸三二分で茶褐色なるが、下卵器と云つて長く尖ツた劍狀のものを尾端に有して居る、



又雄蟲は一寸一分位で綠色をなし、その發音せんとする時は左右の翅を斜に起して烈しく振動させ左翅の裏面を右翅の表面で摩擦すからその音がガチヤ〳〵と連續して起るのである、故に此蟲のとを俗に「がちや〳〵」とも呼ぶのである。

◎蟋蟀

その形狀その他一切轡蟲に似て、雌蟲は身長一寸四五分ありて濃綠色である、雄蟲は一寸二分餘りで茶褐色を帶びて居る、七、八、九月の頃出でゝギッチョン〳〵と鳴くのである。

◎馬追蟲

その體軀は雌雄共に大差なく七分餘りの大さで綠色を帶びて居る、形狀その他轡蟲及び蟋蟀に略同じく、八、九月の間に現はれシーッ、シーイッと鳴く蟲である。

◎蟀

その體軀は黒色に褐色を交へ、形狀は前の諸蟲と少しく異つて頭部が大い、雌蟲は長さ一寸內外、雄蟲は九分前後にして七月より十月までの間に現はれ晝夜の別なくコロコロチー〳〵と鳴く、故に又「ころ〳〵じいろ」と呼ぶのである、此蟲は他に比べて美聲でないのと、常に床下など濕氣多き所に棲息して誰れが耳にも入り易く爲に珍らしからざるとで蟲屋の手を經て人の愛玩を受けるには至らない。

◎りいりい蟀

その體軀は普通の蟀よりやゝ小さく雌雄共に長さ四分五厘許り、黒褐色で後頭部に灰黃色の斑紋がある、七月より十一月の間に出でて多くは叢中に棲息するも、又往々家屋の近傍なる石下、板壁の裏面その外朽ちた木竹などの中にも棲息して、晝夜の別なく鳴く蟲なるが、その聲晝間はスツトンリーリーリー又はリー〳〵と鳴き、夜間は重にリーリーとだけ鳴くのである。

◎えんま蟀

その體軀は形普通の蟀と大差なけれど雄蟲の頭部が著しく大にして閻魔大王の冠に似た所があるのでその名を取つたのである、その色は黒褐色の雌雄とも略同じく約七分計である、八月、九月、十月の頃出でゝ草野田圃の間に棲息し晝夜の別なくクチエ〳〵と續けさまに鳴くのである。

◎つゞりさせ蟀

その體軀は普通蟀の如く圓筒形で黒褐色である、身長五分餘にして雄蟲はやゝ大く七、八、九月の多く出でゝスセツ〳〵と續けて鳴くのである。

以上述べた幾種の蟲は直翅類に屬するもので、此直翅類と云ふは中々種類も澤山であるが、その美聲を發するものは此數種に過ぎないのである、大抵初夏五六月の頃から叢中或は土中に孵化棲息し、細蟲又は草木の嫩芽等を食つて生活し晩秋の頃になつて產卵の後に死滅するのである、人の普通鳴と云つて美聲を發するは、その實は口で鳴くにあらず兩翅を相摩擦する音である、而してその美聲を發するは雄蟲のみに限られて、その目的は全くそれで雌蟲を呼ぶ手段に外ならんのである。

◎螢

夜間多く水邊に光明を放つて飛ぶとは誰れも知る所なるが、この蟲は甲虫類に屬して其大小は產地に依て異ふのである、普通のものは僅に二三分しかないが有名な江州石山の產となると八分に餘るものも珍らしくはありません、その發生に關しては大抵初夏の頃、草叢中の卵から直に孵化して飛ぶものゝやうに思ふや

うなれど、實は否らずして前年の秋草の叢中に產付けられた卵が間もなく孵化して指頭大の紙のやうな扁平な小蟲となつて、蝸牛の類を捕へて食物とし枯葉などの下に潛伏して冬季を凌ぎ、翌年初夏の頃に至つて始めて螢と變化するのである、かの最も奇異なる夜間の光芒は未だ學者の間にも確證を得ることが出來ませんが、或一部の學者の說では、螢光は脂肪の酸化作用に依るので螢の尾端には厚き脂肪層を有し、呼吸の作用でその部分に空氣を吸收し、空氣中の酸素と右の脂肪とが酸化作用を起



して燐光を發するのであらふと云ふことである。

さて種々の蟲類の發生するは大抵此の夏季にある、晝夜我れ〳〵を交々襲擊する蚊、蚤、蠅等は云ふまでもなく其他一々數へ盡さるべきでない即ち前に話した種類は其中で我れ〳〵を喜ばせる部分に屬するのであるが、多くの內には我れ〳〵に惡感を起させるものも少くない、今その部類に屬する內より一つ捕へたるは蛇である。

◎蛇

此種類も澤山あるが我國に產するものは二十五六種

で、其中人を噛む毒蛇は先づ蝮と飯匙とであるが、就中飯匙は多く琉球に產し內地では九州の一部分である併し每年その爲めに生命を失ふものは少くないのである。

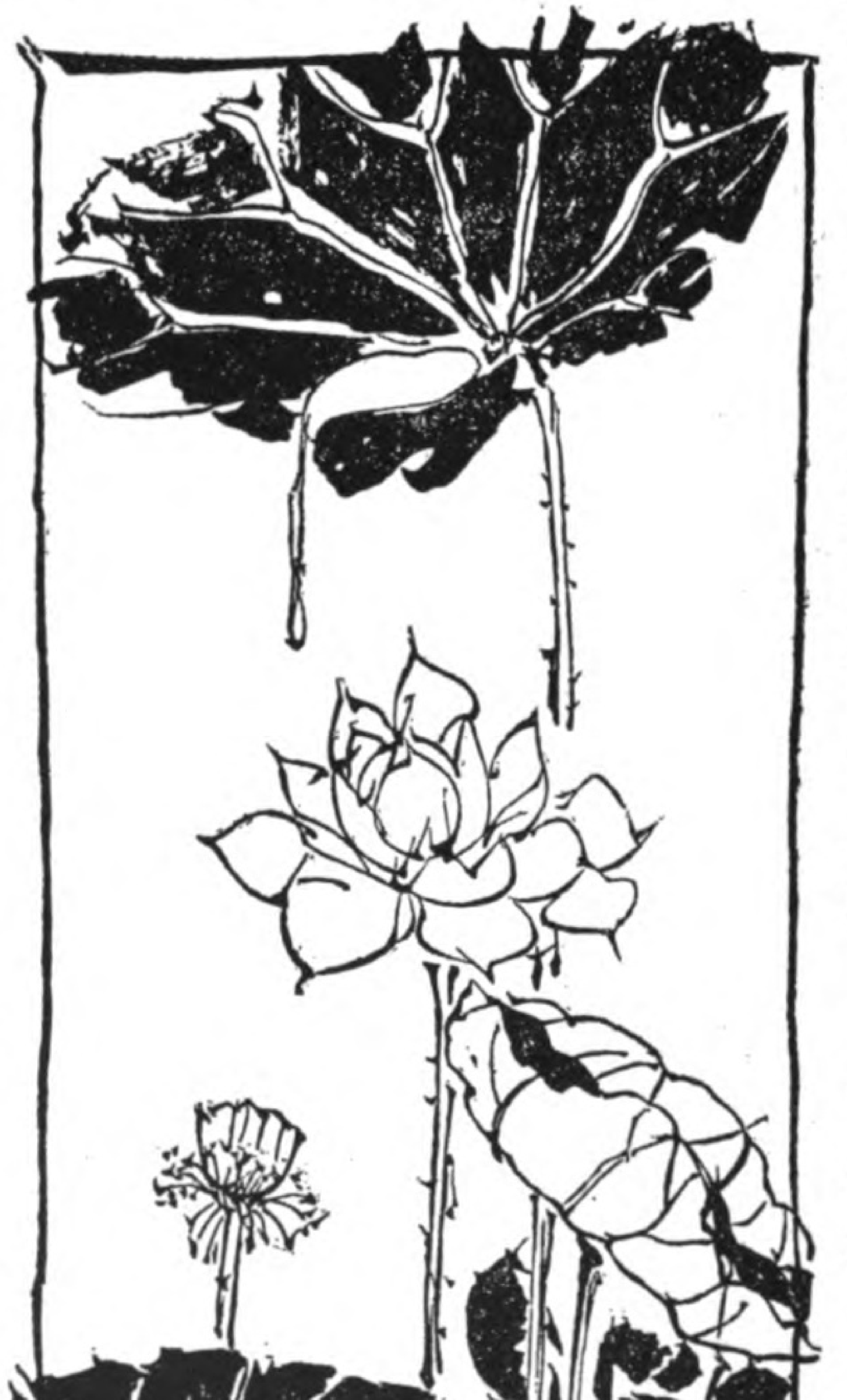
▲蛇は主として地中若くは石墻等の間に產卵し初夏の頃に至つて孵化するのであるが、偶々母蛇が產卵の周圍に蟠局を卷いて居ることがあるので、世人は蛇も鳥の如く卵を溫めるものゝやうに信ずる者多き樣なれど、是れは單に危害に對する保護の目的に過ぎないやうである、その卵殼は石灰質が少く雞卵等の如く堅硬でないから、季期が來て孵化すれば自然に碎はれて容易に出づるのである、玆に最も奇異なるは毒蛇に限りて產卵でなく胎生である、故に世人は之を見て蛇は口中より產出するなどゝ臆斷するものが多い、現に或る地方などでは蝮の生產期が蕎麥の白き花盛の頃であるからその時季は蝮が生產する爲に牙を拔く必要があるのでその中毒が一層激しいと云つて、野に出づるものは頗る警戒するのである、併し毒蛇に限り口中から產るゝものでなく矢張り生殖器部より生るゝには相違ないのである。

蛇の食物は多く蟲類野鼠の類であるが、印度に產するパイゾンと稱する大蛇は兎、雉子等の野獸野鳥を食ひ、往々牛馬等の大なものを襲ふこともあると云ふことです、その自己の體徑より大なるものを食ふ塲合には、先づその周圍に纏ひつき之れを緊迫けて長細きものと爲しその上で嚥下するとか、又口に啣へつゝその一端より激烈な溶解力を有する唾液を以て漸々軟化して嚥下すのだと云ふことである、

蛇はその體軀からして見好きものならず長蟲、口繩などゝ云つて人の嫌ふものなるが、草深き地方にては往々坐敷などへ上りて婦女子を驚かすことあり、元來蛇の運動するは專ら腹部の鱗を起伏させて進行するのだから、これは全く地上其他の匍匐面との摩擦に依るのである、故に硝子板のやうな極めて平滑な摩擦のなき物體上にては匍匐することが出來ないのであるから若し蛇の通路に硝子板を敷き置かばその浸入を防ぐことが出

来ると云ふことです。

毒蛇を鑑別するにはその體鱗に連鎖状の斑紋を有し首から尾にかけて一條乃至二條の白線が通ふて居る、且つ普通のものに比べて顎骨が非常に開張して、下顎骨が左右二片に分れ腱を以て接續して居る、これは専ら大なるものを嚙む用意で蛇が己が口より大なるものを能く嚥下するのは此の作用に依るのである。



毒蛇が人體その他諸動物を嚙みて激毒を與ふるは、専ら毒牙の作用である、毒牙はその尖端はやゝ内方に彎曲し且つその裏面に溝を有するものもあれば又その内部に管孔を通じて居るものもある、その物を嚙む時には眼の下方にある毒嚢から毒液を排出して此溝なり管なりを傳ふて他物内に注射するのである、而もその排毒の作用は口を開くと同時に筋肉自然の壓迫に依つて壓し出されるので蛇自身は無意識に毒を排出するのだと云ふことである、又その嚙むと云つても電光石火とも云ふべく一瞬の一擊であるが、而もこの一

撃で毒は十分に傳へられるのである。
毒液のはたらきは實に恐るべきもので、一たび毒蛇に襲はれその毒を感受するときは直に血液に混じ靜脈を傳ふて心臟に入り、茲に心臟痲痺を起さしむるのである、故に毒蛇に噛まれたときはその毒の他へ傳はらざるやうにして直に醫療を受くるは云ふまでもないが先づ應急手當としては其創口の前後を成るべく堅く縛りて血液の循環を一時防遏するが肝要です。

家禽の話

GS生

近來大分家禽思想が發達して來たので、家庭の副業として追ひ〱流行する傾向も見え、既に二三の女學校には家禽飼養法の一科目を置いた所ろもある、殊に大隈伯や樺山伯が熱心に皷吹して居られると云ふから將來は多望でせう。

△家禽に掛けて世界一と云ふは丁抹である、その猫額大の小國ながら千八百九十八年度の統計を見ると家禽數が九千八百三十三萬の多きに達し、その輸出高が七百五十萬圓許りである、その生產力は中々盛にして今日では一千萬圓以上に上つて居る、斯く丁抹の近來優勢になつたのは一は地質風土の家禽に適するのと、一つは倫敦といふ大市場を近く控へて居るからであらふ販賣方法は立派なトラストで首都コッペンハーゲンに組合總督部を設け全國に渉つて國民的大運動を遣つて居るのである。

△我邦の家禽數は幾許であるかと云へば約四千萬足らずで、現に年々清國から仰いで居る雞卵が百萬圓を超過する樣な始末で、且つ東隣の米國でも近時雞卵黃味療法と云ふことが盛に行はれるやうになつて、一人一日に少くとも十四五個の雞卵は必ずいる譯けで雞卵は益々騰貴する計りである、故に斯業を盛んにして先づ支那から仰で來たものを內地で辨ずるやうにし、進で需用の無盡藏とも云ふべき北米へ輸出の途を開いたら戰後の財政整理に意外な資源となるかも知れぬ。

△支那の御馳走の中に皮蛋と云ふものがある、これは家鴨の卵を灰汁漬にした物で蘇州の名産であるが、一ヶ年の産額は約一千萬個に上り重要輸出品の一に數へられて居る、そこで之に附帶して家鴨の卵の人工孵化業も餘程開けその孵化方法の簡易で巧妙なるは驚く計りである、孵化業者は勿論學理を應用するのでなくたゞ祖先以來の實驗によつて知らず〳〵その呼吸を覺えたものだが、其孵化場といふのは一大温室で、寒暖計の装置がしてないから正確な温度を知るとは出來ないが、先づ華氏八十度位と覺ゆる適度の温氣を保



ち、一場内に泥土で塗り上げた竈三四十位あつて、何れも凡一千個位を容るべき深い釜を掛け蓋を密閉し、竈口より藁火を以て燒き、徐々に温むると二十日の後取り出し、幅一間長さ四間位の吊り棚數個所に稻藁若くは古綿を布きたる上に程よく列らべ、その上を蓆を以て掩ひ置くと二十日間位に及ぶと、自然の温度によつて孵化の時季に達し、棚上幾百千の雛兒は自ら一齊に嘴を以て卵殼を啄き破つて滿足の狀態で現れ出るのである、温度の適否を計るには温めた卵を眼の所へ觸れて知るのじやそうである。斯ふ云ふ風に孵

化したのを二三日の後、諸方から養雞家が買ひに來ると雌雄一番六十文位で賣渡すのである、これは在清國蘇州の白須副領事が親しく永號老哺坊の孵化場を實見した話である、此哺坊に於いて一ヶ年の産額は約四十萬番に達するそうであるが、その一ヶ年と云つても清曆正月から五月までの孵化時季を指したものである養家鴨家は謂ゆる水草を追ふて移轉する農夫で、何でも水草の豐富な濕潤な弘い空地を見付けて飼ひ放し、愉快らしく青草を喰はせて成長せしめ、然る後問屋へ販賣するのである、その監督者は口に長き烟管を啣へ氣樂さうに二十尺位もある一本の竹竿の尖頭に棕櫚の葉を結び付けたものを持つて、一群數百の家鴨を指揮するのであるが、その飼養法の熟練なヿは迚ても他邦で眞似の出來ないと云ふヿである。

△そこで素人が家禽の飼養を始めるには、先づ幾何飼はねば勘定が合はないと、最初から利益を打算して大業に掛るものが多いので、大抵は失敗に了るのである元來生物を取扱ふヿだから尋常では行かない、思ふやうに卵を生まなかつたり雛が育たなかつたりして種々意外な故障などが出來て豫算が外れるが普通である、故に最初は試驗的に一番ひ位から着手し充分經驗も積み呼吸を吞込んだ上で漸次增殖して最後の目的の程度に達するが安全である。

▲轉地療養の必得

呼吸器病其他大抵長病に罹れる者は醫家が勸めて轉地療養をなさしむれど恁かる身心衰弱者を單獨に山間或は海濱に送らんことは唯に効果少きのみならず往々爲めに不測の害を招くヿあり今試みに單身旅窓に在りて何等の慰藉なからんか萬感交々至りて遂に無限の寂寥を感じ折角清新なる空氣を呼吸する効能も斯の精神上の不快に支配されて反つて病勢を募らしむることあり故に自家の別墅に轉地する者は勿論然らざる者と雖も夫妻同伴又は會心の友と打連れるにあらざれば決して轉地すべからず彼の放逐策に均しき單獨若しくは看病人附添の轉地は斷然廢止すべきなりとは久しく結核症にて某地に轉療せし或る醫師の實驗談なりき。

女子判任官の登用

去月二十二日小松通信局長以下通信省關係高等官管理所關係吏員及女子雇員約四百名列席の上下村所長より親しく辭令書を交付せり女子雇員も茲に於て永年の勤續に對しては恩給其他退官賜金給與の途を開かるゝは勿論敍位敍勳の御沙汰をも拜するの恩典に浴し得べく辭令を受けたる本人等は同所出仕以來未曾有の名譽を荷ひたることゝて孰れも喜悦に堪えざると共に責任の重きを加へたるを自覺し益奮て事務に精勵せんとの意氣込を表し居れりと今回任用せられたるものは殆んど總て永年勤續事務に精通し男子の通信手と同一の事務を執り現に女子雇員取締の職に在りて技倆最も優れたるものなるが學歷としては多く高等小學卒業に過ぎざれども勤續五年以上の者六人四年以下の者四人三年以上の者三人なれば事務上の經驗は頗る豐富なるを想像し得べし又た其年齡は三十歳以上一人三十歳以下二十五歳以上二人二十五歳以下二十歳以上八人最年少は十九歳にして二人あり、其從事せる事務の種類は郵便貯金利子の計算檢査郵便貯金拂出の檢査郵便貯金預け人原簿の計算檢査等を取扱ふ貯金課勤務の者最も多しと

△東京貯金管理所貯金課

和久井みれ　中村春

菅沼とよ　早川久

岡崎よれ　田中恭

△同内國爲替課

岡田はる　小野てつ

森岡とく　大藤とく

辻村こう

△同庶務課

岡田きん　兒玉みつ

△大阪支所

中井えい　福崎とく

△下關支所

澤村しん　木下あさ

登用者略歷

○和久井峯子

麻布新網町一丁目五十二番地＝和久井久次郎氏の長女にして本年二十八歳、父は愛國婦人會東京支部員にて長兄榮藏氏は東京電氣株式會社の技師を務め一家の兄弟姉妹九人、家庭睦ましく峰子は本所南二葉町に生れ五歳の時より同區表町明德小學校に入り卒業の後は裁縫其他の技藝を學び居たるが、去卅三年通信省にて女子雇員を募集さるゝとき募りに應じて爾來貯金課雇員となりて原簿の記入を掌り勤勉の功空しからず一昨年大阪管理所の指導者に選まれ同地に一ヶ年滯在して昨年歸京し其後貯金課に執務しありしが今回選拔せられて判任官に登用せられしなり

○中村春子

京橋鈴木町九番地醫師中村直氏の長女にて今年廿二歳父は舊膳所藩の典醫なりしが廢藩後上京して醫業を開けり春子は同區寶田小學校全科を卒業し後ち父に漢籍を授かり母に裁縫を習ふ中父病褥に臥したる

を以て業を中止し去三十四年一月貯金管理所の雇を拜命し三十五年九月三十六年十一月筆算競技會にて二回とも優等の賞狀を受領せられたるより今回登用の一人となりたり、長兄順一氏は本年第一高等學校を卒業したり。

○早川久子

京橋木挽町九丁目六番地、亡父利久氏は東京府士族にて遞信省通信書記として下關に在勤の當時久子は下關高等小學校を卒業して補習科に入り裁縫其他を學び居る中、父死亡したるより母たか子と共に上京し久子は戸主となり牛込區榎町に住居せしが去廿六年中遞信省貯金課雇員となり目下計算課の事務を執り居れり方正謹直なるよりして今回の選に當りしなり。

○田中恭子

岡山市士族醫師田中意誠氏の長女にて廿年七月同地に生れ父は大阪に奉職したるより恭子は同地の三阪小學校にて卒業するや病死したるにつき母梅子が恭子を引連れ去る三十五年上京して梅子の兄なる赤阪區福吉町大塚某方へ頼りて同居したるが翌五月母梅子も病歿したるより恭子は異郷に孤兒となり叔父の世話を受け三十五年十二月臨時雇員となり爾來就職中大阪へ出張を命ぜられ遂に今回登用の榮を得たり

○岡田春子

麻布區我善坊町四十三番に住し父洪碩氏は鐵道作業局建築課員なり、春子は嘗て父洪碩氏が靜岡縣に在勤中、靜岡尋常高等小學校を卒業し、間もなく父と共に上京して、女子の學ぶべき二三の科目を習ひ居る內、某氏の周旋にて當時の就職する貯金管理所爲替課の雇員となりしは六年前十八歳の時なりしが、爾來勤勉怠らず每年三期に勤勉賞與を受け、今回選抜せられて判任官に登用せられしなり。

○森岡豐子

本所區緑町三丁目四十三番地森岡新三郎氏の長女にて父は舊藩藤堂伯爵の家臣なり、豐子は本年二十歳なるが其學齡に達したる時本所松坂町の江東學校へ入校し、高等小學全科を卒業して家事を助け居る中、遞信省にて女子雇員の募集あり、豐子も進んで之に應じ、現今の勤務に就き熟達して爲替課精算掛女雇員取締となり、遂に今回の選に當りて通信技手を命ぜられしなり。

○大藤德子

芝區愛宕町四丁目六番地に住居し父寅吉氏の亡後は母の手に育てられ愛宕下町の實成小學校全科を卒業し、十八歳にて爲替課三部の雇員に採用せられ、四年間在勤し判任官の資格を與へられしなり。

○菅沼豐子

貯金管理所の菅沼豐子は長野縣諏訪郡中村四百七番地の士族にして上京後京橋區山下町の泰明小學校に學び、後神田の高等女學校に入りて卒業し、爾來母を扶けて裁縫其他家事を助ひ居たるが、一昨年管理所の雇員となり、性質温良にして萬事に注意深く、最も職務に忠實なれば、今回登用を得たるなり一家は戸主信一妹たけ牙四郎及び實母との五人暮らしにて睦じきこと春の如しと云ふ。

富士登山者心得

山梨縣にては今度富士登山者の便利を圖り旅客案內者其他取締規程を設け尙注意事項を印刷し吉田警察署をして便宜旅客に配付せしめたりと注意書の要項左の如し

▲心　得

一、生水及雪解水等は必ず飲用すべからず宿屋には煮沸水山小屋には湯茶の準備あり

一、登山中發病負傷其他困難の事故生じたる時は巡行の巡査又は山內派出所の巡査に申出づべし

一、途上に於て兒童が投錢を乞ふことを堅く禁じ置きたる故必ず投與せざる樣せられたし

一、登山に要する總ての料金は左の如く一定したり萬一にも從來の慣習にて山祝酒手等を望むものあらば斷然斥けられたし

▲宿　屋

宿泊料	一等	金一圓
同	二等	金七十五錢
同	三等	金五十錢

(但學生兵士に限り三十五錢)

晝食料	一等	金三十錢
同	二等	金二十錢

晝辨當料十三錢、餅代十三錢、金剛杖一本五錢、綿入損料一枚三錢、胎內腹帶一筋三錢、但し辨當、餅、杖、綿入、腹帶等は客の需用なき場合は此限りにあらず

▲山　小　屋

一泊料金三十錢(但夕一食付)木賃料金十五錢(飲食寢具を供せざるもの)蒲團代金五錢(木賃にて泊り蒲團を借るもの)雜煮代金四錢(同上好に應じ)飯料(同上)茶代二錢、休息席料二錢、湯若くは茶一椀一錢五厘、一膳飯三錢、煮染代三錢

▲馬車及乘馬

馬車四人乘一人金三十三錢(淺間神社より馬返しに至る)同六人乘一人金二十五錢(同上歸路)乘馬一人金二十五錢(但し胎內廻り五錢增夜間一割增)

▲登山案內者

合力一人金一圓(客五人迄一人とし定員外持込一人毎に十錢增胎內廻五錢增)同上須走口下山一人金一圓五十錢(吉田より登山歸路須走口に下山する者)同上風雨滯在一日一人十錢中道合力案內料金一圓(富士山の中腹を一週する者)八湖合力案內料金一圓(富士八湖を眺望し得る箇所を一週する者)登山兼中道案內料金一圓二十五錢(但三日に亘るときは二十五錢を增す)胎內のみ案內料金十錢

一、合力駕籠屋等には許可證を携帶せしむるは勿論尙各自に住所職業を明記したる名刺を携帶せしめ置き就業に際し客に之を呈出せしむる筈なるを以て若し不都合の行爲ありたる場合には其旨通報を煩したし

一、登山に必要なき携帶の行李鞄等を預め須走又は御殿場に廻し置かんとするものは宿屋に命ずれば馬夫に依り遞送すべし



某薄倖婦人の半生

紫陽花

今も思ひ出す、友が十六の初々しい丸髷姿、物思はしげに門の外に立つて、學校から歸路がゝりの私を捉まへては、ね、貴女、女はお嫁に行くなら貧乏の處に限りますよ、御金持なんか些つとも何にもなりますものか、旦那は未だ御歸家にはならないのよ、今日でね丁度三日、定まつてるは佐野やよ、と、口惜し狀にほろりとしては、見るともなしに西の方の紅々とした空を眺めて、……雨が降つたのでお天氣が善いたつて怎うにもなりやしないんだから……淋しいから遊んで行つて下さいませんかと、去りとて、心から止めるでもなし、細つそりとした肩聳やかして、左樣ならと、くるりと後ろ向きになつて、察して頂戴な、悲しいのよと、氣でも狂つた樣にずん／＼と奥へ走り込んで仕舞ふ。

能く這麼事があつたんで、世慣れぬ私には其の頃、之れは何の事だらうと殆んど了解に苦しんだ。

怎うせ氣狂さ、併し氣の小さい人だね、第一身分が違ふ、旦那が妾狂ひし樣がさ、例へば藝者買ひし樣とも、見る影も無い自分の里と比較たら、其樣事位我慢の出來相なものでは無いか、我儘だ、濡れ手で粟の摑み取りする氣で居るから、其れだから困ると、嫉妬よりの嘲罵か、猜疑よりの惡口か、友には誰れも同情する者は無かつた、其れから友が廿歲の時、友が空閨を

守りし涙の幾夜、良人が折り得し花の、未だ色褪せぬ間に、何處の馬の骨の種とも知れぬ忘れ片方を預つて早くも不幸にして寡婦となつたのである、其後自分は都に漂浪ふ身となつて、友の消息を聞く事が出來なかつたが、近頃不圖▲某華族の内訌を耳にするに及んで、そゞろ思ひ出されたので、故郷の人に友の事を聞いたら、怎せ生れが生れだからね、浮氣も當り前さ、



然う何日迄猫が被つて居られるものか、可愛相に未だ若いんだから無理もあるまいね、だけれど彼れぢや、碌な死に様も出來まいだらうせと、評した。

不幸なる薄命婦人よ、運命は何處迄同じ徑路を辿つて我々を翻弄するのであらう、畢竟墮落と云ふも不義と云ふも、不自然なる道徳と云ふものゝ束縛の犠牲となつたに過ぎぬので、況して超然として人生の意味を支配すると云ふ宗

敎すらも、好運なる人々が薄倖なる人を呪ふ道具に使用つて居るのではあるまいかとさへ思はれるのである

されば強ち之れを以て後車の訓誡とせよとは云はじ罪は何處にありやとも無下に探るまじ、唯覆りし前車の轍を追うて、若き青春の夢を破りし憫れむべき婦人の半生の涙痕を、弔はうとするので。

▲婦人名は瀧子

知る人は、直ちに袖をおうて一掬同情の涙を禁じ得ぬであらう。

既に人は愛なき結婚を强ひられるのさへ不幸であるのに、其の上殆んど狂者に等しき良人に事へて、關渉多き複雜なる家事の衝に當らねばならぬ、最早や其時に於て夫人の半生は亂されたのではあるまいか、之をしも人は氏無くして玉の輿と云ふであらうか、成程位は伯爵、職は廟堂に立つて、陛下の政を扶翼し奉るの榮譽を擔うて居る程の人であるから、良人としては決して不足は無かつたであらう、蓋し前に一度は伯爵の懇望を退けたのは、未だ世路の辛酸を知らぬ、深窓の下に人と成つたお孃樣には、餘りに年の相違を悲しんだのが原因したのであらう、之れが若し美しうて若くて而して才人に優れて居る位高き殿であつたら、白痴で無い限り狂者で無い限り、人間と生れて女と生れて能く之れを拒み得るの勇氣は迚も無からうと思ふ、其時既に夫人に蟲があつたからだ等と云ふのは、頗る人類自然の本來の歸趨を誤まつて居る愚かな人の云ふ事で、よしやあつたにした處が、今日白晝所謂世の紳士紳商とかの家庭の内部を曝露したら、寧ろ這麼事は珍らしく無い事だ、けれど、夜は沈々として人靜まり、火かげ淋しう淡るゝ孤影を顧みて、良人の無情を泣く時、良人が一朝事に觸れて、怒氣心頭に發し、殆んど人倫を以て判じ得られぬ程の亂暴を働く時、夫人は華族に嫁し所謂英雄を良人としたのを非常に後悔された事だらうと思ふ、かくして幾年、此の間に實家は商業上の手違ひより、不慮の失敗を招き、さしも一時は全盛を極めた昔の榮華の夢を。

▲奥山の五層樓

に止めて、一家は悉く離散して仕舞つたのである、大厦の將に覆らんとする時、如何に名譽、家の面目を思へばとて、夫人の纖手にて怎うして支へる事が出來ませう思ひ遣りの深い夫人は骨肉の落魄を見るに堪へ兼ねて苦しい思ひで人目を忍んで、實家へ給養れたと云ふのは、或は事實であつたかも知れぬ、頼む木陰に雨漏り初めてよりは内外の視線一身に集まりて、良人の愛の頼む可からざるを悟つた夫人は、勢ひ夫人が全心の愛を、



▲兩人の愛兒

に濺いで、月にも花にも命にも代へて大切に注意深く撫育されたのである、けれど、人は夫人の愛は姑息であつて、根本から兒女の敎育を誤まつて居つた、だから兩人に兩人、彼樣所謂華族の姫樣坊樣の好標本を拵へたと、併し夫人は人の云ふ樣に決して子女の敎育を忽せにしては居られ無かつた、嘗て、長子は餘り學校の成績が善くなかつたので、夫人の心痛は其れは一方では無い、其の試

驗成績の發表前にでもなると、恥を忍び情を明して密かに其の受持ちの教師の處へ人を以て、或は自ら、愛兒の成績を聞きに行かれたとか、切なる夫人の哀願も校規には如何ともし難くて、心細けに微行の俥乘り捨てゝは、翠帳の奥深く殆んど寢食を忘れて、長子の幸を祈られたと云ふ事だ、其れ程慈愛深き母の手に育てられた長子が、何故哀れなる母を離籍し、母が一縷の望みを繋ぎ居りし幼女すらも、夫人の手より奪ひ取つたか、之れは溫順なる長子の罪でもなく、長子を育てた優しい夫人の罪では勿論無いので、即ち伯爵家の後見、若しくは補佐の任に當たる人等が、不注意無責任より起つた偶然の結果で、角を矯めんとして却て牛を殺すの愆を、私共は寧しろ憫むのである。元より

▲幼　女

は夫人の出では無かつた、けれど優しい夫人は出の誰れなるを問はず、愛には決して變らう筈がない、況んや良人が臨終の時まで頼むとばかり、夫人は此の幼女によつて始めて良人の溫き愛に觸れしぞや、況して況んや、猜疑の眼を以て滿されし渦中に、現在血を分けた愛子にすら外々しくされて、自分の不遇に泣き悲運をはかなむ時に於てをや、例へば、果て無き大海原に漂ふ一つ舟の、僅かに見ゆる東の雲の映え、或は寂寥しき千里の荒野をさすらひ勞れし旅人の、遙かに望む人里の烟の様に、此の時は寧ろ幼女は夫人の慰籍者であつて、心細い悲しい中にも幾らか前途の光明が輝く様に思はれたのだ。

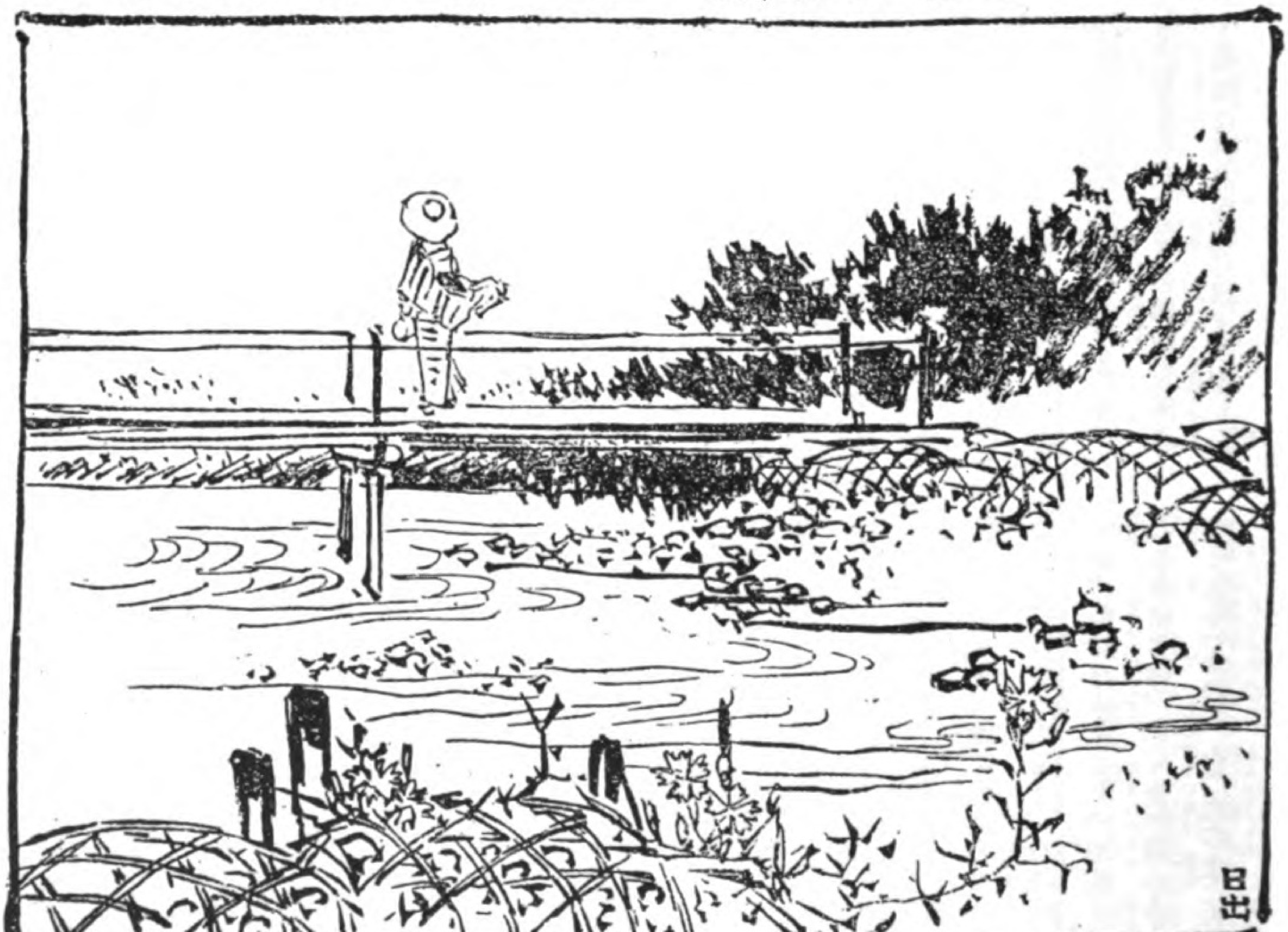
夫人が花の様な美しい靑春の若き血潮は、所謂氣狂殿様なる良人の爲に、涸らし盡されて仕舞つて、あまつさへ半生の涙で綴つた歷史は、此處に脆くも餓虎の爪牙に掛かつて引き裂かれて仕舞つたのである、而して暗澹たる密雲に深くも封じ込められたので、私共は事の眞相を知るによしないけれど、某家に行はれた、

▲最後の悲劇

を思ふと、人間本然の性は決して善ではあるまいと今更ながら疑はれる、猜疑、嫉妬、中傷、反間苦肉の策を以て薄倖なる婦人の半生を埋沒し終つたのである

ものを、其夜断ちがたき恩愛の紲に、徹宵まんじりともせず幼女が紀念の緋色の小枕眺めて、「蜻蛉つり今日は何處迄行つたやら」の嘆あつたらしと思ふ、否夫れよりは悲しく夫れよりは果敢なく、其よりは一層深酷の寂寥を感じたであらう。

斯くて愛宕の寓居に昔の俤を偲ばんよしもなく、獨居淋しう此處に一期の月を見納めて仕舞はねばならぬであらうか、人の噂を眞實とするも、強ち私は夫人の操行を是非せまい、澆季の世一々洗つて見たら百鬼夜行、都は人間の皮を着



日出

た野獸の寄り合ひではあるまいか、されば唯私は此處では、悲かりし涙の半生は半生の夢と共に葬つてしまつて、人類の自然に遡り

▲殘餘の半生

を百花爛熳たる活世界に再び出たらばと思ふのである、否明ら様に云へば、赤坂某なる紳士が果して頼母しい人であつたら、公然再婚するに躊躇は不必要だと云ふのである、前門の虎後門の狼を防ぐには、夫人は餘りに若く美しく而して弱くはあるまいか、區々たる伯爵夫人てふ虚名に憧れて餘義なくされし罪が誠の罪

になる樣な事があつては、夫人の爲めに斷じて取らないのである。

夏の趣味＝消夏漫興

梧水生

夏季休業！夏季休業！嗚呼嬉しき夏季休業!! 試驗と云ふ難關を踰えて、極樂國土たる夏季休業ともなれば、都下十萬の遊學生、男子と云はず、女子と云はず、懷しき父母の御顏を拜すべく、樂しき故山に安臥すべく、皆な笈を負うて歸り去りにき。

彼等が、新橋或は上野の停車場を出でゝ後、數日、さしもの降り續きし霖雨も名殘なく霽れ渡りて、雲母に似たる空の色、毎日々々、ぢり〳〵と照りに照りつけ、雨なぞは一滴も落して遣らぬ、その代りに炎の箭を射下して遣らうと云はぬばかりに、眞上より太陽は射るが如く白光を輝かして、お江戸の街は大凡そ一千有餘街、屋上の甍より陽炎となつて燃えたついきれ、縱橫に蜘蛛の巣を張る鐵路に觸る電車の轍、人は肉も、皮も、十斛の油となつて溶け去らむとする夏日の苦しみ、あゝ釜中吟！あゝ銷暑行！徒らに酷烈なる暑熱に呻吟せむよりは、いざや、此の身心共に消化せしめずむば已まざらむとする都市の、その片影に、眞箇樂天地、無上極樂淨土の橫はれるを探り得て、聊か歸省せる諸姉諸兄に、一片の涼味を頒たむと欲す。

◎不忍池畔の拂曉＝蛇の說

昨宵、鏡の如く淸く澄みたる一輪の月の、斯くも濃き霧を息吹して、曉近く西の空に沈みしとは、月も亦た人を弄ぶの情にありとこそ。

見よ、紫罩めし朝靄の、上野の森は宛然太古に似たらずや。

風が持て來る馥郁たる芳香、神氣既に爽快になりて、漫ろに歩を運せば、影こそ見えざれ、喃々喋々、漸く辨天堂の傍に近くに從ひ、影の如く、形の如く、仄かに淡く映畵のやうに浮び出でたる手弱女の姿とても現世の人とは思はるればこそ、辨才天女の假に御姿を現はし給へるにはあらずやと、行き逢ふや、振返り〳〵、殘り惜しくも別れてお社に參詣しぬ。

辨天堂の傍、渚に臨める古松に倚りて、茫然として獨り空想に沈めば、脚邊に澱む水底深く、突として悲しき聲あり。嬉しきも人の情なれば、恨めしきも人の情なりと、我れは愴然として、微かに鬢の戰ぐを覺えぬ。昔日の事なれど、池の端の金丹屋の娘、叶はぬ戀に現し身を歎き、我が佇立める此の邊を暫時低徊しけるが、軈て、寧そのこと蛇になりてもと、白蓮咲き匂ふ池水に哨嘩身を躍らして、十八を一期にあはれうたかたの泡沫と消えにし水面を凝視めて、我れは悵然たる事稍少時。あゝ金丹屋の少女、戀に迷うて老松の根方より池中に躍り込み、此の不忍池の主になりしとか。洞庭湖畔の湘君の祠も、

猿澤の池の釆女の靈も、皆な戀に迷ふ一念の、水に入りて蛇に化りし其れなりとや、女＝池＝蛇、あゝ女は蛇の化身なるか、蛇こそ女の化身なるか、兎もあれ我れは他人が見る目を厭ふ蛇を見る毎に、必ず何處の女が長しへに浮ばれざる靈魂ありと思ひ、一掬の涙を灑いで弔はざるはなし。蛇の音樂を聞き分くると云ふも、亦た女性の罪に陷て恁はしき姿に化生したるを證據立つる者ならずや。願くは、思慮少き士人よ、蛇の姿の恁はしきが故に、濫りに之れを嫌惡するを止めよ、必ずや、その蝮、縞蛇、黑蛇、山楝蛇の別を問はず、前世は眉目麗しき美人なりしが、一旦罪の穢れによりて、恁はしき姿を曝し、人を見れば恐惶して小さき穴に隱れ、時に已むなく勇躍して噛まむとするも、寧ろ甚だ憐むべきにあらずや。



◎尾久の舟遊＝行々子

幸田露伴先生の門下詩人に、行々子を歌へる短詩あり。一寸讀めば何でも無きやうなれど、再三、再四、愈々之れを誦するまゝに、神魂縹渺、遙かに天外に飛び去りて、その聽て止るところ、靑蘆簇生して數里に連り、單調なる行々子の囀聲に、夏日の長き、日暮を顧慮する本能はざらしめ、轉た人生の悲痛哀樂を皆な洗ひ去りて、宛然昔日の童子に若歸らしむべく、世も、人も、決して年を取らざるものゝやうなる心地ぞすなる。

行々子、行々子、
鶯の經も讀まず、山
雀の藝も無く、
よし、あしの中に、
何をか囀づる、日がな一
日。

これに就いて、我れに一個の聯想あり。年齢未だ若かりし時、友人二三と、墨田の上流、尾久に小舟を浮ぶ。盛夏日中、日は正に午なり。謂はゆる興に乘じて輕舟遠近なく漕ぎしかば、少しく皆な疲れて、一叢茂れる綠陰に纜をつなぎ、漸く釣り得たりし鮮魚を菜に、辨當を開

き、飽くまで喫し、飽くまで胃嚢を膨らせたりしかば、俄かに睡氣を催し、一同申合せたらむやうに、或は艪を枕とし、或は膝を枕として暫時は低唱微吟しつゝありしが、神氣既に夢現の間に彷徨ひ始めぬ。

川下遙かに簇々として湧き出でし白雲の峯は、悠々たる流水に映じ、頭を蔽へる緑蔭の中には、甚だ單調なる吟蟬の聲あり。此の單調なる吟蟬の聲と、此の悠々たる水の流と、共に相融合して、共に川下遙かの雲の峯に流れ込まむとす、あゝ此の時！　此の時こそ！　人生の苦しみ無く、世の悲しみ無く、己れ自身も亦た、彼の雲の峯と共に融け去らむとす。大きく眼を開くも煩はしければ、絲の如き眼して、今や氣の遠くなるばかりに睡魔に襲はれつゝ、最後の神氣を鼓舞して、眺め入れば、倒に映れる蘆荻の影、水中の何處にか斷續せる行々子の聲、宛然一歩々々眠りの國に導くに似たり。嗚呼、緑蔭、涼風、單調なる蟬の聲、悠々たる川の流、簇々たる白雲の峯、青々たる蘆荻の洲、斷續たる行々子の聲、而して我が胃嚢は充分に膨れたり、眞に人生の極樂淨土。

數秒にして、突如として聲あり、

「山で赤いのは……躑躅に椿イ…………」

愕乎として覺れば、緑樹茂りあふ木の間隱から、ヌツト顏出したるは、赤兒を負へる十歳ばかりの、火のつきさうなる頭髮したる少女なり。

「ヤア寢てヱる〳〵、真ん中で書生さんが寢てヱる」

睡き眼瞼こすり〳〵、眼を開けむ、葦の間より、起つ鳥あり。行々子なり。

◎驟雨

朝の中にはミン〳〵蟬が鳴いて、山の手の奥様の虫干のお手傳ひ半分、半ば幇間然たる某の俳諧の宗匠、感吟を吐いて曰く「虫干や疊の上の雪月花」奥様の御恐悦斜めならず、普段の御不精にも似もやらず、下女へ誇りの衣服陳列會、漸々樟腦の紙包を更えた時分、ボン〳〵時計が今しがた三時を打つたばかり、急に太陽が薄暗くなつて、行き處に迷つてるやうな生温い風が吹き出して今西の空遠く遠雷の音が微かに聞える。

道理で正午つから蒸して來たと思つたが、雷鳴つて來たれと、俄かに干物を取込むやら、梅干を物置に運ぶやら大騷ぎ。軈て太陽の色も黄色く見える程暗くなると、大豆程の雹がボツリ〳〵、大きな刷毛で撫でたやうな風が颯と落ちると、眼を射るやうな紫電一閃、坤軸を碎く雷鳴の轟き。慌てくさつて雨戸を繰るやら蚊帳を釣るやら、お線香を立てるやら、桑原〳〵桑原〳〵、庇を叩く雹の音、植込を吹き萎る黒風のざわめき、雨戸の隙間から紫閃の迸る毎に、唯だ一擊に粉碎せんとばかりの鳴りはためき。往來に人の馳けて行く足音が聞えて、電光閃くや否やキヤツ！　と叫んだ、呀ツ誰れか氣絶したんだよ、早く出て御覧……。でも奥様……。大丈夫だよ、もうお納りなすつたから……

…。漸く下女が蚊帳の中から匍ひ出て窓の戸を細目に開けると、何時しか驟雨は通り過ぎて了つて、垣根際に青鬼灯が大地に叩きつけられてゐる、軒の上には雀がチユウ〳〵と鳴いて、空はもう真青である。黒雲は疾に、東の空に飛んで行つて了つて、雷鳴の聲も、遠くの方で臼を碾く程にしか聞えない。庭の草木からぽた〳〵と雫が滴つて、大地には水溜が出來て、大きな蟻が泳いでゐる。五尺の體軀を有つた人間ですら、膽玉が縮上がつた位だから、嘸ぞ蟻やなんぞの虫ケラ共は吃驚したであらう、と思ひの外、梅の木で、油蝉がジユウジユウと鳴きだした。隣では、

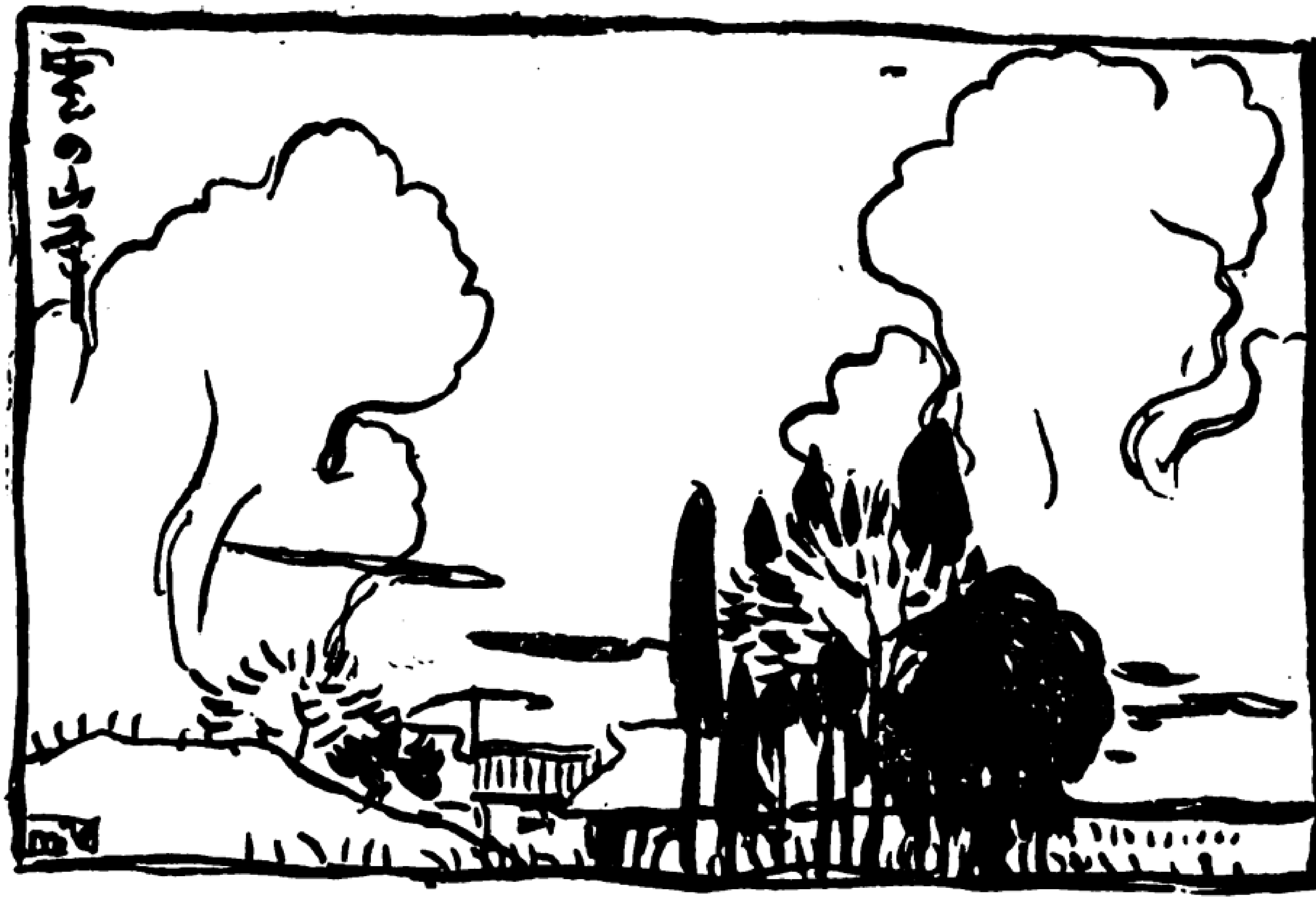
「大相酷い驟雨で御座いました」

「お祖母ちやん、こわかつたね」と小供の聲

涼風一陣、西の空に太陽が射して、東天には美しい虹の掛橋。庭の草木にも虹が立つに。

「豆腐イ、豆腐イ」、早や豆腐屋が來た。

往來は塵とも汚れてゐず、溝ばかり濁水が流れてゆく。



◎茫々たる道灌山

八田の小橋は小やかなれども、帯の如くゆるく流るゝ跡許のいさゝ小川は、昔ながらの螢の名所の名に背かで、宵闇の頃は星の流るゝかとばかり、あはれいぶせき茅屋の屋根にも、云ひ知らぬ風情はあるものよ。小橋の畔、水菓子など賣れる小暗き藁屋に、蚊遣の烟濛々と立昇り、流れに添ふて一際仄暗き木立の茂りの蔭に、青き燐の燃ゆるが如く塊をなして見ゆるは、夜目にもしろきあぢさゐの花。遣水の流るゝ庭の片隅に潮染の涼しげなる、いかなる花かこれに及ばむ。花なき夏の庭を飾るに、縦しや百日紅の賤しきは無くとも一朶の紫陽花はなかるべからず。さま〳〵の思ひに耽りつゝ、小田の蛙の時折思ひ出せしやうに、鳴く聲に送られつゝ、黒闇々たる杉の大木いやが上に茂り生ふる小徑に入れば、梟の鳴く聲物淋しく、俳人正岡子規子が奥津城所も、この邊と覺えぬ。兩側は杉の木立の唯だ恐ろしげに闇夜を包めど。天の一角のみは、星の光朧ろに匂ひたり。馬追虫

轡虫の鳴く音いと喧しく、淋しみは弗々と身に迫來りぬ。やがて木の間を出づれば廣々したる道灌山なり。近き頃より、新しき家の其處此處に見ゆるやうになりたれども、なほ武藏野の昔を偲ばせて、十餘町に連る高原、坦々として蔽ろ夜の掩ひは遠く淡く、斷崖十丈の絶壁に佇立みて、遙かに眼下一帶の平野を望めば、夜の靄淡として、茫々漠々たり、忽ち脚下に咆吼する亞米利加機關の汽笛に愕きて、一眸をより、、、近き邊に轉ずれば、赤き光、青き光、無數の燈火散點して、宛然是れ波止場に佇立めるに似たり。十里に擴がる虫の音なくば、轟々たる波濤の音を聞かば、轉た海濱に彷徨ふ心地ぞすめる。冷氣襟に迫り星の雫か、我が袂しめやかなり。

◎雑司ヶ谷の墓畔

夕陽傾きて蜩の聲頻りなり、鬼子母神の森に時雨や降らむ。我が亡き母君の御墓は、此所にあるなり。二十年の久しき、夏草いやが上に茂り生うて、槐の葉のいたく大ひなる、石碑よりも高くのびて、我れは涙の他にあらじ、何人の句にかありけむ、「槐の葉や祖先の墓はあゝ荒れぬ」と、作らざる句なれど、實景見るが如く、腸や斷たれぬべし、此處の墓地は、奥津城所いと疎らにして、身長にもあまる夏草野原、縹渺として、機織虫などのきちく〳〵と幻のやうに飛びかふも、何人の魂の化身にやと、その哀れさはいと更なり。墓守の家は一隅にあれど、寂寥たること物にも譬へがたし。あきつ虫捕る兒等も、こゝに來たらず、廣き野原ぞ、閻魔蟋蟀のなく音、玉をまろばすが如ければ、憂ひなき人も、現世の他を懐しむめり。況して父母を失ひ、妻子に別れしものゝ心やいかならむ、身を埋むる夏草の中を低徊逍遙して、亡き魂を呼び返さまく、手巾を顔に推しあてゝ、すゝりあぐとも、晝顔の、人生のはかなきを示し、芒、茜の、人の世はたゞ夢よと教ふるに似たるのみなり。

茫漠として際涯なき夏草野邊の奥津城どころ、人は實に夢に生けると悟りなむ。

▲**女子と歯科醫**　日本全國に歯科醫學校として有名なるは高山歯科醫學校の跡を繼ぎたる東京の血脇歯科醫院を首めとし名古屋京都及び岡山等に一個所づゝ存すれども特に女子に歯科醫學を授くるは單り東京に血脇學院あるのみ同校には現に二十名の女生徒を有し此の末なほ續々入學志願者の數を加へ行くべき傾向あり女子の新職業としては最も見込みあるものと認められしなり同校は突然今後女子の入學を許さゞることゝなれるが其の理由は近時女子問題の八釜敷き折柄、同校には已に二百名以上の男學生あるとて兩者間の風紀に關して一々學校の注意行届かざる廉ありたればとて別個の教授を爲すには鮮からぬ費用も係る等の點より一先づ女子の入學を謝絶したる次第なれど歯科醫は女子に最も適當なる醫術にて該醫術免許ある婦人ならば月百圓以上の收入はある可し現今女子の歯科醫は

木下いつ子（本郷）▲早川稲子（日本橋）▲伊藤ひさ子（麹町）▲高橋こう子（日本橋）▲加藤つる子（日本橋）▲山口富江子（信濃）▲中村安子（千葉町）

世界一富豪の 花嫁と花婿

靑眼

世界の大財産家を以て稱せらるゝ者は多し、鐵道王の如き、鋼鐵王の如きは、則ち其類なり。而も窈窕花の如き妙齢の美人にして、巨億の富を有し、一雙の玉手能く之を守つて失はざるものに至つては、世界中唯一のクルップ氏の女。

▲ベルサ孃

あるのみと言ふも、決して過稱にあらざるなり。傳ふるところに據れば、孃の有する財産の總額は、凡そ

▲四十五億萬圓

にして、一年間の收入は、少なく見積るも二百五十萬圓、則ち一ヶ月二十萬圓以上の收入ありといふ。驚くべき巨額にあらずや。而て孃は啻に斯る莫大の財産を有するのみならず、

▲其の人品

も亦優にやさしく、鹿のやうな柔和の眼眸、金茶色の麗はしき頭髪、見るから品良く氣高くして、男子を惱殺すべきチャームを有し、其の年齢は、

▲花の盛りの二十歳

性質は内氣で靜淑で、衣食共に粗朴に甘んじて敢て奢侈に流れず、一見たゞ温順の一女子に過ぎざるも、

▲頭腦は明確

にして、思考力と判斷力とに富み、時に臨み事に處して、一絲紊れざるの才を有すといへり。そも誰か孃をしてかゝる大財産を有する身とならしめたるぞ、孃の父は世にも名高き獨逸の

▲大砲王クルップ氏

にして、氏には跡を讓るべき男子無かりしかば、今を距る三年前、ベルサ孃が十七歳の時、氏は重き枕に就き、臨終將に近からんとするに方り、此の莫大の財產を擧げて、彼女の手に讓り、心靜に永眠の人なりしなり。ベルサは父の後を繼ぎしより、風にも堪へぬ一少女の身を以て、大責任を負ひ、五千二百人の事務員四萬五千の職工を有する

▲大鐵工場

を管理して今日に及べり。啻に之のみならで、許多

の炭山、鐵山、機械工場、大砲の實驗に供する二十哩に亘る地所、及び外國に於げるクルップ家各種の所有物は、悉く孃の手に歸して、其の管理の下に就けり。

ベルサ孃は自身重役會議に臨まざれども、熟く議事の性質を識りて、一々監督者に就き自ら處理するを例となせり。而して孃の尤も心を傾けるは、父大砲王の生前心を用ゐて經營したる、

▲慈善事業

にして、職工及び其の家族の幸福平安に關しては、萬遍なく注意し、或時は其家に到りて疾病を問ひ、不幸を慰むるなど行届かざる限なければ、職工と其の家族とは孃を尊敬すること光明の天使の如く、皆爭ふて力を盡さゞるはなしといふ、孃の住居は、獨逸國エッセン市なる

▲此ヒューグルの別莊

にして、小高き丘の上、欝蒼たる深林に圍まれたる宏壯の家屋、其の結構は歐洲中世君王の宮殿に比すべく、邸内には大砲王の嗜好により蒐集したる歐羅巴美術の花の、目を眩ます許りなるが、許多排列しありといふ。

孃の富と勢力の至大なるに加へて、容貌亦花の如く美麗なれば、孃の婿たらむと希望して、種々手を盡したる者の多かりしも怪むに足らざれども、其の候補者の數は、三百六十二人の多きに上り、此中には、親王十二人、公爵八人、伯爵五十八人、子爵十九人、男爵六十四人、内閣大臣三人、將官十六人、全權大使四人文學者十人、畫家十七人、詩人十一人及び米國の富豪二人ありしといふに至つては、又以て驚くべきにあらずや。而し中原の鹿は、グスタフ、フオン、ボーレンなる、

▲幸運兒

の掌中に落ちぬ、氏は當年三十六歲にして、久しく侍從の職に在りしが、後外交官となりて、米國に於ける獨逸大使館附法律顧問となり、尋で北京公使館に三年間同職を勤め、千九百三年羅馬法王廷駐在露西亞公使館附書記官となりて羅馬府に轉任して今日に及びたる人なりと云へり。

此頃の伯林電報は報じて、孃と氏との間に婚約の成立したるを傳ふ、華燭の典を擧ぐるも近きに在るべし婚後ボーレン氏は外交官の職を辭し、クルップ大工場理事者となり、之が管理の任に當るといふ。芽出たし芽出たしとも、芽出たし。

活断

人事活断 運命占ひ所

天啓堂

△福岡縣の花代女に答ふ——貴女は美人の上に無病健全で學問が出來、文學がお好きで居らしやるとは造詣の程も察せられる、表情に富まないとの心配は「習ふより熟れろです」から御希望の交際場裡に上られたら成功します、外交官或は海軍士官などを婿とせられて妙。

△百合女に答ふ——夫婦間の和合もよし將來の幸福も得られますから、相當の媒介者をお尋ねなさい屹度結婚は成立します。

△三河の一苦少女に答ふ——貴女の學問熱心は感心ですが、父兄方の申されるヿも道理ですから家庭で自修の道をお取なさい、今日は通信教授などいろ〳〵書物が澤山出來て居ますから此段は中々便利です。

△信山女に答ふ——良人に缺れしため實家に歸つて居なさるとは不幸のヿに存じます、今に良緣がありますから急がずにお待ちなさい、其内に氣も晴れ運も向きます。

△おとなし女に答ふ——如何に貴女がおとなしくつて御嫁に行たい願をなさらなくとも、其年頃ですから世間が放棄して措くものでありません、母御がなくとも父上が御心配なされるから、それこそおとなしくして待って居らしやるがよろしい、此秋には必ず縁談が纏ります。

△初音の里、やなぎ女に答ふ——先頃の縁談は立消なり、當座、挨拶とお聞流されてよし。

△十四年心配生に答ふ——母上のおすぐれなさらないのは家庭がゴタツクからで、義姉が嫁付きて家が納まるやうにならば、母御の病氣も自然快くなります、成るべくそれまでは氣の結ぼれないやうに令妹と共々慰めてお上げなさい、母上の天壽は長命ですから自ら心遣ひして天壽を縮めてはなりません。

△本郷一本木女に答ふ——貴女の氣の落着かない間は幾度學校を換へても駄目です、學業に限らず專心でなければ成功するものでありません、令姉の縁談も親御が心配して居らしやるから今に良縁が見付ります、貴女はその心遣ひを學業の上にお傾けなさるがよし。

△玉井雪惠女に答ふ——井蛙无咎と云ふ象です、淸水を酌む用意であるから決して徒勞には終りませんが、愈水を飲み得るかと云ふに未だ釣瓶など機械もなく六ヶ敷い、折角の御奮發ですが高師の入學は不結果に了ります、併し一二年修科ならば合格せぬとも限らないです。

△あはれなる女に答ふ——病氣は必ず全快します、樂んで攝養なさるべし。

△吉田菊子女に答ふ——破談してよし。

△筑後の二八女に答ふ——小娘と精袋とは何んとやらで、實に油斷のならぬヿです、未だ初心の學生で艶書の取り遣りをするとは驚入るの外なし、占ふまでもなし以後お愼しなさい。

△廿二歳の梅花女に答ふ——貴女は金持の處へ嫁付なら無理算段しても嫁入調度の金を作らねばならぬ、貧乏人の妻となるなら着の身着のままで行く積りだから運命を知らせよとのヿですが、釣合はぬ不縁の本は

身分相應の仕度で身分相等の處へ片付かれるが、將來の幸福です苦勞もするに及ばず又捨鉢とならずとも濟むでせう。

△須摩春子女に答ふ――それは中傷です、貴女が心配しないと云ひつゝ氣に掛けて居なさる丈け、敵は中傷に成功したのである、益々貴女の品行を愼しみなさいましたら、根なし草は直ぐ枯れます。

△名古屋の一女に答ふ――裁縫科の女教師になれます、又今日の處では教師と急に離れなさるとはありません。

△武藏の一女に答ふ――女子は男子と違ひて餘程老け易いから年若い夏人を持たば、一生役にも立たない苦勞が幾程か睡りません、それも場合によつて止むを得ませんが、貴女の地位は他に夏縁を求められるがよし。

△神奈川縣の倘女に答ふ――貴女の緣談は甚だ有望です、寡で照ぜらるゝが吉、行々は外國へも行くやうになるでせうが、それが却て夏人との愛を深くするのです。

△しほれ草女に答ふ――結婚に妨げあり、約婚のまゝ待つ時は後日の悔ひあるべし。

△福岡のかつ女△京都煩悶女△山陰道一少女に答ふ――孰れも從兄との結婚は差支なし。

△福島の心配女に答ふ――進まない令妹の再緣を取極なされたとのこと、行末はお案じなさる程もない、平穩に納ります。

△故郷遠き不幸女に答ふ――夏人は事實的重婚であり名譽を重づる軍人であるから、未だ籍のある前妻より強請せられて餘儀なく貴女が不幸の犧牲とされたのである、愈々離婚となるも分娩後の談となさい、且つ合性もよし厭で別れやうと云ふでないから未だ交涉の餘地もあります此際あはてず泣かず落付て強剛にお掛合なさらば、屹度好都合に運びます。

△求敎女に答ふ――貴女の煩悶は實に同情に勝へません、これは案と義兄の罪なるに自ら意思の薄弱を責め他を容し終身獨棲と覺悟されたは天晴れです、斯の決心の下に謝絶されたとて求婚者が眞心するやうなら戀以外に取る處なき卑劣漢ゆゑ惡失しないでよろしい、併し他日若し父兄の同意にて成婚の場合は女性天眞の幸福をお受けなさるながよし。

△伊豫のいず子女に答ふ――未だ結婚を急ぐ齡でないから、今二三年も修養なさい分別も自然に就くやうになるから婿選を誤ることもないです、母親の失きゆゑ不始末なりと後指さゝれてはならないとの心掛けは今後益々大切です。

△田舍むすめに答ふ――校長の勸告は間違つて居る　私立學校の教師には有勝の弊です、力に足らぬ趣味なき學科を强ひられ病氣になるとはお氣の毒なことです、療養快復の上は御希望通り實用の專修科を研究なさるが吉。

△ＭＭ女に答ふ――易に枯楊生華老婦得其士夫无咎无譽と云ふは、牛白の老婦などが青年俳優などを引づり込むやうな場合で亦可醜であるが、精神には老若はありません既に意氣投合し相容せる上は形式の結婚を爲げなさるは順序です何に遠慮がありませう。却て今後倘何時までも此儘に經過なさるは中傷を受ける恐れがあります、又新なる事業に手を出しなさるは望み少なし。

△北海道のはな子女に答ふ――それは貴女の案じ過ぎと云ふものです。過ぎた家へ緣付たなどのひがみ心を持たず、虛心平氣で今まで通り夏人大事となされるが宜しい、夫婦中は至極夏好で一點の氣遣ふとはありません。

△靜岡のゆり子女に答ふ――貴女の意志が今日のまゝ虛榮に爲せず堅

實を旨とせられたら日頃の心痛を醫する喜を生じ來ます、大人虎蛩未占有孚の占でありますから、分家を廢してお考へ通り嫁付なさい、軍人、銀行家、教育家等は何れへ嫁付かれてもよし。

△牛込の若人に答ふ‖縁談に愚人の口だから義理にも斷はられないなどゝは善くない考へである、報恩の途は外に幾何もあるから斷る場合へ持出す問題ではありません、その親子とも進まない結婚談に何時までも屈托して居るは不可。

△母思ひの不幸女に答ふ‖母御の開運は老後にあるのです、氣丈夫にお待ちなさるがよし、論より證據五人までも子寶が授つて居るでせう、係り児が幼いとて苦にするにも及ばぬこと、却て早く手助けともなるは男子よりも女子の方です、貴女達四人の姉妹が心を併せて力になつてお上げなさらば母御の蘇生なさるとは請合です。

△大江の一女に答ふ‖獨立などゝは貴女たちの云ふところでありません、幸ひ縁談もあるとですから親御の同意なされて居る醫科醫へ嫁付なさらば安全です。

△下野すみれ女に答ふ‖御同職の教員との結婚は親御の同意を得難し、如何に貴女が自烈體がられても駄目です。

△春野蘇喜子女に答ふ‖貴女も亦破鏡の歎に會ひなされたとは、お氣の毒です、さて再嫁まで實家へ奉公して見やうとの御考へは至極よし、却て早く良縁を得られる兆となる象が現はれて居るとを豫言し置きます。

△春野久子女に答ふ‖貴女の現狀には何等か結婚の妨となる事情があるでせう、三方の縁談何れとも此際強て取結べば婦三歳不孕の凶に遇ふべし、來る九月十月の頃に至つて談あらば交渉せられて吉。

△野中白ゆり女に答ふ‖令兄の御病氣は治に向ふて居ますが、餘病の併發は勿論恐るべく、又急變の手當にぬかりなきやう看病者の注意が肝要です、貴女の運命は本年開運に向つて居るから十二月中には目出度話しがあるでせう、九月十一月は諸事控目に疾病に罹らないやう用心なさい。

△涙女に答ふ‖世に賢婦人と稱へられるは貴女の如き婦人の後身である、貴女が額の汗は一家の生計を賄はす油となり、貴女が愛の涙は未人の主人公令弟の蘇へる慈消である、貴女に此の婦清の修養あり、縱令學校の卒業證書を持たずとも、他日喜んで内助に盡せんと願ふ紳士が出來て屹度幸福が得られますから、決して彼是と迷ふに及ばず安んじて家事の爲にお務めなさい、總ての縁組は天が貴女を玉成なさる厚き思召であります。

△横須賀櫻子女に答ふ‖一年三百六十五日晴天許りでなく雨も降れば風も吹く、人生もその通り永の日月ですから終始平板の上を行くやうなわけに參りません、可笑い日もあれば悲しい時もあるもの、故に幸福も一層嬉しく感じ又苦しみも辛抱が出來るのです、樂は苦の種苦は樂の種、何もクヨ〳〵思ふに及ばず、今に笑ふ時が廻つて來ます。

△仙臺氣掛女に答ふ‖令兄の御病氣で御心遣ひの程はお察し申します、さて貴女が養子を迎へなさるとしては主婦としての責任が愈重くなつたのですから折角お奮發を望む、随て縁談の方は先方との合性も至極宜しく將來爲になる人であるから、遠慮せず進で先方へ交渉なさい、結果は良好と判す。

△音樂希望の煩悶女に答ふ‖好きこそ物の上手、貴女の熱心は必ず成功するでせうが、親類の故障とは何です、貴女は音樂以上に必用なものを打遣つてあるのではないですか、唯音樂が面白いと云ふ丈けのお考へなら不安心の象もあるから御注意せないといけません。

△由紀子女に答ふ‖女學生の墮落は音樂生徒が一番だと云ふ噂がある位ですから餘程意見が堅固でなければ危險です、殊に父兄の同意も得難いのですから見合なさるがよし。

△本郷の苦勞女に答ふ‖女子とて獨立自營の出來ない筈はないですから折角の御志一發憤なさるがよろしい、併し再縁をお進めなさるは親兄弟の情として然るべきとであります、依て後日良縁あらば嫁付かるゝも妨げないでせう。

△神戸の一少女に答ふ‖貴女が跛なる爲め夙に獨立生活の準備をなされたとは、彼の戀の理想のと勝手氣儘をした果てに一寸拗て見る滑稽云ひ草と異なり、感稱の至りです、此の素養あり不具を償ふて餘のりあれば必ず良夫に嫁付きなさるべし、此尋れの男子との間は慥に結婚成立の見込あり縁談ありてよし。

△北海の牛女に答ふ‖試驗の成績は面白からず、結婚は無論出來るが八月離父の下へ歸られるとは天水進行とて先づ六ヶ敷とお心得おきなさい。

△ゑひめすみれ女に答ふ‖良人を換へるは婦人の不名譽です、意見の衝突するなどゝは未だ貴女がお若いからであります、婦德は水の物を潤ふす如くなければならぬ、決して反抗するものでありません、女子は登ひ離しなどゝ、威張て居る亭主をして內心に女房でなければならないと思はせるが貴女の技倆にあるのです、此處の呼吸が合點參いつたら離婚は中止なさるがよし。

△川上十七歲女に答ふ‖良人は明治七年、九年、十年、十六年、十八年、十九年生の男に付き選まれて吉、軍人、銀行員、金物商、米商等の職業を可とす。

△川上十八歲女に答ふ‖明治六年、七年、十五年、十六年生の男子と結婚せば大吉、僧侶、神官、農業、會計員、醫師、材木商、飲食店等の職業は皆なよし。

△深思女に答ふ‖貴女の心配は全く猜疑心から起て居るのです、今日では良人に密婦と云ふやうなものはありません、向後貴女の仕向け次第でないものも出來るやうになるのですから、此處婦人のたしなみが肝要です。

△白露女に答ふ‖病氣の一心岩をも透ふすと云ふ諺もある通り、貴女は學問も出來、家事の經驗もあり妻女としての資格は出來てるから、此上意志さへ確かであれば理想の工學士でも又颯々しい古武士風の男でも婿に持てます。

△春野すみれ子に答ふ‖意思は慥に感通して居るから結婚は成立する見込あり、併し三ヶ年間の洋行であるからそれを待合せられる貴女も後れぬ丈けの新智識養成が大切です。

△高知縣いなかものに答ふ‖御心配なさらなくとも大丈夫良人の愛は永久に保てます、病氣の爲には一寸良人に嫌はれなさる方が宜しい、全體病氣は不治の症でありませんが唯再發し易い質ですからお困りになるのです、コツクの素養を磨して專門の名譽にお縋りなさい。

△京都のさつき女に答ふ‖婚約整ひ近々目出度お輿入の趣き祝賀いたします、扨て御尋れの夫に事ふる道と云ふは、何時も結婚當夜の心持で居なされば偕老同穴保險付です、併し氷の月日それが實際中々六ヶ敷いのです。

△山奥の女に答ふ‖母堂の手傳をなされて幼妹の世話をなさるは將來の母たる貴女には良い經驗です、時に婚期は早い方でないのだから相當の縁談は交渉なされてよし、開運は結婚の後であります。

△神戸の田中みつ子女に答ふ‖結婚さるゝが何より吉、親類が世話し

て呉れなくとも、又身内や同胞がないからとても心配には及ばず、一心同體の良人を得て御覽なさい是れ位頼母しいとはありません。

△兵庫一老母に答ふ‖良人に永訣なされて寡で居なさるとはお氣の毒ですが、是れは貴女の頼御許りでない世間には斯る不幸な方が澤山ありますから、此處はあきらめ一つにあるのです、幸ひ獨身生活の考もあるとゆえ、再縁のとですから急がずともの事、徐に良縁をお待なされ。

△エスキモー頬悶女に答ふ‖貴女の現在は密雲にして雨らざるの象である、既に十分雨意は催し居るに係らず雨とならずに居るのです、結婚の機は熟して居るから結婚するより外に道はないのです、將來は先づ無事です。

△大森の女に答ふ‖独身で遠洋航海は遠慮なさるがよし、此處は良人の勸めに從ひなさるが至當である。

△京都某女に答ふ‖貴女の運命は子供の成人に依て開けるのですから、良人の大酒亂暴が如何に苦しからうとて決して再び死ぬ氣など出さないで、老後を樂みに母たる天職に殉じなさい。

△再度の失敗女に答ふ‖二三年來の失敗に元氣は餘程沮喪したと見えて未運氣は向いて居ない、秋頃の思はくは控へられてよし。

△紀伊の煩悶女に答ふ‖養子は成るべく低い處より迎へるがよし、東京まで出て勉強した程の男は大抵土臭い田舍娘は嫌ふものだから、矢張田舍育ちの二十四歲男にお定めなさるが將來家の爲です。

△世を厭ふ女に答ふ‖父母の許諾を得られない男子を慕ふて他へ縁付氣になれないからとて獨身生活をなさるとは間違ひである、斯る薄弱な動機では末の遂らるる筈はありません、正式に求婚の出來ないやうな婿に將來の見込みもあつたものでない御反省なさい。

△遠江の山奥女に答ふ‖婚期は熟して居るから明日にも縁談あるべし、銀行會社の取締役、軍人、外交官、音樂家、金物商、農業家等よりの求婚は應ぜられて吉。

△待女に答ふ‖貴女が求婚を謝絶されたとて男子が厭世家になりはせぬかとは一寸自惚過るじやないか、舅姑がある爲め辛抱出來まいとは是れ又今時意氣地のない話じやありませんか、勇氣をお出しなさい、廿一歲と云へば嫁入盛り結婚は早きを吉とす。

△梅雨降子女に答ふ‖人に尊卑の例ありても職業に貴賤はない、眞面目に從事せば何業によらず神聖です、女子の手でするとは大抵甲乙はないもの老舗ある從來の家業に出情なさるがよし。

△三貫の不幸女に答ふ‖或人が女房は米の飯なりと云つたとがあります、貴女も良人より米飯としての愛には變りがないではありませんか、近頃良人が花柳の街へ出入さるは、良くないとですが一時の出來心ですから餘り氣になさらぬがよし。

△心痛女に答ふ‖良人の猜疑心には嘸お困りでせうお察し申しますが、婦人のたしなみは今 に在るのですから徐に辛抱なさい、疑ひの雲は屹度晴れます。

△京都おたふく女に答ふ‖廿一歲の男子と結婚なさるが吉、求婚を斥けられたとて惡聲を放つとは卑劣極るとです、縱令恩人なりと顧みるに及びません、貴女は稍少き孤見なり日頃の親切に對して餘儀なき要請に一回握手接吻に應じたりとて罪惡ではありません、併し男女の間に好意を表するには別に作法がある以後は御注意なさるがよし。

△こゝろきまらぬ女に答ふ‖貴女が親子ほど相違のある良人を持ち多くの繼見を育てなさるも縁あつてのと、今日に及んで他から彼れ是れ非難したとて輕く離婚する譯のものでない、貴女も承知で繼見が柔順で良人が親切であるとすれば幸福ではありませんか。

△社會に迷ふ女に答ふ――地獄で佛と云ふことがある、不人情許りの中で不圖一人優しい方に出會たのだから、天にも地にもない良い人と思ひ込まれたも乙女心の無理はないが、經驗ある親御の意見は何處までも聽かればなりません、馬には乘て見よ人には添ふて見よで自分の亭主とすれば、云ふに云はれぬ好い處も出來るものです、獨身生活は覺束ない。

△九州無名女子に答ふ――法律は女子が十五歳に達せない內は父母の同意を得なければ結婚を許しません、貴女の一存での婿定めは今二三年お待なさい、併し合相の上から見ると先方は貴女の見込で居るほど未來は幸福でもないやうですから御再考を勸告しておく。

△あやめ女子に答ふ――尋常の家庭でも養子するは一倍の損あるもの、況して兄弟三腹にもなり男子さへある貴家の ことですから十分な養子は先づ得難いが當前である、故に嫁入の方針をお取りなさるが結婚には上策とす。

△無記載現金女に答ふ――お氣の毒ながら美文、消息文の載らなかつたは選に當らなかつた爲め、衞生顧問前以て同樣の質問が他から出て居たのでせう、又人事判斷は眞面目な質問と信ぜられなかつたからです、貴女許りではない大切な身上話を匿名なればとて端書などで申越される方が少くない、試みになどゝ御尋れは總て沒書といたすのです。

△寒村の一女子に答ふ――明治六年、七年、十五年、十六年生の男子と結婚されたら大吉、神官、僧侶、教育家、銀行員等の職業の方がよろしい。

△山澤能子女に答ふ――山間僻地で子女の教育が出來ないから五歳の幼兒を都會の親戚へ托したいとの御希望は好くありません、幼年の教育は馴れた方がよろしい取扱しは寄寓に付くものです、十歳未滿は母親の手元で養育してほしいものです。

△周防の迷ひ女に答ふ――何も運命とあきらめて家の爲に犧牲とおなりなさい、君國の爲に名譽の戰死を遂げられた良人に對し天晴れ貞順の節を全ふうとなさる見上げた貴女であるから斷腸の苦みはお察し申ます、若し遺兒が男子なれば何處までも所志をお遂げなさることを喜びますが、今は枉て舅姑や實父母の御意に從ひなさることを勸めます、婚約な捨てゝ、結婚する義弟のことですから滿身の愛を捧ぐるでせうからそれがせめてもの慰藉となります。

△靜岡縣かく女に答ふ――新婚の新枕交すや交はさぬに思ひ掛けない良人の外征、後は氣六ヶ敷い姑に事へて永の留守、いよ〳〵凱旋と聞く嬉しさも束の間で、良人は酒色に耽りて內を外な振舞ひ片時も安き瀨なしとは如何にもお氣の毒な境遇です、併し良人も名譽の負傷が平癒しての凱旋でありますから、眞に萬死に一生を得られたので云はゞ氣保養の放蕩でせうから、今暫らく御辛抱なさるがよし、何れの方面を見ても未だ誠に開運とは參りませんから靜に落着て居らるゝがよし。

△川端やなぎ女に答ふ――方針は再縁に限る、嫁の選擇を誤り一ヶ月計にしての離婚であつたから過を再びしては宜しからず、愼重にしてお出でなさい。

△大阪の苦勞女に答ふ――廿九歳と云へば晩婚ですから今一二年遲くなつた處で婚期を失すると云ふ程でありません、隨て折角の良縁であるから婚約の上今まで通り弟妹の世話なされつゝお待ちなされるがよし。

△迷へる女學生に答ふ――東京遊學は卒業の上でのこと、今は一心不亂に學科の勉强最中である筈なるに、彼れ是れ煩悶するとは沙汰の限りです、結婚の專門研究は成功覺束なし、折角の目的も水泡に歸しますから、學科の選擇を誤らぬやうになさい。

△美濃の飼女に答ふ――令兄の留學中でもあり兩親の下で家事の練習をなさるがよし、最早や結婚期のことであるから奉公する考へより嫁入り

の準備をなさるが順序です。

△松風子女に答ふ‖それは煩悶するまでのことはない、他より縁談のありかけた節、先方へ正式に結婚を申込み呉れるやう御通知なさるまでのことです。

△徳島縣某女に答ふ‖不具な令姉の保護の爲め家に居て婿養子をお取りなさるとの事は實に宜しくありません、貴女が夫婿中睦じきさまを姉上に見せ付ける様になれば、保護所でない只さへひがみ根性の令姉は忽ち發狂して仕舞ふでせう、他へ嫁付かるゝが吉、姉上の運命は自ら不幸ものとあきらめるが一日早く付けばそれ丈け幸福になるのです。

△山里の煩悶女に答ふ―一たび叔父の暴慾の犠牲となれば開運は駄目です、幸ひ都に依頼すべき方があるのですから兎に角上京してお縋りなされ、決して此際落膽してはなりません、上京の期は八月、九月の兩月の中に限る、此時ならば屹度好都合に運びます。

△伏見町の心配女に答ふ‖母堂にはお氣の毒ですが家門の爲め婿の出世をお樂みなさるより外に道はありません、此以外は何事も運命ですからあきらめて我慢なさるがよし、又貴女も良人の側で出産なさるが吉、若し此際母の元へ歸られるやうなことがあれば、將來は悲き境遇に沈まねばならぬとお覺悟なさい。

△近江の靜枝女に答ふ―不出戸庭无咎と云ふ境遇でありますから、決して〳〵養家を出てはなりません、結婚の事と臨機の處置をお取なさい

△信州すわ子女に答ふ‖貴女の結婚は無理な成立でありましたから今日の結果は當前免れられない處です、頓て貴女の希望は達せられる期に近いて居りますから、來る十月若しくは十二月の内に決行して然るべし。

▲以下の解答は六月上旬に接手したるものなれど判者の都合により、遅延せり、質問者は其心にて見らるべし、猶來月よりはなるべく解答を急く事に致します、端書の分は解答致しません。

▲牛込青柳女に―此の縁は今貴孃が期してゐるやうに幸福でないのが殘念に思ふ、先方の仁は、普通人ならば子供の三四人もあるべき三十九歳の至る迄、獨身を守つて居るのは、一家の餘儀なき事情の爲とは言へ、甚だ氣の毒な境遇、然かも婦人の情に漏れざるは、ハイカラ風の吹きすさべる今日、世に奇異らしき人物なりと判者は深く貴孃の心事に同情するのであるが、けれども無理に仕上げんと思へば此の縁は結ばれざるにあらざれど、後には身を落とす心配あり、それに御兩人の間に出來べき二人のお子供も一人は魯鈍にあらざれば孱弱―どうも面白くない、故に年内に良縁あれば他に嫁せらるゝ方可なりと判ず、且つ貴孃は御婦人としては父親の性を受けて確實であるが、情に強きは白璧に微瑕、御注意あるべし。

▲煩悶女に‖貴孃の如き身分にて煩悶沙汰は、聊か仰山にて滑稽のやうにも思はれます、それは本年一年丈凝然として辛抱して居られれば、來年二月後には良縁あり、貴孃はその縁を外さぬやうに爲さると將來の運性は吉。但し年内に縁談あるも貴孃の爲には甚だ不吉ですから先づ其儘兩親の仰せを守つて居つたのが上分別です。

▲なんぎ女房に‖御手紙が判者の手に入りしは六月上旬、最うお子供がお出來ですから、卦に依つて判ぜば六七月分娩なれば離座に近かく、八九月なれば安產であります、「私は誠に心配事多く、とても紙や筆には盡されませんが、長命を保つことが出來ませうか、親に先立つ不幸を思へば……」など仰せらるゝは餘りに氣が弱いと申すものです。

▲廿一歳心配女に‖誠に御不幸な身の上、御察申し上げますが、貴姉の生年月や、御亭主の生年月が判りませんから、御運性は判然解らぬが、

生月は二月、或は五月、然らざれば十一月であるとすれば、今一人二人は殖ゑるのは銓衡なし、但し此の外の生月であれば今暫らくにて御迷性が定まりますから、氣を屹然持たれた方が宜しい。

▲片山里の賤の女に‖貴嬢は兄上も居らるゝ事ゆゑ無論他へ出らるゝ方であるが、口數さへ愼んで居らるればその中に縁談も出て參りますですから餘り言葉を飾らず淸淨に身を持ちなされば、末には運性の開くことを受合つて置きます。

▲憂き子に‖御良人の年齢は御書面には出て居りませんが、多分三十五であらうと思はれますが如何、若し三十五か三十八なれば、良人のお子であらうと思はれる、引き取つてお世話なさつては如何です、お苦しい事もあらうが、何も御良人の爲め、一ト辛抱お勸め致します、御書面に依れば、良人は滿身の愛を注いで居らるゝといへば、過去の事はほんの若氣の失錯ですから今其の水子を引き取らるれば、良人は貴姉の心情に感じて、家庭はます〳〵圓滿に爲りゆくに相違ありません。

▲さゝ波女に‖丈餘の長文にて細々と衷情を披瀝せられたるは、判前も兄弟思ひの貴姉にはほと〳〵感服しました、先づ弟御より判斷致せば此のお子は人間が利巧であるが、手前勝手の癇癖强ひ性質であると見受ける、學校の成績が惡いのも遊戯盛りの腕白時代であるからで、行末は貴姉が心配なさるほどの事はないと思ひますから、今一年ばかり氣を長くして見ては如何です。成程弟思の貴姉としては此の儘致して置くのも氣が氣であるまいとは思はれますが、其の中に見當が附きますから暫しの間成行を見て居らるゝのが上策です、心配なのは妹御ですが、偶然すると或は此方は親御の名前を繼がるゝかも知れず、若し縁附けるならば今年は幸運ですか、若し今年が不良ぬとなれば明後年です、男は二十四五、然うすれば二十八歳が合性となつて居ます、折角樂しき家庭を作られながら實家の此の心配、氣苦勞は察しますが少年の教育は理屈で矯るものでもなく、左りとてくよ〳〵案じてばかり居ても何等の益もありませんから成る可く氣を綏然とお持ちになる事をお勸め申します。

▲心配女に‖貴姉の境遇は誰かの小説にでもあるやうで、兩親には早く別かれ、祖父祖母の手で育てられたといふから、幼時より相應に苦勞爲さつたのが、判者には歴然と眼に見る様の心地がします、二十歳の時にすでに破鏡の嘆に陥られたのは、よく〳〵不運なお方。それが末頼もしき二十一歳の青年に邂逅れたのであるから、意見かすつくり合つて互に精神が投合したのも、判者には見えるやうに覺つて居る。若し貴姉の身分が三人の子供の親でなく、互に獨身の人達であれば判者は一も二もなく夫婦と爲られんことをお勸め申すが、事情は其様小説のやうに手輕くゆかぬのは兩人に取つて惜しむべき事です、夫れ故此の青年は生涯獨身で徹ほす事の出來るものならば永久に交際が續くであらうが、青年の一身を擧げて貴姉の爲に犠牲にする譯にも行くまいから、寧ろ今の中に交際を絶たれた方が吉と思ふ、それは青年の爲にも貴姉の爲にも忠告する。汚はしい交際でなしといふ御手紙を信じて判者は眞面目に答へて置きます。

▲柳生女に‖韓地へ行くのは此上もない大兇、職分もお有りなされば今暫らく韓地の方は見合せたが良いでしやう。

▲岩代の其の母に‖兩方とも縁は近きにあり、長女の方は東か、南か、羊申の方角より縁談あれば、應ぜらるべし、妹御の方は北、それでなければ南と西の方角より縁談あれば當人の運は開きますから、決して左程心配するには及びません。

▲娘を思ふ母に‖娘御はまだ十八歳とあれば、今一二年俟たるゝも

吉、度月は度月でありますか、それに依らなければ婿君の年齢を判断する事は出來ません。

▲花あやめ女に――御兩親が其の氣であれば、此の戀は成就しましやうが、貴孃が餘りに思ひ込んで居るのは將來能くありません……背の右側の痛は全快するから、安心なさい、顏面の出來物は判斷の限りでありません、醫者に診察しておもらいなさい。

▲池端の文子に‖貴孃はまア何んといふあどけなき女でしやう、帝國大學の人でも他の大學の人でも、皆んなまだ親の仕送に依て勉強してゐる身の學生ではありませんか、假令先方に此頃流行つてゐる愛とやらんいふものがあるとしても、其れは貴孃の身の行末に何等の幸福も與へませんから、よく注意なしなければなりません。

▲栃木縣愛讀者に――貴女の御希望は一應道理と思へますが、世間は其樣希望通にゆくものではありません。お友達で東京へ出て女子大學へ入つた方もあらうが、中には東京で縮尻つた人も一人や二人でありません、矢張御兩親の仰せに隨つて、柔順に國に凝然として居られた方が吉其のかはり種々の雜誌を讀んで世事におくれぬ樣に」といふ御心掛はいつも無くなさないやうにしなくてはいけません。

▲駒込の松風女に‖二十五歳の貴孃に、二十六歳の男子、一年の相違で、稍か同年に見えますが、他の親戚にて確實なる人物との評があらば、矢張此の人を夫と定めて立身後棄てられるやうな事はありません、只貴孃のお心掛一ッ。ですから氣を確かにしないといけません。

▲長崎のかり舍女に‖卅五歳の貴孃が今に獨身とは、家庭の御事情とは言へ氣の毒千萬ですが然し、精神は大きくお持ちなさい、一生運決して埋木に終るとはあるまいと思ひます、御兩親の生年月及貴孃の生年月を詳しくお知らせ下さい、判然と運性を見て上げましやう。

▲ゆり子孃に‖貴孃は十九年生だといへば年は呼ぶ年二十の花盛の、縁附き最中ですが、二十七歳、二十九歳の人を夫と爲された方が幸福です、多額納税といふ家柄に產れたばかりでなく、將來の運も極めて吉です。

▲思案女に‖御希望は至極良好だが、其の心掛さへあれば希望は七八分通りは達します、まだお年頃ですから精一杯御勉強なさい。

▲栃木ＹＡ　生に――お考は間違つて居る。餘り高尚な望を出さず、相當の處に縁附かるべし。

▲紀伊の不幸者に‖不用扱にされて居ると思はるゝのも、判者は僻疑とばかりも申しませんが、幾分欺心の持ち樣もありましやう。此の心の持ちやうにて苦勞の雲晴れて樂しき運性に向へます。

▲丹後の某女に‖今暫らく主人に仕へて居らるゝ方が、貴女の身に取つて大吉です。

▲苦勞の一婦人に‖御心中お察し申上ます、但し御良人は貴婦に對して大した嫌氣もなく、青年の血氣に任せ、一時の出來心より失敗に陷つたものとせば左まで求むるにも及ばぬではありませんか、若し想像が中れりとせば良人の苦を分けるやうに仕向けられては如何です、すると口に出さずとも貴婦の赤心に對して御良人は身を愼むこと受合です「如何なる談判が初まつて居るであらう」などと考へず、良人に同情を寄せて、その行末を心配するが一家和合の良策です。

▲あや女に――陽氣な職業があなたの性に合ひます。

▲東京女に――お子供は出來ます。

▲兵庫女に‖餘り深思爲されずば年内に良縁あり、獨身生活は不吉。

▲奈良ＺＺ女に‖御心掛は感服いたしました、父上と御相談の上篤と人物を研究爲されたらば如何です。御心中さへ判れば父上も御了分

の意をのみ徹すとは申されますまい。

▲女學界愛讀女と靜女に――御質問は、寧ろ衛生顧問に属して居ます、判斷の限りでありません。

▲はたちの女――先方には別に異狀なし、貴孃が思ひに思い拔かるゝほど先方の男子は思つてゐるかといふお尋なれば、どうも御滿足を與ふる譯にはゆきません。

▲不幸女に――その中に良人の心は和らぎます、赤心を以て、良人を慰むるの外道なし。

▲市内しのぶ女に――御姉弟の睦しきは、幸運の恭です、「特に姉上の余に盡したるが如く余も又姉上に學資の煩はかけまじ」との言は如何にも健氣〳〵の事です。併しながら「病氣に成つたら其の時さ」といひ令弟の説も御志は殊勝ですが、世間の例に做はれた方が得策ではあるまいか、なほ御兩親の生年月、御令弟の生年月が分らなくては此の運性を詳しく判斷する事は六ヶ敷です。

▲紀山の心配女に――「如何ほどの事情ありとも辛抱致したい」といふ御精神なれば、此處一二年の中に良緣あり、相當の處なれば慾に關係せずして緣附かるべし。

▲米澤の考へ女に――從兄と結婚なされて吉。

▲廿歲の女に――親御の御選定になつた廿一歲の男とは合性も至極宜しいから結婚なされたら將來は幸福です、之と反對で貴女の勝手に見立て、居る方は萬事凶。

▲鳥取の一女に――親御が心配して進めなさるに係らず三十歲の今日尚ほ結婚されないとはドーした不量見です、若氣の一徹で縱令獨樓が出來たところで、五十六十の老後に及んで、生みの子を持たいでは世にこれ程心細い不幸はありません、如何に骨折て育てゝも貰つた子では痒い處へ手の届く世話はして呉れません、又金を山程積んでもです、金は冷たいものドーしても温い血でなければ駄目ですから能く〳〵御思案なさるがよし。

△露の尾花女へ――貴女の天稟は極て英敏ですが、悪く云へば神經質で人一倍物に感じ易くその上勇氣が乏しい、而も多少文學の嗜好があるのでその中毒も手傳つて居るであらふ、今日では一種のヒステリー患者とも云ふべく健全なる精神狀態とは見えないから、勉めて靜養なさると同時に大に勇氣を振興しなさい、さて貴女の運命は無爲風の二爻に當り柔順にして協力者に從ひ事をなさば間違ひないが、單獨で自儘に遣ると總て不成功に了るのです、故に若し寡獨の身となつての助力は却て令弟が足手纏となり後悔を増す結果となるのです、又貴女の神經質では徹姫中が思ひ遣られます過ぎたるは及ばざるが如く胎兒の位置を誤診する悲劇も出來したのです、二度でさへ氣も狂はんばかりなどゝは女子の天職を何と心得へて居なさる、大砲、常陸山とて牛馬の產でなければ下らぬ心配を廢して、寧ろ孝兒を擧げれば死ずるも瞑せずとの覺悟で、五人十人多々益々產する勇氣をお出しなさい、今次の姙娠には若効なる產婦に依賴して至極ノンキにお暮しなさるがよし、次に令弟は决して成功を急ぎてはならぬ、一年勉強して一年休學すると云ふ方針ならば至極妙。

△日東向生女へ――不穩無事な家庭を今日事を荒ら立てゝ離婦など持出すに及はず、惡むべき男の歸り來るまでは其儘になさるがよし、若し他日爲々止むを得ないときは何處までも事實を非認なされて、世間をして彼が慣用手段かと思はせ、表面より令兄を以て幾分の金與へて落着せしめる方法をお取りなさい、實にお氣掛りはお察しますが决して落膽すべからず。

園藝

園藝の樂

藤葉女史

私は忙しいから、とても園藝などゝ云ふ呑氣な事に手を出す暇はありませんとよく聞きますがそれは大きな間違だろうと思ひます、云ふ迄もなく日進月歩の今の世の中ですから日々に爲すべき仕事の多くなるのは當然で又最も結構な事です、然して斯樣に世の中が忙しくなるに從つて益々園藝など云ふ事が必要になつて來はしまいかと思ふのであります。

又或人は私共は忙しいから猶斯ふして庭いぢりや、畑の眞似事をやつて居るのですと云はれたが實に理のある事で、目の廻りそうな社會に出ていろ〳〵に腦や身體を勞する事が多ければ多いだけ一方では之れを慰め、樂しましめ、將休ませなければなりません、其處で之れ等の慰安を得る方法は幾何もあるでしようが此園藝など云ふ事は亦最もよき手段であると思ひます。

植物は私共の肉體に缺く可らざる大切なものであると共に、又肉體以上我々の靈即ち精神にも限りなき處の糧を與へる大切なものであります、誰も花に對して怒るもの、不快な感情を抱くものはありません、昔の人の句に

むつとして歸れば門の柳かな

と歌つたのは一面優しい婦人の美を表はしたのではあるが其美を植物に依つて云ひ表はしたので、其他植物に依つて種々の美しい感情を云ひ表はした歌や、俳諧や文章は澤山にあります。

斯ふ云ふ風でありますから苟も家の週りに一坪でも半坪でも空地があるならば、其處に相應しい花や草を植ゑて夫れを培養する事は只に美しい花を樂しむと云ふばかりではなく家庭の融和をはかる上に於て著しい感化を有するものです。

花も木もなき荒陵にさびしく立てるひとつ家は如何

にも物凄くさびしそうて誰が見ても一つの暖いホームとは思はれない、家の主人が一日の勞を休むべき己が棲み家に歸つて來た時に此乾燥無味寧ろ物凄い樣な家に這入るのと、たとへ少しばかりの地内でも植物の種々が生ひ茂つて居る處に入るのと何れが優つて居るでしようか。

要するに園藝の主眼たる要件は、徒に廣い土地を以て貴しとするのでもなければ、又徒に珍奇高價なる花木を以て貴しとするのでもないので、只夫れを見る人作る人の性情の如何に依るのだろうと思ひます、誰でも我身を愛する樣に亦植物を愛する心掛けが最も肝要だろうと思ひます、夫れ故之れから園藝に關する注意を二三記して見たいと思ふのである。

▲土壤

園藝をするに就て一番大切なのは土壤であります、勿論此土壤とても其處に植ゑる植物の種類に依つてそれぞれ違つて居ますが、然う云ふ細かい事は多年の經驗に依つて分るので栽培の方法とか、氣候とか、種々の場合に依つて中々一樣に云はれるものではありませんから、只一般に亘つた處の事を云ふので。

誰でも知つて居る通り植物は根から自分の身體に必要な養分を吸ひ取つて葉で夫れを消化させ、植物の體質と同じ樣な性質のものに化して夫れを以て次第に成長して行くのである。

夫れで根から吸收するものと云へばいろ〳〵あるがどんなものでも水に溶解しなければ自由にそれを吸收する事は出來ない、如何に多くの肥料が有つても夫れの溶けるべき水分が無い時には何にもならないので、即ち土地には適當の水分が無ければならない。

夫れで水分を適當に保たしめる爲めには土地をよく細かに碎く事で、極く細かにした軟かい土地は毛細管引力と云ふ働きに依つて水分を宜い工合に保つ事が出來るので、此作用は土が細かくされて土と土との間に多くの空隙を造る樣になるから、其間に水を含む事が出來る樣になるのである、夫れ故土を細かくする事は植物の根が成長する爲めに必要であるばかりでなく水

分を保たせる爲めにもなるのである。

▲肥料

其次ぎには肥料で、凡そ植物が成育するに必要なる肥料と云ふものは元素として見れば僅から十元素位で其主なるものは窒素、燐酸、加里、苦土、石灰、硫酸鐵、鹽素等で、之れ等のものは、大抵の土地に自然と存在して居る只其內で不足を來すものは、窒素、燐酸、加里位なもので斯樣に種々のものがあるけれ共大抵は一所になつて働くのである、併し皆が皆同じ効能があると云ふ譯ではなく中には亦それぞれ特別の役目を持つて居るものがある。

其一二を擧げて見ると、植物は其葉でも、莖でも、根でも凡ての處に窒素を含まない處は無いから、植物に取つて窒素の必要なのは勿論の事で、之れは如何なるものから取るかと云ふと、硝酸曹達、アンモニユム、又は普通に用ひる處の人糞尿などから主に吸收するので、之れ等の肥料はどんな効能があるかと云ふと之れは主として植物の葉や、莖の繁茂を助け植物をして速かに成長させる、又植物を軟かにする樣な効能があるのです。



併し私共の經驗で實際植物を見るに、餘り葉や莖が勢よく成長したものには花の着き樣が少ない樣に思はれる、即ち木の勢力が皆他の方にのみ行つてしまつて花の方には餘り行かないのである。

其處で花を咲かせ樣とするには、窒素質のものをやると同時に、又花に必要な處の燐酸を多く含んだ肥料をやらなければならない、燐酸肥料として今日一般に用ゐられて居るものは、過燐酸石灰、重燐酸石灰などである、油粕や鯡の絞粕の樣なものは燐酸と窒素との兩方を含んで居るから大變に都合がいゝ、實際燐酸肥料は窒素肥料の樣に澤山にやる必要はないが之れから追々に咲くあさがほの樣なものには是非ともやらなければならないものです。

其他に加里類の肥料は如何なる効能があるかと云ふと窒素肥料を施して葉や、莖の軟かになるのに反して夫れを强固に生育せしめるものである、彼の木灰などの中には多くの加里を含み、且つ燐酸も多少含んで居るのである。

斯樣に細かく云つて見ると夫れ〳〵其効能が違つて居るのであるが、其の植物に依つて、之れ等の注意を忘れずに適當に混ぜ合はして施す事が必要である。

彼の堆肥と云ふのは之れ等の諸性分を適當に含んだものであるから園藝家に取つては大切な肥料と云はなければならない。

肥料を施す効能は只之ればかりでは無い以上の樣に土地を肥沃ならしむると共に、今一つは土地を改良する事も出來る、石灰の如きは土壤の酸性(此酸性と云ふのは土地に種々の有機物が混ぢつて夫れが分解したりする時に起るのである)を中和し、其上に又粘土の如き固まり易い性質の土を程よく軟らげ、砂地に施せば之れを緻密ならしむる等の機械的の作用をなすを以て肥料としての効能よりも此方に大なる効能を持つて居る、以上の如き肥料を施すに付ては如何なる注意がいるかと云ふと。

粘土には一度にやる肥料でも砂土には何度でも分けてやらなければ皆流失してしまふ。

夫れから成長期の長いものにはなるべく分解の晩いものを施すのが宜いが、人糞の樣な分解の早いものを施すならば其發育中に何度も少しづゝ分けて施さなければならない。

凡て植物が養分を吸收する時には鬚根と稱する細い根の先から吸收するのであるから、肥料をやる時には此注意を忘れないで、餘り根際にやつてはいけない只益が少ないのみならず時には根を損ずる事もある、凡て植物の根と云ふものは葉や莖が空氣中に於て四方に廣がると共に矢張り地中に於て四方に廣がるのであるから葉や莖の廣がつて居る廣さの範圍内には根も廣がつて居ると思つて餘り間違ないのである。

▲蒔付けと、植付け

地拵へが出來たらば次ぎは蒔き付けと植付けで、小さい種子は土を極く細かに篩つて其上に蒔く、指の間から洩る樣な小さな種子は中々むらのない樣に蒔くと云ふ事は困難で、斯う云ふ時には砂と一



所に蒔くと大變に蒔き易い、土はどうしても其種子の大きさより疎くてはいけないと云ふ事である、凡て土はどの位被せるかと云ふと種子の大小や、種々の場合に依つて違ふが一般にいへば種子の大きさの三四倍の厚さに掛けるのがいひと云ふ說もある、併し砂土には深く、粘土には自然淺く蒔き、旱天の時には深く、濕潤な氣候の時には淺く蒔かなければならない。

夫れから此種子は春の彼岸に蒔くべきものとしてあつても氣候の寒暖に依つて、寒い處ではそれよりも晩く蒔かなければならない。

排水の不良なる土地は良好な處よりも春は晩く、秋は早く蒔き、寒地と暖地とを比較すれば寒地はどうし

ても生育が惡いから多少密に植ゑても差支は無い、瘦せた土地は肥ゑた土地より疎に蒔かなければならない事は取るべき食物の多少に依つて云ふ迄もない事である、苗を植ゑる時の注意、苗を植ゑるには曇つた日を擇んでするのが宜いが、又然ふ行かない時には葉を半分位に切り縮めて植ゑると日中でも大抵枯れずに生へ付くものである、之れは何故かと云ふと。

植物は根の働きと、葉の働きとは常に平均して居なければならない、之れが其一方例へば葉を皆むしつてしまへば大抵の植物は枯れてしまふ、根に於ては云ふ迄も無い、然るに今植ゑかへる際に、根はまだ充分に土に落ち付かないで弱つて居るにも係らず、葉が依然として其働きを續けて居ては根との平均を失つて終に枯れてしまふ、其處で其力を平均させる爲めに一時葉の勢力をも縮める樣にすると云ふのである。

之れと同じ理屈で大きな木でも植ゑかへる時に根を切り縮めたらば枝も夫れに準じて切り縮める事が必要である。

植ゑかへる時期は大抵秋、葉が落ちて後か、春芽の出る前に行はなければならない、之れは植物も動物のあるものと同じ樣に冬の間は葉も落ちて用をなさず、根も吸收の働きを止めて殆ど枯れたも同樣な有樣で居るものが多い、之れを植物の冬眠とでも云ふので、此間に移し植ゑるのが最も得策なのである。

誤つて根を傷けた場合には其傷口を更に鋭い小刀で切つて滑かにして置かなければならない。

夫れから遠方から苗木を送つて來た場合などには、夫れを急に水の中に浸ける事は最も惡い、斯る時には自然と濕氣を含ませる樣に日蔭の處か、少し濕氣の多い處に假に植ゑて置く必要がある。

▲灌水、排水

灌水をする時には必ず如露の孔の細かいのを用ひて平均に徐に蒔く樣にしなければならない、決してひしやくや、椀などで亂暴にやつてはならない。

併し如何に植物の發芽や成長に水分が必要だとは云へ其度を過す時は地中の空氣の流通を妨げて根は窒息

してしまふ、鉢植にした植物が原因も分らずに何時の間にか消えてしまふ樣な時には餘り水が過ぎたに依る事が往々ある、土の中にあるべき根が地上に出て來る樣な塲合には確に水が過ぎて、地中で空氣の流通を妨げられる爲めであると云ふ事が分る。

　夫れから今一つは發芽の時に水分が多すぎると、太陽の熱は充分に當つて居ても、水分が蒸發する爲めに芽の發達に必要なる温度が皆取られてしまつて從つて芽が充分に成長する事が出來なくなる。

　まだ書き立てたら幾何もあるけれ共徒に長くなるばかりであるから之れで切り上げる事として、青々と緑滴る樣な菜園や、いろ



いろの色を競ふ花園に立つて眺めるのは只眼の藥になるばかりでなく、新鮮なる空氣を吸ふて心身を爽快ならしめる、猶其上に植物の成長する工合や種々の事に付いて學理的の知識を知らず識らずの間に受け、注意力を増す樣になる。

　まして、主人が書齋の一輪挿にはき〳〵とした花を折つて挿し、一家打集ふ樂しき夕餉の膳に裏の畑から取り立ての蠶豆を味ふ時の愉快さは中々口で云ふ事は出來ないでせう。ですから、園藝はなか〳〵樂しみのもので、人の建康を助けるばかりでも他のものに替へられぬ利益です。

眞情溢るゝ姉の手紙

東京地方裁判所の公判廷に於て今村裁判長が牛込藝妓殺しの犯人田邊某に讀み聞かせたる手紙あり、これぞ田邊の姉なる早川みよが其の愛弟に宛て送りたる訓戒の書信にして一字一句悉くこれ恩愛の情を含まざるはなく滿廷粛として聽者いづれも同情の涙に咽びたりと斯る慈愛深き姉をもてる弟の如何にして斯る大罪を犯せる、眞に斷腸の至りならずや。

亂筆御判讀あらまほしく候日々降りくる雨に物おもふわが一身にはいとゞ哀れを催しぬ、ましてや御身前途に大望を抱きながら空しく一室に涙をのみて囚はれの身となる何ぼう可憐の事なるか雨につけ風につけ御身の事思はぬ日とてなく、いかに之を送りたまふか暑さにも冒されぬにや嘸かし淋しくおわすらん戀しき故郷の夢を結びたまふらん樂しかりし去年の暑わらは同胞打集ひ澄みわたる清き月のむしろに御身がのべし雄々しき思想ひそかに祝福を垂れ給はんとを祈りしも嗚呼過去の夢となりしか、おん身こそ杖とも柱とも思ひ前途茫然たる蒼海もを見事渡航を期せり姉は御身を過まてり弟よ決心を砂の上に建てしにや迷の夢未だ覺めざりしか一姉の爲め身鐵窓に囚はれ幾多の希望も水泡に歸し君が名よりも地に捨てざることを得ず嗚呼歎かはしきの至りなり思ひまはせば心亂れて糸の如し年老いたる一人の母君父君の早世をみまかり給ひしより一身をおん身等の爲犠牲に供し敎育ちう事に重きを置きおん身等が成功を明暮神かけて祈りし甲斐もなく何たる行爲ぞや醜を天下に曝し一家の不面目何の言を以て亡父の魂に謝せんか、只々指導の宜ろしきを得ざりしと仰がれ候度に勿體なくそじん候君が先頃公判の記事涙もて讀終らざりき御身の心いかに切なかりしか、姉三十年來初めてかゝる苦しき思ひぞいたし候御身もさもあらん、さりながら心の駒の狂ひよりぞかし、あれ程までに酒に飲まるな煙草ふかすなと肉親の姉なればこそ便りのほどに言ひ送りゐるを更らに用ひ給はず圓滿なる家庭をも棄て幾年月千辛萬苦の望みも水泡に歸せり君が心中を察せば涙禁ずる能はず嗚呼過去の事繰り返すとも及ぶまじ天にまします我等の神よ彼が心中をはかり給へ神よ願はくは彼に平和の慰を與へ給へ君失望したまふな全智全能の神われ等にとても居まし給へば御身安かれ思ひ煩ふ勿れ弟よすこやかにいまし給ふや暑さも日に増し厳しう覺ゆされればよく／＼心づけられ御身大切になされよかし神經衰弱は近頃よろしきや度々便りいたし度は山々なれども境遇を憚り思ひながら貴意を得ず只姉の心中御推察給はらん事を。

御老母初め一同無事にくらしなされば必ず御心配下さるまじく先は筆をとむ。

姉より

田邊五四三樣御許へ



美文

(秀) ある夜

盛岡日本鐵道社宅　山口ます子

ひろのあつさも名残なう消えて、かろきたもとをはらふ夕風すゞしく、月さへいともなかしけれど、そこはかとなくさまよひいづ。

こゝにそのかみ名ある人の庭在ありし處とかや、さまよき築山、大きやうなる池の面、うゑなしたる木々の姿もたゞならず、されども今はつくろひもせで花のみだれ散るも雨風の心にまかせたるさまなり。

かなたの池のみぎはにのぞみて立てるは、その昔よりの軒ばとかや、しげる草葉に椽のあたりをうづもらせながらも、さすがにえならぬすみかとは知られけり、軒ばにゆらぐは岐阜提灯ならで昔しのばしよともし火いと淡く打匂ひたるをむかいにあびつゝ、座したるは、年まだをさなき乙女子ながら、みどりに打げぶる髮のかたにそひつゝ末はるかに流れて下にこぼれけり、そのかたへには玉琴とも見ゆるがぬし待ちがほに横たはりたるを見もかけず何かひたすらに、本のやうなるもの手にもち添へて、ふし目にひもどき居るそのさまの優にまた氣高くしてこなたよりおぼろながらもそれとさやかにみやられたるゐもいはれぬあはれさ、よひにふみ見る嵯峨野の秋の物語など思ひつゝやるせなき心を琴の糸にむせばせ、月にかこち、世をうき秋のかくれ家とは、かゝる處か、かゝる夜なりしか、頃しも今は虫のれの千ぐさの露と打みだれ月さへすみてさえまはりたるを、さながら思ひは幾秋かの夢のかへらぬ。折もよしや、折もよしや、そもいづくよりぞ本のへにもろゝつまの琴れは

月はちぎれ／＼の雲、幾疊この中につゝまれて、梢の色黒く昔のさまはひときはさやかに浮びたり、なほ同じまゝに燈のやゝあかく匂ひつゝ。

妻琴のぬしや、そもたれならむ、ふとまた見ればかの影は立川よとして奥のかたに消えぬ、一つのこはれし燈の淋しげなるにはじめて心づきぬ、あなをかし、我ながらをかしともまたおもしろかりきなどてはかなき思ひをばまよはせつらむ。

いつしか琴のねもたえたり、かの人かげし再び見えず、吹く風ひやゝかにゆらぐ檜のさむげに見ゆるさへあるに虫のねまたふけておのが衣の白きがひとりさえて見えぬ。

（評）文なめらかにして、情景に詩趣あり、韻致あり、和文に達したる人の手すさびと見たは僻目か。

（天）其れでも男か？

尾張國小牧町中町　穗積榮子

お隣家の芳男様、妹は榮子。お年廿三歳にておはするが、お頭髪はチックとか申す鬢油にて、ピカ〳〵と眞ん中より御奇麗に梳き分け給ひ、ローナル水、二八水など絶えず用ひ給ひ、しやなり〳〵なりと妙な腰つきして御散歩をうつさせ給ふおしとやかさ。

この頃も御友達より富士登山勧められ給ひけれども、御み足弱ければにや、失敬し給ひてお離れの二階に閉ぢ籠もりてプープーと、バイオリン奏でさせ給ふ。お障子など開け放たれたる折には、微風に變な香料の薫送り來て、宅の者共怪しみて鼻うごめかすもをかし。

妾などお邸へ參りて、芳男様のお眼にとまるが最後人足遠き奥のお庭へ導き給ひて、新體詩とか申す西洋のお經をば、御聞き苦なし玉ひ、妾などには六ヶ敷くて解されぬ由申上ぐれば、御親切にもさらば註解して聞かせんと、宣ひて愛が何うの戀が何うのと、果ては金のおん指環二つまで飾らせ給ふ貴き御手に、妾が汚れたる掌握り給ひて、いやらしき戯れ言など、平常のおつゝしまやかに似もやらで、臆面もなく言ひ出で給ふ大膽さ、流石廿世紀の殿方はお見上げ申したるものなり。

（評）女は男らしき男を好むとか、此の篇當世流行の男らしからぬハイカラ男を罵倒して痛快、々々。文また巧者の筆と御見上げ申す。

（地）故郷を憶ふ

岩代國伊達郡小手川村川原　岸野常子

憶ふれば四年の昔温き故園の懐を出でゝより、途けくも天涯の孤客となり、千里雲へだつる異郷の空に、いたづきの身となりてこゝに幾日、逢えんともせで日々に弱りゆく、我が面かげや。

瞑目して靜に過去を偲べば、かすけき記憶の端を辿りて、夢の如く描き出さるゝ故郷のさま。千秋の翠を飾る愛宕山の下、悠久の諧音を傳ふる廣瀬川の片邊り、堤の上に柴垣を繞らして、やり水の響長閑けく漏るゝ一つ家、そはわが懐しきホーム也。花の旦、月の夕、老ませる父上と病多き母上とは、淋しう妾が業成らむ日を、指折り數へて待ち給ふ、夕顔棚の下陰、紋達の煙ゆたかなる處、なかしき宵闇のたゝずまひを賞しつゝ、われを語り給ふらむか。さるにても榮ある誉れの花を胸高く飾りて、温き故園の懐に歸るの日はそもいつぞ、遠く他郷に客となりて、落花の春を賦すること茲に四たび、流光夢の如く消え去りて、志業未だ半ならず、いつの日か懐しき膝下の孝養に侍するを得ん。

あはれ塵の巷にながくも夢の主人公たりしふる郷は、今親しく、我前に顯れぬ。幼馴染の親しき山蔭に青く、柴垣を繞る廣瀬の流は、昔前代

の遺音に響き、千古に白玉を結びつゝあるは、いかに苔と水との契久しき、かつては霜める眼に見返りしこゝの杜蔭も、今はわれを迎ふる緑門とも覚えて、小さき胸はいとゞ漲立ちつ。

迎ふる者より迎へらるゝ者の尙嬉しさ、慈愛にあまる父よ母よ、笑顔の中に浮ばせ給ふ涙には、感謝の涙を以て答ふる外、また何等の言葉なきなり、遊戯に餘念なかりし妹は、其優しき手を止めて來り、無邪氣なる弟は、罪しらぬ瞳を浮べてわれに擁しぬ、淋しき我が家は、暫時樂しき笑、喜ばしき矢を以て滿されしが、妾は竊に老父の額に寄る年波の加はりしを歎きぬ、老母の頭髮に置く霜の白きを悲しみぬ、あゝ我れあてなき世のあら浪に漂ふこと四年、志業未だ中ならずして、早くも父母はいたく老い給ひぬ、歸りて开が膝下に仕へんか、身を立つる能はざるを奈何、他鄕に遊びて業を修めんか、風樹の嘆亦知るべからず、惱みある胸は亂れに亂れて、暫し悄然と彳む折柄、隙間漏る夕風肌に沁みてふと眼を醒せば、身は尙冷かなる寢の裡、故鄕を偲びつゝ假寢せし夢なりけり。

あはれ懷しき故鄕よ、いとしき父母よ、ありにし似たる今宵をいかに過させ給ふらん、藥服むべくやをら起き上りて。そこかとばかり眺めやる夕の空、聲なく翔り行く鳥一羽、寂う落ちし杜の彼方、眠よりさめ出し明星の光かすかに何をか囁く。

（評）筆致趣味あり、懷鄕の情紙上に溢る。

（人）答　辭

筑前國嘉穗郡
飯田村上山田　松　村　三　保

戰雲こゝに收まつて吹く風も枝をならさず、降る雨も時をたがへず、久方のあまつ日かげの限なく照らす御代の光をあびて、今こゝに補習科修了證書を賜はることの忝じけなさよ、貴賓の臨場又其榮を加へたり。

つらく往時を回想すれば、我等此學びの庭におりたちてより、雨の朝も風の日も昔の根のれもごろなる師の君たちの御教をうけつゝ、吳竹のよとせが上に、補習科の業をさへ卒ふることのうれしさよ、仰げば高き富士の根も、臨めば深き鳴の海も、此高き恩にはなどかしくべき、此深き恵にはいかで及ばん、あはれ何にたとへてか之を謝しまつらん、あはれ何をもてかられに報いまつらん。

恩を謝する道唯一のみ、恵に報ゆる道唯一のみ、畏にかしこき勅語の御趣旨を奉戴し、心に尊き師の君たちのみさとしを服膺して、波風荒き世に出でん日、岩根こゞしき山路に行き迷はん時、其波風を打返さ彼の山路をふみこゆべき堅き決心もて、我等婦女子の本分をつくさんこそ、即ち此恩を謝すべき所以の道なるべけれ、此恵に報ゆべき所以の途なるべけれ。

されば、今より後も學びし道をゆるがせにせず、受けし教を守りつゝ、賤がうみ績のうむことなく、身をつゝしみ心をはげまし、誠をもて事に當り、日本女子の本分を全うせんこと、是れわらは等の願なり、今此盛んなる御むしろにつらなり、うれしさ身にあふれて謝し申すべき言の葉だに知らぬを、唯思ひ定めつる一節を述べて、謹みて御諭に答へまつるになん。

（評）具さに師の恩を感謝して餘すなし、文に結構あり、潤色あり、答辭の體を得たるものと謂ふ可し。

（秀）湖　畔　の　夕　暮

奈良縣山邊郡
豐原村助命　奥　中　か　ね

見渡す限り、はてしもない碧瑠の琵琶湖、遙か北の方には、滋紫の竪

田の畔や、緑青色を帯びた山山が、霞隠れの比良の峰に續いて、或は高く、或は低く、長汀曲浦の波に涼しく影を投げて居る。今し彩雲をもれて美はしい、眞紅の波を漂はして居た夕日は、早や西山に落ちて、糸の様な柔金の雲に一縷の名殘を止め、暗紫に凝せた波は、次第に藍色に溶れて行く。水天髣髴の沖合から、灰色がかつた眞帆片帆の群が、名殘を滑つて湖の上を辷るが様に、靜かに此方に參つて來るのは、失走の浦に釣をして居た漁夫が、家路を辿るのであらう。

折しも遠く撞き出す三井寺の鐘が、ゴオ……ンと一撃つよく夕暮の靄を破るとき、浮見堂の邊を徘徊つて居た雁は一度にパツと羽音を立てゝ、ハラ〳〵と空に舞ひ上つたが、再び友を集めて、三つ四つ二つ、そよ〳〵と風の吹く蘆間に下つた。何時しか夜の神の眼光が空に輝き初め、遥か向ふの漁家の燈の光が木の間を漏れて、夢の様に水に閃めき出した。

かくて空も水も全く夜の帷に包まれるのである。

（評）これ一卷の繪畫なり、觀察文として上乘のものと稱ふべし。

（秀）流　水

福井縣吉田郡
圓山西村開發　野坂まさを

軒近く流るゝ小川よ、なれはいづくより來て、いづち行くらん、其もと其末、尋ね見るも興あらんかし、人間はぬ深山にありては、果敢なきものゝ限りとすめる、峰の、こゝの木の葉、かしこの苔の下を、滑り〳〵積り〳〵て漸く、さゝやかなる谷間の流となりては、朝な夕なに行き通ふそま人の、乾ける咽頭をや、潤ほすらん、殊に照る日のかげの燒く計りなる夏にありては、いかばかり賤が仕業を勵ます料となるらん、岩にせかれて潺々たる音するを、聞きつけ走りよりて一掬に疲れを忘るゝ旅人もあるらん、里近き小川となりては芹つむ少女、小魚おさる童べ等を、樂しくあそばしむるよ又たかしこには、水車を回らして人の働きを助け此處には家々に湛へたる池に流れ入り、物清むるに便り善らしむ、築山の木立、岩のたゞずまいなどいかばかり巧みをこらして作りなしたる庭なればとて、筧に水の通はざれば何とかせん、水清らかに庭の小石さへ數へらるべき泉水に、魚どもの心地よげに遊べる様を見ては雅人もすが〳〵しくや覚ゆらむ、かゝる小川の集ひ〳〵て大川となりぬれば、船浮べて物運ぶ事の易きはいふも更なり、汀の景は見所多からん、花咲き匂ふ長閑けき朝、涼あみ涼しき夕、月澄みたる夜、さては雪のふりたる景など、四季折々の景色めでんと打ちつれだつ人々も多きぞかし、平和な流れにありては釣竿を携へて靜に樂しむみやび男もあるらん、其深く廣く流るゝ様は、木の葉苔の下を潜り來れる果とも見えず、其の功のいみじさよ、深く淺く、廣く狹く、濁りつ澄みつ、様々に流れての末は海に至る、あはれ晝ともいはず、夜とも限らず、絶えず流れ流るゝは限りなきを知らしめ、かしこはとく、此處は緩やかに、岩にあたりて碎けては遇ひ遇ひては碎け、物に逆らはずして流れゆくは、優しき心を諭すかと思はる、いでや、我等も流るゝ水の心をまなびつゝ、よしや、大川の流となりて世を益し、そこらの人を樂しましむる事能はずとも、せめては清き谷間の流れ、里の小川となりて、疲れし賤を慰め、可憐なる小兒を喜ばせまほしうなん。

文机の傍ら靜に書を繙く窓の中にて、庭のやり水のさゝやくが如、諭すがごとき聲をきゝつゝ思ひ出し儘のそゞろごとをかくなん。

（評）比喩奇警、文また流水の如し。

あゝ玉よ!!!（愛猫の死）

田名村　廣守千能子

六月廿九日此日は何たる悲しき日ぞ……。妾が最愛なる玉、然りわが唯一の友なる玉は、あゝ妾れ自ら手を下して死に至らしめんとは、あ……。

そは夕方なりき、われは雨戸とざさんと椽に立出で勇ましくしめつゝありし折しも、三枚目の間より白き玉の手いでたり、如何にせしぞ、と引あげ見しに、玉は苦しきならん、仰向に倒れて、しきりに手足をせがき居たり、妾はあまりの事に氣も顚倒せんばかり驚きつゝ、抱きあげぬ、あゝ其時、思ひいだすも涙の種なり、「何處を打ちしや」と尋ね給ふ、母上のみ聲も耳に入らざりき。

玉は途に出血夥しく、其の夜七時頃落命しぬ。父上の言葉に鼻柱をいたく打たれしなりと、あゝわれは悲しみと恐れとに堪へかねて泣きぬ。

あゝ親猫の鳴きさけぶ其聲のあはれさ、妾れさへ腸をたつ思あるに、まして親猫の心の中!!!、あゝ妾れは其の夜枕に付くも寐られざりき。

翌朝玉のなきがらを埋葬せんと、涙ながらに友と只二人立ちいでぬ。



あゝ玉よ、實にはかなきは汝の命なりしよ、妾れ少しく注意の足らざりしためにかゝる苦しみを汝にみせしよ。あゝ玉よ、恕せ玉よ、妾れ幾度にも汝に謝罪せん恕せ玉よ。行く道すがら愛らしかりき汝、妾れによく馴れゐしことども語れば、友も泣きぬ、妾も……。

友はすき鍬にて土を掘り始めぬ、あゝ妾れは玉を手ばなすに忍びざりき、玉一人土中にうづむる事のいかに悲しかりしよ、あゝ玉よ、よみじ安らかに極樂とやらに赴けよ玉よ……妾は途に心を決して玉を……花たばと共にうづめ終んぬ、あゝ又もあつき涙が……思へば汝玉はみじかき一生なりしよ、居ることわづかに一月あまりなりき、いかにはかなき命なりしよ。妾れ讀書する傍に來りて寐むるが常なりき、妾れ他出せんとするや、後をしたひてはなれず、爲に外出を見合すことさへありき。

父上母君、學校にいで行き給ひし後は、妾れ一人如何に淋しかりしよ、淋しきが中にも玉ありし故に、われは常に心たのしかりき、然るにかく最も愛せしわれ自ら玉を死に至らしめんと……あゝ如何なる因緣ならんか妾もつみ深きことしてけるよ。

家路に向ひたれど墓を去るにしのびざりき。

三度頭をかへして泣きぬ、玉よ、安らかにねむれよ然して再び我家に生れ來よ、あゝ玉よ……。

友にうながされて、遂に家に歸りぬ。

机の下の少さき冷やかなる寢床を見、半ば食ひのこされし食器を見てまたも泣きぬ、時にくりやの方にて親猫の子を案じてなく聲きこえぬ、妾は得堪へず、立ち上り厨屋にゆき、三毛を(親猫の名)抱きあげ擦でつゝ、みけよ免せ妾れあやまちて汝の愛子を……

＊　＊　＊　＊

五月雨ふりしきる夕べ玉をしのびて墓地にさまよへばかすかに地下になく聲きこえて、愛らしき姿、目に浮きて斷腸の思ひに咽びぬ。

玉は實に愛らしき猫なりき、その毛波の美はしく肉づきの豐かなりしことよ、然れども今は……愛らしき目も、かはゆき聲も、再び永遠にきくあたはじ……あゝ!!!

(評) 文は幼稚なれど、猫を悼む情あはれにやさしきを以て採れり

笑林一束

郭公女

(負け惜み)

茲に何事も負ける事の嫌な老人有り、一日他より英文の一書來れり。然れど悲しいかな一字をも讀むことを得ず、逆様に讀みけり、折しも小供來り一見するや今日こそはやり込めんものと。

「お老爺さんいくら威がつてもこれ許りは讀めないでせう、其れは逆様ですよ」と言へば老人は早速

「ナーニお前の讀み好い樣にそちらへ向けて有るんだ。

(思惑違ひ)

紳士或る令孃に逢ふごとに、其の令孃は花の如き顏に笑を湛えて紳士を迎へたり、紳士は吾に意有るならんと心嬉しく或機會を得し時令孃に向ひ

「令孃! 貴女のお心は僕夙に知つて居ますよ、貴女は僕を愛して被居るんでせう」

「イヽンエ、貴郎の顏が宅の狆に餘りよく似て被居るものですから」

(人間の目的)

甲「君、僕は人間は何の爲に働けるやと云ふ問題に就て近頃非常に煩悶して居るんだが、賢明なる君の結果して如何?」

乙「そりや何でも無いことさ、美人の細君を貰てうまい物を喰はんが爲さ」。

(おつり)

「奧樣、憐れな者に惠んでお與んなさいませ」と乞食が後からついて行く

奧樣「生憎小かいお金が無いから此の次に上げ樣」

乞食「イヽヘ一圓札でも構ひません、お釣錢を出しますから」。

(堅固なすまい)

乞食「堅固な家屋に被居る旦那樣や奧樣方何卒離儀な者にお惠みを頂きたう御座います」折しも通りかゝりし人之を聞き

「ナニ堅固ナお住ひの人ぞと? 人を馬鹿にしてゐる、そりやお前逹の方が寺の門に起臥しているんだから餘程堅固だよ」。

(心配無用)

甲「僕は本當に君が力を竭して異れたので、お蔭で成功して甚麼に嬉しいか……嗟々僕は君に對して何の言葉を以つて報ぜんや」

友「君其麼に心配するにや及ばんよ、僕は金さへ貰らや可いのだ」。

（女慈善家）

慈善家の妻「貴郎は私の様な薄幸な者を助け、妻として下すつて、私は甚麽に嬉しう御座いましたか…… それに近頃貴郎は他に女をお拵なさいまして、優しい貴郎にも似合はないことだと思ひますわ。

夫「僕は慈善家だからお前一人のみを助ける譯にやゆかん、世のあらゆるお前の様な女を僕は助ける積りぢや」。

我が家庭

東京　なでしこ

およそ、人として心樂しからざらんには、いかに身にあやにしきをまとひ、口は山海のうるはしき味にあくとも、などかたのしかるべき、春は薫れる花の山、秋は織りなす千草の野邊など、いづれも心ゆくべけれど、家庭の和樂にはいかでしくべき。

抑々我が家は慈愛ふかきたらちれの君とたゞひとりの弟と召使ひのみ、あしたには父母のうるはしき御かんばせを拜し、晝は學びやにありておのがさま〳〵の學びのみちをはげみ、歸りてはたらちれの温き情の中にはぐくまれ、あかれさす夕日のかげをまちては打集ひて面白く、はた愉快に一日を過しゝ事共、さては來しかた往く末のことなどたのしく打語らひあるは弟と共におのが居間にて親しく古人の書をひもどきて身の行ひをいましめ合ひつゝ身をすこやかにし、浮世の派風をよそに過して志ざす業を學び得るなどげにこれいつくしみ深きちゝはゝの賜ならずやはきて召し使ふ者は皆忠實なればにや、おのづから一家はだんらんしてかりにもよこしまのみちをふまざるは偏に明けき大御代の惠みなりかし、あはれ思へばかく身にあまりある幸ありてこそ、春の花もことにうるはしく、秋の月も一入くまなきを覺え、埴生の宿のいぶせきも玉敷く高どのにもたちまさりつゞれも錦におとらざるべけれ、思へばいとゞありがたき極みにこそ。

消息文

（天）都の友へ返す

尾張國小牧町中町　積穂榮子

お玉章拜見し。

何とて斯くは激しく怒り給ひしぞ、「絶交」とは何たる悲しき宣告を與へ給ひけるものかな。お金の一件を拒絶したるを妾が薄情と思ひ玉ひてか、あゝ良人は三月の病褥に呻吟し、幼兒は食に饑えて呱々と泣く聲すら細く涸れ果てゝ、見るからに聞くからに衣の袖の露乾くべきひまとては無之、かゝる淺ましき態、君に報ぜんも心苦しとて、つひ洩らさゞりしものから薄情と恨み給ふもいさゝか無理とは思はれど。

然るにても姉と呼ばれ妹と呼びて、春は花秋は紅葉と四つの袖打ち連られて睦みける昔戀しや、おゝ其れ君十六の春なりしよ、星影洩るゝ鎭守の森の松が根や、潤みし眸に妾が蒼き頰眺め入り給ひて「假令いかなる事ありとて妾は貴女が妹なるよ、誰が言ひ初めけむさる者は日々に疎しとは、妾は今山河隔つる一百里、東の都に遊ぶとも、いかで親しき姉君のおん姿しれらるべき」と、三年以前、互の壯健を祈りて涙に袖を分ちける折、握りかはせし掌に屹ッと力を籠めて、契り給ひし言の葉を忘れうたかたと消えにけるかな。

ア、妾が胸は血潮にをどり、妾が腕は血潮に狂ひ、想ひ亂れて筆の運

びも自由なりぬ悲しさよ、多くは言はじ、君、薔薇の花は花はしき昔の讃めども、食すべきにあられればとて打ち捨て給ふにや、いかに？。なほ、御勤孝の上御返事給はり度く、かしこ。

（評）言葉使ひ巧みにして、着方凡ならず。趣味あるおとづれと拜見仕候。

（地）別かれし友の許に

越前南條郡今庄村　梅野

まあどんなにあの晩の夜の悲しかつたでしやうか、まあどんなに其夜の寂しかつたでしやうか、私は唯もう何とも云へない氣がして、獨りしよんぼりとほの暗い火影に照らされながら、深い深い悲に沈んでしまつて、しばしは息のないもののやうに冷たくなつてしまつたんですよ。

全くね、人には告げぬ胸の秘密をさへ語り合ふて、互に慰め慰められ、互に頼み頼まれた二人なんですもの、それがまたいつ逢へるか奈何かの別離なんでしやう、わたしほんとに泣きましたわ、泣いて泣いて泣きつくして、あれやこれやと樂しかつた昔のことを繰返へし繰ひ返へして、其果てはまたいつもの悲しい別離の一曲を謠ふて見ましたの。

そらいつでしたか、あなたとあたしがうら枯れの木立寂しい世離の森かげを繞つて、ゆるう〳〵流れて行く白川のほとりに、宿世果敢ない身上を物語つて、せめてもと御空遠けき星影に二人が行方の幸多かれと祈りかはした其夕、あゝ其夕あゝ其夕初めたて謠ふた別離の一曲、それがまあほんとに二人が今の讖でしたのですわね。

かたみに離れ〳〵ては雲と隔たついく山河の遠けくて、夢ならでは逢ふよしもないのみか、風にもたへぬ葉末の露の玉の緒のいつどこでどうなることやら、思へばあたし寂しくて心細くてたまらないわ、ね、初めは何處の誰れとも知らなかつた二人の、かく三年あまりも同じ學びの窓の下に親しく睦び馴れたのは、げに何の因何の果、會ふは別かれの初めと云ひますけれど、飽かぬ別離程世に詫しく悲しきものはないのですもの、今更ながらつらい浮世の運命が恨まれますのね。

それにまして女は三界無住とやら、あたしらが別れ別れの末は奈何なるのでしやう、けれど、よし行雲流水いづこを宿とさだめかねる萍の明日は異なる岸邊に咲きましたとて、唯いつまでも心の花のうつろはで、いく世久しく互の胸に友愛の靈火の燃えて居ると思へば、またどんなに心強く嬉れしいかわかりませんわ、ですからねどうかいつ迄たつても互に忘れッこなしにしましやうね、どうぞ御身を大切にね、そして折々にきつと御音信をしてくださいね、あゝ別かれて後にいくら思つたからつて仕様がないのですけれど、別かれて後には奈何してまたこんなに戀しいのでしやう、どうぞね忘れないで下さいよ、あなたと私とは永久の友なんですもの。

（評）友愛の情掬すべし、文また精潤、眞情を傳ふるに足るものあるをもて、地位に推す。

（人）姉上を諫むる文

下總　春溪女史

姉さん、何卒、何卒お願ひで御座りますから、人間らしい人間になつて下さい、此の妹が一生のお願ひで御座ります。

姉さん、お父さまはお亡くなりなさるまで、姉さんの事ばつかし心におかけ遊ばして、夢にも美智、美智つて、姉さんの事を仰しやらないときはありませんでした、たゞ姉さんを案じ、姉さんを思ひ、姉さんを忘れないで、お父さまは、とう〳〵冷たいお墓となつておしまひなす

つたのです。

しかも、姉さんは……それで人の子だ、人間だといつて、御心に耻ることはありませぬですか、しかし、私は今更、過ぎ去つたことを、くり返しは致しませぬ、たゞ姉さんどうぞ、これからは御心をお直しなすつて下さい、而して御墓の下の御父さんに喜ばしてあげて下さい、笑はせて下さい、安心させて下さい、姉さんの母と、姉さんの妹は、此の田舎にお父さんのみ墓を守りながら、ひたすら姉さんの御改心と、姉さんの御立身とを祈つて居るので御座います。

（許）文は未だしけれど、やさしき眞情のこもれるをもて採れり。

（秀）友のもとに

名古屋　杉谷稜子

さいつ日御邪魔申してより、青葉の上にふりそゝぐ五月雨のあめ晴れやらず侍れば、くもりがちなる心のもの憂きに堪へず、教の趣とる業も、文讀まむにもいつとなく興の湧くを覺えれば、腦の病もや出づらんかと覺束なくて、かゝる時にはとヴアイオリンなど調の亂るゝもかまはず心なぐさに彈きすさび侍るを。空のけしきもやう〳〵心地よく晴れつれば



一昨日明子樣を訪れて珍らしくも半日を面白くかたり過し侍りぬ。學校も明日を限りに休暇となり侍れば、避暑かた〴〵數旬のうち田舍の叔母が家に籠りて、田圃の涼しき趣味を樂しまんかと思ひ侍るになん、風きよき青田の面の稻葉にのぼる露の朝、月さやかに野川の葦間がくれ鳴く水鷄の夜など、今よりなつかしく、なつかしく、たのもしくも胸の小琴のひゞくを覺ゆるにこそ。さては兩三日中に御目もじに參るべくなん。あなかしこ

（許）筆致練熟、いつもながら面白く拜見仕候。

（秀）兄の結婚をせしを友の許に

菫子

露樣、先日申上た事れ、兄のお嫁さまあれとうとうきまつて私新しく優しい美くしい姉樣が出來たのよ。露さま喜んで頂戴。私嬉しうて〳〵一日そばについて居て母に叱られるのよ、でもまつたく不思議なんですもの、學校で私達より二つ上のクラスに藤井民子つて云ふ方があつたでしせう、ほら露さまがお好の、私子何ですか似たお名と思ふて居りましたら、其の藤井さまなのですもの。露樣の事もよ

う知つて居らしつてよ、丁度二年程もお遊び申さないから、ぜひお目にかゝり度いつて、そして姉さんが貴さまとあなたとは學校でもお姉妹でしたが今度から私もどうぞ姉と思ふて頂戴つて、貴さまいゝでしよう、妹になつて下だまいな、すると私ほんに嬉しいのどうぞお願ひですわ。あの兄は矢張り學校へ參りますから、明日朝からきつとお出で遊ばせな留守の中にそして白萩の花姉と私に一枝づゝ持つて來て頂戴な、其かはり兄のおかしな寫眞内證でそつとお目にかけますわ、そして貴さまのお家と、私のところといつしよですとどんなに樂しいでせうれ。あらそれでは三人して遊びづめで母が困りますつてよ困つても好いわれ貴さま。ごきげんよう。

（評）子供らしく、可愛らしきおとづれよ。

（秀）　繪葉書にて都の友へ

栃木　玉野とし子

下なる繪は妾が止宿せる太平山上旅館松野屋を染なき筆に染め出せしに御座候。在京中はいとも御心にかけられし脚氣症も、俗塵を遠く離れし山上清新の大氣に朝夕となく親み候せいか、此頃は全治致し候樣なる心地致し候まゝ、御心安う御思召下され度候。

友居ます方を望みてうた思ふ
袖に涼しき朝の山風

文字の行列と御笑ひ下され度あらく　かしこ。

（評）簡潔にして趣味あり、繪葉書文の上乘。

故郷の妹に

奈良　奥中かね

清樣!!　私と一緒に裏庭の葡萄棚の陰に席を延べて學課の復習をしたり、月の好い夜涼しい二階の椽でヴアイオリンを彈いたりした事は、最う昔の夢だわれ私が出立の支度するのを清樣が名殘惜し相に眺めて「姉樣もう行くの」つて鼻聲になつた事は、母樣と村端れ迄見送つて下さつて「姉樣行つちや厭よ」つて私の袂に縋り附いてお泣きだもの、私も母樣も何だか悲しくなつて六つの袖を濡らして別れた事なんかを思ひ出す每に姉樣は獨りで泣いて居るのよ。清樣身體を大事にして待つて居て下さい、直に歸りますから。

み熊野の濱里より都の友へ

和歌山　森　繁尾

夏もやうく　更けて候、こゝ櫻岡の里の昨日今日、波にさゆらぐ花藻の影の、おぞやすどろに褪せゆきて、見渡すみ熊野の大海原は今し夏まぎりのけはひ床しうて候、沖の小島の新綠はた翠滴らむ計りに、櫻山の風情又なくなかしうて、渚にさゞめく波の鼓の幽韻、風にさゝなる松の小琴の調また一入の興も深う、賦や一掬の涼味愛すべく候。さては小雨そぼ降る雨の夜中、杜鵑の一聲二聲夢覺の枕に通ふなど、都の君に聞かせまほしうも候かな。さはいへ朝夕たゞ波の音松の聲のみ耳にして濱久しき濱住の身にはいとゞ御邊の空忍ばれて候を、憐み給はすは洩させ給へ都の夏のみ消息。

波の音松のひゞきにあけくれて
ひとりさびしき濱ずみの身や

都の兄へ

仙臺　蘆立しま子

御消息のたび、換みし郷のさま、わけて先つ日は細々のおさとし、一たびは母様より父上のお耳にも達し入れ候へ共、例のお氣質、一ことに女の物學びは要なきことゝのお叱り、固よりふつゝかもの〻妾のこと、朝夕實同田畑のつとめにいそしむこそふさはしけれとよく〱思ひあきらめ候、御あんじの事も好結果にてしろがれの玉繩へたらむ如き美しき願を収め候、条にせば一入の見榮あるべく、今年も母様と共着手のことゝ致候、兄様にはお羽様もと心がけ居候、離れのつゝじ今さかりにて美しとばかり、拙の筆とる閑も無之候。

歸省前故郷の姉の許へ

京都　鈴木ふさ子

月日の關守なしとはいひながら「別れは逢ふのはじめ」の諺をせめてもの樂しみにして御別れしましたのは昨日のよしですがはや一年中の昔となりましたね――其間雁のおとづれの絶えたことはありませんでしたが一度も御目にかゝらず。そう〱いつでしたつけね――御寫眞を御ねがひしましたら「はやく業を卒へ見事な成績を得て歸つて下さい其時は寫眞よりもつと〱いゝ實物を御覽にかける」と只一言だけの御返事下さいましたね―― 姉さん私は苦しい時や故里を思ひ出した時などにはいつも此御言葉を思ひ出してはゝげみましたよ、さぞ姉様變つてらつしやるでせうね――、試驗は一週間前にすみまして本日卒業證書及び成績なども らいました成績の眞否は歸つた時に第一の御土産で御目にかけます、あゝほんとにあのプラットホームで御別れした時―― 私は姉さんがわざと笑をもらして居なすつたのを見たらもう〱胸がせまつて「姉さん御きげんよう」といつたきりあとは涙でしたわ!! 私は此度あの同じプラットホームでのうれし涙が想像されますのよまだ〱申し上たき事はつきませんがとても〱私の拙き筆ではかきつくされませんからよろづは御目もじの節。あまりのうれしさに文があとさきになつてますが御さつし下すつて御許し下さい左様なら。



△英語青年

本郷丸山新町同社

英語界の先覺武信氏の主幹なる同誌は英語研究雜誌中にて最も青年に愛讀され且つ最も趣味あるものなるが、其内容は獨習欄、短篇小說、受驗參考、青年倶樂部、等數欄に別ち各欄いづれも奇拔なる材料を蒐集して譯解の如きも、專ら字句の要點に意を用ひたるもの〻如し定價七錢每月二回發行

新體詩

（天）田舍の夏

愛媛縣溫泉郡雄群村　珠川朋子

ねぐらにいそぐ鳥ゆきて、
西にしづみて三つ二つ、
わが背おそしと待つ妻の、
一筋ながきうすけむり、
玉なす汗をしぼりつゝ、
いざや浴したまへかしさぞや、
心をこめて妻がくむ、
茄子のさかなに粟のいゝ、
ゆあみしはてし妻は今、
やがて來らむこの秋の、
木の間をもれし月影は、
田の面のかはづ樂しげに、
さすがに長き夏の日も、
星の影さへ見えそめぬ。
ゆふげの設けやゝそめむ、
丘のかたへとなびくなり。
夫は今しもかへり來ぬ、
あつけくおはすらむ。
さかづきいく度のみほして、
またなき味と口ならす。
背ともろともにはしゐして、
みのりいかにとかたらへり。
二人が上にさしそひて、
うたへる聲もいと高し。

（地）石地藏

茨城縣東茨城郡岩船村孫根三三　雪子女史

村のはづれの塚の上に、
何れの御代に何人の、
幾年月を雨露に、
鼻は砕けて眉は落ち、
立てる一つの地石藏、
何のゆかりて立てにけん。
打ちさらされて今は早や、
丸きつむりに苔蒸しぬ。
朝な夕なに其前を、
花を手向くる人も無く、
烈炎天を焦がしてぞ、
朔風膚を劈いて、
悟りの笑を湛えつゝ、
慈悲忍辱の御佛は、
慾にあこがれ色に泣き、
闘へ苦む人の世を、
往き交ふ人は多けれど、
香を捧ぐる人も無し。
つむり火焔立つ日にも、
雪は其身を埋むとも。
平和慰安の其の姿、
眉宇の間に溢るなり。
浮世の榮華を夢みつゝ、
笑ふて立てる氣高さよ。

（人）瀧のうた

名古屋市長島町二〇　杉谷稜子

新星うごくみ空より、
光りは嶺にたゞよへど、
葛の花さく谷陰の、
青葉も漏る涼風に、
山ほとゝぎす鳴きよどむ、
宮のうたげか姫み子が、
五百枝の杉奥深く、
銀の旗の揺めきて、
うすくれなゐの雲落ちて、
樹立にせまる夕霧や。
こゞしき岩路こえ來れば、
谺とひゞく瀧のおと。
夏の夕は山祇の、
琴のしらべのさやかなり。
小琴の音をたづぬれば、
瀧つ宮居の岩秀聳ゆる。

（秀）涙

美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

かへらぬ人をしのびつゝ、
窓による身も涙なり。
月おぼろなる春の夜の、
春やむかしの春ならぬ。

父に別れてはやとゝせ、すぎし月日も夢なりや、
遺愛の梅は今もなほ、軒端の花と咲きぬれど。
母に別れてはやみとせ、すぎし月日も夢なりや、
手づから織りて賜ひたる、これもかたみの衣なれど。
父だにまさばかたりても、胸の憂をとくべきに、
母だにまさばもろともに、幸なきわが世泣くべきに。
つれなき人に捨てられて、垣の捨菊花さかぬ、
わが行末やいかならむ、涙ばかりを友として。

（秀）暮鐘

麻布　原てる子

幸あれとのみ別れしが、渡頭の柳かげ暮れて、
水に夕の雲をみる、心さびしき思ひかな。
佇む袖に暮の鐘、遠きひゞきを傳えては、
消え入る空のはてもなく、はてなき幻影を獨り慕ふ。

すみれ草

石見　牧岡惠子

君來ろ――　その足音よ
風薫る　花園小路
絹ずれの　優音そよぎに
さわぎ立つ　揚羽胡蝶
かいま見の　我が袖まいて
高くたかく

君は來ぬ――　雛げしのかげ
瑠璃の水　囁きひくき
忍び音や　ひとみは燃えて
青春の　血もゆる胸に
菫草　匂ふ色香よ
濃くきよく

み手とれば　水に流るゝ
春光や　銀鱗あや吹く
和風に　うつら天地を
香のゆらぎ　魂はむされぬ
花あかり　薄色衣に
まかれまかれて

夕立

大阪　村上みさほ

黒雲迷ふ大空や、龍虎は茲に戦ぐらむ、
一陣颯と風吹けば、雨霰鋭く漲りて、
おどろ〳〵と天地も、砕けんばかり轟きぬ。
物のあやめも夜のごと、斜に散るやあし繁く、
青葉に注ぐ白玉か、板戸を叩く聲高し、
やがて雲行きおさまりて、紅き夕日の地にながし。

短歌

(天)逸題　下野　高鹽かつ子

羽黒山貝が音遠く雲に消えて夕立すなり麓七村

評。嘗てほゞ同じ語意を以て山村秋雨を歌ひたる某ありき。唯彼は秋雨の寂しみを歌ひ、此は夕立の壯景を歌ふ、趣味自ら同じからず。宜しく並び立つを妨げずして可なるべし。

(地)富士山　備後　平岡艶子

田子の浦に動かぬ姿うつりけり靜かなる代の富士の神山

評。洋々として太平の氣象あり。

(人)韓國に月を眺めて　鎭南浦　西崎久美子

すぎし代に三笠の山を思ひ出でし人の心を月にとはゞや

評。俯仰感慨の意言外に在り。

秀逸

○○○夕歌　越前　島高喜子

ひとふさはこはましものとおとなへばあるじは見えぬ夕顔のやど

描し得て妙々。

○○○失題　牛込　平塚白百合

むさし野やゆけども秋のはてぞなき尾花の末に月低うして

古歌に倣りながらも、用語の巧みなる、自ら新趣味を出す。

△○○海邊月　安房　鈴木美那子

海士の子が今はと歸る釣の糸に懸るも細し三日月の影

海村日暮の景見るが如し。今はと歸るの一句は再考を待つ。

○○○海邊夏月　常陸　菊地峰子

村千鳥啼かぬばかりを夏にして霜をあざむく砂原の月

村千鳥啼かぬばかりとは面白し。

○○○納涼　埼玉　東角井高子

少女子の袖ふきかへす夕風にすゞしさ見ゆる川面の宿

涼味可掬。

、○○友の母亡ひしをいたみて　伊賀　服部歌子

愛し子のなげき思して如何ばかりよみ途の旅のたちうかりけん

好作。

○○○水鷄　京橋　高宮安子

夜ことくたゝく水鷄のいつはりになれしつゝ月もはかられにけり

殆ど用調の妙を極む。

△○○逸題　福岡　姫野たまき

月あかり美し人のほの見ゆる秋簾ゆらぐ音低ふして

婉麗。

△○○新秋雲　足尾　森原野

秋きぬと雲にも見えてちりそむる桐の一葉に雨そゝぐなり

婉約可愛。

△○○螢　河内　田中入須子

三日月もはや名殘なく入にけり螢に後の闇をまかせて

下句殊に面白し。

、○○逸題　宮城縣　橋本ゆき

涼風にふかせておばしまに暑ふことなきこの夕かな

清境可掬。

、○○逸重　熊本　二葉

村雨の過ぎにしあとの涼しさは神のめぐみの露やまきけむ

着想の警拔。

、○○思ひまゝ　神戸　島屋登美子

嫁入りぬ歸りぬ逝きぬ生れぬとはなしつきせぬふる里の夏

歸省の實況。

○○矢重　伊勢　中野露子

なげゝとて吹くか松風音を低う故里偲ぶ夢やれし夜半

音を低うが好し。

、○○矢重　越後　坪井わか子

夕月に里の乙女が馬洗ふいさゝ小川を螢ながるゝ

田舍見る所の景也。

、○○苦熱　京都　西澤まつ子

起きても見臥しても見れど吳竹のそよぐ風さへなき暑さかな

巧に實狀を陳ぶ。

○○矢重　仙臺　草立しま子

虹たちぬ彼方は遠き君が里かたみの胸のかけはしとこそ

虹を互の胸への橋とは何等の奇想ぞ

△○○矢重　越後　菊子

はてしなき大海原にむかふ時せまき心の耻かしきかな

好教訓歌。

、○○時鳥　神戸　今西操子

今宵この月を血に啼く聲すなり同じ血に泣く人もある世に

佳。

○○矢重　鴟遊　山田愛子

磯寺の鐘の音遠く海遠く清風高里夏の夜の月

不可なし。

佳調

海上月　兵庫　柳田白百合

舟うけて笛にしたらむ人やたれ月よき須磨は海原にして

夏旅　丸龜　吉田ます子

旅人もあつきにたへてしばしとて汗おしぬぐふ松の下かげ

○　姫路　登美代

琴の絃はきれたるまゝに日數經て友の病の輕からぬかな

殘暑　下野　天野露子

限りありて夏はみなつきはてぬれど殘るは秋のあつさなりけり

夏夜　上野　小岩井なみ子

水鷄なく聲もとだえて里川のせゝらぎ低う月更けわたる

○　福井　筧道子

夏の夕小川のほとりさまよへば絽の我が袖に螢裏間う。

○　和歌山　森紫尾

たそがれを楡の木陰にたゝずみて靜かに踊しぬ夕づつの影

夏月　武藏　青柳彌生子

百千船打ならひたる帆柱のかたへに涼し夏の夜の月

曉海　南越　齋藤なか子

世の果に消えて行く彼磯寺の鐘のひゞきよ落ち行く月よ

矢重　南越　桐谷牧子

去年見たる少女はあらず衰へて着物賣る橋ぎわの家

夏月　佐賀　野方すま子

夏もなほまつこの露の月見ればまだきに秋のこゝろこそすれ

雨後蟬　備後　たかれ

ゆふだちの露のしたゝる木すゑよりとりて涼しきひぐらしの聲

螢　長門　杉山菊野子

いとし子のおもやつれにし枕べに籠のほたるの光さびしも

折にふれて　三重　佐々木くら子

文つけて友かりやりし白鳩のかへさきつかふ夕雨の窓

夏雜　周防　西村つれ

夕顔の棚をのぼりて花をめぐる蚊遣の末に月かすかなり

水雞　備後　田村もと

山かげのいさゝ流れも音すみてふけ行く月にくひな鳴くなり

名所月　越後　白葉子

船一つ二つあしまに唄ひでゝ月になり行く須磨の海原

失題　尾張　梶田愛子

やせしきに眠るおさな子ほゝゑみぬ夢にや見えてなきはゝの面

折にふれて　安藝　松坂椿子

のみのあと數へながらに添乳してはしゐせしよを忍ぶ夏かな

漁お煙　千葉　山本桂

すさびにし沖つ汐風絶へぬらし煙ぞ高きあしの屋の里

夕涼　淺草　春江

暫らくは世の欲をさへ川風に忘れ果てたる夕凉かな

失題　越後　中村すみ

あわれにも殘るとみしはさゝかにの糸のとめたる花にてありける

朝顔　櫪木　安田文子

朝顔の花の屋根を描き添へてすてし筆とも見ゆる畫か

夫をうしなひて　長崎　西村春子

思はじと思ひつゝなを思はるゝ形見のちごの笑むにつけても

白百合　横須賀　高橋椿子

かぐはしき華を友におくらまし蝶もやどらんしら百合のはな

秋蟲　名古屋　林田糸子

賤の女が糸くる小屋に月ふけてもの淋しくもはたをりの鳴く

夏の月　本郷　堀江花子

茂りあふ夏木の濡れ葉の隙もりて影も涼しき夏の夜の月

失題　南總　桐谷まさ子

とゞめます夫まさぬまを病むまどに縫ふや袂に夫のきる衣

隣家　松山　野口白露

人皆にあるは黄金に人縁けとのどかに賤の機たかまし

寢覺郭公　小樽　粒羅美船子

初音よりうれしかりけり郭公またぬ寢覺の夜中の一聲

納涼　越後　金子とく

住の江の海原かけて吹風に夏もわするゝ松の下蔭

夏月　埼玉　富倉鶴子

風ふけば池の浮草片よりて底より出る夏の夜の月

○　上毛　星野花子

大那智の山を雲まく朝あけや頂凉し初夏の風

夏月　牛込　ますみ

みちかよの枕凉しくよもすがら宿るもうれし夏の夜の月

夏海　名古屋　清水とら

月は今まつの梢に影見えて浦かげ涼し須磨の夕暮

晩夏　　小倉　橋瀬とく子

朝ぼらけ花にかすみし山もとのさともみどりの夏は来にけり

夕顔　　牛込　夕がほ

はしゐして月まつ賤が垣根よりほの見えそむる夕顔のはな

○　　上野　佐野露子

まきこめし簾はなちて青簾又まきかへす親心かな

蛍　　美濃　田中文子

くらきにはまよふならひな夏虫の何より照す光りなるらむ

○　　美濃　徳島芳子

百合の香の床間に満ちて君が詠む歌のたくみのいとあたらしき

時鳥　　前橋　宮内りき子

山の端の空もうすれて有明の月にわかれなく時鳥

鵜川篝　　宮城　渡辺作子

宇治川やくらき上つ瀬下つ瀬に月とも見えてかゝりほのめく

露　　東京　田中千賀子

風吹かば散りゆく身とも白露の淡紫の花に宿れる

初秋　　大阪　落合はな

いつしかもあし間の浪の音かへて浜辺の潟ぞ秋になりゆく

○　　水戸　榊はる子

辞してかへる夕べを月いでぬ一むら白き夕顔のみち

紫式部　　美濃　花はちす

色かへぬ松の操のけだかさにやどりかれたるもち月の影

学窓にて　　愛知　白百合

くり返しまき返しつゝ見れどく／＼あかぬは母の水茎のあと

夏月　　栃木　白井光子

雨はれて露うちはらふ草村の風に影ちるゆふ月よかな

雨中早苗　　熊本　中山ぬい子

いたくふる雨もいとはで乙女子の早苗とるなり小山田の里

なつ川　　仙台　竹尾きみ子

若鮎の躍るも見えてなつ川の流れすゞしき水の面かな

○　　兵庫　柳田白百合

汐あみて得たる一詩を誦し見ぬ月影しろき須磨の松原

旅　　福岡　清水みよ

旅に出て今宵二十日の海の上にきゆる月かげみにしみわたる

○　　信州　草羽まつ子

一もとの川ばた柳雨細う蛙追ふ子の眉うつくしき

折にふれて　　美濃　田中もりみ

わが園のいさゝむら竹うちなびき夏としもなき夕風そふく

磯の夏　　備後　立脇挙子

磯の辺や小蟹泡ふくやさしさに蘋の花一つそとなげてみつ

朝顔　　岡山　田上濱子

朝顔の咲きしあしたをとく起きそ夏はうれしきものと思ひぬ

亡き友を忍ぶ　　麻布　濱江

かきならす小琴の音にも偲ばれぬ去年のこ宵の君が面かげ

風しらず　　伊豫　渡辺梅子

みなつきの末のゝすゝきまらぬだに今来ん秋を何招くらむ

蓮　　三河　山中その子

池なまて夏の心になすものははちのす花のいろかなりけり

送入營　　近江　翠柳

敷しまのやまとをむなゝしくもいでたつ君の幸を祝はん

夏曉　大阪　八重子

さゝがにの糸のすだれのさゆらぎて露の玉ちる夏の曉

逃暑　安藝　雲面幸子

牛牽て歸る翁の影消えて靄に暮るゝむさしのゝ原

夏　美濃　田中久代

なつみ川またよを過すあかつきに岸のあしはら水鷄なくなり

蚊やり火　備後　梅園

山の端のくまなき月にくまなすは賤がかゞりの烟なるらん

銷夏　韓國　桑原てる子

牧童の歌もねむけに聞ゆなりせみなくこかけ繪のふてをとる

窓外螢　芝區　路久子

出てなばと月まつ窓の玉すだれまつほのめくは螢なりけり

白百合　肥前　竹岡ひさ子

さびしさに母のみはかにもふつればけたかくひとりさける白百合

暮　水戸　糸川いく子

暮ときてこゝろ安くもねらるゝはわか大君のめぐみならずや

○　東京　山本濱江

母君のみ肩たゝくにそむきたる昔し戀しき古鏡かな

夕立　東京　市川かれ子

色との橋を雲間にかけそめてはれ渡りゆく夕立のそら

逃暑　伊豫　渡邊梅子

喧しきくりやの鼠ひそまりぬ妹がたはふれの猫のそら音に

○　備中　有田たまき

何となく床しかりけりしづかやのまがきに咲けるしら百合の花

姫百合　愛知　ますみ

細なかれ垣をめぐりて雨れしに姫百合さけり亡母君の家

折りにふれて　埼玉　東てい子

水樓にもよぎ小蚊帳の朝明けや蚤の香寒う鼻にせまり來る

泉　兵庫　藤濱やを子

立よれば夏もよそなる岩清水せみのなく音も此處は涼しき

秋雨生涼　大阪　山中ます子

ぬれてちる軒端の桐の木末より涼しさ送る秋のむらさめ

泉　大阪　愛子

わき出る谷間の清水むすびあげて夏をも知らず遊ぶけふかな

朝顏　久留米　神代いと子

訪ふ人はたえてなけれど朝かほの我まちかほに朝な〳〵さく

歸省して　神戸　脇屋とみ子

そろひにと求めかへりしこのリボン君はやゆきぬ誰れにあたへむ

夕立　安藝　鈴香

しばしとて野道をいそぐ旅人の傘取ればやむ夕立の雲

世治文事興　岐阜　度會よし子

明らけく治まる御代のしるしなりいや榮りゆく大和言の葉

蟬　名古屋　清水みさを

小笹原下葉うごかす風もなくあつけさ添ふる蟬の諸こゑ

子規　東京　清子

夢さめて戀しさまさる五月雨のふけたる夜半になくほとゝぎす

山の中なる學びやに教への襟とる友の許に　陸前　しづか

人の世の汚れにとほき山里にまことの實をおほしたてゝよ

短文

（天）◎いさゝ川　　岩代　岸野常子

瑞枝さす木の下陰、振りたつる小鈴爽かに、清き水草を洗ふ背戸のさゝ川、青草を食める小牛の側へ、野薔薇の花眞白う水面に垂れて、赤襷の優し少女大根を洗ひ居けるが、ふと已が姿を流に映し、何思ひ出てかにこりと笑みぬ。

（評）大乘の教は、平淡にして空、此文それ短文の三昧に入れるものか。愚ひやれ、賤が伏屋の水車の、水に任する心安さを。

（地）◎勿れ　　姬路　船戸ゆき子

男女席を同じくする勿れ同席するとも物言ふ勿れもの言ふとも交はる勿れ交はるとも親む勿れ親しむとも狎るゝ勿れ狎れらるゝこと勿れ。

（評）文格整齊、壯嚴威力。

（人）◎朝顔　　八王子　中村かね子

お彼岸にまいた朝顔もう小さな蕾ができました姿は朝夕水をやるたんびにこれは白かしらこれは赤だらうこれはあづきかしらどうか兄様が歸省する頃にはこれがみんな美しく咲いてくれるようにと朝顔の神様に祈りますよ。

（評）朝顔の神様、果して如何なる神様なるか、思ふに水彩畵のやうな模様のある美しい着物を被た女神であらう。

◎水たまり　　巣鴨　鈴木まさ子

染井から巣鴨へ出るせまひ道、妙にうす暗いのに、時々かさに落るしづくにびく〳〵しながら、よさそうな道を拾て行くといきなり、ピシヤと、はれが上たので、失敬なと、かさを横にしたら、すみません、と色のくろい青年、又むかふの水たまりで、ピッシヤリ、見れば足が一本しかない、あつと、今だに一本かこげ茶の靴下が目につく。

（評）嗚呼これ征戰金勳の人にあらさる無きを得んや。

◎實直者　　芝　新野壽枝

小さきながらも頑丈造りの家構ひ主人は三十餘りの實直者烟草嫌ひの商賣物の酒も好まず暑き日も寒き夜も怠らず斯くして兄が人手に渡したる田畑を元々返し遣りて自分は紅塵百尺の都に隅田の花も他見に劇場は繪看板に見過して相替らずの水飯好き病や得ると人云へばアヽと高く笑ひて俺は親父の特製でがす。

（評）君子の人か、君子の人也。

◎自然　　大阪　後間八重子

少し心地あしき夕暮、苔むす庭におり立ちて、繁る青葉にひたと寄り添ひつゝ、何見るとしもなく奥を〳〵見入りけるに、いと細き葉末に蝶二つ止まりて眠り居れり、ふと傍の木の枝に目を移せば甲虫嚴かに坐して之も動かず、げに靜なる自然の樣やといと嬉しくて、仰げば空に淡き月もありき。

（評）眠蝶、坐虫、淡月、いづれも自然の中何等かの意味をふくめるが如し。

◎午睡の夢　　三重　帆山靜子

若楓の緑滴るやうな影に釣床を釣つて好き詩集をよんで居ますとそれもいつしかうつら〳〵美しい華胥の國へ遊びました。白い羽の生へた可愛いゝ子が二人唱歌を歌ひながらかけて來て姉樣とよびますから吃驚して見ますとそれは夢で、清と晴子が起しに來たのでした。

◎姉さん　越前　井田愛子

もう三時間の後に妾には新しい兄さんが出來るのです お母さんは姉さんのほつれ髪を直して被居ると武ちやんが飛んで來て「姉さんお嫁に行くッてほんとう」姉さんは鏡の中でお母さんと見合して默つて笑ッていらッしやいました。

◎修羅場　長崎　西村春子

菅の陣傘、蝶の陣羽織、いづれおとらぬ勇士のいでたちいかめしう、淺黄木綿の小手すれあてしたる、女武者さへうちまじり、ふりくる五月雨の彈丸全身にあみつ、小田すきかへすヨイヤサーのときのこゑ、馬のいななき、鍬のいなづま、げに今日此頃の、田舍ぞ修羅の巷なる。

（評）わざとならぬ諧謔、面白し〳〵。

◎光ちやん　出雲　世良ふみ子

弟の秀ちやんが、今日學校で惡戯をして止置にでもされたとみえ、大へん遲く歸つたので、お父さんに嚴しく叱られてシク〳〵泣いて居た、それを妹の光ちやんが悄然と傍に見て居たが、秀ちやんが泣くのが急に悲しくなつたとみえ、やがて妾が所へ走つて來て、光ちやんも亦シク〳〵泣きだした。

（評）同情の文を以て同情の事を寫す、簡にして竭せり。

◎雛心　紀伊　林貞子

家庭の不如意から。今日。久しくなれし學び舍を。見捨つるの巳むを得ざるに至つた。妾は。校長殿諸先生方に。をしまれ。友人には校門で泣かれ。妾も亦泣きつ。眼をはらして家に歸り。有りし次第を涙乍ら。父上に申し上げて居ると。側に居た此年八つの濟ちやんが。「姉ちやん。もう學校よしたの。僕も止めよ。僕が姉ちやんと遊ぶの好き」と、嗚呼子供は無邪氣！ 明日から。妾は濟ちやんと一緒に遊ばれる身であらうか。

（評）人世の眞情を寫し來つて、言外自づから涙あり。

◎同胞　河内　田中八須子

一日門前にて、兄弟二人が睦じく遊んで居たが、如何した拍子か互ひに競合つて、とう〳〵弟は泣かされた處へ同じ年頃の友達が來た、暫くたつと是れ亦た何が間違つたやら、兄と頻りに喧嘩を始めた、今度は兄が敗たと見へて泣聲を揚げた。すると今迄泣て居つた弟は忽ち涙を拂つて兄に加勢をして、とう〳〵友達を泣してしまつた。

（評）兄弟牆に鬩げども、外其侮を防ぐ、解し得て自然絶妙。

◎未亡人　麴町　木島春枝子

折々破れ垣をもるゝ琴の音のゆかしさ兎角降りがちなる此頃一入のさみしさを添へぬ我が宿の奥さんの話によれば琴のあるじはさる日露のいくさにみまかりたまひし大尉の君の未亡人とかや今しも聞こゆる餘音かすかに萬事休めるが如き近衞隊の消燈の喇叭嗚呼未亡人のみ心はいかに……。

◎虹　山口　三浦富子

夕立の後なくはれてやがて夕日は花園を照らして露をふくんだ風がしづかに葉末をつたふて居る ふと天を仰ぐと七色のいろ鮮かに虹の浮橋其上に恰も天女の舞の樣な雲がたゞよふて居る。

◎弟の歸省土產　栃木　玉野とし子

弟の歸省に、都よりのお土產は如何にと問へば、傍なる行李指し、そが中に滿ち滿ちたりとのことに、お可笑と思ひつゝ、開き見ればこは如何に、幾日を蓄積せし洗濯物の數多。母も妾も爲なしと答禮する辭に窮したりき。

（評）佳話。

◎田吾作の御化粧　和歌山　山口文枝

蒸さるゝ樣な暑い日妾は今しがた御飯を炊き終へて暫し木かげにいこはん物と涼しい木立の間を逍遙てました、すると、つい下の街道を荷車曳きつゝ通り行く若者あり見れば懐よりあやしき懐中鏡取り出し頻りに御化粧して居た、嗚呼田舍の田吾作すら斯の通り況して堂々たる大學生の御化粧は尤かと感ひました。

(評)滑稽もこゝに至れば、聊か眉を皺めざるを得ず。

◎讀の罪　下野　外塚あさ

少し早いが他に取りかゝる程でもないからといふ野かへりの背の君これがまあ一時東都の紙價を高からしめた「破天荒」の作者とはあゝまたしても涙が出る。

(評)一篇の小說、僅かの文字にて之を盡す。

◎無邪氣　上毛　佐俣喜美枝

四歲なる姪靜子新らしく買つて頂きし下駄を餘り嬉しそうに抱へて居る故に皆の者よりほかのベゞのと取り替へて頂戴とからかはれしを心配してか少さき紙切れを下駄の裏(地につくところ)へはりつけて「姉チヤンこゝへ靜子と書いて頂きだいよ」といと眞面目に云ひしには餘りの罪なき行ひに思はず抱き占めぬ。

◎瓜もみ　下野　栗山たけ子

暑中母の命で、瓜揉をつくらうとしたが、或は薄く或は厚くどうしてもできないので、納屋に籾挽をしてゐた下女を呼んでつくつて貰つて、客の叔母に上げた、處が大變お譽めにあづかつた。

◎燕の親心　尾張　梶田愛子

去年軒の燕の巣を、雀が大層荒しましたから、今年は其處に行かないで、上に來てしきりに鳴きましたが、上には御免だと言ひてほつて置きましたら、一本のかすがひを中心として、泥や芝を咥へて來て、自分の巣を造りかけました、可哀想に乾くと落ちるよと言つて居ましたが、とう〳〵、見事な巣を造り上ました、私は是を見て熟々と感じました。

◎螢の光　米眞　中西まさ子

祭狩りから歸つて來た昔の、弟の信一(九歲)の、妾が見えぬと、默つてゐますと、まつ暗の次の間で「第六二ノ宮金次郎は……」と修身書を讀む聲がしますので、立つて行つて、ひよいと、のぞきますと、机の上には一ト塊りの青い光り！　妾は思はず一歩退きながら「信ちやん！」と呼びますと、例の可愛らしい聲で……「草螢だ！　草螢だ！ッ」

◎茅蜩を弔ふ　大阪　村上みさほ

暑きにも、寒きにも、朝には新ぼふるゝた、夕には亂れした囀り、日毎日毎我が手に馴れしいまし、あゝ哀れ、ひぐらしの聲靜かに、そよ〳〵と風渡る此夕べ、名殘深く、卵の花こぼるゝいさゝ小川に弔ふ、水や淀まず、心して行け。

◎男か女か　神戸　河木すぎ

兄様の御宅に臨月の御腹を抱へていらしやる姉様があります、或る日私は人より教わつた事がありますので、早速兄様の御宅へ行き御目にかゝり一かど判斷の出來得るつもりで。

「兄様此月の一日の朝早く見へた方はどんな方でしたか若男の方が見へたのなら今度の赤ちやんは男の子よ、又女の方でしたら女の子が產れますのよ」と申ますれば兄様は一寸首をかたむけていらつしたがすぐに「ア、そうかれ！　一日の朝早く宅へ見えたのは朋友の櫻木君御夫婦連れで須磨へ保養に行くんだつて御寄りになつたよ、それでは杉さん男か女かどつちだれ！」との御答へ故私も此御返事するに一番困りました。

◎得々然　宮城　大瀧錦子

「おや〳〵ぼうは大變だよまあ其れはどうしたの。妾は母上の聲に書窓

を出て見ればぼうは得々然茶の間に大あぐら破りし玉子七つを前に口をとがらし「それだつてぼうは母ちやんがこはしたのが面白かつたんだもの」嗚呼美はしき其心。

◎スケッチ　　青森　山井まつ枝

けふは朝より空がからりと晴れて梅雨の中にもこんな天氣があるかと思はれるようであつたがやつぱり時候はあらそはれぬもの、午後になつて空がぼんやり曇り繪のような雨さへ降り出した、ちようど、お夕飯後姿は花壇に出してある大事の香撫子の鉢を土椽まで、とり入れておこふと思つて庭下駄はいて出ようとすると弟が、姉さん着物がぬれるから林檎の木の下からお出なさいといふ、そうれあの下ならこもつて居るから雨もかゝるまひれと云ながら、かけだして木の下まで行くと、颯と吹きくる一陣の風に葉末の露がパラ〳〵……アレ、といひながら雨の袂をあたまにおふて、しやがんで居ると、椽側の方で弟が、姉さん今援船を出すから大丈夫よ」。

◎病床の友　　肥前　筑丸はぎ子

あなた御氣分は如何と訪なへば父なる人は次室にと指するも切なげに折しも起る咳一鼓境々たる血塩はつばはきに溢れて槭んぼーの夫れかの如く辛うじて顔をもたげてし友は蚊の啼やきかの如くに「御父さま私しもふ駄目なのよ」なあーに此んなものが出なけりや治らんのさとさながら病めるが如き父は聲を搾りて。

◎無邪氣　　廣島　なか子

お隣に敏雄さんと云つて五歳の可愛らしい坊ちやんが居ます、或日私方に遊びに來ましたので、内の花子(二歳)をお嫁さんにあげよーかと聞ひますと、「頂戴」と云われました、「あげたらどーするの」と又問ひますと、「坊大きくなつて、お父さんのよーな大きな服を着て、「おい」「こら」つて、云ふ」と恥かし氣もなく。

◎微笑　　羽前　谷山たに子

みなみ降りにおさよとなん呼べる小娘ありきいと暑苦しききのふの午下り車宿にや行きたりけん髮もおどろに桂さへきれぎれそが頁へる山なす草たばを卸さんともせでそが濁くばかりの汗を拭はんともせで先づ手に持つ燃えかゝれる利鎌を露淺玉を流す渓水に浸し小さき溜息を洩して莞爾ほゝゑみぬ。

◎六疊　　奈良　中上まさ

軒端につるせる忍草、青風にゆられつ風鈴に和す。正面に掲げしは過ぎし春兄上に同會のとき紀念にと撮影りしもの、今尚忘れやらぬ當時の感想!!　床に飾りしヴアイオリン、机上に色ます一輪挿しの白百合……夕雲の階退けて臙脂の映うすれゆく窓、何時も違へず奏する月光の曲!!

◎雨後の月　　肥後　つゆ子

今年五ッになれる清ちやん無心に「御月ちやんいくつ」を歌ひ居りしに、俄の泣き聲におどろきてかけよれば「暴が御月ちやんのんでしまつた」と見れば今まで月をおほひし雲のはれたるに「ソラ御月ちやんが出てるよ」と云へば今迄で泣居りし弟の大聲にバンザイ——。

◎わが弟　　福井　なでしこ

今しも次の間で繪葉書やお寫眞など並で獨り遊んで居た弟はいつか靜かになつてしまひました何をして居るのかと思つて行つて見ましたする と可愛い手になき母上の寫眞をしつかと抱いてすや〳〵と眠むつてゐるのでありましたあゝ今頃はさぞうれしい夢を見て居るでせう。

人事詩（劍花坊撰）

「夏季雑題」

天

凉み舟月を背にして拔衣紋　北品川百廿駒澤方　春野ゆき子

評　美と粋とを打て一丸と爲し、則ち此句となる、この邊は先づ人事詩の極意といふところすらりとしてしかも俳句にまがはざるものなり。

地

夏季休暇歸んなんいざパラダイス　備後國尾道市　中尾せき

評　歸去來の「歸んなんいざ」を面白くつかはれたり、感服の外なし、明治川柳として後世に貽すに足る、人事詩もこんなのばかりなれば實に嬉しいものなり。

人

夕立に町は鳥羽繪の活人畫　磐城國西白河郡白河　足立乙女

評　たゞ譯もなく面白い、俳句に「夕立や智慧さまぐ〜のかぶりもの」といふのがあるが此句と多く遜色無し。

秀逸

夏芝居度々顔直す女形　品川　春野ゆき子

君が代は女もすなる富士登山　越後　坪井わか

地藏樣のチョンマゲふいと空に飛び　足尾　伊藤みつ子

大の字の足を藪蚊が重く飛び　芝　小橋きみ子

丸燒の看板いつか玉すだれ　芝　新野壽枝

佳句

避暑に來てはらから終に戀敵　姫路　船戸ゆき子

一家皆歸省の我に夜を更かし　相模　沼田きぬ子

夕立が降ると跣が走り出し　磐城　金子てつ子

螢狩今宵はどこへ行かうやら　長野　太田れん子

夏休み歸れば肩縮められ　下野　永井きく

夏期休暇片山里に花が降り　尾張　堀田愛子

明日歸省汽車より先に夢が飛び　越後　坪井わか

關取を煽ぐは五人掛なり　神戸　間名部駒子

夏祭り込合ふ方へ戀と行き　尾道　中尾せき

夏向は死ぬにも水を撰ぶなり　京都　藤田靜枝

避暑旅行婆殿と云つて叱られる　鳥取　藤井あやめ

金魚賣童衆を誘ふやうな聲　神戸　小島文子

凉み舟加茂の流に水調子　芝　小橋きみ子

蟲干に思はぬふみで離緣沙汰　近江　照子

海水浴財布がよせといひくさる　美濃　櫻井育子

膝の猫廻り燈籠ねらつて居　上野　佐藤露子

行き拔けて日傘覗かる氣味惡るさ　京都　井上いく子

令孃は淺いところでボチ〱し　横濱　長谷川花子

蝉時は早乙女の傘を乗廻し　足尾　伊藤みつ
汗が出て白粉の鼻黒くなり　大阪　六車よしな
稼がれば人も浮世の案山子也　新潟　近藤ちはや
久しぶり門田に涼む凱旋兵　芝　新野寿枝
小式部が端近で蝦のやうにはれ　大和　植田玄子
笠でもあら讃めてよと氷を出し　品川　春野ゆき子
暑い蚊納涼の客を騒がせる　横濱　杉本芳子
[illegible]扇の下で雨やどり　四日市　山口春子
夕立が臺所の窗うへ突貫し　加賀　桃木柳月
朝顔に寐顔見られる耻かしさ　淺草　いつ子
氷水遠慮をすると水になり　本所　花舞女
衛生演説の辯士やたらに水を呑み　和歌山　森紫尾
俄雨客のごたつく氷店　大阪　れん子
朝顔はしぼんだ頃に起て來る　越後　金子とく
姫様を跣足にさせる螢狩　東京　あきもと
縁先の涼味千斛青簾　姫路　六角ゑい子
貴人も始息が出來る鐵扇　向柳原　藤井あい子
蚊遣火は貧しい家についた物　相模　澤呂木たけ子
鳴神の太鼓欲しいが躰飯なり　羽前　谷山たに子
富士山は高い我身は低い也　前橋　入山はる子

撰者吟

氷屋へ每度の使者が玉の汗
重衛は湯治でもしたこゝろもち
瓔珞を軒端に下げる氷店

暫らく「人事詩」を中止す、此題を以て「ものはづくし」に御揮ひ下されたく候、尚是迄人事詩に於て天地人及び秀逸のチヤピオン諸嬢に對しては別に川柳御勉強を願ひ候——(劍)

當世ものはづくし

▲意氣地のないもの

◎讒書を恐れる人　岩代　佐藤みとり
◎養壻の亭主　甲府　清水梅子
◎教場の居眠　信州　矢島静子
、〇骨逞ましき男の乞食　同　松屋松子
、日に當つた鼹鼠　千葉　みなもと
、〇女房に置去られて自殺　神戸　鳥居とみ子
、、女に足をふまれた男　同　倉地夏子
、、男に玩弄せらるゝ女　大阪　すみ子
、、離ふとの出來る婦人を妻に爲し得ざる　奈良　保田續
、、姑の前に出た時の嫁　磐城　金子てつ子
、、雨降りに下駄の緒きれし時　信州　峰村なか子
、、戀につられたやつこ　下谷　横内みのる
、、三十男の玄關番　福島　古田梅子
、、暑い時の人間のからだ　京橋　安西孤星女
、、債權者の前の債務者　神戸　春日愛子
、、蛇の前の蛙　芝　芝本なつ子
、、頑丈男の貧乏　信濃　松尾節子

、、落選後投稿せざる人　岩代　中濱華子
、化粧する書生　函館　古琴
、美人にかけての男　秋田　伊津味穂子
、大人の涙　近江　すみれ
、猫に追はれた鶏　千葉　石野靜子
、婦人に話かけられたる時　紀伊　川俣種子
、ハイカラの大阪言葉　大阪　落合波郷
、鼠退治に躊躇する男　神田　なみ子
、試驗場で白紙を出す　周防　梅田正子
、女房に衣物をねだられ困つてる人　鹿島　滋子
、落第生　在朝鮮　大浦行子
、親の財産あてにする人　攝津　柳花女
、蛸につかまつた学生　上野　佐藤露子
、小男に投げられた大男　本郷　土屋ひさ
、失戀に泣く男兒　周防　梅子
、挨拶をちがはせし時　佐賀　橋本よしゑ
、鼻たれ男　神戸　佐藤ます
、結婚を躊躇する人　同　青狐女史
、酒を飲む時のスタイル　埼玉　根本たまき
、すべつてころんだ時　栃木　岸ケイ子
、門に立つ血氣男の物乞ひ　牛込　川嶋まつ子
、三度まで入學試驗失敗　福井　吉田くす
、朝鮮人　磐城　金子てつ子
、啞　相模　白根高子
、妻君に叱られる夫　芝　加古光子

、女權の強い亭主　飛驒　さゝんか
、妻の持参金で飯食ふ夫　芝　田中むら子
、妻君に閉口する郎君　三州　太田峯子
、妻君の月給をアテに遊んだ人　田端　田中千賀子
、金州丸の將校　河内　奥村房野
、歸り來りし金州丸の捕虜　紀州　森川あき子

▲恥かしいもの

○上座に薦められてきよろ〳〵見られる時　神戸　脇屋とみ子
○襦袢の袖口の切れたる　奈良　保田照
○子供時代の話の出る時　京都　廣瀬ふき
○後れ馳せに汽車に乘り皆に顔見られる時　大阪　すみ子
○出來の惡い時の通知簿　本所　山田濱子
、、授業中居眠して叱られた時　宇都宮　佐藤すい子
、、便所をあけられた　横濱　中里萬壽子
、、戀文を妹に見られる　下谷　齋藤蝶子
、、初めての商店で物を買ひお金不足な時　常陸　長久保秀子
、、花嫁花婿相互の顔　下野　川和浮舟
、化粧の間を人に見らる　大阪　落合波郷
、お醫者樣に舌を見せる　鹿島　古田梅子
、祝文を讀みちがへし時　青森　添田逸子
、男大勢の中へ出る時　信州　松尾節子
、人中で許嫁の夫に逢ふ　岡山　關さゝなみ
、入浴の時を人に見られる　赤阪　玉雪
、男學生大勢の中に一人の女學生　大和　小幡君子
、嫁入りに連れあるかれる　大阪　成瀬かえ子

、雨降りに辷つてころんだ時　　麹町　澁谷米子
、[illegible]新喧嘩の後　　京都　内藤孝子
、人中で花嫁の噂が出る　　紀伊　川俣種子
、町のまん中にて落車せし時　　三河　太田華子
、道のまん中ラバーに出逢つた時　　伊勢　西井ます子
、客の身内と知らず悪口を云ひし時　　日向　中島はる子
、やりそこないの多い時　　大阪　北谷みよ子
、人ちがひした時　　麻布　池田濱子
、廂髪を始めて丸髷に結つた時　　山梨　酒井まさ子
、結婚の夜　　同案者　數十名
、見合の日　　同　同

▲有ても無くてもよいもの

○◎あきめくらの眼球　　福岡　筑紫子
◎宇宙間の塵埃　　麹町　黒川はまえ
、○つかはれぬ小づかひ　　三重　國分温子
、○商人に誓　　岩代　齋藤きみ子
、○力士の髷　　大磯　杉井かれ子
○盲人の提灯　　小石川　内藤はな
○影　　横濱　小村某
○啞の耳　　新潟　五十嵐はな子
○扉の上の帽子　　松山　徳丸せん
○三十過ぎた女の眉毛　　神戸　定村馨枝
○秋の扇　　秋田　佐南とり子
○女の名の下の子の字　　磐城　金子てつ子
○あばたの顔に髭　　在朝鮮　立石すま子

○女學生の袴　　神戸　脇屋とみ子
○すたり店の看板　　三河　太田華子
○桃の木の實　　淡路　岡琴子
○放蕩息子　　京都　廣瀬ふき
○手紙の餘白　　下谷　山尾綾子
○たもと　　本所　山田濱子
○古い新聞　　栃木　岸けい子
○年をとつて出來た子供　　岩代　武藤たき子
○フロックコートの後に有るボタン　　牛込　かれ子
、、知つてる事を教はる　　近江　伊藤須摩子
、、九分八厘の惣領息子　　長門　秀翠女
、、いとこにはとこ　　下谷　齋藤蝶子
、、後來の黒髮　　徳島　古田梅子
、煙草　　奈良　玉書

來月の課題

▲あはれなるもの
▲騒がしきもの
▲ながきもの

清女の筆法を學べとにはあらねど、成る可く嶄新の答案を提出さる可し、たとへば今回の耻かしいものにて結婚或は見合と附けたるが如き平凡なるものにては、自然同案一束の下に折角の苦心水泡に歸すことある可し(選者)

謎々

「海水浴」「緑日」「小村駐英大使」とかけて

一等

▲海水浴　四多摩　雙葉女史
日露の關係」と解く、心は「清對（身體）の競爭（强壯）が目的

二等

▲緑　日　京都高倉御池上る　四辻まさ子
無政府黨員の會合」と解く、心は「匪徒（人）が集まる

三等

▲小村駐英大使　筑前　中村久子
人遊ひの拘引」と解く、心は「同名獄（同盟國）に行く

▲海……十二支の辰」と解く、心は「卯巳（海）の中に入る　栃木　瀧田しげ子

▲海……戀文」と解く、心は「大概は遊書（秘書）　門司　渡邊富久子

▲緑……名望家議員の滿期」と解く、心は「再選（賽錢）が多い　奈良　奥西きく子

▲海……軟かい食物」と解く、心は「消化（銷夏）に好い　大阪　八重子

▲海……洋食のフライ」と解く、心は「夏季（鍋）がよい　下野　大谷淑子

▲海……掏兒の運動」と解く、心は「懷中（海中）御用心　大阪　和田久子

▲小……新開地の寂寞」と解く、心は「林の後の小村が情けなく見える　栃木　瀧田しげ子

▲緑……昨今の東歐」と解く、心は「露店が（露天下）騒々しい　相州　岡本敏子

▲緑……數の子の小賣商」と解く、心は「ひやかしが多い　信濃　北澤かつら

▲緑……歐州の歌謡」と解く、心は「人手擬合ふ（人出賑はふ）　堺市　平野靜子

▲海……共寮」と解く、心は「若勢（暴う）して樂しい　大阪　七生しげ

▲海……産室」と解く、心は「うみ（海）にはいる　京都　加藤瑰花

▲小……鯛の魚田」と解く、心は「味噌な付けた上に又鯛燒く（大役）　相州　岡本敏子

▲海……忍ぶ戀」と解く、心は「怖は〳〵深入り　羽前　谷山たに子

▲緑……千手觀音」と解く、心は「人手が（人出）多い　横濱　上村愛子

▲小……大陸の汽車旅行」と解く、心は「林が去て小村が出る　栃木　菅谷はま

▲海……悋氣の人の留守居」と解く、心は「日にやけてくる　上總　齋藤八重子

▲緑……劔術の名士」と解く、心は「撃る（諂る）人が多い　名古屋　山中かれ子

▲海……警察署の控所」と解く、心は「灰殻、新紙、令狀（ハイカラ、紳士、令嬢）が多い　神戸　臨屋とみ子

▲海……へたな賭博」と解く、心は「何時も裸體　函館　榊原薫

八月の課題

▲月見　▲南瓜

▲女子の判任官

〆八月十五日限り

一口ばなし

▲　名古屋　安藤鶴子

友人「花ちやんの内の下女は晝でも寝て居ますの」 花子「あらひどいは、何んぼ内の下女が寝ぼうだつて晝なんか寝ていやしないわ、友人「でもあなたのお父あんはお寝よく〵（お起よく〵）とおしやるじやありませんか。

▲旅は道連れ　堺　めし子

お花さんアナタお足ドウ遊ばしたの、花子「これですか、これは昨日足袋を履いて旅行しましたら、此様にすりきずに成つたの、「知れた事です旅（足袋）は道づれと云ひますわ。

▲月が二つ　丹波　房子

月冴えし夏の夜二人の青年隅田川のほとりに來ると、甲「ナア實によい景色だれ、月が二つ出て居る、乙「馬鹿な月が二ツなんか出るもんか、甲「でも君一ツ水に（見づに）居るではないか。

▲女學生　栃木　岸ケイ子

母親が娘に「近頃新聞に大分女學生のふしだらが書いてあるが、お前などは出される様のことはあるまいれ」と心配そうに尋れると、娘は平氣で、私なんか大丈夫ですとも、お友達さえ知らない位なんですもの」。

▲踏らぬ人　岐阜　度會よし子

甲「世間の人は君を新しい短書だと云ふ、何の事か知つて居るか、乙「それは多分乃公をほめて、何事でも獨りが宜い譯の分つた人だと云ふ事だらう、甲「ハ、、、、、なアに踏らぬ人だと云ふことよ。

▲眼鏡は眼鏡　麻布　池田浪子

先生「皆さん瓢箪は何にするものか知てる方、生徒「知てます老人の眼鏡になります、「先生なぜですか、生徒「今朝内のおぢい様が、瓢箪を持つて行かなければ、花が見られないと申しましたから。

▲一ツ違ひ　堺　平野靜子

お蝶さんあなたお幾年にお成りでしたの、蝶「私はお向ひの艶子さんより一つ妹なの、では艶子さんおいくつ、蝶「艶子さんは妾より一ツ上ですわ。

▲獅つぱな　廣島　なか子

或る人途中で獅つぱなの友達に出合ひ、甲「若しあなた何處に行くのですかと問ふ、乙「お鼻の向いた方に行くのさ、甲「そんならあなたは天に登るのですか。

▲　紀伊　田爪千代子

或田舎者川ばたの茶屋に休み、ゆで玉子を買ひ、殻と共に食ふ、茶屋の女見て「殻をむいて召せ」と云へば、ハアと答へて後の川の方を向いて食ふ。

▲　大阪　青木靜江

出入の男道で土產を買ふて來て下女に向ひ、「一寸盆をかして下さい」下女ぼつちやんと呼ぶ、男「いえ〵ぼん（盆）ちがひですよ、下女「お盆ですか。

▲つんぼ同士　千葉　みなもと

お婆さん、内の老母さんに何を話しても少しも譯らないで、困られえ弊には、老母「眞個に年を取ると仕様がない、お婆さんには何を話しても譯が解らないで、孫それを聞いて、「だつて仕方がないわ、二人共聾なんですもの。

!●●結婚道しるべ●●!

▲本欄の結婚紹介は信用確實なり▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲照會者は雙方への通信料として三錢切手三枚を送るべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送るべし▲〆切は毎月廿一日限り

行き度き方

▲年齢廿七歳血正體健性質温順地方女子師範學校卒業、容貌普通にして家計(醫師)中等、學位を有する醫師か、大尉以上の軍人、又は高等教育ある實業家に嫁きたし但し地の遠近を厭はず。(寫眞あり)(東海一女子)

▲年齢十九歳血統正身體健、ハイカラ氣質にして親切同情に富む、普通教育修了後家庭に在て家政、挿花、茶道の稽古をなせる相當資產家の處女、兩親健在大男は米國に留學中なり、遠近を問はず良縁を求む、良人の都合によつて外國に行くもよし。(寫眞あり)(大阪女)

▲年廿歳地方高等女學校卒業後東京にて專門學二ヶ年修業す、容貌普通血統正、相當資產家の淑女、月收五拾圓以上にして、多少財產ある前途有望の者、又は商家へ縁付きたし、係累あるも不苦。(たさなゐ)

▲年二十二の初婚者性質温順にして地方女子師範卒業、目下教職に從事す、容貌普通、家計中流母健在なり、前途有望の醫師か軍人か官吏又は相當の所へ嫁きたし。(寫眞あり)(駿河一女)

▲年廿五歳士族にして母のみ健在、容貌普通以上教育は東京女學館卒業後家事を練習す、遠近を問はず嫁きたし、事情によつては再婚者にして子供あるも差支なし、成るべくハイカラの人を求む。(求婚女史)

▲年廿五歳血統正初婚女學校卒業性質温順なり、容貌普通家政に熟練す音樂の心得もあり兩親健在にして家計は中等也、學士又は銀行會社員にして、係累なき人の許に嫁きたし。(野楽女)

▲年齢廿二歳の處女普通教育を了り造花及編物科を修了す、容貌普通兩親健在、地方に在つて中等の生活をなす、品行方正なる中學教師若くは軍人に嫁ぎたし但し財產の有無を問はず。(寫眞あり)(麗女)

▲年齢二十一歳士族にして初婚者なり、地方高等女學校卒業後、女子大學に修學せしも都合により歸郷、家事見習方々米人につき英語を研究中なり、大酒家ならぬ借金なき人に嫁きたし。(山陽の求婚女)

▲明治十八年六月生地方女學校卒業兩親なし(一弟ありこれは軍人志望にて上京勉學中)性質温順交際應對申分なし、容貌普通以上、二十八九より三十五歳までの軍人の所に嫁きたし。(さがの屋)

▲年廿一中等教育を卒へ生花音樂を稽古す、容貌體格申分なし、父は官吏家は實業家にして中等なり、愉快なる新家庭を作らんとす、前途有望なれば遠近地位財產の有無を問はず嫁きたし。(ふみ子)

▲とつて二十七と申す老槻の初婚者、容貌普通以下身體健全なれども身長低し、兄は大阪に在つて某事務員なり、相當の良縁を求む。(孫女)

▲年廿二身體健全容貌普通の處女、高等女學校及補習科を卒業し現今家政、音樂活花を練習中、學士、官吏、又は外交家に嫁きたし。(東北の女)

▲年齢呼年二十八の女、血統正再婚者にして身體強健性質温順教育あり海外に移住せる血統正しき品性高尙なる實業家、又は官吏にて三十歳以上四十歳以下の方に嫁きたし。(伊勢の讀者)

▲年齢廿歳地方師範女子部卒業、容貌普通血統正けれど財產なし、遠近を問ず愛情にとみ男子らしくして他日有望の人と結婚したし。(風凉子)

▲年齢呼年廿二歳血正快活の一男子、目下某官衙勤務中、實業家若くは官吏の宅へ養子に行きたし、婚後共に海外に行くも可。(京都一男子)

▲年二十七歳の男去る廿六年岡山醫學專門學校卒業、爾來縣立病院及東京帝國大學病院にて研究し、目下帰省中なるが年來の宿望たる歐洲留學を果したし、依て費用を支辨しくるゝ人の養子となりたし。(四國の人)

▲文學を研究し教師をなし、日露戰役にも數十回勇戰したる二十五歳の男子、初婚にして實家には財產あり、相當の所へ婿に行きたし、女は精神すら高潔ならば、再婚、不具、容貌を論ぜず。(田舍の狼)

▲年齡廿二の男子血正體健、中等教育を卒へ工兵補充兵たり、目下三等郵便局員として六年間勤續す、熱心なる實業家の養子となりたし(敷男)

▲知人二十五歳東京醫科大學生身元、實產血統の確實なるや否は地方の人の評に任す、相當の富豪家或は確固なる病院主の養嗣子に世話したし但し配偶者は廿歳前後にて高等女學校卒業の者に限る。(關西丁生)

求むる力

▲友人年二十四歳血統正溫厚篤實なる韓國官吏年收九百圓、高等女學校卒業身體健全容貌美音樂の素養ある廿歳迄の處女を求む。(在韓の紳士)

▲年齡三十二血正の士族、三年前陸軍高等官を辭し北米合衆國にあり目的實業、陸軍恩給金もあり、普通教育ありて精神確固體格健康米希望にて忍耐力ある女子を求む、但し結婚は相互理想の夫妻たるに足ると認めたる上にて實行すべき事(P.B.)

▲年齡廿歳財產を有し血統正、身體健全尋中卒業後電氣通信技術學校を卒業し、目下官途に奉職す配偶の有無を論ぜず養家を求む。(姓名留置)

▲二十五歳の男子血統正確目下某官衙に勤務中月收二十五圓係累なし、容貌普通にして身體健全なる十九歳以下の處女と結婚を望む、財產技術の有無を問はず多少家事の心得あれば妙なり。(伊勢T、H生)

▲年廿六小學校敎員にして血正、身健、志望確實なり、精神的に幸福なる家庭を作り將來苦樂を共にせんと欲する處女を求む、財產の有無を問はず、但し奢らざれば衣食に窮せざる程の財產を有す。(神戸M生)

▲年齡廿二品行端正大地主、生來薄弱加ふるに數年間學業に熱中せしため健康を害せり一寡婦二年長者三弱弱者の家へ入夫を望む。(米山X生)

▲廿六歳の男子目下某會社員月收二十圓、一度妻を娶りたるも或る事情の爲め離婚せり、廿歳前後にして普通教育ある血統正しき女子と結婚したし、再婚不苦富山縣人なれば妙。(周旋生)

▲年二十三俊秀の藥劑師地方名門の出なり、現時獨立の生活をなす、依て相當の内助者を求む、條件次第養子に行くもよし。(獨立生)

▲年二十六官立專門學校卒業目下官職を奉じ月收五十圓、他に係累なし年齡十六より廿歳まで、中等教育を修め音樂茶花の素養ある容貌普通以上の血統正しき貞淑の處女を求む。(好音生)

▲年三十商業學校出身實業に從事し市會議員たり、實母一人妹三人陸軍士官及文工學士に嫁す、宅には公債株券一萬圓其他不動產あり、中等敎育を卒りて料理裁縫の心得ある幕末功勞者の孫を貰ひたし。(拾小舟)

▲年齡廿四血正學力普通將來實業の大家となり、天下を濶歩せんとする大志を有す、年二十二才以下の學力普通裁縫に心得ありて美貌若くは商業に經驗ある婦人と結婚したし。(肥前國夫)

▲血統正父は辯護士、某私立大學卒業後專ら文學研究中、容貌美麗なる高等女學校卒業位にて、多少文學趣味ある健全なる處女を求む。(求婦生)

▲廿五歳の男子某高等專門學校を卒業し、英國其他歐洲各國に數年間滯在し、今回歸朝して現今英國貴婦人と共に京都に住す、東京產にて身體强健容貌悪しからざる處女を求む。(Beaute)



つや文

田中夕風

「東京にて、たま。
可怪くはありませんか。」
と某女學校の教頭なる内山君子は一封の文を四年擔任の葉山みち子に示しぬ。
片手に頰杖つきて今し作文の添削に餘念なかりし渠はふりむきざまに
「誰の處にですの。」
「こら。」と打返し見せたる、向井雪子とて、級の中否全校を通じての美しき子なりしなり。

「ね、這麼ものを渡す譯には、」
「さやう、」と渠は少時默して
「立合の上で。それも無い智慧を附けるやうでも。困りましたねえ。」
「勿論信書の秘密は大切だけれども仕方がない、披けませう。」
と封おしきれば、罫紙三四枚に男の不熟なる手して、
何日も汽車にて通はるゝを見んとて、毎朝停車場に佇みたりしを、君は知りしや。今は都に學ぶ身となりたり路は隔たらんとも。
といふやうなる事を、所謂菫文學とやらん、星よ、戀よ、或は、眞如の月も曇りて、など撰り並べたり。
「ね果然。困りますねえ」

「あゝそれでもまあ、」と棄は却々胸を撫でゝ、

「向井の方から、別に何も言つてやつた樣子はありませんねえ。」

「まあ此の手紙では、しかし彼子もあんまり安心が出來ませんよ、何としても奇麗過ぎるのだから。」

「眞個に。」と受けて、

雖然、彼の通り短い袴に手拭を下げて、何時も髮を亂して運動ばかりして、那樣心は微も無いやうですが、何しろ餘り眼に付く子ですから心配ですね。

と言ふ時、

「葉山さん、向井は、あれで中々しやれて居ますよ。」

と一隅より、

「私、色が餘り白過るし、眉毛もいかにも濃いと思つて居ましたが、過日傍でよく〳〵見たらば、白粉を塗けて居るのですよ。そして眉毛も畫いてありますの。ですから仍然。」

「いゝえ。」と棄は打笑みつゝ、

「白粉を塗けないでも、彼いふ白さもありますよ。始終斯うぼーつとほけ立つたやうに、そして、彼いふ人に限つて、眉毛が眞個に黛でも付けたやうに、くつきりと濃いものです。

私の子供の中の友だちにも、彼の通りなので一人ありました。

まあ御覽なさい、何時もテエスをして汗ばんだ顔を手巾できゆつきゆつと拭いて居ますが、那麼時は、頰がぽつと赤くなる故か、額や首筋が餘計に白くて、眉毛は眞個に塗つたかと思ふ程濃く見えます。

約言、餘り奇麗過るので、這麼禍も買ふのですね、可哀想に。」

と棄は獨言のやうに。

「おほゝゝ葉山さんは又、大分彼子の美さ加減を觀察なさつたものね。」

と敎頭は言ふ。同時に、

「何だか葉山さんのお咄を聞いて居ると、餘計に彼子が美人のやうな氣がすること。」

と、是は彼方にロングフェロース詩集を讀み居たる英

語の教師なり。

「それで」と渠は、

「奈何しませうねえ、此の手紙を。」

「さあ、一應親を呼んで注意しますか。」

「さうですねえ。」と一寸頭を傾けて、

「しかし、那麼事を言つたら、劍呑がつて退學でも爲せはしないでせうか。折角來年は卒業するといふ間際に膝を折るのも可哀想だし、それに、餘り大げさにして、何か不品行でもあつたやうに評判が立つては、それこそ人の大事な娘に、一生の疵をつけるやうなものですしね。」

と、自身も子を持つなる渠は、人の親を思ひやる心も深くて、種々に煩ふなり。



新柄——眞岡地の中形一反壹圓五拾錢(三越)

加之、渠は前任地にて、可哀な生徒を見たりしなり。母一人娘一人互みに賴み交して、母はそれ一人を命にはかなき手業しつゝ、美き娘は女學校に通はせたりしに何處も同じ、なま暖き風に蝶の羽風のふは〳〵と取留なき文は、其地なる中學程度の某學校の生徒よりとて、三度四度學校に宛てゝ來ぬ。

其度に職員會は開かれたり。

やう〳〵二年生の何の色なき心に、然ばかり人の議し評むるとも知らで、餘念なく學ぶを見るにつけ、母親が平生の苦辛を聞くに付け、渠は、自ら擔任の生徒にはあらざりしかど、涙含まて哀憐がりつ、

罪は彼方にありて、此方の罪を言はゞ美きのみなり。假に數步を讓りて、然る文を越さるゝだけ此方

に隙ありしとするも、退校の名を負せんは餘りに過重なり。彼女が技術に長けたを幸ひ、母に諭して、その方に轉せしむるにて足りなむ。と何時も説きつ。暫時は何れとも定まらで其儘なりしを、家事の都合により渠が此地に轉任の後、男子の方は其事によりて退學せしめられしかば、此方も終に彼女を退校せしめぬ。と友より知らせ來し時は、憫然なる母親の上を思ひて、渠は漫に袖を濡しき。今も其を思ひ浮べて、肌栗立つ心地のしつ。

「まあもう一度這麼事がありたらの事にしませうか。加之、消印で見ても、最早此地に居るのではないやうですし。」

「さうねえ、しかし。」

と教頭のいふ時、時計は四時を報じぬ。

「あ、私、四時には人が來る約束があつたつけ。」と慌しく、

「それぢやあ、葉山さん、貴女仍考えて見て下さいな。私も考えて置きますから。」

「は、さうしませう。」とて、再び添削未濟の作文帳を取上げぬ。

此後も、教頭は仍、向井の親を呼びては、と促す事ありき。

されど、渠は、彼文の書様により、全然若き男の、半は、董文字を並べたき浮草の根もなきすさびとして、捨置くと共に、此方には向井とは言はず四年生一同に

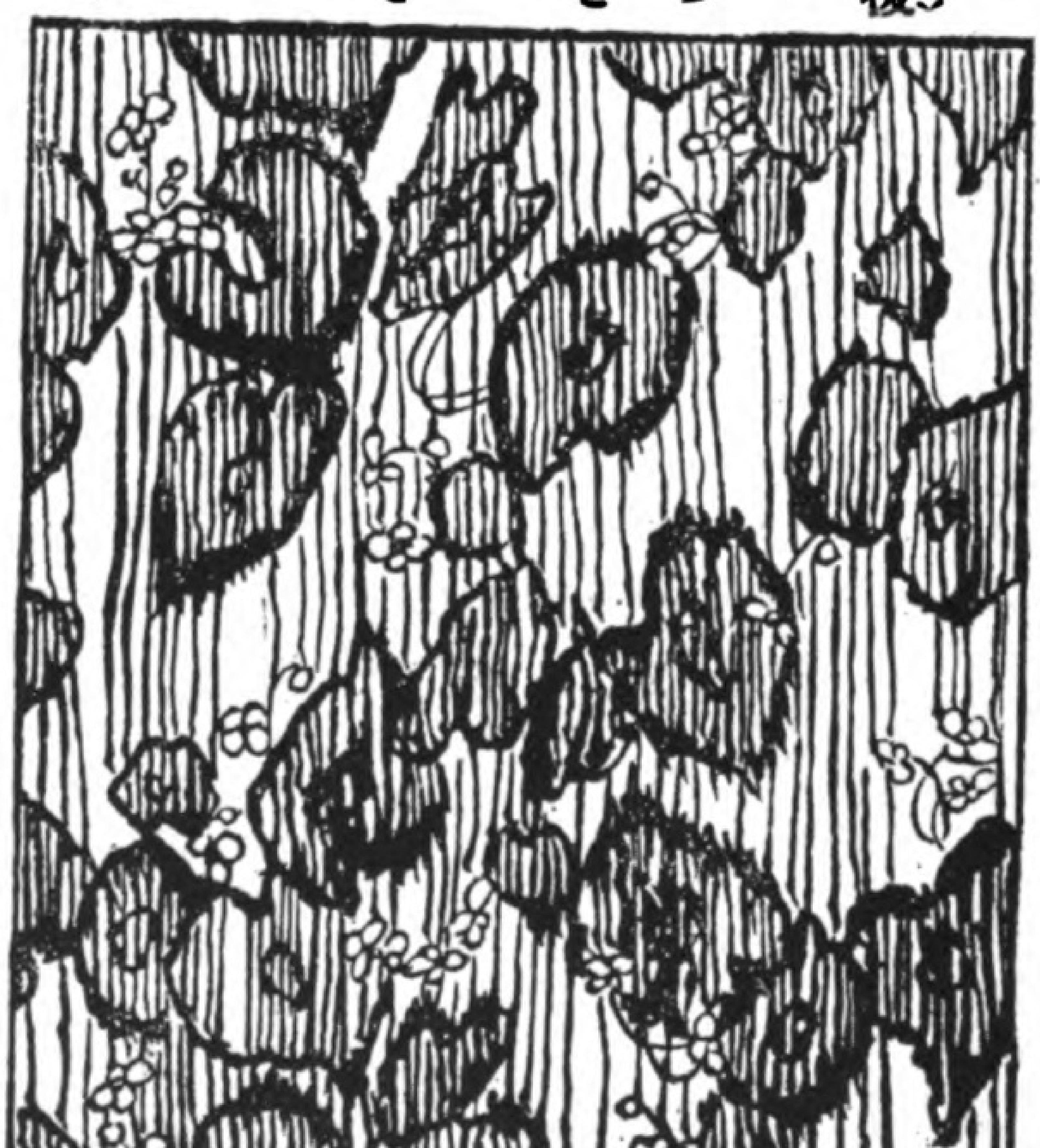
女子は、いかにも女らしく靜肅なるとともに、嫋竹の一節ありて、戯けたる男に侮られぬやう心すべきなり。醉しれたらん男なりとも、形を正して目成るには避けゆくぞ、況て然らぬ者をや。此方の用意一つぞ。

とて、それとなく戒めつ。

文は、机の抽出し奥深く秘めたりしが、或時、二日三日打續き彼女の遲刻せる時、渠は言知らず不安の様子に、密やかに小蔭に招きて、

「向井さん、一昨日と昨日と今日と、奈何して這麼に

遲刻するのですか。」
と、俯向きたる彼女の肩より、美き面わを差覗くやう
にして溫和く問ひぬ。
「は。」と、彼女が例も爲なる
耳朶少し赧めて、
「あの、一昨日は、汽車に乘後
れましたし。昨日と今日は、
お醫師樣に寄りましたのでつ
ひ遲くなりました。お屆けを
持つて參りました。」
とて、懷中よりさし出すを披き
て、
「眼が惡いのですか。」
と言ふ時、稍充血したる彼女の
眼と合ひたり。
「然ですか。」と密やかに吻と息吐きて、
「それは不可せんね。それならば宜しいけれども、途
中は能く氣を注けて、女學校の生徒がなどと、人に
言はれないやうにしないと不可よ。もう少しで卒業
なのですからね、宜しい。さ、お入りなさい。」
とて、文章を簡潔にといふ渠は、例の力の籠りたる詞
短かくて許しつ。



新柄——浴衣地一反壹圓五拾錢(三越)

然れど此後も、此生徒の缺席の
度、遲刻の度、早退の度ごと、
渠は彼女の上に、幾許の注意を
拂ひたりけんよ。その仔細を尋
ねて何事なかりしを喜ぶ時は、
例も、それとなき教訓の詞を添
へつゝ、斯くして人知らぬ苦辛
を味ふ暇に、師走の降り氷る日
極寒の一月二月も過ぎて、櫻咲
く三月下旬、此の級は、一人の
落弟者なく、眞率なる良き組と
の賞讃を博しつゝ、めでたく卒業しぬ。
式の後、教室に集まりたる生徒の前に、渠は、例の多
感なる、しかも深沈なる態度もて、

「永々、厳しい事ばかり言ひましたが、皆さんは、腹も立てず、能く言事を聽いて、何の先生にも、今までにない眞率なよい組と賞められ、一人の落第もなく、揃つて卒業して下さつたのは、眞個に嬉しく思ひます。」

と、言ひたりし時、先刻より、卒業の唱歌、校長の告辭に、打連り涙含みたりし生徒は、得堪へず聲立てゝ机に打臥しぬ。

「那麼に、大きな聲をしては、不可せんよ。」

と制する渠も、此級が、三年生の九月より、擔任中の其事彼事、四年となりては況て上級なり模範生なり。然る事して可と思ふか、斯くせではならぬならずやなど、

今の大方の女學校の、作法はあり學科として、倫理はありそれも學科として、要は、若き教師の髮の形、袴の穿き方をのみ爭ひ擧て、ハイカラ風のみ吹荒むを少からず慊かず思ひける餘り、「女らしく」といふ題のもとに、眞率にといふ主旨のもとに、欠伸催さする長時間の説法こそせざれ、事に亘り機に觸れつゝ、そも幾返り戒めたりけむ。

今日の別れのありとは知りつゝ、

ありと知りてぞ、彌々戒めつる。など、

假令ば、幾年の苦勞に育て上げつる娘の、良き緣ありて愛度門出送る親の心も斯くや、

言知らぬ熱き涙の溢るゝを袖もて、犇と押へて立つに眼を擦赤めたる級長は、やがて立上りて、歔欷泣きに聲も途切れつゝ、

「先生、私達は眞個に亂暴な生徒と言はれて居ましたのを、先生がお出になつてから種々教へて頂いて、辛と少しは女らしくなつたので御坐います。眞個に此御恩は、何日まで經つても忘れません。」

と言終るや、誰が口よりともなく、

「先生、難有う御坐いました。」

とて、又一時打啼くなり。

此日しも、渠は、机の抽出し奥深かりし彼艶書を、火桶に打くべつ。

篝火のやうなる若き男の秋波の、其後かき絶えて事なく熄みにしぞ、嬉しと神に感謝しつゝ、歸りて後も、四十七名の卒業生が、木綿の紋服愛らしう、免状受けに出でにしさま、リボンかけたる髪を机に投かけて、幼兒のやうに啼きたりし容など、胸の中を往來ふ端に、

「向井もまあ無事で。」

と想起すと共に、嬉さの默しがたう、衷心よりの祝ひの詞は、すら〳〵と端書に認められたり。

拜啓、未だ御眼には懸らず候へども、世に超えて美き嬢様の、遙々の、路を汽車にての御通學、いかに不安心く御案じ遊ばされ候御事と、子を持つ身には、外ならず御察し申上參らせ候ひし。事なくて御卒業の嬉しさ、なほ御機嫌よくて御榮えあれと、祈り參らせ候。かしこ。

と許り、いかなる事のありけんとも知らぬ彼女の兩親は、大方の祝ひとしてや讀みたりけんかし。

父おもひ

小栗風葉

三

晩方私も一先づ宿屋に歸つた。勿論仙臺の伯父には電報を打ち、委しい事は後から長い書面に認めて送つた。

此際私は何うしたものであらうか、甚麼事情があるにもしろ、現在の妻、現在の母の病死を素知らぬ顔で過さうとは何事？死を公にされぬ事情とは何であらう？私には更ぱり合點が行かなかつたが、右に左、亘作に命じて主治醫から死亡診斷を受けさせ、知己親戚にもそれ〳〵通知を出したが、鐵衞は別にそれを拒みも爲なかつた。

嗚呼お朝と云ふ人は實に不幸な女である。一つは容色の勝れて居た所爲であらうが、恐しい派出好な人で何時も〳〵娘のやうに氣の若い處から、シツチリした

伯母などは「まるで商賣人のやうだ。」など〻蔭口に言つて居た。が、左に右見上げた聢りした處のある女で何事でも負嫌な處から、他から憐れまれたり同情されたりするのを何より苦痛に思つて、何所まで我執の强い人であつた。仙臺の伯父などに言はせると、鐵衞が今の悲境に陷つたも、お朝の虛榮心に釣込まれた所爲である、と共に、今日猶は苦鬪の中に一道の光明を仰いで撓げない其の勇氣は、執着强い妻の賜物と言ねばならぬので。

其夜も九時過ぎ、重作は慌しく宿屋に來て、私に直ぐ來てくれるやうにとの事である。

途中まで來て、「一體、何事が起つたのだ。」

「旦那樣も餘りだが、那麼情の强い娘は、私見た事がねえだ。」とプリ〳〵憤つて居る。

「誰がさ、靜枝さんが。」

「爭はれねえもんだ、今の奧樣が若い時にソックリだから。」

で、重作の話は恁うである。鐵衞が例の鑛山に失敗を重ねて、最早手も足も出なくなつた時、鐵衞の氣性に惚込んで出資した男がある。この町の海產問屋で──鐵衞が石卷町に移つたのも其爲である──相應の資產家であつたが、二三年の間に朝倉鑛山に入揚げて、今では店も張切れず、裏町邊に小さくなつて居る水島某と云ふのが其れで、息子茂樹と靜枝とは結婚の約束さへ結んである處が其水島の周旋で、更に或る金主を見付けたのは好いが、肝心の利益配當の問題で、金主は折半で無ければと承知せぬし、鐵衞は飽迄四分六の配當を言張る爲めに折合が付かず、延いて水島の方とも近頃は遠々しくなつて居る。處へ降つて湧いた今度の不幸、鐵衞は差詰葬儀の費用も工面が付かぬ苦し紛れに、今日又、水島へ二百圓の融通を申込んだ。水島の方では、それを機に金主の一條を持出して、今其のゴタ〳〵最中との事。私はそれで今朝の始末が能く分つた。

寒國の習で、臺所の次には大きな圍爐裡を切つた一間がある。鐵衞は其の正面に寒さうに坐つて居た、朝

から見ると醉も醒めて居るやうである。

客と云ふのは、紺絣の羽織を着た書生風の青年、何うも見たやうに思つたのも道理、昨日同船した美術學校の生徒が其の茂樹なのであつた。

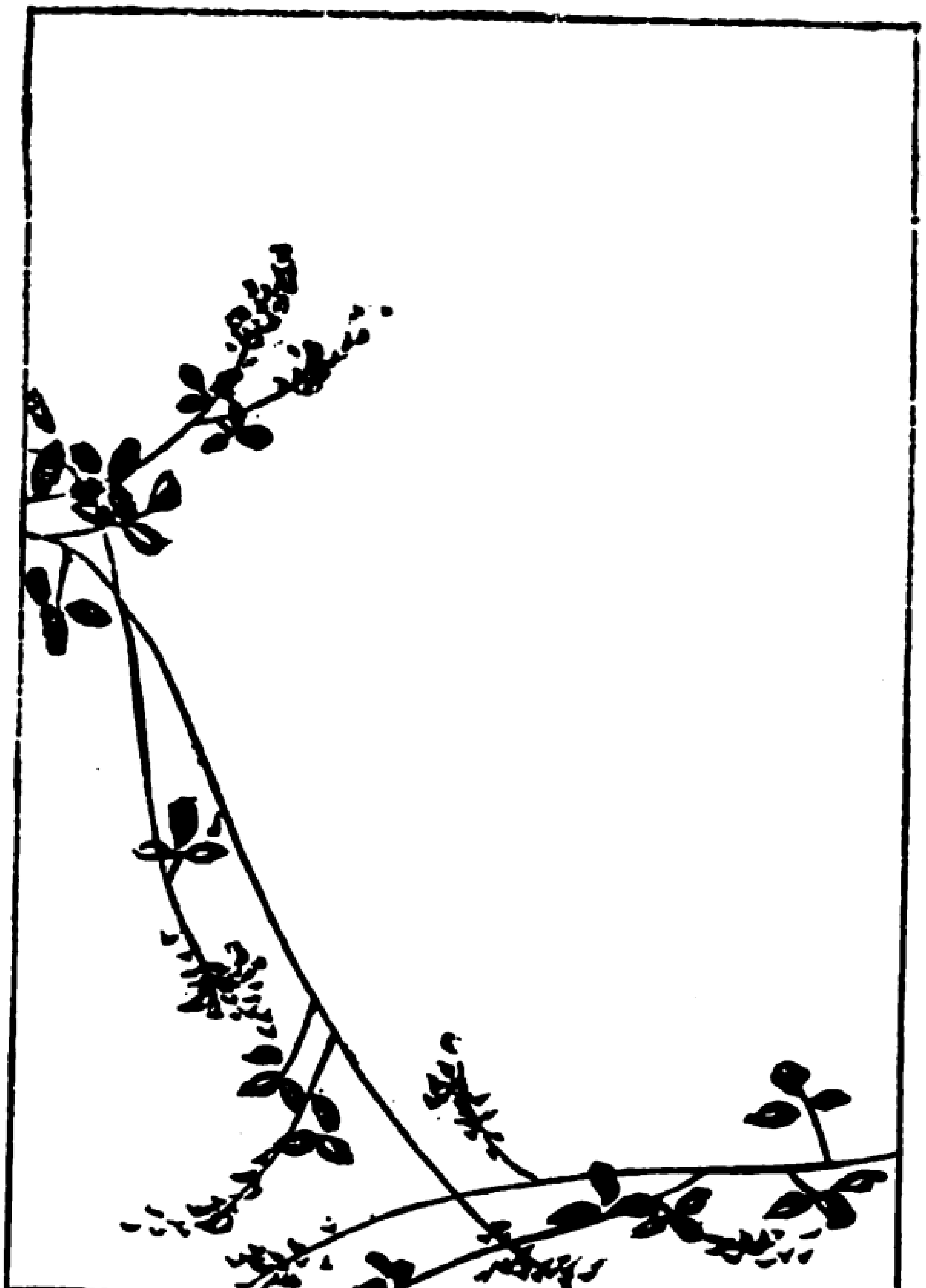
「や、昨日は失敬！」

「お〻貴方でしたか。」

と言ひながら、先方は慌て〻席を譲り、而して子供らしい其顔を眞赤にした。

靜枝は向側に紫懸つた大柄な被布を着てキチンと坐つて居たが私共を見ると心持眉を顰めて、「爺や、お前眞造さんをお迎に行つたの？」

「はあ、行きましたゞ。」と洋燈の心を直しながら末座に畏まる。



水色絽地に花を金泥に、葉を匹田又は寫生風に、裏はかわり色にて染め出したる、兩面染にて上品なるもの　四圓五拾錢。

「困るわ、誰にも斷らないで那樣事しちや、第一失禮では無いか。」

「何有管はねえだ、眞造樣だつて今日の仕様には緣が續いとるだで、一緒に立合つて貰つたら、話の白黑が早く付くべえ想つて――なあ旦那、其の方が可いでねえかね。」

鐵衛は何も言はなかつた。

茂樹は私に氣をかねてモジ〳〵しながら、「では親父にも能く話して諦めさせる事にしませう。」と力無げに溜息して、「然し事情を聞けば親父も可哀さうです、全く今では百圓の金も思ふやうにはならぬらしいです。」

「だから、頼まないと言つて居る。」

「勿論私などに分りもしますまいが、五分の配當と四分六とで、それ程の違がありませうか、素人の考では恁うしてグズ〲引張つて居る位なら、結句同じ事になるだらうと思ひますが。」

「お前などに何が分るものか。」

「ですが――。」

「歸つて親父に然う言へば分る、朝倉鑛山は田村鐵衛の生命だ！四分六の配當と云ふのは、究り鑛山の主權を金主に渡すのも同樣な理屈になるのだ、あの山に花が咲いても他人の物ぢや何になる、今日あの山は人に渡す位なら、鐵衛は二十年來苦しみ拔いた揚句、女房迄犧牲にはしない、家に歸つて然う言つてくれ。」

「承知致しました。けれど、私共の現狀も察して頂かねばなりませんので、濱方は勿論、問屋先まで、随分信用を失して居るらしく、昨夜も親父が染々申すには今度の金主を取逃したら、家は破……破産でもするより外に無いと言つて……。」と、ホロ〲涙を零して居る。

「はゝ、意氣地のない事を――那樣弱い氣なら初から鑛山などに懸らぬが可い。」

「ですが、私の方の身になりましては――。」

「最う愚痴は澤山だ！。」

「は。」と、力無く茂樹は頭を垂れたが、暫くして、「靜枝さん！何とかなりますまいか、私は實に困つた。」と救を求めるやうに娘を見た。

「私にだつて……。」と洋燈の灯を見詰めて居る。

「是が因で、兩家の不和を來すやうな事があると、實に不幸だと思ふから。」

「那樣事はありますまい。」と答へて、靜枝は密と茂樹の顏を偸み見たが、凝と男が見詰めて居るので、サツと顏を赤めて差俯く。其れを見た茂樹は、新しい勇氣を震ひ起したやうな活々した聲で、「小父さん、今一應御考直しを願はれますまいか、此儘歸れば、是で兩家の間が絶えるやうなものですから。」

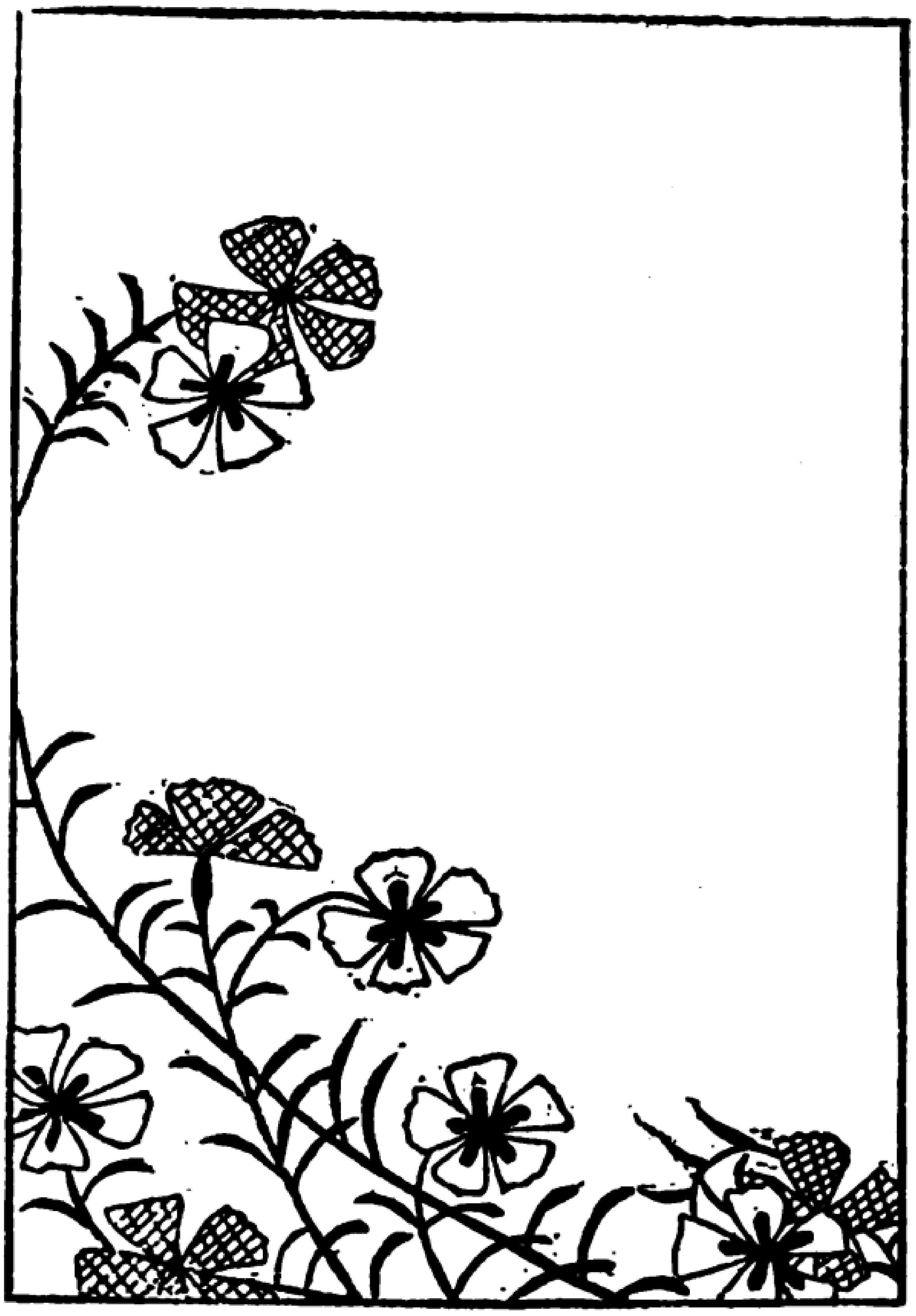
「致方がない、諦むべき事は諦めるだな。」と外の方を見て居る。

曩から鉈豆煙草で、悪臭い煙草をスパ〳〵と薫らして居た重作がグイと膝を乗出して、「お孃様！何とか旦那に相談出來ねえだか、餘りでねえか、茂樹様はお前様の何に當つて居さると思ふだ、些ア茂樹様の事考へてお上げなさるが可いだ。」

「爺やのやうに然う言つた處で、私には…。」

「だつてお前様、茂樹様の事はまあ可いにしても、奥には佛様が那して寢て御座るてねえか、樒一本上げねえで夜を越すちふ法が何所の國にあるだよ、些との無理は佛様に免じて勘辨したら、水島様の方でも何とか又弔の雜用ぐらゐは—。」

「重作！」と鐵衛は耐りかねたやうに、叫んだ。



白絽縮緬に、撫子を匹田又は白上げの寫生風に、葉を藍、緋背にて染め上げし、二十歳前後向きの上品なるもの、四圓七拾錢。

「私お孃様に言つとるだから。」

「貴様は主人に耻を搔せるのか、貴様の口を出す處ぢやない、黙つて居れ！」

「へんや、黙つて居ねえだ、今日は何處が何處迄言はにやなんねえ、其爲めに態々恁うやつて眞造様にも來て貰つたゞで。」と正直者だけに、ホロホロ涙を流して、「お孃様！お前様それで濟むと思ふだか、お前様も口添へて旦那に願つて見るが當前でねえか。」

「だつて、私はお父様の心迄枉げる事は出來ないから。」と唇を嚙んで居る。

「重作！貴様は黙らんか！」

鐵衛の聲が餘り高かつたので、次の間に居た辰子が

泣出した。

静枝は偶いと立つて行つた。

四

其晩茂樹と共に宿に歸つたのは十二時過であつた。月の好い晩で細長田舍町は皆深い眠に落ちて居る。通々茂樹は溜息を吐きながら、何とかして話を圓滑に運ぶ方法を私に相談した。茂樹は鑛山よりも金主よりも、何よりも靜枝との約婚が破れるのを恐れて居るのである。で、私が、「君が靜枝を愛して居るのは、私にも能く分つて居るが、全體靜枝の方では、君は何う思つて居るのです。」

「靜枝さんが？」と顏を赤くして、「それは私の思つて居る以上に、向ふでも思つて居てくれるだらうと思ひます。」

「それなら可いぢやないか、心配はあるまい。」

「然し那云ふ性格の女は、反抗心の爲めに、自分の愛を犠牲にする事があるものですから。」

「其れもある。」

翌日、仙臺の伯父から送金して來たので、左に右葬式だけは濟ましたが、水島からは其限誰も來なかつた。唯、茂樹は通りがゝりでもあるやうに、平常着の儘で餘所ながら會葬した。

其後二度ばかり茂樹は私の宿に訪ねて來て、繰返し靜枝との間の破れたのを悲んで、出來るものなら私に仲裁をして貰ひたいらしい口振であつた。

五

今日仙臺に歸ると云ふ午前、私は田村へ暇乞に行つたら、生憎鐵衛は外出して留守、靜枝が獨り椽端に蹲んで、何か物思に耽つて居たので、私は好い折と思つて、茂樹の事を言ひ出して見た。

「私何う云ふものですか、茂樹さんのやうな方は嫌ひ。」と靜枝は眼も伏せず、明樣に恁う言ふのである。

「何故？」

「だつて、那麼弱々しい、意氣地のない。」

那處が藝術家らしい所さ、私は那の情に脆い、世事に馴れない、弱々しい處を愛して居る。」

「私は可厭！　全で宣教師見たやうだわ。」

「では靜枝さんの氣に入る人は、一體甚麽人だらう。」

「甚麽人つて——ハキ／＼した意志の強い人が、男らしくて好いと思ふわ。」

「誰のやうな、僕の知つてる人で云ふと。」

「那樣事言へませんわ。」

「言へない事があるものか、現在約婚の男を？　非難して憚らない程の、勇氣のある靜枝さんが。」

「だつて、今現在那樣人があるのぢや有りませんもの。」

「現在無くとも、或は過去でも可い、貴方位の年頃には、理想の人と云ふやうな人があるものだ。」

「其れなら、有るわ。」と晴々しく笑つて見せて、「其點から云ふと、家のお父樣なんか、慥かに私の理想の人よ。」



新柄——浴衣地眞岡貳圓四拾錢同縮同參拾五錢上り（三越）

「お父さん！」よ娘の顏を打戍つた。

靜枝は頷いて笑つて居る。

全體靜枝ほど妙な娘はない時には貴夫人のやうに嗜深く取澄して居るかと思ふと、時には馬鹿に浮々して小娘のやうな仇氣ない態を見せる——現に今がそれだ——唯、然うした時に限つて、何處やら落着かぬ不安さうな眼付をするやうに見える。這麽風は、必ず心の内に秘密か恐怖を抱いて居る者に見る事だ。

靜枝は直ぐ以前の眞面目に返つて、「私は全く然う信

じて居ますわ、未だ不幸にして成功しないから、世間では色々とお父樣を悲難するんですけれど、慥に偉い所があると思ふわ、意志の强い所、執着の强い所、私は飽迄男性的だと崇拜してますわ。」

「その點は僕も變らない、小父さんは實に薄倖な方だ……けれども。」と言半して、私は態と言葉を途切らして見た。

「けれども？」と果して靜枝は不安らしい眼付をして私を見る。

「けれども、何うしたの、眞造さん。」

「何有、唯偶いと心に浮んだ迄の事さ。」

「ですから何の事？」

「貴方のやうな人の眼からは、女々しい卑しむべき事かも知れない。」

「あ、分つた、乾度又、茂樹さんの事でせう。然うだわ、ね、然うだわ。」と靜枝は又例の仇氣ない笑を浮べて、心持首を傾げる、何うしても靜枝の心には二重の底がある。

「僕は貴方が弱い人を好かぬやうに、自分の叉情を抑へて喜んで居る人は大嫌ひなのだ。」

「何故那樣事被仰るの。」

「そりや、果を取るのが唯一の目的なら、果を大きくする爲めには、空花を摘み、枝も透して、秋の收穫を待つのが當然の事かも知れない、結構かも知れない、けれど摘捨てられる花の美しさも考えてやらなければ。特に自然の目的は花にあるか果にあるか、第一それすら疑はしい。摘取られた花になつて見ると、乾度云ふ可らざる恨があるに違ひない。」

「ですが其花だつても、他日其の果が大きくなつて、究り自分を犧牲した爲めに然ういふ功果を得たのだと思つたら、それで自ら慰めれば好いと思ふわ。」

「然し、其花の色と香に望は囑して居た、花守の身となつたら。」

「それは致方がないわ、天下花と果と目的が違ふんですもの。」

「では貴方、乾度後悔するやうな事はありませんね。」

「何をですの。」と云ふ聲には不安らしい濁がある。
「水島君を棄てた事です。」
靜枝の顏には明かに混亂の色が見えた。
「僕は乾度其時が來ると思ふ。自分の情を欺いて居る人程、それ丈又甚しい悔恨の時が來るに違無い、貴方は或る目的の爲めに情を殺すのは、然も名譽のやうに言ふが、恐らく現在の貴方であつても、心の內に一種の壓迫は感じて居るだらうと思ふ。のみならず、それは慥に卑怯ですよ、貴方は自分で自分を欺き完せるものと思つて居るだらうが、間違つて居る、世間に對する一種の反抗心とブラウドから、意志に盲從したるものを見なければならぬ。然しそれは、後來必らず悔恨の時が來る、貴方自身を殺した匕首だと云ふ事に氣が付く時が來るに違無い。」


新柄腰帶

「ですけど、私何うしても茂樹さんと性格が合はないんですから。」と言ひながら、衝と立つて椽端に出た。然しそれは私に向つての語を見るより、強いて自分の耳に尉藉の言を聞かせたのかも知れない。
「いや、僕の見る所では、貴方の心は水島君の熱誠に動かぬ程荒んでるとは思はれない、假ひ貴方の理想は那麼人は好まぬとしても、理想と愛とは別な事が往々にしてある、能く心を平にして考えて見なさい、貴方のやうな人に限つて、心の底には乾度烈しい愛が燃えて居るものだ!」
靜枝は顏を伏せて身動もせぬ。私は心の內に一種の勝利を感じた。が又、靜枝が暗然首を垂れて居るのを見ては、有繫に氣の毒にも思はぬとはなかつた。氣の

所爲でもあらうか、面瘦が目に立つて見える。
濱の方微かに舟歌が聞えて、藻でも焚くのか、人の氣を興奮さすやうな匂が、秋晴の爽かな大氣を侵して身に迫るやう。
暫くして面を擧げた靜枝は、煩さゝうに後毛を掻揚げて、「一體、何うすれば可いんでせう、私何も分らなくなつて來たわ。」と投出すやうに言つて淋しく笑ふ。
「悔恨を殘すまいと思ふなら、自分の情も顧るものです。」
「貴方は茂樹さんの話を飜せと被仰るの。」
「水島君の熱望して居るのは其處です。」
「けれど――」と溜息を吐いて、「最う駄目だは、一旦此方から斷つたんですもの。」
「那樣事は無いさ、貴方から話の緒を戻したら、先方で承知しない事はない。」
「すると、此方が詫る事になるんだわね。」
「それが何の恥辱でせう、貴方が打明けて話を元へ戻したら、水島だつて貴方の高潔を何程感謝するか知れない。」
「私は可いとしても、お父樣に謝らせるなんて、斷じて出來ないわ。」
「それは貴方の心次第です。何も伯父さんが出なくも、貴方次第で何うでも結果が付くと思ふ。」
「それも然うね。」と山茶花の散るのを凝と淋しさうに見て居る。
「水島君も貴方も、二人の活きる道は其外に無い、餘計な見え坊や瘦我慢は、斷じて脱ぎ捨てなきや可かんと思ふ。」
「然うね。」と考えて、「然うなると、水島では屹度又、金主の一件を復活して來ませう。」
「それは或ひは知れない。」
「然うでせう。」と言つて暫く考えて居たが、偶と又活返つたやうに派手に笑つて、「私もう可厭！ 尤らないわ、貴方が色々の事を云ふものだから、つい釣込れて了つて……あゝ可厭！ 這麼話は舍しませう。」と立上つた。

では、靜枝さん、貴方は飽迄？」
「は、お父様の意志を貫徹させるのは私の義務で御座います。」
「飽迄自分を殺しても？」
「は、私お父様の爲なら甚麼事でも忍びますわ、考えて見て下さいな、お父様は六十に近いのですよ。私迄放れ了つたら、世間に誰一人お父様に同情する人はないんですもの、お母様は朝倉鑛山の犠牲になつて、一言の恨も言はずに死にました。此上最う、不幸なお父様を助けるのは私ばかり、私は――私は――飽迄お父様の犠牲になります。」と云ひながら庭下駄を引掛けた。

六

私が靜枝の本心を茂樹に話して聞かせた時、茂樹は何とも答へなかつた。無理とは知つても其愛は棄てよと勸めた、茂樹は唯從順な弟子が師匠の言葉を聞くやうにおとなしく、はい〱と頷いて居た。

五六日後。私が仙臺に歸る時、茂樹も同じ汽車で東京に上る事になつた。眼に立つ其顔の窶れを見るに忍びず、例の汽船の中でも、鹽釜からの汽車の中でも、自分は染々慰めてやつた。

愈よ仙臺の停車場で別れる時。

あゝ、是からは眞の獨旅になるですな。」と茂樹は染りと言つた。

「はゝゝ、何を行らない。二週間もすると僕も上京するから。」と威勢よく僕は笑つて見せた。

「然うして下さい。私は是迄、孤獨と云ふ事を考えた事すら無い。靜枝さんに棄てられてから今日迄も、今朝迄も其の事を考えない。それを考えて見やうと思つても、恐ろしい穴倉でも啓けるやうな氣がするから、毎も〱他の方に強ひて紛らして居たですが――朝山君、僕は今日からは、考えも及ばない孤獨の生を遣るんです。」と言ひながら、窶つた行手を眺めた。（完）

餘興

家政學校

小波

第九節　松子夫人　花子　志保子

（花子膝に落ちぬ體で）阿母さん！　何うしたの？

（松子）何うもしやしないんだよ。

（花子）だつて淸が萬歲だつて……

（松子）それはお前が、平常あんなに厭がつて、居たのに、——急に心が改まつて、家政學校へ上る氣に成つたから、それでおめで度うと云つたんだらう家政學校へ上りさいすりやア、もうお肴を焦がしたり、指を火傷する事も無いから、お前も安心するが可いぢやないか。

（花子）……（苦笑して指の繃帶をなぶつて居る。）

（志保子）それでは花子さん！　ほんとに私の學校へ入らしつて？

（花子）ほんとに上りますから、何卒宜しく！

（志保子）まア嬉しい事！　それぢやア私のお友達を、これから貴女に御紹介申ませう。叔母さん！　もう宜しう御座いますか？

（松子）何卒！

ト、點頭き、やがてまた席を設ける、花子はまだ合點ゆかず。モヂ〳〵二人の顔を見較べて居る。

第十節　同上　宇佐子、羽根子、貴美子（三人取次で出て來る）お淸

志保子は立つて、襖を明け、

（志保子）宇佐子さん、入らつしやいましな！

（宇佐子）はい！

ト、以前の宇佐子、今度はしとやかに出て來る。

（志保子）私のお友達、家政學校の飛井宇佐子さん！

（宇佐子）先刻は失禮致しました。（ト、挨拶して坐に着く）

（花子）……（ト呆氣に取られて辭儀する）

（志保子）羽根子さん、入らしつて下さい！

（羽根子）はア！

ト、これも以前に似ず、徐に座に直る、

（志保子）私の同級の方で、眞鍋羽根子さん！

（羽根子）先刻は失禮致しました。

（花　子）……（無言で辭儀する）

（花　子）貴美子さんも何卒お早く！

（志保子）はい、只今！

ト、貴美子今度は畫具箱も持たず、しとやかに出て座に着く。

（貴美子）同室の色澤貴美子さん！

（貴美子）先刻は失禮致しました。

（花　子）……まア……皆さんお友達なの？

ト、一同の顔を見廻はす。松子漸く膝を進ませ、

（松　子）皆さん家政學校に居らつしやる方さ。お前爲いたかエ？

（花　子）まア、私……ちつとも……

ト、極りの惡い體。志保子はそれを慰める樣に、

（志保子）是から貴女が御出でになれば、みんなお友達に成るんですの、けども花子さん！　決して御心配には及びませんよ。貴美子さんだつて、先刻の樣にキザでは無し、羽根子さんも生意氣ぢやア無し、宇佐子さんだつて、もしお轉婆ぢやアありません、皆（少し力を込めて）家政學校の生徒ですから、何卒その御心算で御交際下さい！

（花　子）アラまア……それぢやアみんな故意と爲て居らしつたの？

（貴、羽、宇）はア！

（松　子）けれどもこの志保子さん斗りは、少しも故意では無いんだよ、──何を隱さう、──私はお前の心を直して、何卒して家政學校へ上る樣にと思つて、種々心配した揚句、漸くこんな狂言を書いて、此のお孃さん方に譯を話して、役者に成つて戴いたのさ。所が皆さんも、よく私の心を察して、熱心に勤めて下だすつたから、思ひの外効驗があつて、お前の心がすつかり直つて、こんな嬉しい事は無いよ。──それとも花子！　お前は誑されて悔しいかエ？

(志保子) お腹が立つなら此通サ、私達からも謝罪りますわ。ねエ皆さん!

ト、三人を見かへる。三人も點頭き合ひ、

(羽根子) 花子さん、先刻は、

(貴美子) 失禮な事斗り申しまして、

(宇佐子) どうもまことに濟みません。

(貴美子) あれはもう水に流して、

(羽根子) これからはもう姉妹同様、

(宇佐子) 仲よくお友達に成りませうねエ!

ト、手をつき、口を揃へて云ふ。花子慌てゝそれを制し、

(花子) そんなに仰有つしやられては、私、何と申してよいか解りませんワ。何卒そんな堅い事仰有らないで、ほんとに仲好くして下さいましな! 阿母さん!……私ほんとに嬉しい事よ。

(松子) オヽ、よく云うておくれだ! それで私も安心した。皆さんも難有う御座ります。それでは御仲間入の印に、私が御馳走致しませう。

ト、手を鳴らす、お濟出て來る。

(お濟) お召しになりましたか?

(松子) 御用意が出來たかエ?

(お濟) はい、もう宜しう御座ります。

(松子) お肴は焦げては居ないか。

(花子) アラ阿母さん! (と顔を掩ふ)

(お濟) 何う致しまして! 皆さんに手傳つて戴きましたから、みんなお見事に出來まして御座います。

(松子) まア、そんな事までして下すつたの?

(貴美子) いゝえ、ほんの練習させて戴いた斗り。

(松子) まア恐れ入りましたねエ。では早く出しておくれ!

(お濟) 畏りました。

ト、これにてお濟は、次の間から膳部を運ぶ事あり。

(花子) 私お手傳してあげやう。(ト、これを助ける)

(お濟) アレ、恐れ入りますこと!

(花子) 私もう生れ變つたんだから、何様なお手傳でもしてあげるよ。

(お濟) まア、ほんとによく生れ變つて下さいましたねエ。

(花子)・で、もう明日から家政學校へ上るの? そして種々な事教はるの?

(お濟) まア、結構で御座いますねエ。

（花　子）お料理でも裁縫でも、今度は私が濟に教てあげるよ。

（お　清）何卒お願申します。

ト、この臺辭の間に、膳部皆運び了る。他の者はそれを聞いて、皆々笑ひ興ずる事あり、よき程に松子

（松　子）さ、皆さん何卒お始め下さいな！　花子も御免蒙つて御招伴をし！

（お　清）お孃さま何方に致しませう。

（花　子）私、志保子さんのお隣りが好いワ。

（お　清）では此方へ！

ト、花子、志保子の側に座につく、

（志保子）何うも恐入りますのねエ。私はお手傳ひも致さないで、御馳走斗り戴いては……

（松　子）何も無いので御座りますよ。……せめて餘興でも出來るとよいのですが……

（花　子）アラ阿母さん！（松　子）何を？

（花　子）餘興は先に濟んだぢやありませんか。

（松　子）ほんに然うだつたねエ。ホヽヽヽ。

（一　同）ホヽヽヽ！

皆々打興ずる。よろしく幕

▲婦人辯護士

佛國に於て婦人辯護士の出來たりしは僅に六年ばかりの事なり。されど其出來たる當時の事歷を尋ぬれば中々に興味あり。

初代の女辯護士、ショーヴアン孃はロアレ縣の出身なり。今より十四年前に於て理學得業士となり、次に文學士となり、次にパリ大學に於て法律博士を授與せられたりき。孃はパリ裁判所に辯護士名簿登錄請求の書面を呈出せり。檢事總長は直ちに其書面に可としたれども裁判長及び陪審官等は異議を唱へたり。是に於てブルッセル府の一辯護士は仲裁の勞を採り若しショーヴアン孃に辯護士を認可せずんば彼女の得たる免狀（法學博士）は無効の者となるべしと云ふにあり。併ら判事は無條件にて女子を辯護士とする事を好まざりき。只判事を辯護士より採用せずとの條件を設けてこれを認可せり。かくてショーヴアン孃は法律事務所を開きたり。訴訟鑑定殊に婦人に關する事件引受けと云ふ看板を懸げたり。而して千九百年佛國議會は婦人辯護士に關する法律を制定したり。今や佛國女子は公然何の面倒なく一片の請求書を以て辯護士名簿に登錄さるゝ事となりぬ。

婦人辯護士規則發布の翌日、巴里裁判所第一法廷に於て現はれたる婦人辯護士、黑き制服を羽織りつゝ威あつて猛からざる相貌は、滿場の視線を一身に集めたりき。有名なるショーヴアン孃かと思ひしに、圖らざりきレア、パラショウスキーと云ふ露國婦人にて、今は佛國人に嫁してプチ婦人と名のる者ならんとは。プチ婦人はショーヴアン孃と同じく佛國に於て法律學の免狀を得し女性なりけり。ショーヴアン孃の始めて法服（辯護士服）をまとひて法廷に出たるはプチ婦人よりおくれて十一月二十日なりき。

其後出來りたる婦人辯護士は曰くマルテン夫人テイラン孃、ゲーニョ孃、ルエル夫人の六名なりき。

世界女新聞

うまのかみ

△義俠男兒の奇禍

◎巴里モンマルトル區の出來事。或夜其附近の街頭に、怪い婦人一人立現はれ、通行の某氏（商店の手代らしい男）を引捕へ、何か談判を始めました。折ふし巡回の警官來懸つて、其不體裁を咎め、懲しめの爲めにとて、其婦人を拘引しやうと致しました。所で某氏俄に義俠家に成りまして、其の婦人は「私の正當の妻ですから拘引される理由ありません」と、巡査に向つて抗議を申し立てました。巡査は「本當かしら」と思つて、やゝ躊躇して居る間に、群衆を押分けて現れ出たる一婦人が有ました。いきなり、某氏（番頭風の男）の頭部を、持て居る蝙蝠傘でなぐり付まして怒鳴りました「サア今一度此阿魔を正當の妻だと云つて見ろ。此阿魔が正妻なら私は何ぢや。私は？」

◎本當のおかみさんに飛び出られて、某氏は多せいの人中に面目を失つたのみならず官吏侮辱とか云ふ目安で拘引されましたとんだ男だての、とんだ災難。

△百美人、東洋より來る。

◎佛國政府はマルセーユ港に於て、佛國殖民地物產展覽會と云ふ者を開きました。アジヤ、アフリカに在る各殖民地の出品夥しく集りました。

◎佛國政府は此展覽會見物の爲め、其保護國なるカンボヂャ國王殿下を招待しました。そして其尋でに巴里にも御來遊になるやうに申送りました。勿論其費用は一切政府より支出する筈で。

◎カンボヂャ國は御存じの支那の南方、安南の西隣にある小王國です。先の國王ノロドムは凡そ半歳前に逝去されましたので、若いシソワト殿下は今年一月十一日に國王の位に登られました。

◎シソワト王殿下が、始め御招待を受けました時に、兼て宮中に御抱ひ置きの、百人の踊り子をつれて、佛國へ旅行したいと云ふ、しほらしい御希望を起されま

した。然るに老臣某は之を御諫め申して、踊子御同伴で御渡佛の事は、多額の費用を要し、莫大に佛國人民の負擔を増す儀にて候へば、此儀はたつて御見合せ然るべし」と申し上げました。國王殿下は至極尤の事ぢやとは御召しながら尚ほ百美人を殘して旅立する事の、如何にもつらく御召されていろ〳〵思案を廻らし給ひ其末が巴里に御到着の上は、百美人を何所かの劇場に出勤させて、其貰つた給金を、佛國政府に納め佛國納税者の財布に差し響のないやうにすると云ふのである。



巴里社交界の花〔大統領の令嬢〕

◎佛國人は此可愛らしいシソワト殿下とそして御連れになる百美人との到着を早く見たいと待つて居ます。我國でも來年の東京の博覧會に朝鮮國皇帝陛下を招待して、官妓御同伴を御願申したらどんな者でせう。定めし佛國の政府や人民がシソワト殿下を御待ちになる様に待つて居るで御座いませう。

九月號記事豫告

（九月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數	十二册
增刊四回	一、四、七、十月價格同一
郵税	一册 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規署

一本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
二御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
三郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
四總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年八月五日發行 第六卷第拾壹號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 山田英二
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話 三百三番 千十八番
本局 二千六百二十番 三千二百二十九番

發兌元＝避暑旅行之好侶伴＝博文館

文學博士
高山林次郎君遺稿
姉崎文學博士　齋藤文學士
共輯

樗牛全集

故文學博士高山林次郎君が、吾邦文藝界の發達に貢献せしヿ甚だ多きは世人の知る處なり其肉體は龍華寺境内冷なる土中に横はれりと雖、言や永遠の生命を有して輝く、茲に博士が遺文を蒐集して彼れが思想に接して靈の泉を汲まんとする者、はた彼れが事業を研究せんとする者の便宜に供す。

樗牛全集第一巻 美學及美術史	全	洋装大判美本 正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢
樗牛全集第二巻 文藝及史傳	上編	洋装大判美本 正價壹圓五拾錢 小包料貳拾錢
樗牛全集第三巻 文藝及史傳	下編	洋装大判美本 正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢
樗牛全集第四巻 時勢及思索	全	洋装大判美本 正價壹圓五拾錢 小包料貳拾錢
樗牛全集第五巻 想華及消息	全	洋装大判美本 正價壹圓五拾錢 小包料拾五錢

文學博士　高山林次郎君著
時代管見
全一冊　洋装小判　正價參拾錢　郵税六錢

齋藤緑雨君著
みだれ箱
全一冊　洋装小判　正價貳拾八錢　郵税四錢

文學博士　高山林次郎君著
文藝評論
全一冊　洋装小判　正價參拾錢　郵税六錢

齋藤緑雨君著
あられ酒
全一冊　洋装小判　正價貳拾五錢　郵税六錢

（後付の二）

發兌元＝避暑旅行之好侶伴＝博文館

巖谷小波君著

伯林土產 戀の畫葉書

一名留學生氣質

全一冊中判總クロース
金文字入繪表紙頗美本
正價壹圓郵稅八錢

◎伯林四季風俗（彩色木版刷）……四葉
寫眞銅版口繪……十葉 挿入

先に洋行土產二卷を著して、洛陽の紙價を高からしめ、將た天覽、上覽の榮を得たる著者は、今又拾遺として茲に本書を公にせり。小說か、否、談話か、否、畢竟實地の見聞を基として、例の妙想を構へ、快筆を揮へるもの、加るに和田氏が挿畫の錦上花を添るあり。氏も亦當年著者と共に彼地に遊べるの人机上一たび之を繙かんか、寫す所眞に迫らざる無く、所謂る文明國の暗面は、忽ち淨玻瑠の鏡に照らされ、例の留學生の眞相は宛ら紙上に躍々たらん。

樋口一葉女史著

一葉全集

全一冊洋裝大判
正價四拾錢
郵稅拾錢

博文館編輯局校訂

◎修紫田舍源氏

全一冊中判美本
正價六拾錢
郵稅拾六錢

源氏物語の古雅なるを俗化し、美文圏中に一新機軸を開きたる柳亭種彥の傑作たる田舍源氏は行文艶麗にして趣向優雅實に時代人情の機微を發揮せるもの、原文總假名なるを校訂し本書とせり蓋し江戶文學の粹なり。

村井弦齋君著

小說 酒道樂

全二冊洋裝大判上製
正價一册五拾五錢
郵稅一册八錢宛

著者の序に曰ふ『酒を飲む者衆し、酒の効用と害毒とを知つて而して飲む者幾人かある、我が小說を讀む者衆し、我が小說の精神を知て而して讀むもの幾人かある、惟ふに知るは易く語るは難し、悟るは易く行ふは尙ほ難し、千萬人中幸に我が精神を知悟して而して行ふものありや否や』と以て其內容を知るに足らん。

理學士 依綠軒主人著

社會主義新小說 文明の大破壞

全一冊洋裝大判
正價四拾錢
郵稅八錢

（後付の二）

發兌元＝避暑旅行之好侶伴＝博文館

博文館編輯局校訂

◎東海木曾奥羽道中 膝栗毛

全一册中判美本 定價六拾錢 郵稅拾六錢

本著者一九他の徒らに筆を弄はし腹を捫りて心にもなき滑稽を綴る類にあらず其の未だ筆を下さゞるに先たちて胸中已に一部の膝栗毛あり地方の風俗方言習慣等を熟知し輕妙の文洒脱の想一讀して噴飯せざるものなし盛夏三旬の休暇中親友兩三輩相携へ彌次喜多的の旅行を試む亦一興ならずや本書は其の好侶伴にして又良指導たり愛讀を賜へ。

忘れがたみ

若松賤子女史遺稿　櫻井鷗村君編纂

全一册洋裝中判 正價八拾錢 郵稅拾錢

社會百面相

内田不知庵君著

全一册洋裝大判 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

●小說 女道樂

村井弦齋君著

和裝大判上製 定價八拾錢 郵稅拾貳錢

酒道樂は過ちで御座る、女道樂は罪で御座る、男振のよき人此罪を作り、權勢地位のある人此罪を作り、金のある人此罪を作る、主人一人の罪作りは、妻子眷族一家親類迄、如何なる影響を及ぼすべきや、人は鏡に對して顏を磨く何ぞ眞書を讀んで其心を磨かざる、此書は心の鏡なり、美貌も映じ醜顏も寫る親は子に與へて心を照さしむべく、妻は夫に捧げて其行ひを正さしむべし、文明の世の家庭道具は一日も心の鏡なくて濟むべき。

尾崎紅葉君遺著

紅葉全集

全部六册總クロース大判美本

總紙數五千六百頁

正價一册壹圓八拾錢送料十五錢

全部六册正價拾圓　全部小包料金八拾錢

目次

第一巻

- ●色懺悔
- ●新桃花扇
- ●南無阿彌陀佛
- ●戀の蛻
- ●夏痩
- ●新色懺悔
- ●猿枕
- ●七十二文命の安賣

第二巻

- ●伽羅枕
- ●むき玉子
- ●夏小袖

第三巻

- ●三人妻

- ●風雅娘
- ●巴波川
- ●拈華微笑
- ●此ぬし
- ●關東五郎
- ●文ながし
- ●わかれ蚊帳
- ●二人むく助
- ●二人女房
- ●おぼろ舟
- ●紙きぬた
- ●戀の病
- ●侠黒兒

第四巻

- ●男ごゝろ
- ●袖時雨
- ●隣の女
- ●鷹料理
- ●冷熱
- ●青葡萄

第五巻

- ●多情多恨
- ●千箱の玉章

第六巻

- ●金色夜叉前編
- ●金色夜叉後編
- ●續々金色夜叉
- ●煙霞療養
- ●紅葉著作年表

- ●心の闇
- ●むらさき
- ●不言不語
- ●三箇條
- ●浮木丸
- ●八重襷
- ●安和歌觀林
- ●寒牡丹
- ●金色夜叉中編
- ●續金色夜叉
- ●新續金色夜叉
- ●紅葉山人傳

（後付の三）

（其の四）

發兌元　＝避暑旅行之好伴侶＝　博文館

羽君著書

風月集

全一册袖珍總クロース美本寫眞版入
正價金參拾五錢郵稅六錢

目次

侯爵伊藤博文君題字

歐山米水

目次

全壹册和裝折衷
空前の美本仕立
正價壹圓五拾錢
郵稅八錢

若菜籠

全一册袖珍美本三百廿頁
正價廿八錢　郵稅四錢

紀行あり、小說あり、美文あり、韻文あり、小品に俳句に新作舊編、著者が得意の作は容れて可憐なる此一籠の中にありて春の野にあこがれて摘み溜めたる千種の若菜日長の玩びには、之に過ぎたる品あるまじ評判〳〵

全一册袖珍洋裝頗美本
正價拾八錢　郵稅四錢
●●●●●▲特價拾貳錢（五月一日より六月卅日迄祝賀紀念として割引す）

歐米小觀

目次

全一册袖珍上製
正價四拾錢
郵稅六錢

口繪

乙羽君小照
●外國繪はがき通信寫眞銅版二十四葉
●乙羽君案不折君畫の乙羽洋行漫畫、石版刷十六葉

博文館

（後付の五）

發兌元＝避暑旅行之好伴侶＝博文館

鹽井武島大町三文學士合作

美文韻文 花紅葉

全一冊袖珍美本四〇二頁
正價參拾錢郵稅六錢

天に春花秋葉の文あり人間亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騷ぐ。其の錦心、繡腸吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たると言を俟たず。

文學士 武島羽衣君著

美文韻文 霓裳微吟

袖珍美本 正價參拾五錢 郵稅六錢

武島文學士が世の歌學者其他文學に、志すものゝ爲めに歌に關する論說、叙事、隨筆、史傳を收輯して、一卷となしたるものなり。皆之れ山の峨々たるが如く、水の洋々たるが如く琅々誦すべきものならざるはなし。

發兌元
東京日本橋區本町
博文館

文學士 土井晩翠君著

天地有情

袖珍美本 正價貳拾五錢 郵稅四錢

峨々の山、洋々の水、以て晩翠君の詩を評すべし。此集君が吟峨を錄して、こゝに美麗の冊子を成す。新體詩中別に一旗幟を樹立するもの、詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ。

文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 暗香疎影

袖珍美本正價廿五錢郵稅六錢

佐々木信綱君、印東昌綱君合著

美文韻文 磯馴松

袖珍美本正價廿八錢郵稅六錢





大和田建樹君著

散文韻文 深山櫻

著者大和田先生が文學に深く措辭に妙なるは世既に定評あり、今此書は新作の散文韻文二百廿餘篇を輯めたる者、一たび之を繙かば櫻の山に分け入りて清香衣襟に滿つる如く讀者をして、手を放つ能はざらしむる妙あるべし願くは一本を備へて優美清麗なる文字を味はれかし。

全一册袖珍美本
正價四拾錢
郵税八錢

文學士 大町桂月君著

大絃小絃

大絃急雨の如く、小絃私語の如しとは、獨り琵琶の聲のみならんや、此書收むる所の桂月先生の文議論に、記事に、叙事に、才氣潑剌筆力縱橫或は莊重雄大、或は輕妙自在、觀察も亦奇警にして鋭利以て普通文の摸範とすべく、以て作文の指南とすべく、天地間實に此痛快の文なかるべからず。

全一册袖珍美本
正價參拾錢
郵税六錢

文學士 大町桂月君著

美文韻文 黄菊白菊

桂月先生の文は、蠻貊を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿幽澗に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗にして沈痛、優にして豪宕洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を淸くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。

全一册袖珍美本
正價貳拾五錢
郵税六錢

大和田建樹君著

散文韻文 雪月花

其文は淸楚婉麗趣味掬すべく、其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす。此編收むる所無慮二百篇、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗皷たるものは此書を措きて他に又た何かある好讀あれ。

全一册袖珍美本
正價參拾五錢
郵税六錢

女學世界

(明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可) 第六卷第拾壹號 (明治卅九年八月五日發行 每月一回五日發行)

(定價金貳拾錢)

